

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第75集

えんつうじこぼ
円通寺古墓
NA335号窯 I・II

1998

財團法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県大府市、名古屋市は、愛知県西部のほぼ中央、知多半島の付け根部分に位置しています。この両市境は現在でも緑濃い丘陵地が広がっており、太古の昔から我々の祖先の足跡が刻まれてまいりました。特に、小規模な谷を含んだ複雑な地形は、豊かな動植物の生態系を生み、またこの地形を利用して、古くから窯業生産活動が活発に営まれてまいりました。

このたび当地に、建設省及び、日本道路公団によって、第2東海自動車道・伊勢湾岸道路が建設されることとなりました。この工事予定地付近には、近世の墓地伝承が残る「円通寺古墓」、隣接地では愛知県遺跡地図に記載の「高根山古窯」(遺跡番号 01-14132・滅失)などがあります。愛知県教育委員会及び名古屋市教育委員会では、両地点周辺の試掘調査を行ったところ、円通寺古墓では墓壙、高根山古窯周辺では窯体が確認されました。そして、窯体は名古屋市の遺跡分布地図に「NA 335号窯」として追加されました。このような経緯から財愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて建設省、日本道路公団からの委託を受け、建設工事に先立ち事前調査を行いました。その結果、中世・近世の遺構、遺物を検出することができ、この地域の歴史に新たな資料を提供できることとなりました。

調査にあたりましては、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会、大府市教育委員会をはじめとする関係諸機関、さらに周辺住民の皆様から多大なるご協力をいただきましたことに、深く感謝申し上げる次第です。

最後に本書が埋蔵文化財の理解、研究の一助となれば幸いと存じます。

平成10年8月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 塩見修哉

円通寺古墓



例　言

1. 本編は愛知県大府市共和町神戸地内に所在する、円通寺古墓の発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局による「第2東海自動車道・伊勢湾岸道路」建設工事に伴う事前調査として、財團法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて建設省、日本道路公団から委託を受けて実施した。調査面積は 1500 m² である。
3. 発掘調査は平成7年4月から8月にかけて実施した。さらに平成8年度には、調査報告書作成のため整理作業を実施した。
4. 現地における発掘調査は、多くの作業員の方々の参加を得て、本センター水谷寛明（主査・現佐久島小学校）、松田訓（調査研究員）、加藤博紀（調査研究員）、堀木真美子（調査研究員）が担当し、伊藤羊子（発掘調査補助員）がこれを補佐した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、大府市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本編の編集は松田訓が担当し、執筆分担は第IV章を堀木真美子が担当し、それ以外を松田が担当した。
7. 遺物整理作業については松田訓、堀木真美子が担当し、次の方々の参加を得た。
奥村勝信、渡辺泰子、河合明美（調査研究補助員）、棚木えみ子、中西和子、加藤豊子、平野みどり、田中和子、野川佳江（整理補助員）
8. 本編に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。また、本編に示す海拔表記は、東京湾標準（T.P.）の数値である。
9. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
10. 調査記録は本センターにて保管する。
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
12. 本書の執筆にあたり、つぎの諸氏、諸機関にご指導・ご助言をいただいた。記して感謝したい。
(五十音順、敬称略)
内野 正 遠藤才文 川道 寛 久保和士 鳴谷和彦 横山 洋 永松 実 速水信也
古門雅高 松尾信裕 水野裕之 森 泰通 森村健一 森山栄一 山崎純男
愛知県教育委員会 大府市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	(松田) 1
第2節 調査の経過	(松田) 1
第3節 遺跡の位置	(松田) 2
第4節 歴史的環境	(松田) 4

第II章 遺構

第1節 基本層序.....	(松田) 6
第2節 遺構	
第1項 概要	(松田) 7
第2項 上位土坑群	(松田) 7
第3項 中位土坑群	(松田) 10
第4項 下位土坑群	(松田) 17
第5項 溝	(松田) 19

第III章 遺物

第1節 土器・陶磁器	(松田) 21
第2節 金属製品・その他	(松田) 25

第IV章 出土人骨概要

(堀木) 36

第V章 ま と め

(松田) 54

挿図目次

第1図 愛知県・大府市概観図	2
第2図 遺跡周辺地形図	3
第3図 周辺遺跡位置図	5
第4図 調査区土層概念図	6
第5図 調査区土坑群位置図(1/250)	8
第6図 上位土坑群位置図(1/100)	9
第7図 SK61周辺図(1/20)	9
第8図 中位土坑群位置図(1/125)	11
第9図 SK84出土状態図(1/20)	11
第10図 SK48平・側面図(1/20)	13
第11図 SK53・76・77・78平面図(1/20)	13
第12図 SK82平・側面図(1/20)	14
第13図 SK85平・側面図(1/20)	14
第14図 SK89平・側面図(1/20)	15
第15図 SK91平・側面図(1/20)	16
第16図 下位土坑群位置図(1/100)	18
第17図 SK29平・側面図(1/20)	20
第18図 SK30・55平・側面図(1/20)	20
第19図 遺物実測図①	22
第20図 遺物実測図②	23
第21図 銭貨拓影①	26
第22図 銭貨拓影②	27
第23図 銭貨拓影③	28
第24図 銭貨拓影④	29
第25図 遺物実測図③	30
第26図 遺物実測図④	31
第27図 遺物実測図⑤	32

表目次

第1表 調査工程表	1
第2表 土器・陶磁器觀察表	24
第3表 銭貨觀察表①	33
第4表 銭貨觀察表②	34
第5表 金属・ガラス製品觀察表①	34
第6表 金属・ガラス製品觀察表②	35
第7表 石片觀察表	35
第8表 出土人骨性別一覧	45
第9表 頭蓋骨計測表①	46
第10表 頭蓋骨計測表②	47
第11表 齒冠計測表①	48
第12表 齒冠計測表②	49

写真目次

写真1 出土人骨①	50
写真2 出土人骨②	51
写真3 出土人骨③	52
写真4 出土人骨④	53

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

円通寺古墓は墓域の伝承が残る地で、愛知県大府市共和町神戸地内に所在する。この伝承地内に建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局によって、第2東海自動車道・伊勢湾岸道路の建設工事が行われることとなった。このため愛知県教育委員会では、道路建設工事に先立ち、この伝承確認及び埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため、平成6年に試掘調査を行っており、この時点で墓壙及び人骨、近世陶器などを確認した。これらの遺構、遺物検出地点は道路建設予定地内に入っており、事前に発掘調査が必要と判断された。

側愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、大府市教育委員会の協力のもと、平成7年4月から発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

調査区は、道路建設予定地内の舌状台地先端斜面に一括して設定した。この調査区に平成7年4月から資材搬入を行い、表土剥ぎを実施し、発掘作業を開始したのは4月21日であった。

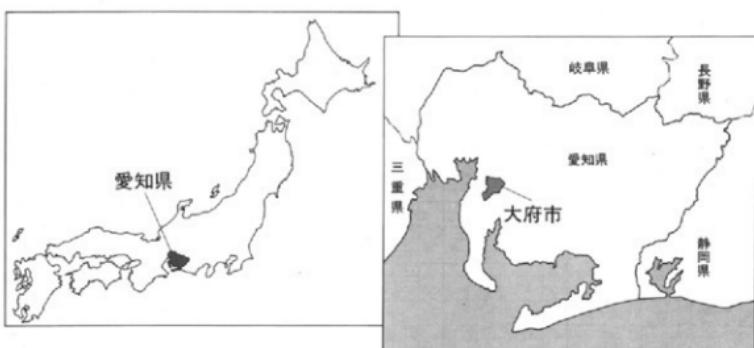
調査地の旧態は竹林及び畑地であり、竹、笹の根が遺構検出面以下まで張り出していて、これらの除去に時間を要した。調査期間は4ヶ月を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて8月1日に現地調査を終了した。

出土遺物の整理作業は、調査中及び調査終了後、洗浄・注記作業を現地事務所で行い、引き続き本センター三河事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

	H. 7 3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
作業員説明会	・												
資材搬入		—											
表土剥ぎ		—											
発掘調査		—	—										
航空測量				—									
補足調査					—								
資料等収取						—							
基礎整理													

第1表 調査工程

第3節 遺跡の位置



第1図 愛知県・大府市概観図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。円通寺古墳の所在する愛知県大府市の位置は、伊勢湾・三河湾に挟まれながら太平洋に向かって南北にのびる、知多半島のつけ根部分にあたる。市域は海に面しておらず、その東境は刈谷市、南境は知多郡東浦町、西境は東海市、北境は名古屋市・豊明市と接する。この中でも東境は旧尾張・三河国境で、往時より東西交流の接点としての位置にある。

円通寺古墳はこの大府市域の北東端に位置し、北側の名古屋市、西側の東海市の境界とは至近距離である。遺跡東側には、国道23号線の大高インターチェンジを縦貫する県道大府東浦線が通っている。この県道を大高インターチェンジより南下するとせまい谷筋にはいるが、この谷口の西側丘陵斜面が今回の調査地点であり、これと向かい合う東側の丘陵を登り切った位置に円通寺が対座する。

円通寺古墳の所在する地形は、丘陵が舌状にのびる末端部分である。この丘陵は地層的には、知多半島の丘陵ほぼ全体を形成している常滑層群に属し、これは尾張丘陵の瀬戸層群の延長として位置付けられる。この常滑層群は、第三紀鮮新統の時期にこの地域に存在した東海湖の淡水性堆積物である。市域の丘陵は、石ヶ瀬川・鞍流瀬川の流れる谷によって東西に分けられる。この中で遺跡の位置する丘陵は、西部丘陵に属する。丘陵上の現況は、畑地、果樹園、雜木林、竹林等が広がるが、大府市のもつ名古屋市に対するベッドタウンとしての機能が強まるとともに、JR東海道線側より急速に宅地化が進んでいる。

参考文献

大府市誌編さん刊行委員会編 1986 『大府市誌』 愛知県大府市



第2図 遺跡周辺図（国土地理院1/20地勢図「名古屋」部分）

第4節 歴史的環境

円通寺古墳の位置する知多半島北部の丘陵は、舌状台地が複雑に発達しており変化に富んだ地形を形成している。こうした複雑な地形は、海に近いことも含めて豊かな動植物の生態系を生み、古くから人々が生活を営む場として利用されてきた。たとえば台地先端部分や段丘面、さらには低地に沿った部分には、各時代の人々の生活の痕跡が今も多く残されている。こうした遺跡の中で、調査地の所在する大府市域を中心として、その歴史的環境を概観してみたい。

遺跡周辺に目を向けてみると、各時代の人々の痕跡で最も古い時期のものは、共栄町石器散布地である。この地点は名古屋市南端から続く丘陵の先端に位置し、本格的な発掘調査は行われていないが、石器が数点採集されており縄文時代後半と位置付けられている。縄文時代が終わり、弥生時代が始まる時期のものでは、市南部の丘陵端に位置する桟敷貝塚がある。市域にはこのほかに貝塚は見つかっていないが、大府市と境川をはさんで対岸に位置する刈谷市では、縄文時代の各時期にわたる貝塚が台地の縁辺部に所在しており、衣ヶ浦最奥部周辺がこの時期に豊かな海浜をひかえていたことを物語っている。弥生時代の遺跡としては、複合（弥生～室町時代）遺跡であるが、市東部の沖積低地に位置する惣作遺跡がある。さらに古墳時代に変わろうとする時期には、市北端の丘陵上に位置する子安神社遺跡や、南端の丘陵上に位置する源吾遺跡などがあり、沖積低地やその背後の丘陵端に人々が生活を営んだことがうかがえる。こうした傾向は古墳時代にも引き継がれたことが、惣作・子安神社遺跡などの複合遺跡から見て取れるが、古代になると衣ヶ浦奥部は製塩地帯としての様相が顕著になる。市域では惣作遺跡から製塩土器が出土しているが、周辺地域である半田市、東浦町、刈谷市、高浜市、碧南市の衣ヶ浦沿岸部には古代製塩遺跡がならぶように分布する。こうした製塩遺跡とともにこの時代には、市南部の丘陵上に灰釉陶器を生産した野々宮古窯、瓦を生産した吉田第1・2号窯がある。平安時代になりこれらの生産遺跡が登場してくるのは、律令国家体制の成立に関わるものと思われる。しかし、この体制と密接に関わる条里制地割は、狭小な平地以外のほとんどが丘陵部で形成される大府市域では見出せない。中世に至るとこの地は、猿投山西南麓古窯址群、知多古窯址群といった陶器生産地域に包括されて行くが、生産体制の中心として位置したわけではないようである。現在知られているこの時期の陶器生産窯としては、吉田第1・2号窯、ハンヤ古窯、石ヶ瀬古窯、移山古窯、高根山古窯、別組古窯、外輪古窯などがある。戦国時代には、当地は尾張・三河の国境に位置するため戦乱の地となることもあったが、近世に至り幕藩体制の確立とともに尾張藩の支配下となり、藩直轄の蔵入地や藩士の知行地である給知の混在地となり、明治を迎えることとなる。こうした歴史的経緯のもと、本遺跡は円通寺という寺院の「もとはか」としての特質を有するが、この円通寺の縁起について概観したい。

円通寺は、春江院という名古屋市緑区大高町に所在する寺院の末寺にあたり、現在の宗旨は曹洞宗である。円通寺では、文禄二（1593）年に当時の住職が書き残した資料を所蔵しているが、この「觀音縁起」によると開山は天平六（734）年に僧行基によって行われ、当時は法相宗の寺院であった。しかし、承久・天慶の乱により焼失したため真言宗の寺院として再興され、建武の戦乱によって再び焼失した。その後、貞和四（1348）年に立ち寄った夢窓国師が、中興開山をして臨済宗の寺院となり、この「觀音縁起」を書き残した哲榮の後継者が決まらなかったため、村人の合議により曹洞宗の僧を後継者として迎え、この時点で春江院の末寺となつた。その後、文政七（1824）年には知多新四国札所の第八十八番に列し、現在に至つてゐる。したがつて、円通寺の宗旨は法相～真言～臨済宗を経て、現在の曹洞宗に至つてゐる。



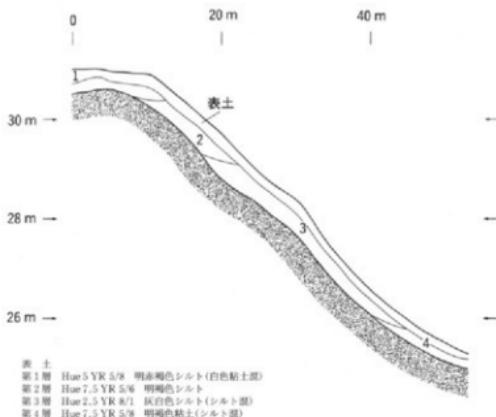
1：円通寺古墳 2：共栄町石器散在地 3：桟敷貝塚 4：楚作遺跡 5：子安神社遺跡 6：源吾遺跡
7・8：吉田第1・2号室 9：ヤンヤ古窯 10：石ヶ瀬古窯 11：移山古窯 12：高根山古窯 13：別唄古窯
第3図 周辺遺跡位置図（国土地理院1/5万「名古屋南部・半田」部分）

第II章 遺構

第1節 基本層序

今回の調査区における遺跡の基本層序を概観すると、第4図のような状況がみてとれる。調査地点の立地環境は、調査区の設定が東西方向にのびる舌状の丘陵端になされたため、全体が東方向に傾斜する斜面上に位置する。この調査区全体は、旧耕作土と思われる淡黄褐色の水はけの良い表土が覆っており、この下には調査地点の下位から順に遺物包含層が薄く斜面上に堆積している。以下に各土層の堆積状態、土質を説明する。

調査区における地表面は標高約25~31mで、地表面には前述の表土が約20~30cm程堆積している。この表土中にも近世~近代にかけての遺物が含まれていたが、この表土の縮まりは悪く明らかにローリングを受けた結果と判断し、この層を機械掘削によって除去した。この表土直下には調査区の上位から順に、白色粘土の混じる明赤褐色シルト（第1層）、明褐色シルト（第2層）、シルト混じりの灰白色粘土（第3層）、シルト混じりの明褐色粘土（第4層）がそれぞれの下位層にかぶるように堆積していた。これらの下の基盤層は淡赤褐色粘土であった。



第4図 調査区土層概念図

第2節 遺構

第1項 概要

本遺跡で検出した遺構は、土坑・墓壙（SK）106基、溝（SD）3条である。遺構検出面は概ね標高25～30mである。

調査区内の各遺構分布状況は、北側には溝3条が方向をやや異にしてのびており、南側には土坑が集中している傾向がみられる。さらにこの各土坑は、北側にはほとんどみられず、東に向かって傾斜する斜面上では、西から上・中・下位と3つのグループが認められる。これら各グループ間の境界は、極端に明瞭とは言い難く、密度の濃淡や等高線の緩急によって判断した。しかし、土坑・墓壙の掘り手や依頼者は、まずは斜面における標高の差によって、ある程度掘削の場所を意識したことが考えられる。この意識が、各遺構をグループ化させる要因の一つとなったことは、推察できる。したがって、このグループ化がどのような理由で意識されたかを考えるために、遺構は各グループごとに記載を行い、比較してみるとこととする。

各遺構の時期については、人骨とともに出土した副葬品と思われる遺物からは、細かい時期まで特定し得るものが無く、銅鏡やそのほかの金属製品などの特徴から、近世から近代初頭が想定できるに留まる。

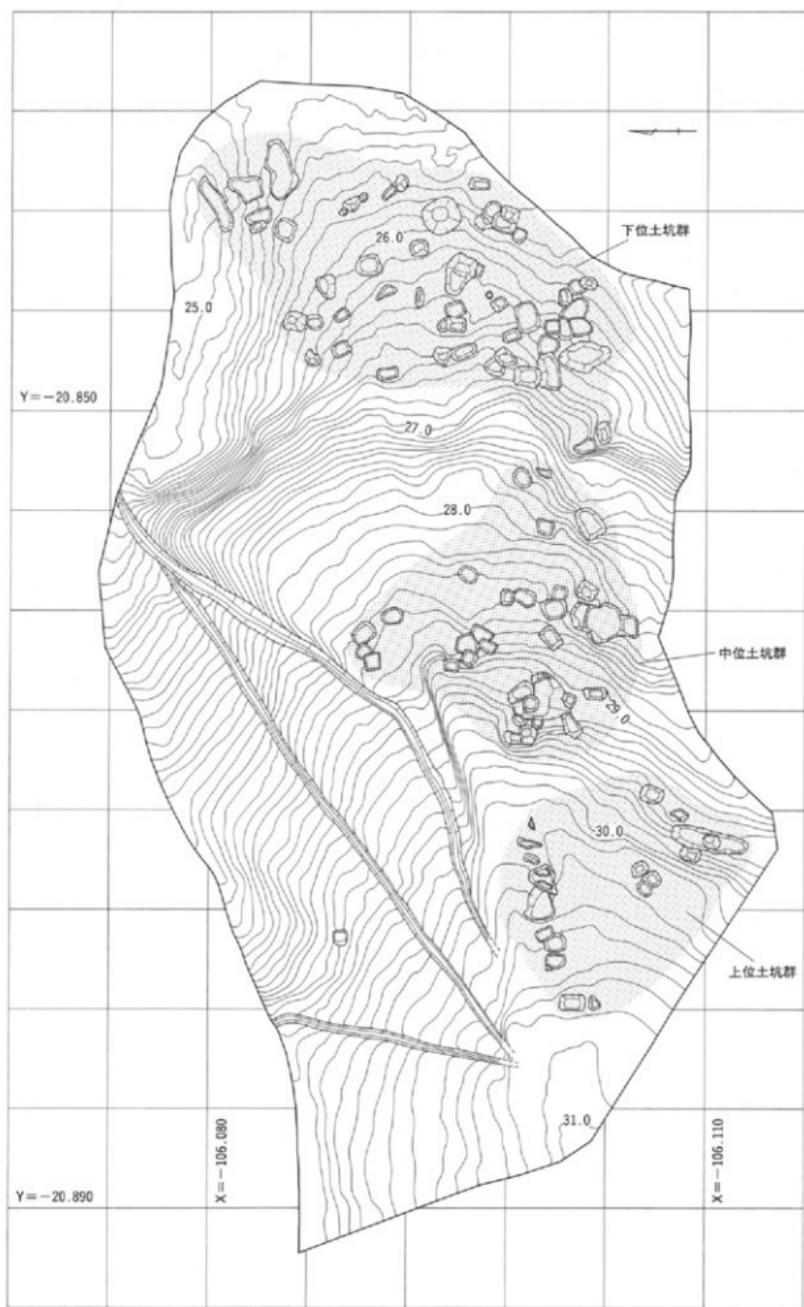
第2項 上位土坑群

調査区西側の南半分に集中する。各土坑の掘り込み面は標高30.2～30.8mの位置からで、この中でも北側で東西方向に並ぶ列と、その南側で集中する土坑群との間には、遺構の空白部分が見られる。北側の土坑集中部は明らかに列を意識して掘り込まれており、位置的には緩やかな斜面の尾根部分に並んで検出される。また、標高30.0mの等高線付近では、尾根筋から分かれで遺構の空白部分が帶状に認められると考え、この部分を上・中位の境界とした。そして、等高線上に表れる尾根筋と、そこから分岐する空白部分に墓道の可能性を考えた。

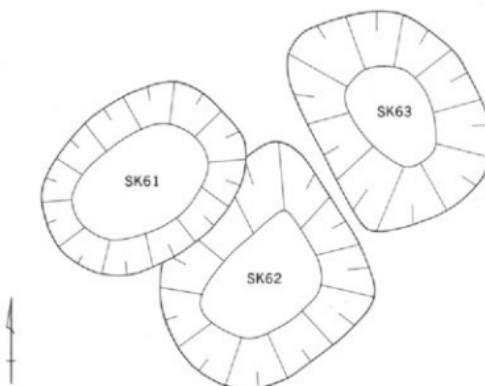
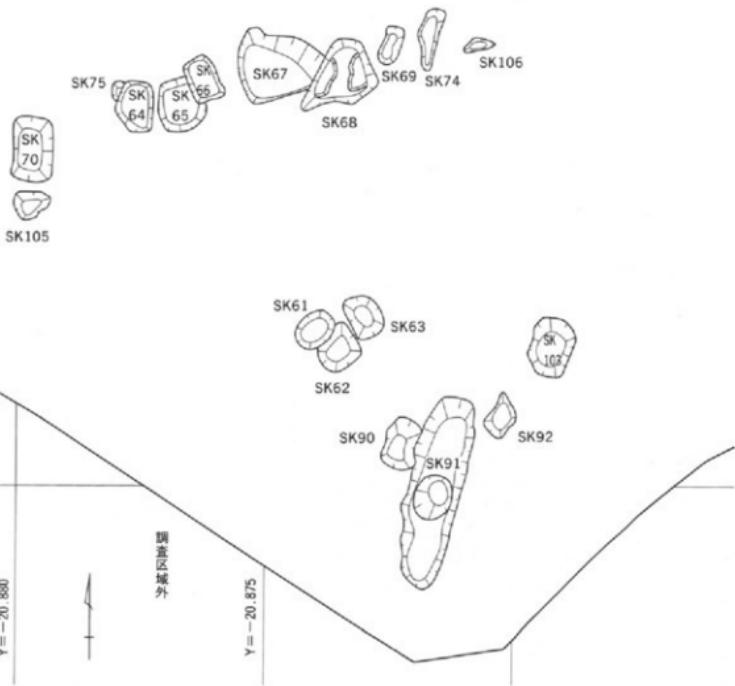
各土坑の平面形態は概して不整長方形で、規模は長径が1m前後のものが多くみられる。深さは、極端に浅いものを除けば、検出面から0.44～1.2mで、統一性は窺えなかった。このなかでは、SK61、65から人骨と思われる骨片が出土しており、SK64からは、骨片はないものの副葬品と思われる遺物が出土している。本群の土坑数の合計は、14基である。

SK61 上位土坑群の中ではほぼ中央に位置し、SK62を切っている。平面形態は楕円形で、長径0.85m、短径0.55m、深さ0.65mを測る。土坑内からは、頭蓋骨と思われる人骨が出土している。

SK64 本群の東西土坑列の西側に位置し、SK75を切っている。平面形態は不整長方形で、長径



第5図 調査区土坑群位置図(1/250)



第7図 SK61周辺図(1/20)

1.0 m、短径 0.75 m、深さ 0.44 m を測る。土坑内からは、陶器鉢の破片、鉄製の火打金、銅製の煙管雁首など副葬品と思われるものが出土している。

- SK65 東西土坑列の SK64 東隣に位置し、SK66 を切っている。平面形態は隅丸の不整形で、長径 1.05 m、短径 0.95 m、深さ 0.53 m を測る。土坑内からは、四肢骨と思われる人骨が出土している。

第3項 中位土坑群

調査区中央の南半分に集中する。各土坑の掘り込み面は標高 27.3~29.5 m で、土坑の集中部は、本群中西側の最も標高の高い部分や、本群中央の標高 28.4 m 付近にみられ、そのほかにも数基程度の集中が 3ヶ所みられる。標高 28.0 m の等高線から上の部分では、傾斜が緩やかで遺構の検出されない部分が認められ、この部分のすぐ上には土坑の集中部が並ぶため、この空白部分は墓道の可能性が考えられる。

各土坑の平面形態は、上位土坑群と同じく不整長方形が多く、規模も似通っており長径 1 m 前後のものが多くみられる。深さは、極端に浅いものを除けば検出面から 0.3~1.3 m で、上位土坑群と同様に一定の傾向は窺えなかった。このうちでは、SK53、54、76、77、110 からは人骨が出土しており、SK48、49、78、82、84、85、89、91、92、98、99、107、109 からは、人骨とともに副葬品と思われる遺物も出土している。本群の土坑数は、32 基である。

- SK48 中位土坑群の中央やや北側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、長径は 0.95 m、短径 0.8 m、深さ 0.76 m を測る。土坑内のほぼ底面から、1 体分の人骨が良好な残存状態で出土し、この人骨の頭部付近からは鉄製の火打金、銅鉄 6 枚が出土している。埋葬形態は右横臥屈葬と思われ、埋葬頭位は、北西と思われる。

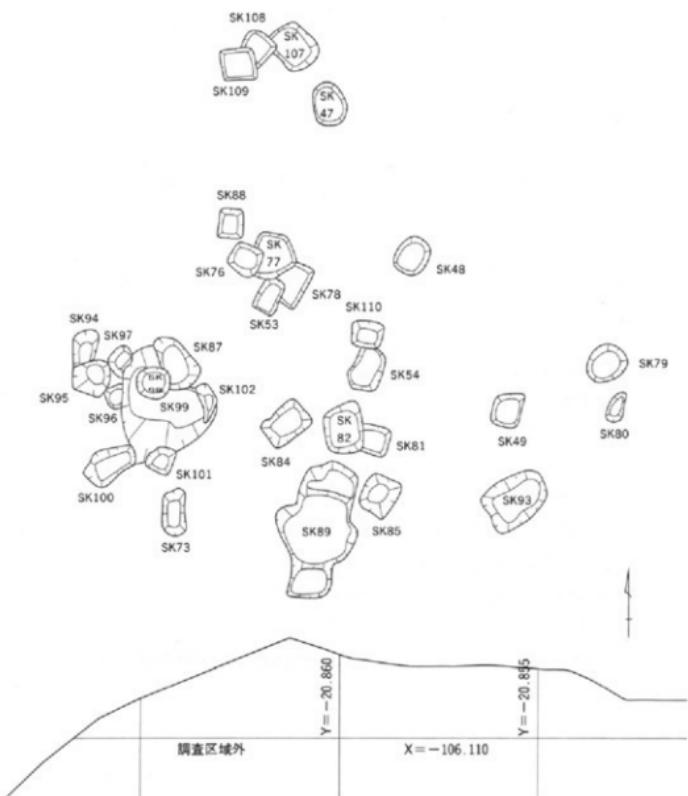
- SK49 本群の東側に位置する。平面形態は不整形で、長径 0.85 m、短径 0.75 m、深さ 0.71 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨、腸骨と思われる人骨とともに、鉄製の釘、銅製の煙管雁首、鉄製の火打金、チャート材の火打石が出土している。

- SK53 本群の中央やや北に位置し、SK78 を切っている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、長径 0.9 m、短径 0.6 m、深さ 0.39 m を測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な 1 体分の人骨が出土し、埋葬形態は左横臥屈葬と思われる。

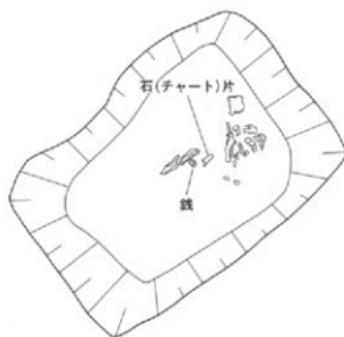
- SK54 本群のほぼ中央に位置し、SK110 に切られている。平面形態は不整形で、長径 1.1 m、短径 0.75 m、深さ 0.88 m を測る。土坑内からは、四肢骨、椎骨と思われる人骨が出土している。

- SK76 本群の中央やや北に位置し、SK77 を切っている。平面形態は隅丸方形で、長径 0.8 m、短径 0.75 m、深さ 0.65 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨の一部と思われる人骨が出土している。

- SK77 本群の中央やや北に位置し、SK76 に切られている。平面形態は不整形で、長径 1.15 m、深さ 0.36 m を測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な 1 体分の人骨が出土し、埋葬

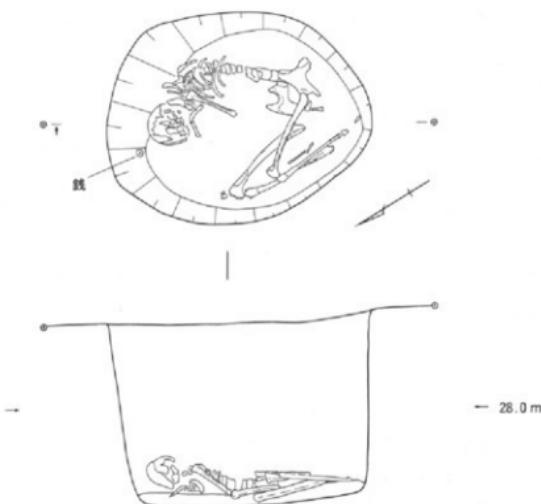


第8図 中位土坑群位置図(1/125)

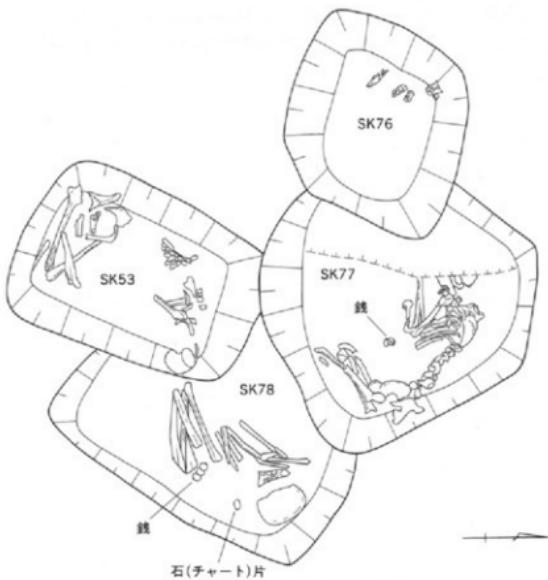


第9図 SK84 出土状態図(1/20)

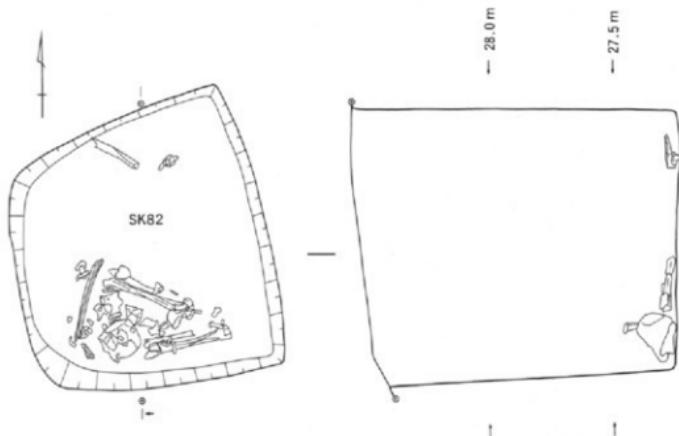
- 形態は右横臥屈葬と思われ、埋葬頭位は北西と思われる。
- SK78 本群の中央やや北に位置し、SK53、77に切られている。平面形態は隅丸方形であったと思われ、長径1.05m、深さ0.26mを測る。土坑内からは、埋葬形態が左横臥屈葬と思われ、埋葬頭位が北西と思われる残存状態の比較的良好な人骨が出土し、この頭蓋骨脛から鉄製の火打金、チャート材の火打石が出土し、椎骨脛から銅鏡6枚が出土している。
- SK80 本群の東端に位置する。平面形態は梢円形を呈し、長径0.8m、短径0.4m、深さ0.42mを測る。土坑内から人骨は未出土ながら、銅鏡4枚とともに土製皿が3枚出土している。
- SK82 本群の中央やや南に位置し、SK81を切っている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径は1.25m、短径0.95m、深さ1.3mを測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な1体分の人骨が出土し、この寛骨と大腿骨が定位位置にありながら、上腕骨が大腿骨と並んで出土したため、埋葬形態は少なくとも横たえられた状態とは考えにくく、前屈で座らされた状態であったと思われ、これとともにチャート材の火打石が出土している。
- SK84 本群の中央やや南側に位置する。平面形態は隅丸方形で、長径1.15m、短径0.8m、深さ0.8mを測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が出土しており、これとともに火打金と思われる鉄片、チャート材の火打石、銅鏡7枚が出土している。
- SK85 本群の中央南側に位置する。平面形態は隅丸方形で、長径1.15m、短径0.8m、深さは0.8mを測る。土坑内からは、残存状態が比較的良好な人骨が1体分出土しており、頭蓋骨が倒立状態で出土していることなどから、埋葬形態は少なくとも横たえられた状態とは考えにくく、座らされた状態から、頭部が時間差で落下したときに倒立状態に至ったことが考えられる。鉄製の釘と、銅鏡が5枚出土している。
- SK89 本群の中央南端に位置する。平面形態は不整形で、床面も安定しておらず、単一の土坑とは思えない落ち込みもみられるため、複数の土坑が重複している可能性も考えられるが、平・断面の観察からは掌握し得なかった。長径3.45m、深さ1.23mを測り、少なくとも、10体分の人骨が出土する。残存状態の比較的良好な人骨のうち、図中の人骨a・fは埋葬形態がどちらも右横臥屈葬で、埋葬頭位はaが南西、fが東と思われる。また、人骨bは大腿骨が遠位端を上位にして出土していて、上位の肋骨から下位の肋骨までが重なって出土しているため、埋葬形態は横たえられていない可能性が考えられ、前屈で座らされた状態であったと思われる。鉄製の釘、銅製の飾り金具、銅製の煙管雁首・吸口、鉄製の火打金、チャート材の火打石、銅鏡が出土している。
- SK91 本群の南西端に位置し、SK90を切っている。平面形態は不整長方形で、床面は单一土坑のものとは思えない落ち込みもみられるため、複数の土坑が重複している可能性も考えられるが、平・断面観察からは掌握し得なかった。長径3.85m、短径1.05m、深さ1.08mを測り、土坑内からは頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が複数体分出土しており、そのうちの1体分は全て焼骨であった。これらとともに銅製の煙管吸口・雁首、銅鏡7枚が出土している。
- SK98 本群の西側土坑集中部の中に位置し、SK87・99を切っている。平面形態は円形で、長径



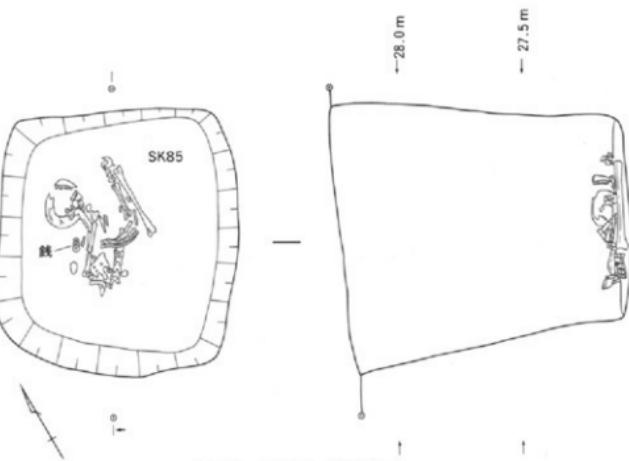
第10図 SK48 平・側面図(1/20)



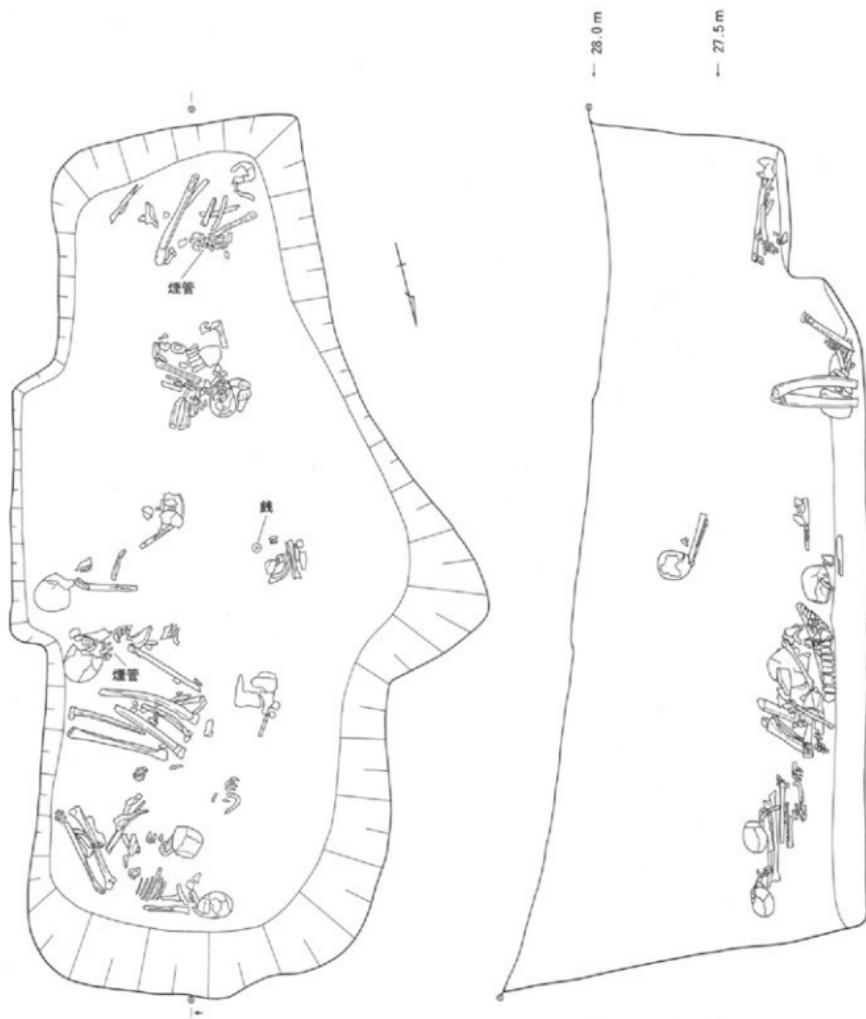
第11図 SK53・76・77・78 平面図(1/20)



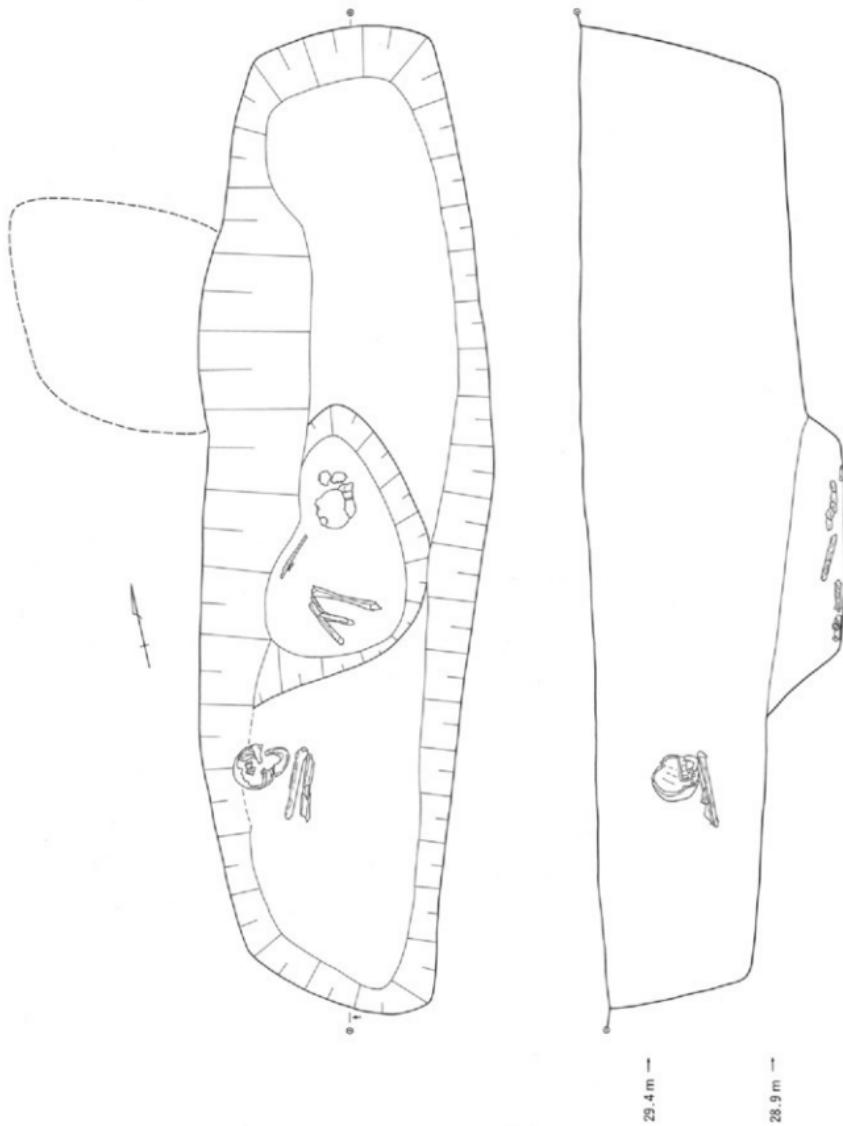
第12図 SK82 平・側面図(1/20)



第13図 SK85 平・側面図(1/20)



第14図 SK89 平・側面図(1/20)



第15図 SK91 平・側面図(1/20)

0.85 m、短径 0.8 m、深さ 0.61 m を測る。土坑内からは、椎骨と思われる人骨が出土しており、これとともに火打金と思われる鉄片や、銅鏡が 3 枚出土している。

SK99 本群の西側土坑集中部の中に位置し、SK87・98・100～102 に切られている。平面形態は楕円形と思われ、長径 3.0 m、短径 2.05 m、深さ 0.42 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が出土しており、これらとともに鉄製の釘、銅製煙管の雁首、銅鏡が 13 枚出土している。

SK107 本群の中央北端に位置し、SK108 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、長径 1.2 m、短径 0.95 m、深さ 0.86 m を測る。土坑内からは四肢骨と思われる人骨が出土しており、これとともに銅製の煙管吸口が出土している。

SK109 本群の中央北端に位置し、東側の SK108 を切っている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.85 m、短径 0.8 m、深さ 0.88 m を測る。土坑内からは四肢骨と思われる人骨とともに、銅製の煙管吸口が出土している。

SK110 本群のほぼ中央に位置し、SK54 を切る。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.75 m、短径 0.65 m、深さ 0.91 m を測る。土坑内からは、残存状態の比較的良好な人骨が 1 体分出土している。

第 4 項 下位土坑群

調査区東側、丘陵の舌状部先端に集中する。各土坑の掘り込み面は、標高 24.9～26.9 m である。この中で、標高 25.7 m の等高線部分では、傾斜が緩やかで遺構が検出されない空白部が帶状に認められる。本群の中での土坑の集中部は、このわずかな空白部をはさんで南北に分けられようが、上・中位土坑群に比べると極端な集中箇所はほとんどみられず、散在した様相を呈する。また、標高 27.0 m の等高線付近には、傾斜は緩やかではないが遺構の空白部分が帶状に認められると考え、この部分を中・下位の境界とした。これら帶状の空白部は、墓道の可能性を考えた。

各土坑の平面形態は、上・中位土坑群と同じく不整長方形が多く、規模も似通っており長径 1 m 前後のものが多い。深さは、極端に浅いものを除けば検出面から 0.31～1.39 m で、上・中位土坑群と同様に統一性は窺えなかった。このうちでは、SK12、35 からは人骨が出土しており、SK07、09、29～31、33、55、58、86 からは、人骨とともに副葬品と思われる遺物も出土している。また、銅鏡のみ出土している土坑も 9 基みられた。本群の土坑数は、55 基である。

SK01 本群の中で想定した墓道に南面し、SK03 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、長径 1.1 m、短径 0.95 m、深さ 0.97 m を測る。土坑内からは、土製皿が 2 枚出土している。

SK07 本群の西側に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 1.05 m、短径 0.55 m、深さ 0.55 m を測る。土坑内からは頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、銅鏡 3 枚が出土している。

SK12 本群の中央東端に位置する。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 1.05 m、短径 0.55 m、深

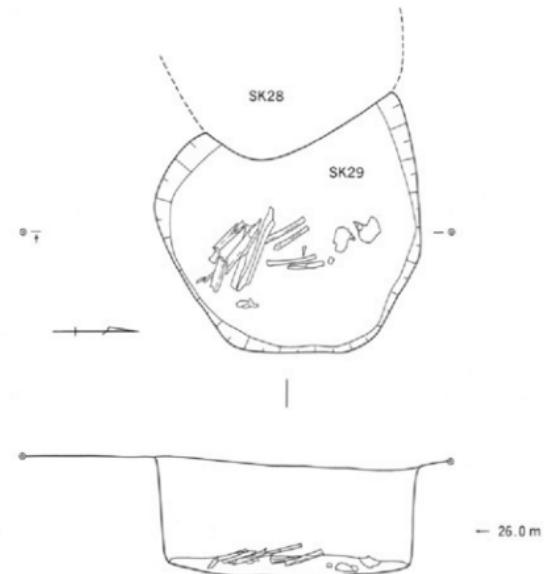


第16図 下位土坑群位置図(1/100)

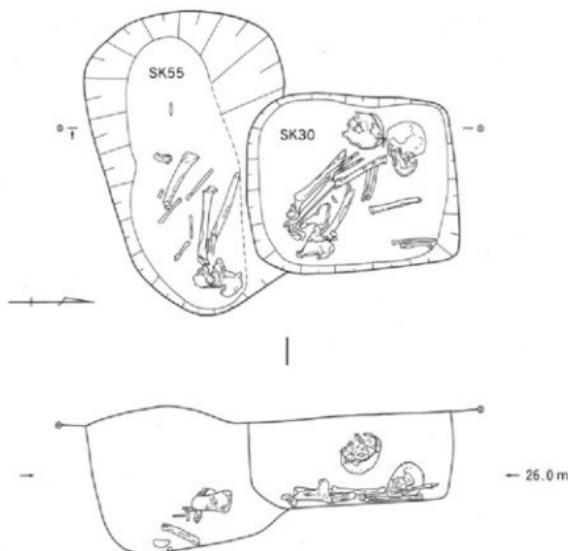
- さ 0.15 m を測る。土坑内からは、椎骨と思われる人骨が出土している。
- SK29 本群の南側に位置し、SK28 に切られている。平面形態は不整形で、長径 1.15 m、深さ 0.46 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨の他、頭蓋骨脇から鉄製の火打金、チャート材の火打ち石が出土している。
- SK30 本群の南側に位置し、SK55 を切っている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.8 m、短径 0.7 m、深さ 0.44 m を測る。残存状態の比較的良好な 1 体分の人骨が出土し、副葬品と思われる銅製の煙管吸口やガラス製の髪飾りがともに出土する。人骨の埋葬形態は右横臥屈葬と思われ、埋葬頭位は北西と思われる。
- SK31 本群の南端に位置する。平面形態は不整形で、長径 2.65 m、短径 1.6 m、深さ 1.18 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、鉄製の釘や火打金、チャート材の火打石、銅鏡 6 枚が出土している。
- SK33 本群の南東側に位置し、SK14 を切り、SK34、51 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈するものと思われ、深さ 0.21 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、鉄製の火打金、チャート材の火打石、銅鏡 5 枚、銅製の飾金具、煙管吸口・雁首が出土している。
- SK35 本群のほぼ中央に位置し、SK15 を切っている。平面形態は不整形で、長径 2.05 m、短径 1.45 m、深さ 0.81 m を測る。土坑内からは、四肢骨と思われる人骨が出土している。
- SK55 本群の南側に位置し、SK30 に切られ、SK56 を切っている。平面形態は梢円形を呈するものと思われ、長径 1.2 m、深さ 0.62 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨が出土し、これとともに銅製の煙管雁首が出土している。
- SK58 本群の南側に位置し、SK59 に切られている。平面形態は隅丸方形を呈し、長径 0.8 m、短径 0.65 m、深さ 0.39 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨と思われる人骨とともに、鉄片が出土している。
- SK86 本群の西端に位置する。平面形態は不整形で、長径 1.15 m、短径 0.65 m、深さ 0.49 m を測る。土坑内からは、頭蓋骨、四肢骨、椎骨と思われる人骨とともに、鉄製の火打金、銅鏡 6 枚が出土している。

第 5 項 溝

- 調査区北西側に 3 条が集中する。いずれも傾斜に沿う方向で低みに向かっているが、それぞれのびる角度は若干異なり、このため調査区北端で SD02 と 03 が交差する。
- SD01 調査区北西に位置し、規模は概ね 幅 0.5 m、深さ 0.25 m である。調査区内の最上位付近から、東にやや振りながら北方向にのびる。無遺物で、時期を判じ得ない。
- SD02 調査区北西側に位置し、下位で SD03 に切られている。規模は、長さ 29.5 m、幅 0.5 m、深さ 0.15 m を測り、主軸の方位は N-55°-E を測る。無遺物で、時期を判じ得ない。3 条の溝の中では、最も直線的である。
- SD03 調査区北西側に位置し、下位で SD02 を蛇行して切っている。規模は幅 0.4~0.9 m、深さ 0.2 m を測る。無遺物で、時期を判じ得ない。



第17図 SK29 平・側面図(1/20)



第18図 SK30 + 55 平・側面図(1/20)

第III章 遺物

第1節 土器・陶磁器

本遺跡から出土した遺物のうち、陶磁器、土器などは、同じく出土の金属製品に対して比較的少量で、このうちでも遺構内から出土したものはさらに少なかった。遺構内の人骨周辺から出土した陶磁器等は、本遺跡の古墓としての性格から類推すると、副葬品の可能性が考えられる。しかし、本遺跡ではこうした例はほとんどみられず、生前に使用した陶磁器を副葬するような習慣は、この調査地では窺い得ない。

図版に掲載した出土遺物の内、1～3、6～8が遺構内出土遺物で、それ以外のものは遺構外の検出遺物である。

1～3・7・8は土器皿である。1～3はSK80出土で、全てロクロ成形である。これら皿の遺存度はいずれも比較的良好であったが、残存する口縁部にはタール等の付着はみられず、灯明皿としての使用は成されていないようである。7・8はSK01出土で、いずれも1～3とは異なり、手捏ね成形された後、非常に丁寧に布引きと思われるナデ整形が施されて、薄手に仕上げられている。6はSK64出土の陶器底部で、外側底部を除いて内・外ともに鉄釉が施されており、17c末～18c初頭の片口鉢であった可能性が考えられる。

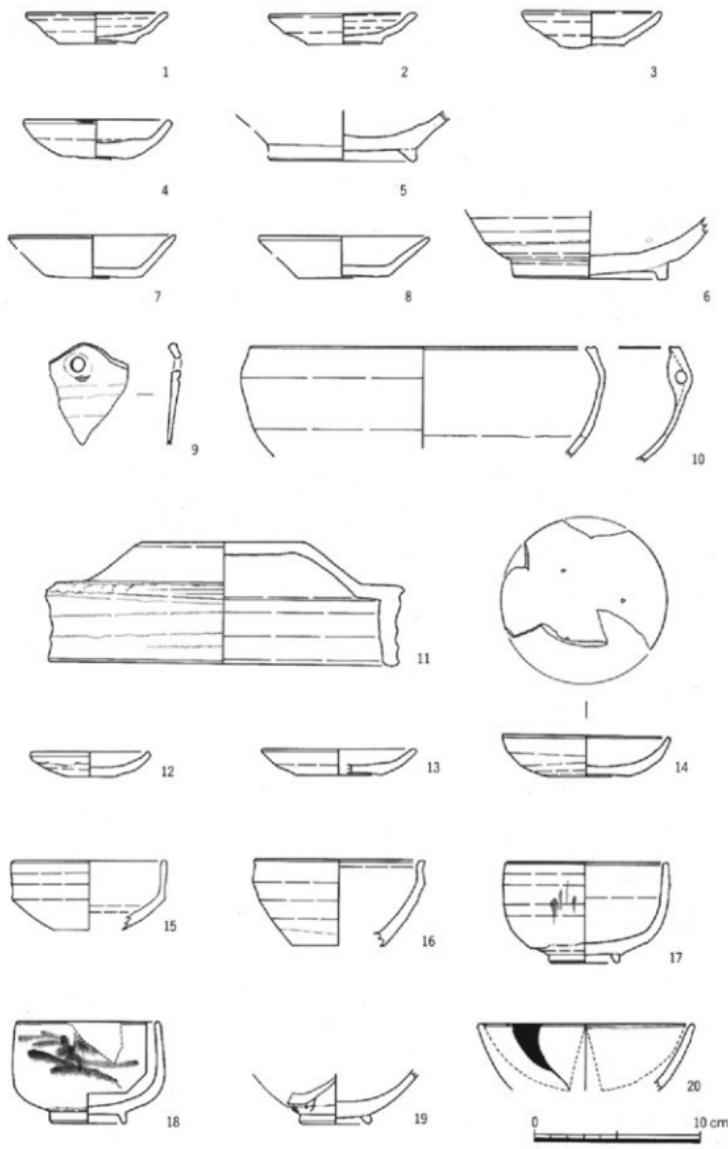
4・5は中世灰釉系陶器の内、いわゆる山皿・山茶碗である。4の口縁部にはタールが付着しており、体部に比べてかなり厚く無高台の底部であることから、12c後葉～13c前葉のものと思われるが、灯明皿として再利用された可能性が考えられる。5は、高台がしっかりととした高さを持ち、丁寧に整形されており、粗痕などもみられないことから、12c前葉の山茶碗と思われる。

9・10は土器鍋で、9は吊り手取り付け用と思われる穿孔が、口縁部の一部を山形にした部分に施されており、10は内耳を有する。

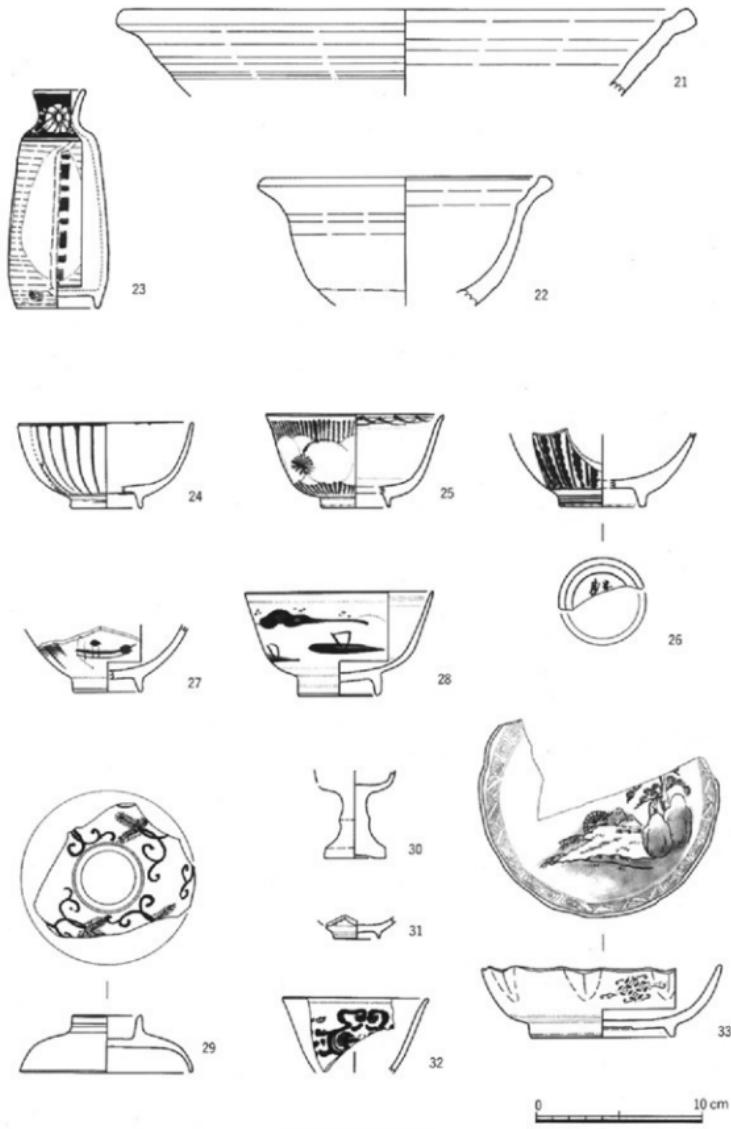
11は窯道具であるサヤ鉢で、いわゆる「えんごろ」と呼ばれるものであるが、調査区及びその周辺に窯跡は確認されておらず、転用された可能性も考えられる。

12～23は陶器で、12～14は皿である。12は19cに至って、灯明皿専用に灰釉を施して焼かれたものと思われ、13は軸調などから志野皿の系譜に連なるものと思われるが、盛時のものに比べると小型化した18c前葉のもので、14は精釉が施された18c後葉の美濃産と思われる。12・13の口縁部にはススが付着しており、13は灯明皿としての転用が窺える。

15～20は陶器碗である。15は体部中程に稜線が入るいわゆる「せんじ」と呼ばれるもので、18c後半の美濃産と思われる。16は17c後半の「天目茶碗」、17は18c中葉の瀬戸産の「御室茶碗」である。18は呉須で絵付けされた灰釉の碗で、18c後半の瀬戸産と思われる。19は残存部にわずかに鉄絵が見られる灰釉碗で、18c後葉の美濃産と思われる。20



第19図 遺物実測図①



第20図 遺物実測図②

は幕末期美濃産の陶胎染付で、外側には捺梅文が施されている。

21は攝鉢で、口縁部内側に隆起が巡ることから17c前半のものと思われる。22は灰釉が施された鉢で、19cの瀬戸産と思われる。23は陶器の徳利で、外側口縁部脇から肩部にかけて呉須で絵付けされており、体部には鉄絵で施文が成されており、外側高台脇には、梢円形の枠に「犬山」の文字が陰刻されている。

24~33は磁器で、24~29、32・33は瀬戸・美濃産である。24~28は、椀で、29は椀に伴う蓋と思われ、32は小椀である。33は波状口縁の皿で、内・外側には、銅版刷りで絵付けが施されている。これら椀・蓋・小椀・皿とともに呉須による染付で、いずれも幕末から明治期のものと思われる。

30・31は肥前系の磁器で、30は仏飯器、31は猪口と思われる。いずれも19cの製品と思われる。

遺物番号	出土位置(グリッド)	材質	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	備考	登録番号
1	SK80	土器	皿	1.8	8.3	4.6		E-1
2	SK80	土器	皿	1.9	8.6	4.4		E-2
3	SK80	土器	皿	2.1	8.2	3.9		E-3
4	検出(I B20i)	陶器	皿	2.3	8.5	4.6	番号取り上げ・口縁部にタール付着	E-4
5	検出(I B19g)	陶器	椀			(8.6)	番号取り上げ	E-5
6	SK64	陶器	甕?			8.9	17C~18C初、片口?	E-6
7	SK01	土器	皿	2.5	(9.9)	5.8		E-7
8	SK01	土器	皿	2.4	(10.1)	5.4		E-8
9	検出(I B20i)	土器	鍋					E-9
10	検出(II B1k)	土器	鍋		20.7			E-10
11	検出(I B20i)	土器	窓道具	7.3	19.4	9.5	番号取り上げ・明治?	E-11
12	検出(I B20j)	陶器	皿	1.5	6.9	3.6	番号取り上げ・灯明皿。19C前	E-12
13	検出(I B20j)	陶器	皿	1.6	(9.0)	(5.2)	番号取り上げ・灯明皿。18C前	E-13
14	検出(II B1j)	陶器	皿	2.4	10.0	4.8	18C後半、美濃	E-14
15	検出(II B1k)	陶器	椀		(9.0)		18C中~(後)、美濃	E-15
16	検出(II B1h)	陶器	椀		(10.0)		17C中~(後)	E-16
17	検出(I B20j)	陶器	椀	6.1	9.5	4.2	番号取り上げ・18C中、瀬戸	E-17
18	検出(II B1i)	陶器	椀	5.1	8.5	4.2	18C後、瀬戸	E-18
19	検出(II B1j)	陶器	椀			4.0	18C後、美濃	E-19
20	検出(II B1g)	陶器	椀		13.0		19C中(第二四半期)、美濃	E-20
21	検出(II B1j)	陶器	瓶鉢		34.1		17C前	E-21
22	検出(I B20f)	陶器	鉢		16.9		19C(明治)、瀬戸	E-22
23	検出(I B18h)	陶器	徳利	13.1	3.0	4.9	明治? 小牧? 「犬山」の刻印	E-23
24	トレンチ(I B20h)	磁器	椀	5.1	10.4	4.0	明治	E-24
25	検出(II B1j)	磁器	椀	(5.6)	(10.6)	(4.6)	19C中、美濃	E-25
26	検出(I B19h)	磁器	椀			(5.0)	明治	E-26
27	検出(II B1i)	磁器	椀			(4.1)	明治	E-27
28	検出(II B1j)	磁器	椀	6.2	10.2	5.0	19C中	E-28
29	検出(II B20)	磁器	椀蓋	3.4	10.2		明治?	E-29
30	検出(II B2j)	磁器	仏飯具			3.2		E-30
31	検出(II B2f)	磁器	椀			2.7		E-31
32	検出(II B1j)	磁器	椀			8.7	19C中	E-32
33	検出(II B1h)	磁器	鉢	4.1	14.2	8.7	明治、銅版	E-33

* () 内数値は推定

第2表 土器・陶磁器観察表

第2節 金属製品・その他

本遺跡から出土した遺物のうち、金属製品などは、陶磁器、土器などが少量であったのに対して、一定量の出土を得た。今回の調査では、遺跡の性格が近世～近代の墓域であつたことから、金属製品のうち 60%以上が銭貨で占められていた。金属製品の総出土点数は 249 点で、材質は銅、鉄である。

34～104 は銭貨で、すべて銅貨である。銭貨の総出土点数は 162 点で、これらの出土状況は、遺構内から出土しているものが大半を占め、六道銭として用いられたことが見える。このうち海外渡来銭と思われるものは 3 種出土しており、94 が元祐通宝、95 が元豐通宝、96 が紹聖元宝と思われる。58～61 は文久永宝で、渡来銭と文久永宝以外の銭貨はすべて寛永通宝である。寛永通宝のうち、34・36～38・51・63・65・67・73～75・80・101 が古寛永、それ以外のものが新寛永である。

105～120・126～129 は、銅製品である。105～120 は煙管の雁首、吸口で、竹製のラウが一部残存するものも見られる。雁首はいずれも脂返しが大きく湾曲せず、首部全体も短めで、肩を有するものは見られないが、113・120 には小さめの火皿の根本が急激に広がった部分に、稜線が見られる。吸口も肩を有するものは見られないが、105・111・114 には急激に径がしばられる部分に稜線が見られ、114 には草花文と思われる装飾が施されている。

121～125 は、鉄製の釘である。調査区全体では 37 点出土しているが、いずれも遺構内から出土しており、棺の仕立て用材として使用された可能性が考えられる。

126～129 は、銅製の金具である。127・129 には装飾が施されており、木製品の仕立て用材として使用された可能性が考えられる。

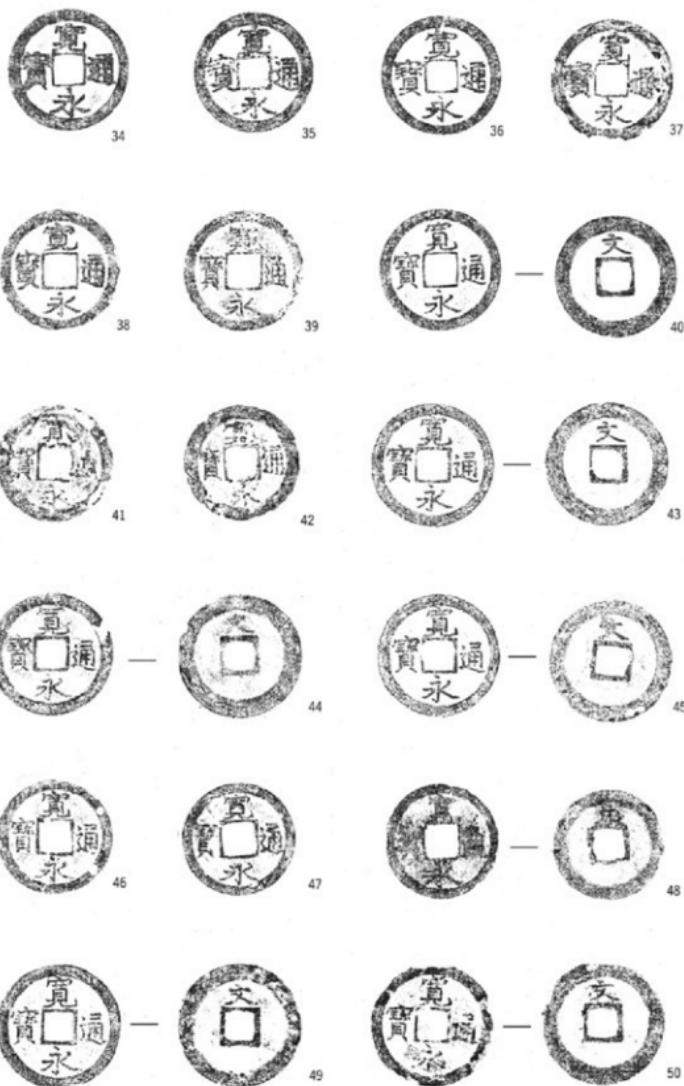
130～144 は、鉄製の火打金である。原形を留めているものは少ないが、いずれも片側に突起部を持つ形態と思われ、遺構内から出土しており、副葬品の可能性が考えられる。

145 は、ガラス製のかんざしである。遺構内から出土しており、副葬品の可能性が考えられる。

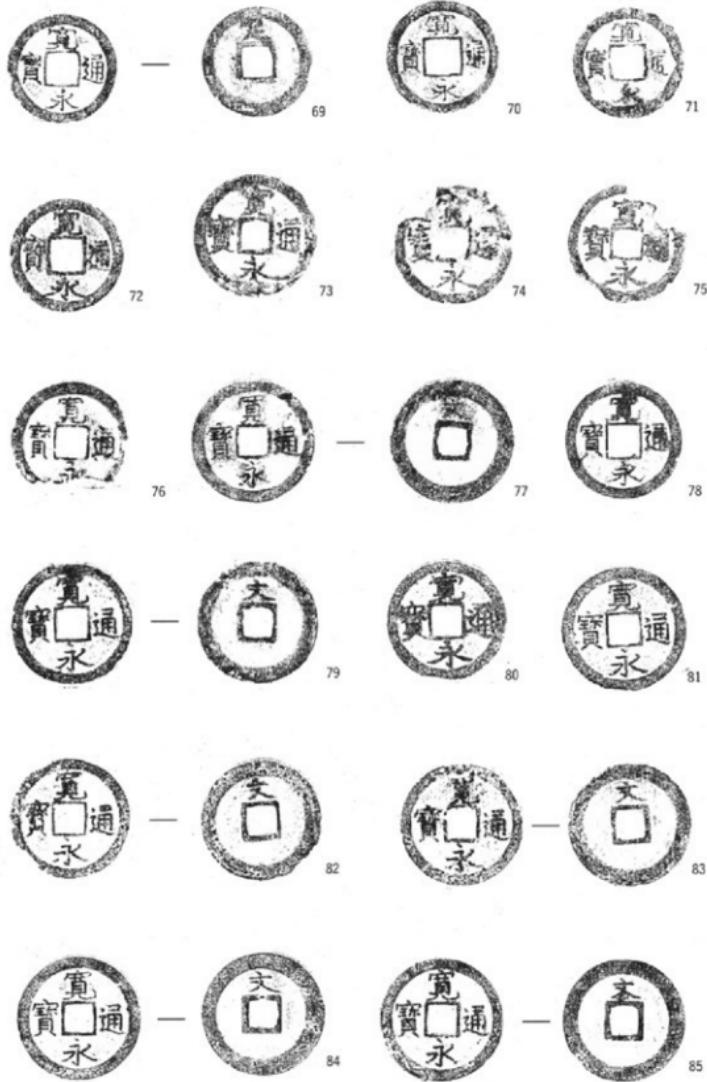
146～154 は火打石と思われる石片で、材質はいずれもチャートである。これらのチャート片は火打金と同様に遺構内から出土しているが、調査区周辺は遺構掘削に伴い自然にチャート片の入り込む環境とは考えにくい。したがってこれらチャート片は、火打石として火打金とセットで副葬された可能性が考えられる。形態はいずれも不整形で、凹凸が表面に認められるものや、火打金との打ち合わせによって生じたと思われる剝離痕が、縁辺部に認められるものもみられる。

参考文献

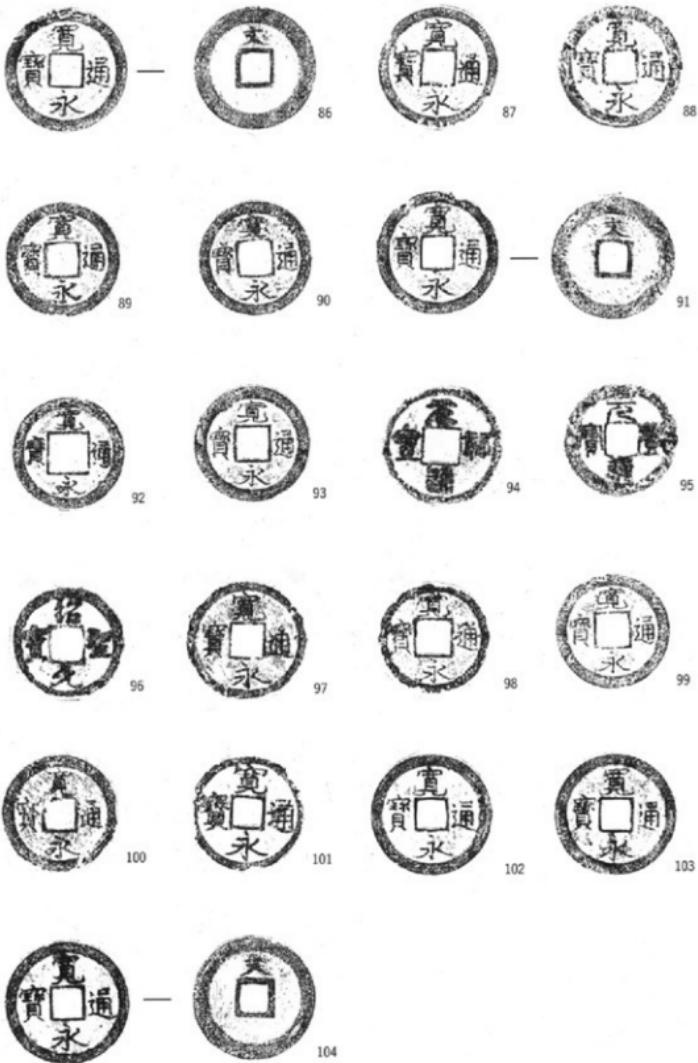
古橋佳子 1995 「名古屋城三の丸遺跡(Ⅵ)」—金属製品— 納受知県埋蔵文化財センター



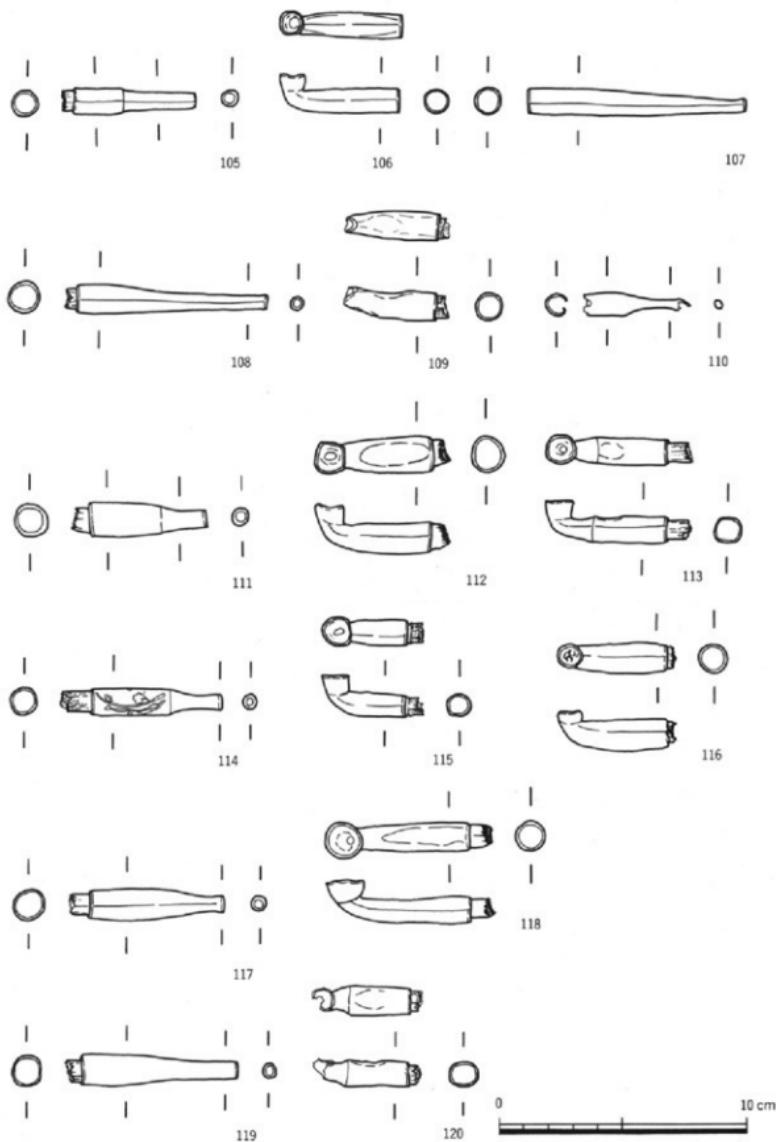
第21図 錢貨拓影①(原寸)



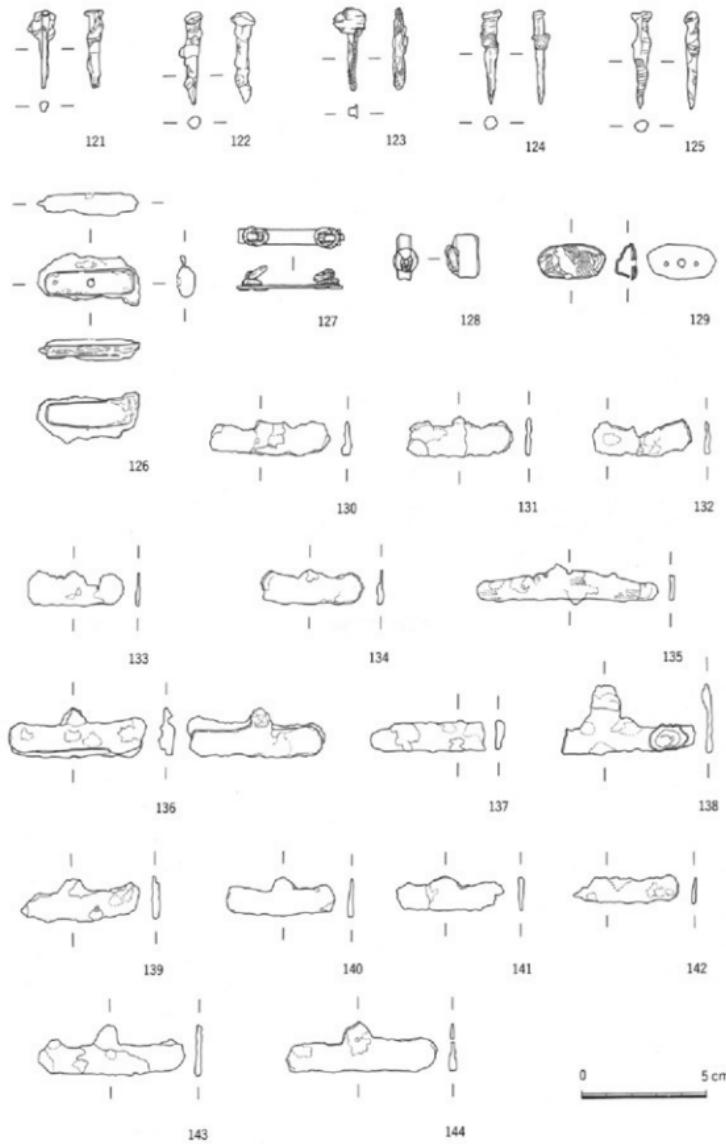
第23図 銭貨拓影③(原寸)



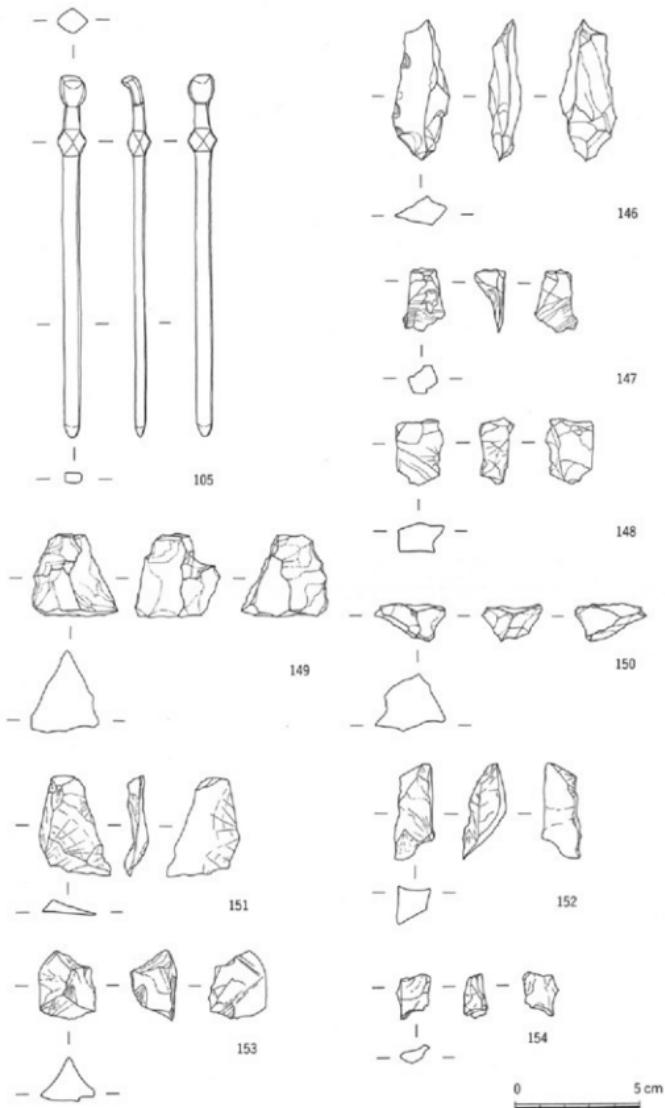
第24回 銭貨拓影④(原寸)



第25図 遺物実測図③



第26図 遺物実測図④



第 27 図 遺物実測図⑤

遺物番号	遺構	種類	径(cm)	孔深(cm)	重量(g)	備考	登録番号
34	SK04	寛永通宝(古)	2.4	0.6	2.9		M-34
35	SK05	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.4		M-35
36	SK06	寛永通宝(古)	2.4	0.6	3.1		M-36
37	SK05	寛永通宝(古)	2.4	0.6	2.8		M-37
38	SK07	寛永通宝(古)	2.4	0.7	2.7		M-38
39	SK07	寛永通宝(新)	2.4	0.7	3.3		M-39
40	SK07	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.9	背郭上に「文」	M-40
41	SK11	寛永通宝(新)	2.3	0.7	2.7		M-41
42	SK11	寛永通宝(新)	2.3	0.6	2.6		M-42
43	SK21	寛永通宝(新)	2.4	0.6	3.2	背郭上に「文」	M-43
44	SK21	寛永通宝(新)	2.4	0.6	3.7	背郭上に「文」	M-44
45	SK21	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.9	背郭上に「文」	M-45
46	SK21	寛永通宝(新)	2.3	0.7	2.2		M-46
47	SK22	寛永通宝(新)	2.3	0.7	2.6		M-47
48	SK22	寛永通宝(古)	2.3	0.7	2.1	背郭上に「元」	M-48
49	SK27	寛永通宝(新)	2.5	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-49
50	SK27	寛永通宝(新)	2.4	0.6	3.4	背郭上に「文」	M-50
51	SK27	寛永通宝(古)	2.4	0.7	2.9		M-51
52	SK28	寛永通宝(新)	2.2	0.7	2.4		M-52
53	SK31	寛永通宝(新)	2.3	0.6	2.6		M-53
54	SK31	寛永通宝(新)	2.2	0.7	2.5		M-54
55	SK31	寛永通宝(新)	2.2	0.7	1.3	背郭上に「元」	M-55
56	SK31	寛永通宝(新)	2.2	0.7	2.6		M-56
57	SK31	寛永通宝(新)	2.3	0.6	3.3		M-57
58	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.0	背に11筋の青海波文	M-58
59	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.1	背に11筋の青海波文	M-59
60	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.2	背に11筋の青海波文	M-60
61	SK33	文久永宝	2.6	0.7	3.8	背に11筋の青海波文	M-61
62	SK33	寛永通宝(新)	2.6	0.7	4.4	背に11筋の青海波文	M-62
63	SK48	寛永通宝(古)	2.4	0.6	3.7		M-63
64	SK48	寛永通宝(新)	2.2	0.7	2.4		M-64
65	SK48	寛永通宝(古)	2.4	0.6	3.5		M-65
66	SK48	寛永通宝(新)	2.3	0.6	2.8		M-66
67	SK48	寛永通宝(古)	2.4	0.6	3.2		M-67
68	SK68	寛永通宝(新)	2.3	0.7	2.6		M-68
69	SK68	寛永通宝(新)	2.2	0.7	1.7	背郭上に「足」	M-69
70	SK68	寛永通宝(新)	2.2	0.7	2.5		M-70
71	SK78	寛永通宝(新)	2.2	0.7	3.3		M-71
72	SK78	寛永通宝(新)	2.2	0.6	2.6		M-72
73	SK78	寛永通宝(古)	2.4	0.6	4.0		M-73
74	SK80	寛永通宝(古)	2.4	0.6	2.3	3個接合	M-74
75	SK80	寛永通宝(古)	2.4	0.6	1.8		M-75
76	SK80	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.4		M-76
77	SK82	寛永通宝(新)	2.5	0.6	2.7	背郭上に「文」	M-77
78	SK85	寛永通宝(新)	2.3	0.7	2.4		M-78
79	SK89	寛永通宝(新)	2.4	0.7	2.5	背郭上に「文」	M-79
80	SK89	寛永通宝(古)	2.4	0.6	3.2		M-80
81	SK89	寛永通宝(新)	2.5	0.7	3.1		M-81

第3表 銭貨觀察表①

遺物番号	遺構	種類	径(cm)	孔径(cm)	重量(g)	備考	登録番号
82	SK92	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-82
83	SK99	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.9	背郭上に「文」	M-83
84	SK99	寛永通宝(新)	2.5	0.6	3.0	背郭上に「文」	M-84
85	SK99	寛永通宝(新)	2.5	0.6	3.8	背郭上に「文」	M-85
86	SK99	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-86
87	SK99	寛永通宝(新)	2.4	0.6	3.6		M-87
88	SK99	寛永通宝(新)	2.5	0.6	3.1		M-88
89	SK99	寛永通宝(新)	2.3	0.6	2.7		M-89
90	SK99	寛永通宝(新)	2.2	0.7	2.2		M-90
91	SK99	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.8	背郭上に「文」	M-91
92	SK99	寛永通宝(新)	2.2	0.8	2.1		M-92
93	SK99	寛永通宝(新)	2.3	0.7	2.5		M-93
94	検出(I B18m)	元祐通宝	2.3	0.7	3.2		M-94
95	検出(I B18m)	元豐通宝	2.3	0.7	2.9		M-95
96	検出(I B18m)	紹聖元宝	2.2	0.7	2.5		M-96
97	検出(I B18m)	寛永通宝(新)	2.4	0.6	2.4		M-97
98	検出(I B18r)	寛永通宝(新)	2.2	0.8	2.5		M-98
99	検出(I B18r)	寛永通宝(新)	2.3	0.7	2.7		M-99
100	検出(II B1k)	寛永通宝(新)	2.3	0.6	2.4		M-100
101	検出(II B1j)	寛永通宝(古)	2.2	0.6	2.7		M-101
102	トレンチ(I B19k)	寛永通宝(新)	2.4	0.6	3.9		M-102
103	トレンチ(I B19k)	寛永通宝(新)	2.4	0.6	3.4		M-103
104	トレンチ(I B19k)	寛永通宝(新)	2.5	0.6	3.5	背郭上に「文」	M-104

第4表 銭貨観察表②

遺物番号	遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	吸口径	吸口幹径	高さ	火皿径	幹径	材質	重さ(g)	登録番号
105	SK30	煙管吸口	4.9			0.5	1.0				銅	10.1	M-105
106	SK33	煙管雁首	4.8					1.6	0.9	0.9	銅	9.3	M-106
107	SK33	煙管吸口	8.7			0.5	1.0				銅	15.0	M-107
108	SK49	煙管吸口	7.6			0.6	1.0				銅	15.0	M-108
109	SK55	煙管雁首	(3.8)					1.3	-	1.1	銅	6.6	M-109
110	SK64	煙管吸口	(4.3)						-	-	銅	2.3	M-110
111	SK89F	煙管吸口	4.6			0.7	1.3				銅	11.2	M-111
112	SK89Fの下2	煙管雁首	4.7					2.0	1.1	1.3	銅	12.0	M-112
113	SK89Aの20	煙管雁首	1.6					1.6	1.2	1.0	銅	10.7	M-113
114	SK89Aの20	煙管吸口	5.3			0.6	1.0				銅	10.6	M-114
115	SK89南	煙管雁首	4.2					1.6	1.1	0.9	銅	7.3	M-115
116	SK91南	煙管雁首	4.4					1.6	1.0	1.0	銅	11.4	M-116
117	SK91南	煙管吸口	5.3	0.7		1.1					銅	12.7	M-117
118	SK99	煙管雁首	5.8					1.8	1.5	1.1	銅	12.5	M-118
119	SK107	煙管吸口	6.4			0.7	1.2				銅	6.6	M-119
120	SK109	煙管雁首	(3.9)					(1.1)	-	1.1	銅	6.6	M-120

第5表 金属・ガラス製品観察表①

遺物番号	遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重さ(g)	登録番号
121	SK31	釘	3.1			鉄	1.1	M-121
122	SK31	釘	3.6			鉄	2.2	M-122
123	SK89中央	釘	3.8			鉄	0.9	M-123
124	SK89南	釘	3.3			鉄	1.0	M-124
125	SK99	釘	4.9			鉄	1.0	M-125
126	SK33	金具	3.5	1.0		銅	4.9	M-126
127	SK33	金具	0.8	4.2	0.1	銅	2.7	M-127
128	SK89	金具	1.3	1.8	0.9	銅	1.4	M-128
129	SK89	金具	2.6	1.4	0.6	銅	1.8	M-129
130	SK29	火打金	4.8	1.4	0.3	鉄	2.3	M-130
131	SK33	火打金	4.2	1.6	0.2	鉄	1.6	M-131
132	SK31	火打金	3.9	1.2	0.2	鉄	1.5	M-132
133	SK48	火打金	3.8	1.3	0.2	鉄	1.5	M-133
134	SK49	火打金	4.1	1.4	0.2	鉄	1.6	M-134
135	SK64	火打金	7.2	1.4	0.2	鉄	3.1	M-135
136	SK78	火打金	5.5	1.9	0.6	鉄	6.8	M-136
137	SK78	火打金	4.6	1.2	0.3	鉄	3.2	M-137
138	SK86	火打金	5.4	2.8	0.3	鉄	3.2	M-138
139	SK89	火打金	4.6	1.7	0.3	鉄	2.4	M-139
140	SK89F	火打金	4.3	1.5	0.2	鉄	1.8	M-140
141	SK89F	火打金	4.3	1.3	0.2	鉄	1.3	M-141
142	SK89F	火打金	4.2	1.0	0.1	鉄	1.0	M-142
143	SK98	火打金	5.9	2.0	0.3	鉄	3.6	M-143
144	SZ04	火打金	6.0	2.0	3.0	鉄	3.7	M-144
145	SK30	かんざし	14.6	1.1~0.6	1.0~0.4	ガラス	15.9	XB-145

第6表 金属・ガラス製品観察表②

遺物番号	遺構	石材	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	登録番号
146	SK29	チャート	5.7	2.2	11.1	S-146
147	SK30	チャート	2.5	1.7	3.1	S-147
148	SK49	チャート	2.7	1.9	7.8	S-148
149	SK78	チャート	3.3	3.5	33.0	S-149
150	SK78	チャート	2.9	2.8	7.3	S-150
151	SK84	チャート	4.0	2.4	6.3	S-151
152	SK86	チャート	3.9	1.7	8.7	S-152
153	SK89	チャート	2.8	2.3	9.4	S-153
154	SK89	チャート	1.8	1.3	1.8	S-154

第7表 石片観察表

第IV章 出土人骨概要

SK07をはじめとする40個の土坑より42体分の人骨が出土した。ここでは各人骨について形態的特徴を記載し、マルテン法（江藤ら、1991）による計測を行った。頭蓋骨計測値は表8・9に、歯冠計測値を表10・11に示す。身長の推定には藤井（1960）を用いた。

- SK07** 骨の保存状態は良くない。頭位および埋葬姿勢は不明であるが、歯が土坑の北部にあり、下肢骨が南西部から出土していた。また頭骨の近くから銭3枚が出土した。残存する部分は、後頭骨、右側頭骨、左右不明の上腕骨骨体、右大腿骨骨体、左大腿骨骨体。出土した歯は全て下顎歯で、左犬歯、左第1小白歯、左第1・2大臼歯、右第1小白歯、右第2大臼歯の合計6本である。咬耗はほとんどみられない。

* : 不明

- SK09 保存状態は著しく不良である。出土した骨は左大腿骨近位端の一部である。また銭3枚および土器片が併出している。

- SK12** 保存状態は著しく不良である。出土した部位は椎骨片数点と火を受け白色化したと思われる長骨片である。

- SK29** 保存状態は良くない。頭位および埋葬姿勢は不明であるが、下肢骨が土坑の南方に頭骨が北方に位置していた。また火打金・チャートが供出している。残存する部位は、後頭骨の一部、下顎骨の一部、右上腕骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、不明骨片が数点出土している。いずれも保存状態が悪く、計測に耐えられなかった。歯は出土していない。

- SK30** 保存状態は比較的良好である。頭蓋骨が2点出土しているが、1点は頭蓋骨以外の骨が出土していない(SK30-19)。1点は他の四肢骨等とほぼ同じ高さからの出土であり、同一個体のものと思われる(SK30-18)。四肢骨の出土した個体の頭位は北西で、埋葬姿勢は右横臥屈位である。他に煙管吸い口とこうがいが出土している。頭蓋骨は2点とも保存状態はほぼ良好である。

SK30-18：頭蓋骨-右頸骨・右側頭骨・右頭頂骨下部および左右頸弓骨を欠損する。頭蓋冠の骨は厚い。外後頭隆起および眉上隆起は余り発達しない。矢状縫合は内板が癒合しているが、矢状縫合の外側および他の縫合は癒合していない。下顎骨は右半分を欠いている。頭蓋骨最大長は 174 mm、最大幅 136 mm であることから長幅示数は 78.2 となり、中頭に属する。歯列は以下の通りである。このうち左上顎の第 1 小臼歯から第 1 大臼歯にかけては、咬耗は部分的に象牙質まで進んでいる。また左下顎第 2・3 大臼歯の脱落跡は歯槽閉鎖の途中である。

* * * 5 4 * * * | * * 3 4 5 6 * * □：游離能 *：不明

体幹骨・四肢骨-残存する部位は以下の通りである。右鎖骨、左右上腕骨、左右尺骨、左

右大腿骨、左右脛骨、右腓骨。いずれの長骨も骨端部を欠いているため、身長推定を行えるだけの計測値は得られなかった。椎骨は第1・2頸椎、第5腰椎および仙骨である。頭蓋骨の形態から女性と思われる。

SK30-19について残存する部分は前頭骨・左右頭頂骨・後頭骨・上顎前部である。矢状縫合および人字縫合は一部内板が癒合しているが、外側および他の縫合は癒合していない。外後頭突起と眉上隆起は余り発達していない。残存する歯列は右上顎第1小白歯、左上顎第2切歯、左上顎犬歯、左上顎第1・2小白歯である。咬耗の度合いは、歯の保存状態が著しく悪く不明である。最大長184mm。頭蓋骨の形状から女性と思われる。

SK31 この土坑からも頭蓋骨が2体出土している。1個体は頭蓋骨のみが土坑の底部から30cm程度上部に位置しており(SK31-1)、底部から出土した頭骨には同一個体のものと思われる四肢長骨が出土している(SK31-3)。頭位は東と思われる。埋葬形態は不明である。釘・火打金・銭6枚が供出している。

SK31-1：残存する部分は頭頂骨および後頭骨の一部。歯は残存しない。

SK31-3：頭蓋骨は前頭骨・左右頭頂骨・左側頭骨。矢状縫合は内板が癒合しているが、冠状縫合は癒合していない。残存する歯は左下顎第2切歯、犬歯、第2小白歯、第1・2大臼歯、左上顎犬歯、第1・2小白歯、第1大臼歯。体幹骨は残存しない。四肢骨は右上腕骨片、左右大腿骨、左右脛骨、左右不明肺骨片が出土している。いずれも骨体のみである。

*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	4	5	6	*	*
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	2	3	*	5	6	7

*：不明

SK33 頭蓋骨の保存状態はほぼ良好であるが、四肢骨は骨端部の破損が大きく、計測は行えなかった。人骨の他に釘・火打金・チャート・銭5枚・飾り金具・煙管吸口および雁首が出土している。頭蓋骨は左右頬骨および上顎部分を欠落する。後頭孔周辺も破損している。外後頭隆起および眉上隆起が発達していない。縫合は全て癒合していない。左後頭部が右に比べやや突出している。残存する歯列は以下の通りである。このうち右下顎第2切歯～第2大臼歯および左第1切歯～第2大臼歯にかけて咬耗が激しい。特に左第1・2大臼歯は頬側面が歯頚部まで咬耗している。右第1切歯は他の歯列よりもやや低かったことから、咬耗がみられない。

*	*	6	*	*	3	*	*	*	2	3	4	5	6	7	*	
*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	*	□：遮離歯

□：遮離歯、*：不明

頭蓋骨の形状から女性と思われる。頭蓋骨最大長は162mm、最大幅125mmをはかり、長幅示数は77.2となり中頭に属する。四肢骨では左右上腕骨、手指骨6本、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨が出土している。いずれも身長を推定するための計測値は得られなかつた。

SK35 不明長骨が一個出土したのみである。

SK48 頭位は北西で埋葬姿勢は右横臥屈位。骨以外では木片・火打金・銭6枚が出土している。

骨の保存状態はほぼ良好で、残存する部位も多い。頭蓋骨は左頸骨および左側頭骨部分を欠損する。矢状縫合と冠状縫合の一部の内板が癒合しているほかは、癒合がみられない。下顎骨は左の一部を破損する。頭蓋最大長は 173 mm である。残存する歯列は以下の通りである。いずれの歯もあまり咬耗していない。左右下顎犬歯、左右第1小白歯にエナメル質減形成がみられる。

[8] 7 6 5 4 3 2 1 1 2 3 4 5 6 7 8	□: 遺歯歯、*: 不明
* 7 6 5 4 3 2 1 [1] 2 3 4 5 6 7 *	

体幹骨は環椎から仙骨まで全て残存する。尾骨は残存しない。骨増殖はみられない。胸骨体および胸骨柄が残存する。左右寛骨が残存するが共に恥骨部分を欠損する。肋骨は骨端部分を欠損するものがほとんどであるが、左右ともに 12 本が確認された。上肢体では、左右鎖骨、左右肩甲骨、左右上腕骨、左有頭骨、左有鈎骨が残存する。下肢骨では左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右蹠骨、左右距骨が残存する。頭蓋骨において眉上隆起および外後頭隆起があり発達しないこと、寛骨の大坐切痕がやや鈍角であることから女性と思われる。左大腿骨の最大長が 400 mm、右脛骨の最大長が 314 mm であることから、推定される身長は 151 cm、147.0 cm となる。

SK49 骨の保存状態はあまり良くなく、頭位および埋葬姿勢は不明である。骨以外の出土遺物は釘・煙管雁首・火打金・チャート各 1 点である。残存する部位は頭蓋骨の一部、下顎骨の一部、右寛骨、左右上腕骨、左尺骨、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨である。長骨はすべて骨体部のみで身長の推定を行えるだけの測定値は得られなかった。頭蓋骨は眼窓より下の顔面を欠いている。眉上隆起は発達しておらず、女性と思われる。頭蓋骨最大長は 167 mm である。矢状縫合および環状縫合、人字縫合など全ての縫合が癒合していない。

SK53 頭位は北、埋葬姿勢は左横臥屈位。骨の保存状態はあまり良くない。残存する部分は、頭蓋骨では、左右頭頂骨、後頭骨の一部、右半分を欠く下顎骨、頭蓋底の一部である。矢状縫合、人字縫合はすべて癒合していない。外後頭隆起は発達していない。歯列は以下の通りである。上下の左第1切歯にエナメル質減形成がみられる。咬耗は残存するすべての歯にみられる。特に右下顎第1大臼歯、左下顎第1・2大臼歯、右上顎第1大臼歯、左上顎第1・2大臼歯はいずれも象牙質まで磨耗している。

[8] 7 6 5 * 3 * * 1 * * 4 5 6 7 8	○: 齢齧閉鎖、□: 遺歯歯、*: 不明
8 [7] 6 ⑤ 4 3 2 * 1 * * * 5 [6] 7 8	

体幹骨は環椎、軸椎、第 1 ~ 4・10・11 胸椎、第 1 ~ 5 腰椎、仙骨である。仙骨と第 5 腰椎は総合している。また仙骨以外の椎骨は保存状態が悪く、椎体のみもしくは椎骨刺のみが残存する状態である。肋骨片が 4 点残存する。右寛骨は恥骨部分および腸骨の一部を欠損するのみであるが、左寛骨は腸骨一部を残すのみである。上肢体では左肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、左橈骨である。下肢骨は左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨である。寛骨の大坐切痕が鈍角を示すことや外後頭隆起が発達していないことから、女性と思われる。

SK54 頭位は北東。右横臥屈位。SK110 に隣接しており、椎骨が連続していることから、SK110

で出土した頭蓋骨が同一個体のものであると思われる。出土した部位は胸椎3点、腰椎2点、仙骨、左寛骨大坐切痕付近、左大腿骨、左膝蓋骨、左脛骨、左腓骨。寛骨の大坐切痕が鈍角であることから、女性であると思われる。左大腿骨の最大長が355mmであることから、推定身長は140.6cmとなる。

SK55 審骨より下の部分しか出土していないため、頭位および埋葬姿勢は不明である。供出遺物は煙管雁首1点である。出土部位は頭頂部付近のみの頭蓋骨、左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、指骨片4点。頭蓋骨に見られる縫合はすべて内板のみが融合する程度である。保存状態はあまり良くない。性別は不明である。

SK58 頭蓋骨の一部と長骨片数点が出土。不明鉄片も供出する。保存状態は不良である。残存する部位は、後頭骨片、側頭骨片、上顎および下顎骨。このうち第2大臼歯には咬耗の跡が認められなかった。性別は不明である。

*	7	6	5	4	3	2	*	1	2	3	*	5	6	7	8
*	7	6	5	4	*	*	1	*	*	*	4	*	6	7	8

*:不明

SK61 頭位、埋葬姿勢は不明である。保存状態は不良である。出土部位は、左側頭骨、左頸頂骨下部、右頸頂骨、前頸骨上部、後頭骨上部、右上腕骨、右桡骨。歯は出土していない。

SK65 保存状態は著しく不良で、出土したものは、不明長骨（大腿骨？）片1点のみである。

SK76 頭部のみ出土である。保存状態は不良である。出土部位は左右側頭骨片、上顎片、歯23点である。残存した歯列は下記の通りである。咬耗の度合いは全ての歯において部分的に象牙質までおよぶ程度である。性別は不明である。

8	7	6	5	4	3	2	1	①	2	3	*	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	*	*	3	*	*	*	*	*

□: 遺離歯、*: 不明

SK77 頭位は北西で埋葬姿勢は右横臥屈位。残存する部位は頭蓋骨で、前頭骨眉間部、上顎、下顎骨、後頭骨、側頭骨一部。歯列は以下の通りである。咬耗は上下ともに、第1切歓から第2大臼歯まで、部分的に象牙質まで咬耗が進む程度である。

*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	*	*
*	7	6	5	4	3	2	1	*	2	3	4	5	6	7	*

*:不明

体幹骨は第1頸椎から仙骨まで全ての椎骨が確認された。骨増殖は見られない。肋骨片も数点確認されている。左右寛骨は腸骨の一部が残存する程度である。上肢では左右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、左尺骨、下肢では左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨、左右距骨である。右上腕骨の最大長は260mm、右脛骨の最大長は305mmであった。

SK78 頭位は北東で埋葬姿勢は左横臥屈位。保存状態はほぼ良好である。供出した遺物は木片・火打金・銭6枚である。頭蓋骨は顔面右側を欠損する状態で、残存する部位は左右頭頂骨、左側頭骨、前頭骨、左眼窩周辺、下顎左半分である。縫合は矢状縫合の一部およびラムダ縫合の一部の内板が融合している。頭蓋骨最大長は188mmである。眉上隆起が発達することから、男性と思われる。残存する歯列は以下の通りである。このうち左右上顎第3大臼歯、右下顎第1小臼歯から第2大臼歯までには咬耗が見られない。他の歯には少しであ

るが咬耗が見られる。右上顎第2小臼歯に齶齒がみられる。また左下顎第2切歯から第2小臼歯までに、エナメル質減形成がみられる。

8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	*		1	2	3	4	5	6	7	8

体幹骨では胸椎が1点出土している。上肢帯では、右肩甲骨、左右鎖骨、左右上腕骨、右桡骨、右尺骨。下肢帯では左右大腿骨、左右脛骨が確認された。いずれの長骨も骨端部欠くため、計測はできなかった。

SK82 下肢骨から上肢骨までがほぼ一ヵ所に集中していることや、寛骨と大腿骨が大きく離れて出土していること、肋骨が重なった状態で出土していたことから、埋葬姿勢は膝を立てた状態の座位であったと推測される。供出した遺物は銭1枚である。骨の保存状態はほぼ良好である。頭蓋骨では顔面と左側頭骨部分を欠損する程度である。眉上隆起が発達していることから男性と思われる。左眼窩上面に小さな孔が5点ほど確認された。体幹骨は頸椎2点、胸椎4点である。右寛骨は破片であるが出土している。上肢帯では左右肩甲骨、左上腕骨、尺骨片が、下肢帯では右大腿骨、左大腿骨近位端、左右脛骨が出土している。いずれも骨端部が欠損していたり、骨端のみの出土で計測には耐えられなかった。肋骨が重なる状態で6本出土したが、いずれも骨体部のみである。

SK84 骨の保存状態は不良である。出土部位は左右側頭骨下部および左右不明の大腸骨片である。他に木片・不明鉄片・チャート・銭7枚が出土している。

SK85 埋葬姿勢は、椎骨が連結していたこと、左大腿骨と左上腕骨が並列に並んでいたこと、頭蓋骨が大後頭孔を上にした状態で出土したことなどから膝を立てた状態の座位であったと思われる。骨の他に釘・銭5枚が出土している。骨の保存状態はあまり良好ではない。頭蓋骨では残存する部分は、前頭骨左半分、左頬骨、左右上顎の一部、左側頭骨、後頭骨上部、下顎前方部である。頭蓋骨は土圧による変形を受けたと思われる。縫合は矢状縫合の一部の内板が融合するのみで、他の部分の融合は認められない。残存する歯列は以下の通りである。咬耗の度合いはすべて少しである。右下顎第2、3大臼歯に齶齒が見られる。

*	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	*

□:遊離歯、*:不明

体幹骨は、環椎から仙骨まですべて残存する。ただし保存状態が不良なため、椎体のみの出土が多い。肋骨が12本、重なった状態で出土した。胸骨板も確認されている。左右寛骨も残存している。大坐切痕が鈍角であること、頭蓋骨で眉上隆起および外後頭隆起があまり発達していないことから女性と思われる。上肢帯では左右鎖骨、肩甲骨、上腕骨、桡骨、尺骨、左月状骨、舟状骨、有頭骨が確認されている。下肢帯では左大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左足根骨、足指骨10個が出土した。

SK86 保存状態は著しく不良である。骨と共に火打金・銭6枚が出土している。頭蓋骨は、右側頭骨下部、右上顎片、下顎片および歯16本が確認されている。歯列は以下の通りである。このうち左右下顎第3大臼歯の歯根部がともに2/3程度形成された状態であった。

*	*	6	5	4	3	2	1	*	*	*	4	*	*	*	*
8	7	*	5	4	3	2	1	*	*	*	*	*	6	*	8

* : 不明

他の残存部分は右恥骨の一部、左大腿骨近位端、足指骨片 2 点である。

SK89 この土坑からは 11 個体分の人骨が出土した。人骨の他には、釘・煙管雁首 3 個・煙管吸口 3 個・飾金具・火打金・チャート・銭 11 枚が出土している。各個体はそれぞれ隣接しており、完全に重なり合うものはなかった。また各個体が隣接していることから釘などの遺物がどの個体に付随するのかは不明である。土坑の南方から順に a から j の記号を添付した。

SK89a 頭位は南西、埋葬姿勢は右横臥屈位。保存状態はほぼ良好である。残存部分は頭蓋骨では、顔面および左右側頭骨、後頭骨下部を欠く。眉上隆起が大きく発達することから、男性度思われる。矢状縫合、環状縫合、人字縫合の全てが癒合している。上顎骨は右下半部を、下顎骨は前方部のみを残存している。残存する歯列は以下の通りである。このうち左右下顎切歯はほぼ半分が咬耗でなくなっている。左右下顎第 1・2 大臼歯も半分ほどが残る程度であるが、特に頬側は歯頸部に達するほど咬耗している。また上顎の大臼歯では舌側に咬耗がみられる。

*	7	6	5	4	3	*	1	1	2	3	*	5	6	7	*
*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	*

□ : 遊離歯、* : 不明

体幹骨では、寛骨から仙骨まで全て残存するが、保存状態は悪く椎体のみのものが多い。このうち、第 5 腰椎と仙骨はほとんど癒合した状態であった。また第 3 腰椎と第 4 腰椎も癒合していた。胸骨体が確認されている。左右寛骨は破片でのみ確認された。上肢帯は左右肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、左右頭骨、左右尺骨が確認されている。下肢帯では左右大腿骨、左右脛骨が確認されている。

SK89b 大腿骨および脛骨が立て膝の状態で出土していること、椎骨が連続して出土していることと大後頭孔が上になる状態で頭蓋骨が出土したことなどから、膝を立てた状態の座位で埋葬されたものと考えられる。骨の保存状態は大変良好である。頭蓋骨は左頸骨の一部、後頭骨上部、右乳突起の一部、大後頭孔右側、左右下顎頸を欠損する。眉上隆起および外後頭隆起はあまり発達しない。頭蓋骨最大長は 171 mm、最大幅は 134 mm であることから、長幅示数が 78.4 となり中頭に属する。舌骨体は舌骨柄と結合した状態で出土している。縫合は内板は全て癒合している。残存する歯列は以下の通りである。歯列はいずれも咬耗が激しく、歯槽閉鎖も著しい。右上顎第 1 切歯、左上顎第 3 大臼歯は約半分ほど咬耗でなくなっているが、左上顎犬歯、第 1・2 小臼歯、第 2 大臼歯、右第 1 小臼歯は歯冠部が咬耗でなくなり歯根のみとなっている。下顎でも咬耗が進んでいる。右下顎第 2 切歯から右第 1 大臼歯まで、左下顎第 2 切歯から第 2 小臼歯まではやはり歯頸部まで咬耗が達している。特に第 1 小臼歯よりも前方に位置する歯は、いずれも前方（頬側）がひどく咬耗している。下顎骨には歯槽膿漏とおもわれる孔が無数に分布している。

8	⑦	⑥	⑤	4	③	②	1		①	②	3	4	5	⑥	7	*
*	⑦	6	5	4	3	2	①		①	2	3	4	5	6	⑦	*

○：齒槽閉鎖、□：遮離歯、＊：不明

体幹骨では環椎から仙骨まで残存する。骨増殖が著しく、第3・4頸椎、第3・4・5腰椎に特に認められた。肋骨は破片が出土している。寛骨は左右ともに出土しており、大坐切痕の角度と頭蓋骨の形状から女性であると思われる。上肢帯では、左右鎖骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨が出土している。保存状態は良好であるが、骨端部が欠損するものが多く、計測に耐えられるものは少ない。手根骨は左右有頭骨、有鈎骨、大菱骨、月状骨、舟状骨、左三角骨、手指骨8個が出土している。下肢帯では左右大腿骨、脛骨、腓骨、左右距骨、踵骨、舟状骨、中間楔状骨、足指骨12個が出土している。計測値はそれぞれ最大長で右桡骨234mm、左桡骨230mm、左尺骨253mm、となる。これらの値から推定する身長は、156.2cm、155.8cm、156.0cmとなる。

SK89c 骨の残存状態は不良である。残存する部分は、後頭骨、左頭頂骨、左側頭骨下部、右側頭骨、上顎歯7本（右上顎第1・2大臼歯、左上顎犬歯、左上顎第1小白歯、左上顎第1・2・3大臼歯）、長骨片数点である。前頭骨には前頭骨縫合がみられる。左第3大臼歯は歯根部が半分しか形成されていない。環状縫合、矢状縫合、人字縫合の全て開いている状態である。また頭蓋骨の骨盤が他のものに比べ薄い。

*	7	6	*	*	*	*	*	*		*	*	3	4	*	6	7	8
*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*	*	*	*	*	*	*

＊：不明

SK89d 保存状態はあまり良くない。残存するものは、眉間および左眼窓上部、上顎下部、舌骨体、歯30本である。眉上隆起および外後頭隆起はあまり発達していないことから女性と思われる。歯列は以下の通りである。いずれの歯もあまり咬耗していない。

8	7	6	5	4	3	*	1		1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7	8

＊：不明

体幹骨では第1～5頸椎、上肢帯では左肩甲骨、左鎖骨、左頭骨、手根骨（左舟状骨）、手指骨3本である。下肢帯では左大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、左右踵骨、足指骨5本が出土している。

SK89e 頭位は東。残存する部位は少ない。頭蓋骨の保存状態はほぼ良好である。顔面と左右側頭部が欠損している。矢状縫合の前方部のみが縮合している。眉上隆起はやや発達していることから男性と思われる。下顎は左前方部のみが残存する。歯は、下顎歯のみである。左犬歯は第1小白歯側が大きく咬耗している。

*	*	*	*	*	*	*	*	*		*	*	*	*	*	*	*
*	*	*	*	*	③	②	①		①	②	3	4	5	6	7	⑧

□：遮離歯、＊：不明

他の部位は右肩甲骨近位、左右上腕骨遠位、肋骨3点、左大腿骨近位、右脛骨骨体である。

SK89f 頭位は東、埋葬姿勢は右横臥屈位。保存状態は良好であるが、鼻骨以下の顔面が変形しており、顔面の復原ができなかった。眉上隆起と外後頭隆起が発達している。上顎には鼻腔漏と思われる孔が存在している。頭蓋骨最大長は190mm、最大幅は142mmであるこ

とから、長幅示数が 74.7 となり、長頭に属する。残存する歯列は以下の通りである。左下顎第2切歯は犬歯側の半分が、左右下顎犬歯および右上顎第1・2切歯、左右上顎犬歯はすべて歯冠の 1/3 ほどが咬耗している。左下顎第1大臼歯、右第2大臼歯、左上顎第2大臼歯、左上顎第1・2小臼歯、右上顎第1・2大臼歯はいずれも歯冠の半分まで咬耗している。このうち下顎の大臼歯は頬側が歯頸に達するほど咬耗しているのに対し、上顎歯では舌側がひどく咬耗している。右下顎犬歯にエナメル質減形成がみられる。

*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	*
*	⑦	6	⑤	4	3	②	1	1	2	3	4	5	6	7	*

○：歯槽閉鎖、□：遊離歯、＊：不明

他の出土部位は第1～7頸椎、第1～3・7～12胸椎、第1・5腰椎、仙骨が確認できた。このうち、仙骨に骨増殖がみられた。左右寛骨は長骨の一部を欠損するのみである。大坐切痕が鋭角であることから男性であると追われる。肋骨片が2点、胸骨柄、胸骨体が確認されている。上肢帯は左右肩甲骨、鎖骨、左上腕骨、左橈骨、左尺骨、左右有頭骨が出土している。下肢帯では、左右大腿骨、左右膝蓋骨、左右脛骨、左右腓骨、左右距骨、左右踵骨、左右舟状骨、左右内側模状骨、右外側模状骨、右立方骨、足指骨 13本である。四肢長骨の計測値は、左右上腕骨の最大長が 311 mm、311 mm、右橈骨が 249 mm、左右大腿骨 440 mm、435 mm、右脛骨 365 mm、右腓骨 354 mm である。これらの値から推測される身長は、160.9 cm、160.0 cm、164.7 cm、163.6 cm、162.3 cm、164.1 cm、163.0 cm となる。

SK89g 保存状態は著しく不良である。残存する部位は、頸椎の一部、胸椎の一部、仙骨の一部、左右腸骨の一部、左上腕骨骨体である。

SK89h 残存状態は良好であるが、残存部位は少ない。出土部位は下顎骨、左右鎖骨、肋骨 4 点である。歯列は以下の通りである。

*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

□：遊離歯、＊：不明

いずれの大臼歯にも咬耗がみられる。このうち右第3大臼歯は歯冠の 1/3 が齶歯で欠損している。左第3大臼歯の歯冠部にはエナメル質減形成がみられる。

SK89i 頭位は北西。出土部位は頭蓋骨、舌骨および胸椎 10 点のみである。頭蓋骨の欠損部分は右眼窩周辺、上顎前方部、左頸骨、左右胸骨弓、左乳状突起である。頭蓋骨最大長は 175 mm、最大幅は 134 mm となり、長幅示数は 76.6 で中頭に属する。顔面部分の保存状態は他の部分に比べ不良である。外後頭隆起が発達している。矢状縫合および環状縫合の内板は癒合している。他の縫合は癒合していない。残存する歯列は以下の通りである。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*

□：遊離歯、＊：不明

SK89j 埋葬姿勢は膝を立てた状態の座位。保存状態はほぼ良好で、残存部分も多い。頭蓋骨は左頸骨の一部および右頭骨下部、左右側頭骨上部を欠損するのみである。眉上隆起および外後頭隆起はあまり発達していない。下顎はおとがい付近の保存状態が不良である。頭

蓋骨の縫合は全て癒合している。歯列は以下の通りである。このうち右下顎第1小白歯は咬耗が激しく歯根部のみが残存している。右下顎第2小白歯～第3大臼歯にかけての咬耗が激しく部分的に象牙質まで達している。右上顎第2小白歯、第1・2大臼歯も咬耗が激しい。左下顎第1大臼歯は奥側が欠落している。また、上顎切歯がかなり前方に突出するのが特徴である。

*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

□：遊離歯、*：不明

他の出土部位は次の通りである。体幹骨は第1・2頸椎、第10～12胸椎、第1～4腰椎、仙骨。左右寛骨はともに保存状態が良好である。大坐切痕が鈍角であることや頭蓋骨の形態から女性であると思われる。肋骨が2点確認されている。上肢帯の残存部位は左右肩甲骨、左鎖骨、左右上腕骨、右桡骨、右尺骨、手指骨5点。下肢帯は左右大腿骨、左右脛骨、左右腓骨、右距骨、足指骨4本が確認されている。

SK89 南 この個体は、他のSK89の一連のものとは出土レベルが明らかに異なるものである。保存状態も不良である。残存部位は頭蓋骨の破片3点、腰椎1点、尺骨片1点、右膝蓋骨、右脛骨近位端、右距骨、右蹠骨、右内模状骨。

SK91 骨の保存状態は良好であるが、残存部分および部位は少ない。煙管吸口・雁首・銭7枚が供出している。頭蓋骨は顎面および上顎、頭頂部が残存している。下顎も右半分が残存している。矢状縫合は内板が癒合している。眉上隆起はあまり発達していないことから女性と思われる。残存している歯列は、下記の通りである。咬耗は全体に少ない。左下顎第3大臼歯は齶歯である。右下顎第2切歯にエナメル質減形成がみられる。

⑧	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
*	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

○：齒槽閉鎖、□：遊離歯、*：不明

他の出土部位は左鎖骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨である。

SK98 骨の保存状態は不良である。出土部位は頸椎2点、胸椎5点、腰椎2点である。骨の他に火打金・銭3枚が出土している。

SK99 保存状態は残存しているものは良好であるが、残存部位は少ない。釘・煙管雁首・銭13枚が供出している。残存している頭蓋骨は左右頭頂骨の一部、前頭骨の一部、後頭骨の上部、左上顎片、下顎骨前方部である。残存する歯列は以下の通りである。左上顎犬歯に咬耗が少し認められた。左下顎第1切歯から右下顎犬歯までの間は、下顎が残存しており、齒槽閉鎖が確認された。

*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	3	4	*	*	*
*	*	*	*	*	③	②	①	①	*	3	*	*	*	*	*

○：齒槽閉鎖、*：不明

四肢骨では左鎖骨骨体。肋骨3点のみである。

SK107 骨の保存状態は著しく不良である。出土した部位は右寛骨臼と右大腿骨骨体である。ほかに煙管吸口が出土している。

SK109 煙管吸口が出土している。人骨では大腿骨骨体の破片が出土しているのみである。

SK110 SK53 と隣接しており、出土状態から SK53 の頭部である。頭位は北東。保存状態は良好である。頭蓋骨は左側頭部を欠くのみである。眉上隆起も外後頭隆起もあり発達していないことから女性と思われる。頭蓋骨最大長は 155 mm である。上顎切歯が突出する特徴を示す。矢状縫合および環状縫合の内板は癒合している。残存する歯列は下記の通りである。左右上顎第 3 大臼歯、右下顎第 3 大臼歯はいずれも齶歯であり、歯冠の半分程度欠損している。残存する歯の全てに咬耗がみられる。その中でも左右上顎第 1 大臼歯は特に咬耗が進んでいる。

8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

残存部位は、体幹骨は第 1 ~ 5 頸椎、胸椎 6 点、腰椎 3 点。上肢骨は左右肩甲骨、左右鎖骨、左上腕骨、右桡骨、右尺骨、手指骨 2 本。下肢骨は右大腿骨、右腓骨である。右大腿骨の最大長は、355 mm となり、推定身長が 140.6 cm となる。

遺構番号	性別	遺構番号	性別	遺構番号	性別
SK07	不明	SK55	不明	SK89d	女性
SK09	不明	SK58	不明	SK89e	男性
SK12	不明	SK61	不明	SK89f	男性
SK29	不明	SK65	不明	SK89g	不明
SK30-18	女性	SK76	不明	SK89h	不明
SK30-19	女性	SK77	不明	SK89i	男性?
SK31-1	不明	SK78	男性?	SK89j	女性
SK31-3	不明	SK82	男性	SK89 南	不明
SK33	女性	SK84	不明	SK91	女性
SK35	不明	SK85	女性	SK98	不明
SK48	女性	SK86	不明	SK99	不明
SK49	女性	SK89a	男性	SK107	不明
SK53	女性	SK89b	女性	SK109	不明
SK54	女性	SK89c	不明	SK110	女性

第 8 表 出土人骨性別一覧

参考文献

- 江藤盛治 1991 「人体計測法」『人類学講座別巻 1』 雄山閣出版
 茂原信夫 1994 「本郷豈遺跡(福島県)出土の江戸時代人骨」『福島県文化財調査報告書第 307 集』 p 293-321 福島県教育委員会
 藤井 明 1960 「四肢長骨の長さと身長との関係に就いて」『順天堂大学体育学部紀要 3』 p 49-61

sk番号	性別	不明	女性	女性	女性	子供?	男性?	男性?	不明	女性	女性	男性	男性	性別?	女性	不明	女性	
1 頭蓋骨最大長			174.0	184.0	162.0	173.0	167.0	188.0		171.0		190.0	175.0		155.0			
3 グラバコラムダ員			179.0	183.0	153.0	178.0	154.5	179.0	182.0		171.0		189.0		153.8			
5 頭骨官員			97.0		94.0	105.0					103.0		107.0	93.0		92.0		
8 頭蓋骨最大幅			136.0		125.0					134.0		142.0	134.0					
8/1 長歯示数			78.2		77.2					78.4		74.7	76.6					
7 大顎前孔員										32.4		36.1	38.9		34.5	33.8		
9 矢小前頭幅			93.0							94.3			103.5	88.3				
10 矢大前頭幅			165.0							107.6			124.1	107.0				
9/10 頭部頭幅示数			88.6							87.6			83.4	82.5				
11 同耳幅			107.0		111.0					126.1			130.0	103.4				
12 最大後頭幅			104.0							111.0			113.0	104.4		93.7		
17 バイオントレーディング										137.0			145.0	134.0				
16 大顎頭孔幅										28.1		26.5	30.4		29.1	28.0		
17/1 肩帶示数										80.1				26.3	26.6			
17/8 脊髄示数										102.2			102.1	100.0				
23 頭骨水平周			445.0							497.0			548.0	498.0				
24 横幅員			315.0		285.0					295.0			330.0	315.0				
25 中矢状頭幅員												392.0			341.0			
26 正中矢状頭幅員			125.0	139.0	113.0	115.0	115.0	120.0	128.0	127.0		115.0	135.0	124.0	126.0	110.0		
27 正中矢状頭頂頭幅員			130.0	130.0	100.0	123.0	105.0	120.0	120.0	128.0	133.0		110.0	140.0	129.0	169.0	115.0	
28 正中矢状頭側頭幅員											110.0		115.0	117.0	117.0	127.0	116.0	
28(1) 正中矢状上頸頭幅員			65.0	73.0	100.0	95.0		95.0	65.0	65.0		73.0	60.0	53.0	82.0	71.0		
29 正中矢状前頭幅員			110.5	115.6	109.5	102.0	104.6	114.6	113.6	108.3		110.1	118.1	107.0	188.5	99.6		
30 正中矢状頭頂頭幅員			112.3	113.2	99.7	112.8	98.4	109.2	109.0	110.8		104.2	123.0	124.6	98.2	101.1		
31 正中矢状頭側頭幅員											91.7		89.3	100.2	101.4	104.4	100.2	
31(1) 正中矢状上頸頭幅員			64.8	79.7	87.8	82.8		86.4	65.3	61.8		63.4	57.0	54.0	75.9	94.1		
40 頭高										96.1			99.5		91.9			
43 上顎前幅										105.5			110.2					
44 頭部當幅										102.4								
45 頭弓幅										130.5								
46 中頭幅										98.0								
47 頭周										161.5								
48 上顎高										68.0			73.3	66.0	60.9			
47/45 ルマン頭示数										77.8								
48/45 ルマン上顎示数										52.1								
47/46 ルマンヒュウ顎示数										103.6								
48/46 ルマンヒュウ上顎示数										69.4								
50 頭部眞開幅										41.8 L	41.6 R		19.4	21.1		18.3		
50/44 頭部眞開幅示数										34.4 L	35.1 R							
51 眼窓幅													58.9	58.5L	38.6			
52 眼窓高													37.88	41.6L	31.8			
52/51 眼窓示数													97.38	108.1L	82.4			
54 眼幅										25.9	22.3		26.5	23.9	23.0	23.4		
55 眼高															48.1			
54/55 眼示数															48.6			
57 鼻骨最小幅			8.4			12.4		10.3			9.0	11.2		9.5				
57(1) 鼻骨最大幅								18.0						27.4	11.7			
60 上顎齒槽員													51.8	51.6	50.0			
61 上顎齒槽幅員						79.7		74.2			73.4		69.3	64.7				
61/60 上顎齒槽示数													134.9	129.4				
62 口道員								40.0	41.2		42.4		45.4	43.8	46.5			
63 口道幅						41.0		40.3			33.1	36.2	38.1	39.7	45.3			
63/62 口道示数								100.8			78.1		83.9	90.6	97.4			
67 前下物幅						44.7		47.6	47.0		47.8		44.1	44.7				
68 下顎長													67.0					
69 オトガイ高						35.0		35.2			33.7	45.4		29.0	29.0			
69(1) 下顎体高			31.5		32.9	31.4	34.1						34.2		25.9			
70 下顎枝高								75.9										
79 下顎枝角								113.5							127.0			
79(3) 下顎切痕高										14.0			14.8	13.1	10.0			
71(1) 下顎切痕幅										33.9			40.9	36.3	32.0			

第9表 頭蓋骨計測表①

sk番号	口通寺(愛知)		本郷寺(福島)		殿久保(福島)		無線報(東京)		桑原(栃木)		開東人 森田	
	n	男性平均	n	女性平均	浅瀬(1994)	浅瀬(1994)	森田・河越	森田(1970)	男性	女性	男性	女性
1 頭蓋骨長大	3	184.3	6	167.0	182.1	176.5	185.0	176.0	183.5	173.2	180.1	172.6
3 グラベルラムダ	3	183.3	6	162.1	173.0	173.5	180.3	170.0	178.0	168.7	171.9	169.7
5 頭蓋骨長	2	180.0	5	98.2	165.3		104.0	98.0	182.6	97.8	103.9	98.4
8 頭蓋骨大幅	2	138.0	3	131.7	137.0	133.0	138.7	129.6	141.1	136.8	131.6	128.5
8/1 長頭骨小幅	2	75.7	3	77.9	75.3	76.9	75.4	73.3	77.0	79.0	72.7	74.4
7 大顎歯孔長	1	38.9	4	34.2								78.5
9 頸部前頭幅	2	95.9	2	93.7	93.9	95.2	100.7	94.0	94.9	91.5	93.5	91.9
10 前大顎頭幅	2	115.6	2	108.3	115.4	111.0	118.5	120.0	117.9	112.3	102.9	115.9
9/10 横顎頭示数	2	83.0	2	88.1	81.8	82.2	86.1	83.3	81.3	81.1	90.9	89.7
11 吻頭幅	2	116.7	3	114.7	126.7	114.7	130.3	119.3	126.6	119.8	121.5	118.4
12 大歯頭幅	2	108.7	3	102.9	113.4	109.4	107.0	109.3	104.5	109.3	105.7	108.4
17 パリオブレグマ高	2	139.5	1	137.0	136.7		137.0		138.5	134.1	135.9	132.9
16 大顎頭孔幅	1	30.4	4	27.9								138.1
17/1 長頭骨小幅	2	76.4	1	80.1	75.7		75.6		75.6	88.5	75.5	76.5
17/8 横顎頭示数	2	101.1	1	102.2	103.6		100.7		98.2	98.1	104.6	102.9
23 浅瀬水平周	2	533.0	2	471.0	524.0	537.0	527.0	504.9	532.2	497.3	567.8	492.6
24 横弧径	2	322.5	3	299.2	361.5		310.0	298.5	324.9	315.1	287.8	294.0
25 正中矢状弧長	1	392.0	1	341.0	361.6		376.0		373.7	359.9	372.0	371.7
26 正中矢状頭頸弧長	5	124.4	6	117.3	124.8	118.0	125.5	129.0	127.6	123.7	130.6	117.4
27 正中矢状頭頸弧長	5	125.8	7	112.7	121.8	128.0	129.0	125.0	126.1	121.3	129.4	127.4
28 正中矢状頭頸弧長	3	116.3	3	117.7	118.0	114.7	114.0	102.0	123.8	114.9	124.4	111.1
28(1) 正中矢状上顎骨長	5	69.6	6	79.7	77.7	69.3	57.7	58.0	78.1	71.9	66.6	57.9
29 正中矢状頭頸長	5	112.7	6	253.7	111.8	100.9	111.2	108.6	111.9	108.2	113.5	110.2
30 正中矢状頭頸弧長	5	114.0	7	104.9	108.7	109.4	114.9	114.8	113.0	109.2	111.7	110.1
31 正中矢状頭頸弧長	3	97.0	3	98.8	100.7	103.8	99.7	90.7	101.9	97.5	101.4	92.1
31(1) 正中矢状上顎骨長	5	65.2	6	77.9	73.4	65.4	56.6	51.5	72.6	67.0	66.4	56.1
40 頭長	3	92.8	103.3				100.0	99.0	98.5	82.5	99.5	94.4
43 上顎頭	1	110.2	1	105.5	105.1	101.3	105.8	101.0	105.6	100.7	96.7	102.0
44 四頭窓幅	1	102.4	2	96.3	96.2		98.1	92.5	99.9	94.4	104.6	100.0
45 頭冠幅	1	130.5	136.7	121.0	122.0		136.4	125.9	126.3			132.9
46 中顎頭	1	98.0	99.0	93.4	106.0		101.6	95.1	101.1	91.6	98.6	93.5
47 頭高	1	101.5	126.7	117.0	123.6	110.5	123.5	119.0	122.4	117.7	123.8	115.0
48 上顎高	3	67.4	72.4	68.1	74.4	63.7	71.8	68.3	72.5	71.4	70.7	67.1
47/5 コママン頭示数	1	77.8	91.9			95.9		91.7	95.7	93.7		93.1
48/5 コママン上顎示数	1	52.1	52.6			56.0		53.0	54.4	55.4		53.3
47/6 ウルヒェウ頭示数	1	103.6	136.9	120.9	115.0					115.8		125.4
48/6 ウルヒェウ上顎示数	1	69.4	72.5	70.4	69.5		70.9	72.3	70.2		71.8	82.0
50 前頭窓間幅	1	19.4	4	30.7	31.7	19.4	20.8	18.9	18.5	17.3	20.5	18.0
50/4 前頭窓間頭示数	2	34.8	18.9	29.8	21.3	19.2	18.5	18.3	20.6	19.2	18.3	18.5
51 頭窓幅	2	38.8	42.0	49.7	40.9	39.7	43.3	41.7	41.8	40.0	42.7	41.1
52 頭窓高	2	34.8	43.9	33.8	34.4	33.9	35.1	35.3	34.5	34.9	34.3	33.8
52/34 頭窓示数	2	89.8	83.0	80.7	82.0	85.0	81.6	84.7	83.3	78.1	89.4	82.4
54 頭幅	2	25.2	4	23.9	25.6	25.4	24.4	25.7	25.1	24.6	25.9	24.2
55 鼻高	1	48.1	53.6	48.1	52.8	47.7	53.6	50.4	50.5	49.9	52.0	49.0
54/55 鼻幅	1	48.6	47.8	52.9	46.4	56.1				51.3	48.4	48.4
57 頭蓋骨小幅	2	19.7	4	9.9	6.8	6.3	7.0	8.0	7.7	7.7	9.2	7.0
57(1) 頭蓋骨大幅	2	14.9	18.1					18.9	17.7			17.9
60 上顎頭増長	2	50.9	57.6				52.0	53.7	50.4	52.6	53.2	50.3
61 上顎頭増幅	1	73.4	3	69.9	68.6		65.7		67.7	63.4	64.7	63.5
61/60 上顎頭増示数	1	129.4	118.1						127.1	126.3	122.7	119.7
62 1口鼻	1	42.4	4	43.3	46.8		46.0	50.1	48.2	44.1	42.5	44.0
63 1口歯幅	2	34.7	4	41.2	46.2		36.9	40.4	38.4	29.6	28.2	40.0
63/62 口顎示数	1	78.1	3	94.0	97.9		80.2			92.0		91.1
67 下顎頭幅	1	47.8	4	45.9	45.3		47.1	44.9	47.8	44.7	46.9	43.2
68 下顎頭							72.2	72.0	70.7	70.9	76.5	71.4
69 リガガイ高	2	39.6	3	33.1	36.5	37.0	35.4	31.8	34.5	32.5	31.7	29.7
69/11 下顎体高	1	34.1	4	31.1	35.1		33.9	27.5	33.3	29.3	32.1	31.3
70 下顎枝高	1	75.9		61.8	57.0	65.0	52.5	69.8	59.4	60.2	52.8	62.6
70 下顎枝幅	1	115.5		129.0	120.0	128.3	127.0	122.9	132.2	128.5	128.2	137.7
70/CD 下顎切歯高	1	14.8	3	12.4	14.0	13.2	14.2	12.6	15.6	13.3	14.8	13.9
71(1) 下顎切歯幅	1	40.9	3	32.1	36.9	32.3	39.4	33.6	35.1	33.9	36.1	34.7

第10表 頭蓋骨計測表②

SK番号	上顎歯													
	II m-d d-l		I2 m-d d-l		C m-d d-l		PI m-d d-l		P2 m-d d-l		M1 m-d d-l	M2 m-d d-l	M3 m-d d-l	
7 右左														
30 -18 左				7.7	-		- 9.6	9.0 9.8						
31 -3 左				7.3	7.1	7.0	8.4	6.3 8.4	5.4 11.1					
33 右左				7.5 8.1	8.1 8.8	-	-	- -	- -					
48 右左	8.4 8.8	7.5 7.8	7.6 6.9	8.5 8.6	8.4 8.8	7.7 10.0	7.2 10.2	11.6 11.7	9.9 11.6					
53 右左				8.5 18.2	7.9 7.5		7.2 10.2	6.7 9.9 7.6 10.5	10.3 11.8 9.9 12.2	10.1 11.7 9.6 11.7	9.4	-		
58 右左	4.9 6.9	6.8 5.0	5.9 6.0	6.8 5.2	5.9 5.9	5.4 6.2	5.9 6.9 5.7 6.9	11.5 11.5 8.0 10.0	11.8 11.0 8.1 9.9	9.6 8.0				
76 右左	9.2 7.0	7.7 8.8	7.3 7.3	7.3 8.9	8.4 11.2	7.0 10.6 7.0 10.2	11.7 10.9 - -	10.0 11.8 10.3 -	- -	11.9 10.5				
77 右左	- - 6.9	- 6.7	8.2 8.4	8.6 - 7.9	8.4 9.7 9.5	7.1 9.2 - -	11.4 - 10.9 11.3	9.7 10.8						
78 右左	4.9 5.1	6.1 5.9	5.8 6.4	6.4 6.4	7.0 7.3	8.5 8.5	- - 7.7 8.1	7.3 - 6.8 -	- - 11.2 10.2	- -	11.3 10.5	-	10.6	
85 右左	- -	- - 5.9	7.9 7.5	7.7 7.5	7.2 7.0	9.2 9.2	6.4 5.8	- - 8.9 8.9	- - 10.1 11.0	8.9 10.1 9.8 10.1	8.8 9.7			
86 右左	6.3 -	4.9 6.3	4.5 -	4.8 -	6.0 -	6.5 7.5	5.2 -	7.7 -	4.2 7.0 6.0 8.9					
89a 右左	7.3 - 6.3	6.1 -			- -	7.4 -	9.2 -	7.1 -	8.9 9.8	10.5 11.1 - -	10.5 11.1			
89b 右左	6.9 - 6.6	6.6 -			- -	- -	- -	- -	- -	- -	- -			
89c 右左					8.2 -	9.1 -	7.6 -	10.2 -		12.6 11.3 11.9 13.4	10.5 12.2 11.1 12.3	9.3 11.4		
89d 右左	8.5 8.8	6.9 7.0	8.3 7.3	8.1 6.6	7.5 8.0	10.0 10.1	8.4 7.3	10.3 10.3	11.1 10.8	12.4 12.0	10.2 12.5 11.8 12.2	11.8 11.4 12.2 11.4		
89e 右左														
89f 右左	9.3 9.1	8.1 8.4	- 7.7	- 7.0	8.5 8.5	- -	8.1 7.2	- -	- 6.5	- 9.6	- - - 12.5	- -		
89g 右左														
89i 右左							7.9 7.6	- - 7.5	- -	- -	- - - 10.2	9.5 16.8 - 10.2	- 10.8	
89j 右左	9.3 -	6.5 -	- 5.9 - -	- -	8.5 8.4	9.9 -	7.7 7.2	9.9 9.0	6.1 7.2	10.6 11.4 6.7 11.0	- - 10.0 -	- -		
91南 右左			6.2 6.2	6.0 - 7.2	7.2 6.9	6.6 7.6	6.9 7.2	- 8.3	6.5 7.2	8.3 11.5	11.0 10.9 11.3 10.0	10.4 10.1 11.1 10.5		
99 右左					8.5 8.1	9.2 8.4	7.3 7.4	10.1 9.5						
110 右左	- 8.5	- 6.5	- 7.5	- 6.3	7.3 8.1	7.9 8.4	9.6 9.5	7.6 6.5	9.8 9.4	9.8 11.2 9.8 11.3	10.8 10.8 10.0 11.5	- - - 11.3		

第11表 南冠計測表①

SK番号	下顎歯															
	I1 m-d d-l		I2 m-d d-l		C m-d d-l		P1 m-d d-l		P2 m-d d-l		M1 m-d d-l		M2 m-d d-l		M3 m-d d-l	
7 右 左							8.4 9.0 8.6 11.3				— 1.8 — 1.8		13.0 12.0 13.3 11.9			
30 右 左							7.5 — — —		7.4 — — —		11.6 11.2 — —					
31 右 左			5.9 — 6.1 6.6		7.4 8.2 6.1 6.9				7.6 9.1 6.5 7.4		11.8 — 7.7 8.7		— — — —			
33 右 左	3.2 4.4 6.1 6.6	— — 6.1 6.9	6.0 6.5 7.3 7.5	6.6 7.3 7.2 7.4	7.3 9.1 7.5 8.2	7.6 8.0 7.6 8.6	4.2 5.5 6.5 7.4	10.5 9.9 7.7 8.7	9.5 9.9 — —	9.5 9.9 — —	10.5 10.5 11.1 10.6	10.5 10.5 10.7 10.1	19.6 9.7 — —	19.6 9.7 — —		
48 右 左	5.9 5.5 6.1 5.6	5.9 6.7 7.4 8.6	7.8 9.0 7.5 8.9	7.6 8.0 7.5 8.2	7.3 9.1 7.6 8.6	10.8 10.5 11.1 10.6	10.8 10.5 10.7 10.1	10.5 10.5 10.7 10.1	8.3 11.2 9.0 9.5	8.3 11.2 9.0 9.5						
58 右 左	4.0 3.5 — —					6.2 9.2 5.1 8.6		6.0 9.1 — —		— — 9.9 9.0		— — 9.0 8.1		— — 9.0 8.2		
76 右 左	5.2 — 6.9 —	5.8 6.6 7.4 —	7.0 8.6 7.4 —	6.8 8.5 6.9 8.9	8.4 10.5 7.1 8.0	10.2 12.4 11.5 —	10.2 12.4 11.5 —	12.4 12.4 11.5 —	11.2 12.0 10.0 10.3	11.2 12.0 10.0 10.3						
77 右 左	6.1 5.9 6.9 —	6.7 6.3 7.4 —	7.2 7.2 7.4 —	7.0 7.8 7.4 6.9	7.9 8.0 7.1 8.0	11.7 10.7 11.5 —	11.7 10.7 11.5 —	10.7 10.7 10.0 10.3	10.2 10.2 10.0 10.3	10.2 10.2 10.0 10.3						
78 右 左	— — 8.8 7.7	7.5 6.8 8.1 7.5	8.1 7.5 7.5 9.7	8.5 7.5 9.7 9.7	6.8 9.8 9.2 11.2	10.9 10.8 10.1 11.2	10.9 10.8 10.1 12.1	10.8 10.8 11.7 10.4	— — — —	— — — —						
85 右 左			5.8 6.8 — —		6.4 7.2 6.3 7.5		6.9 — 6.5 8.5		6.3 — 6.5 8.5		11.8 10.2 11.2 —		— — 9.8 9.9		— — 9.2 9.9	
86 右 左	4.2 4.3 — —	4.2 3.8 — —	5.3 5.5 — —	5.5 6.5 6.3 7.5	4.8 6.0 6.5 8.5	9.0 8.0 11.2 —	9.0 8.0 11.2 —	8.0 8.0 9.8 9.9	7.6 9.8 8.2 7.7	7.6 9.8 8.2 7.5						
89a 右 左	5.6 5.7 5.0 5.3	5.9 5.6 6.0 5.6	6.6 — — —	7.2 8.1 7.6 7.6	7.0 7.9 7.5 8.0	10.8 9.8 11.0 9.9	10.8 9.8 10.2 10.0	9.8 9.8 10.2 10.0	9.8 9.8 10.2 10.0	9.8 9.8 10.2 10.0	9.8 9.8 10.2 10.0	9.8 9.8 10.2 10.0	11.1 9.7 11.0 10.0	11.1 9.7 11.0 10.0		
89b 右 左			— — — —		— — — —		— — — —		— — — —		11.3 10.7 — 10.3					
89c 右 左																
89d 右 左	3.5 3.5 3.9 4.0	4.0 4.0 4.0 4.0	5.0 6.0 4.9 5.2	5.5 6.1 6.0 6.9	— — 6.5 7.0	10.5 9.5 10.0 7.0	10.5 9.5 9.0 10.1	10.0 7.0 12.0 10.1	10.0 7.0 12.0 10.1	10.0 7.0 12.0 10.1	10.0 7.0 12.0 10.1	10.0 7.0 12.0 10.1	9.9 9.1 9.2 9.1	9.9 9.1 9.2 9.0		
89e 右 左					6.2 6.8 — —		6.7 6.6 — —		7.0 7.3 — —		10.9 9.3 — —		9.8 9.4 — —			
89f 右 左	6.3 6.8 5.7 6.7	7.0 6.7 7.5 8.8	7.3 9.0 8.0 9.0	7.0 8.5 7.8 9.1	— — 11.9 13.1	11.8 12.4 — —	11.8 12.4 — —	12.4 12.4 — —	— — — —	— — — —						
89h 右 左	6.5 7.3 — —	— 6.5 — —	7.2 8.0 — —	7.6 8.3 8.3 —	— — 12.0 11.3	11.6 11.4 11.4 11.0	11.6 11.4 11.4 11.0	11.4 11.4 11.0 11.0	10.8 11.0 — —	10.8 11.0 — —						
89i 右 左																
89j 右 左	6.0 5.0 — 5.5	— — 6.3 5.6	7.6 8.0 — —	— — 7.4 —	6.9 8.1 7.4 7.8	10.3 10.2 — —	10.3 10.2 — —	10.2 10.2 — —	11.4 10.0 9.9 9.5	11.4 10.0 9.9 9.5						
91南 右 左	9.0 7.1 9.1 7.0	7.1 6.5 7.1 6.3	8.3 7.8 7.5 8.1	7.1 9.8 7.0 9.9	7.3 9.1 6.5 9.2	11.4 11.3 10.9 11.5	11.4 11.3 10.9 11.5	11.3 10.6 10.5 10.6	10.0 9.6 9.9 9.5	10.0 9.6 9.9 9.5						
99 右 左							— — — —									
110 右 左	— — — —	5.8 6.2 — —	7.2 6.6 — —	7.2 7.3 7.5 7.9	7.6 7.7 7.7 7.9	10.7 10.3 11.6 11.0	10.7 10.3 11.6 11.0	10.3 10.3 11.6 10.6	10.0 9.4 9.9 9.5	10.0 9.4 9.9 9.5						

第12表 齒冠計測表②



SK30



SK33



SK48



SK30



SK33



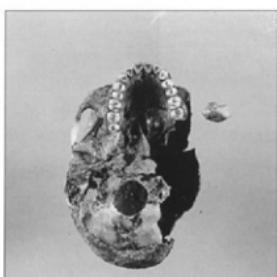
SK48



SK30



SK33



SK48



SK30



SK48

写真1 出土人骨①



SK49



SK78



SK89b



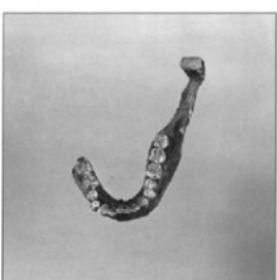
SK49



SK82



SK89b



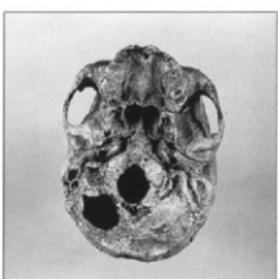
SK78



SK89b



SK89b



SK89b

写真2 出土人骨②



SK85



SK89f



SK89f



SK85



SK89f



SK89h



SK89a



SK89f



SK91

SK89f
写真3 出土人骨③



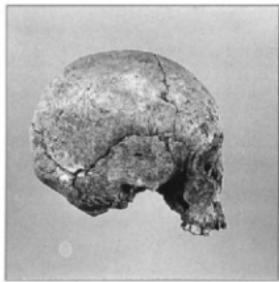
SK89i



SK89i



SK110



SK89i



SK89i



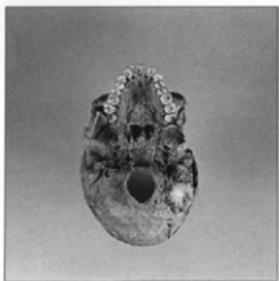
SK110



SK89i



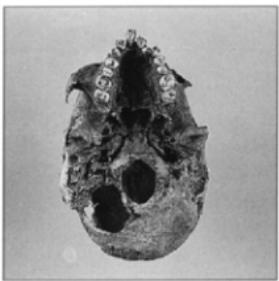
SK89i



SK110



SK89i

SK89i
写真4 出土人骨④

SK110

第V章　ま　と　め

本報告書では、円通寺の古墓と言い伝えられる地点について、発掘調査した知見に基づいて整理報告作業を行った。調査によって得られたいいくつかの情報について、その意味するところを私見も交えてまとめてみたい。

遺構については、調査区全体で3群のまとまりがあると解釈し、群ごとに取り上げることにより、その検出内容にも各群なりの特徴が見出せることを期待した。しかし、結果としてこの試みは、期待を裏切ることになった。本調査地点では、時期を特定し得る遺物が出土した遺構がほとんどないため、時期的なまとまりが解明できなかった。さらに遺構の形態的特徴は、群ごとに差を見出せるほどではなく、比較する材料に事欠いた。こうした中で、ある程度様相を推察し得たのは墓道の存在である。推察する要因としては、等高線上に表れる尾根筋や、緩やかな傾斜で等高線が巡る部分に、遺構が検出されない帶状の空白部が見られたため、こうした部分が墓道であった可能性を想定した。この想定した墓道位置は、各遺構群の境界部とも重なる部分が多く、各遺構の比較分析材料が乏しかったことが惜しまれる。

遺跡から出土した土器・陶磁器については、最初に述べたように遺構内から出土したものはほとんど見られなかった。時期的には、古いものは12c後半から13c前半にまでさかのぼるものも含まれるが、これらはあくまでも製作年代であって、この調査地点での使用または廃棄された年代と一致するとは考えにくい。こうしたものを除けば、これら出土遺物の主体を成す時期は、幕末から明治にかけてのものと思われ、調査地の墓域としての使用もこの時期が主体であったことが窺える。

近世の墓制は、考古学的な調査が少ないながらも各地で行われるようになり、断片的ではあるものの、階層制、宗教色、思想的背景などが考察されつつある。これらの調査事例が示すようにこの時期の埋葬は、現在の行政区画では隣接するような市町村域であっても、方法がそれれ全く異なる場合が多い。実際、本遺跡の所在する大府市と名古屋市は隣接するが、本遺跡と同じく墓の跡で、時期的に近似する中区白川公園遺跡の調査事例では、生前に使用したであろう器を多く伴うなど、副葬のされ方に違いが見られる。この差を、都市部とその近郊農村との差と捉えるのか、被葬者の所属する宗門の差、あるいは階層的な差に要因を求めるのかは、比較する調査事例の増加を持ちつつ、今後の課題となればならないであろう。

いずれにしても墓制は、各時代の社会構造を構成するさまざまな要素がそこに含まれており、地域史を研究するためには欠くことのできない材料である。本遺跡の発掘調査及び報告が、この地域における歴史を解明する上で、その一助として有効な資料となることを願う。

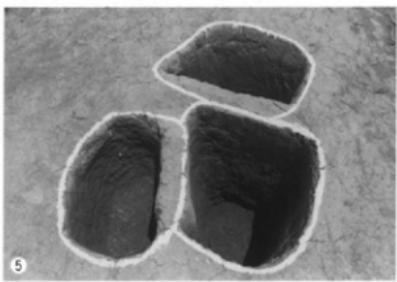
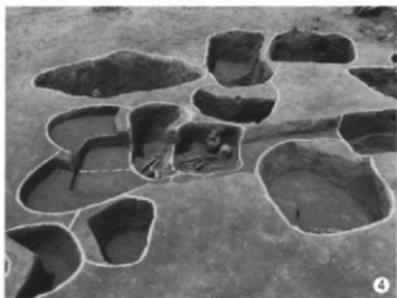
図 版

■ 図版目次

- 図版 1 ①表土はぎ風景（東より）
②遺構検出状況（西より）
- 図版 2 ①SK91 断面（北より）
②SK107 周辺（北東より）
③SK01 周辺（北西より）
④SK30 周辺（東より）
⑤SK62 周辺（南より）
⑥SD01、02、03（南西より）
- 図版 3 ①SK67 周辺（西より）
②SK80 遺物出土状況（東より）
③SK49 人骨出土状況（北東より）
④SK30、55人骨出土状況（北東より）
⑤SK31 人骨出土状況（南東より）
⑥SK82 人骨出土状況（東より）
⑦SK85 人骨出土状況（東より）
- 図版 4 ①SK48 人骨出土状況（南西より）
②SK89 人骨出土状況（南西より）
③SK89 南端部分（東より）
④SK89 中央南部分（東より）
⑤SK89 北端部分（北より）
- 図版 5 ①SK77 人骨出土状況（南西より）
②SK78 人骨出土状況（東より）
③SK77 人骨出土状況（西より）
④SK53 人骨出土状況（西より）
⑤調査区完掘状況（西より）
- 図版 6 ①SK29 人骨出土状況（北東より）
②SK61 人骨出土状況（東より）
③中央土抗群跡遺物出土状況（北西より）
④作業風景（西より）
⑤航空測量風景（東より）
- 図版 7 調査区全景（左が北）
- 図版 8 遺物写真(1)
- 図版 9 遺物写真(2)
- 図版10 遺物写真(3)



①表土はぎ風景（東より） ②遺構検出状況（西より）



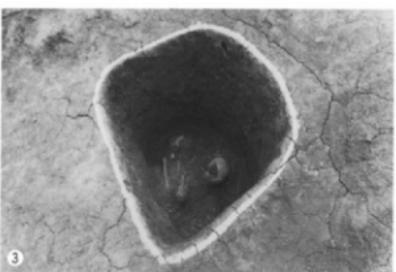
① SK91 断面（北より） ② SK107 周辺（北東より） ③ SK01 周辺（北西より）
④ SK30 周辺（東より） ⑤ SK62 周辺（南より） ⑥ SD01, 02, 03（南西より）



①



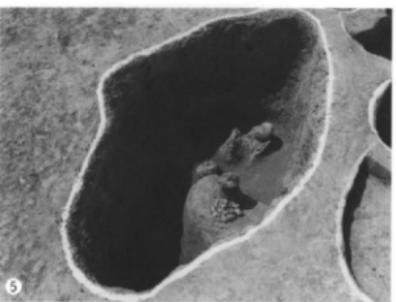
②



③



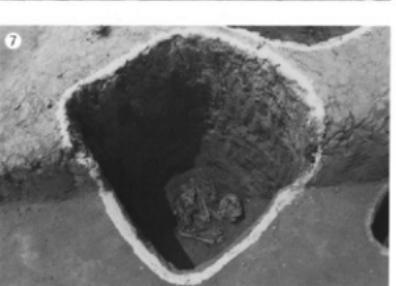
④



⑤



⑥



⑦

① SK67 周辺（西より） ② SK80 遺物出土状況（東より） ③ SK49 人骨出土状況（北東より）

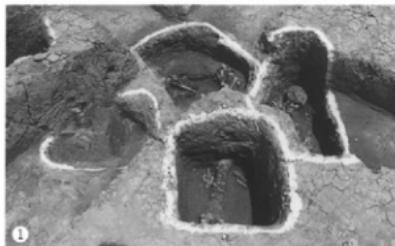
④ SK30、55 人骨出土状況（北東より） ⑤ SK31 人骨出土状況（南東より）

⑥ SK82 人骨出土状況（東より） ⑦ SK85 人骨出土状況（東より）



① SK48 人骨出土状況（南西より） ② SK89 人骨出土状況（南西より） ③ SK89 南端部分（東より）

④ SK89 中央南部分（東より） ⑤ SK89 北端部分（東より）



① SK77 人骨出土状況（南西より） ② SK78 人骨出土状況（東より） ③ SK77 人骨出土状況（西より）
④ SK53 人骨出土状況（西より） ⑤ 調査区完掘状況（西より）



1



2



3



4

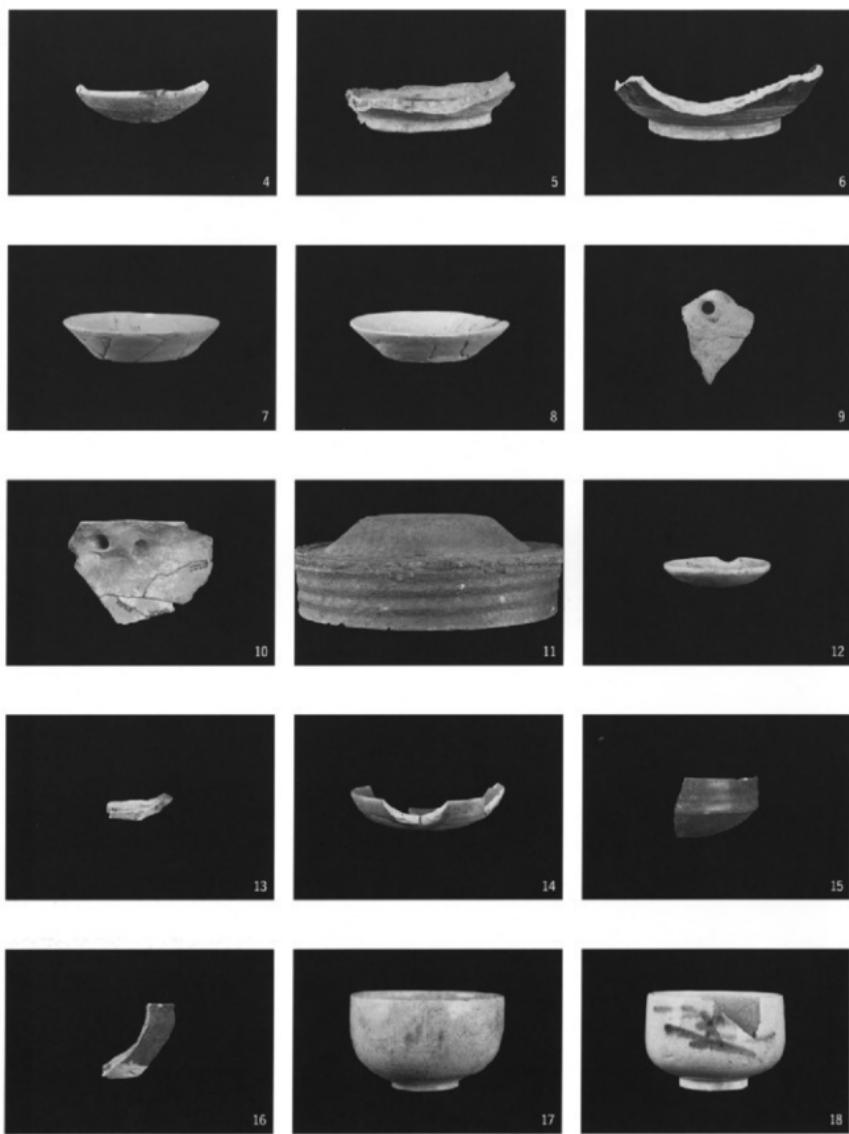


5

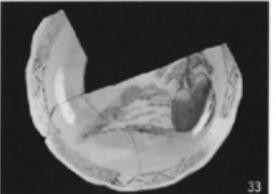
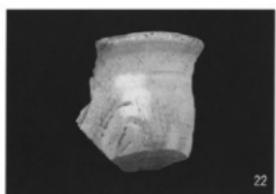
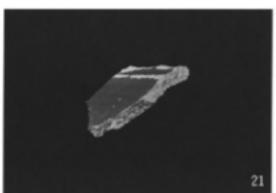
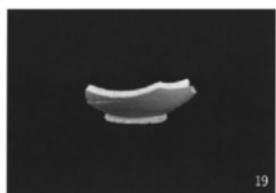
①SK29 人骨出土状況（北東より） ②SK61 人骨出土状況（東より）
③中央土坑群遺物出土状況（北西より） ④作業風景（西より） ⑤航空測量風景（東より）



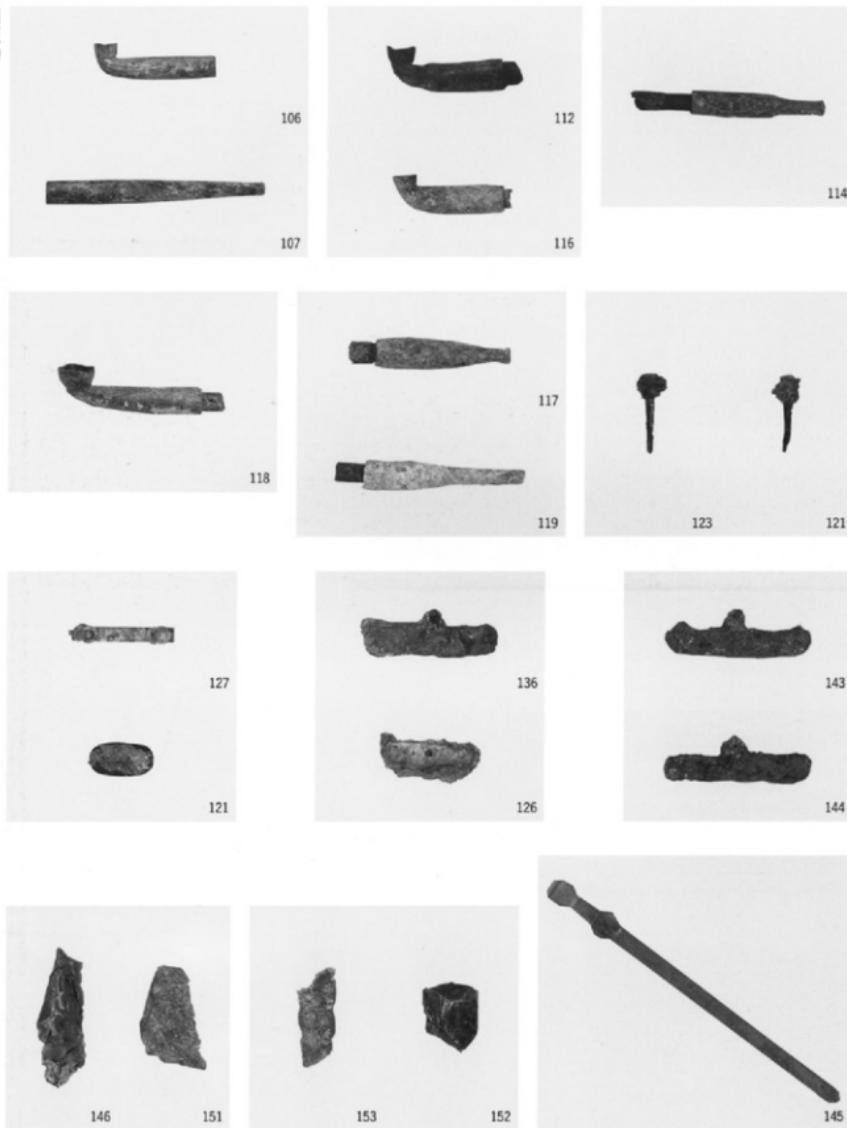
調査区全景（左が北）



遺物写真(1)



遺物写真(2)



遺物写真(3)

NA335号窯 I・II



例　言

1. 本編は愛知県名古屋市緑区大高町高根山地内に所在する、NA 335 号窓の発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局による「第2東海自動車道・伊勢湾岸道路」建設工事に伴う事前調査として、財團法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて建設省、日本道路公団から委託を受けて実施した。調査面積は平成7年度が 900 m²、平成8年度が 250 m² である。
3. 発掘調査は平成7年8月から11月、平成8年6月から7月にかけて実施した。さらに平成8年度から9年度には、調査報告書作成のため整理作業を実施した。
4. 現地における発掘調査は、多くの作業員の方々の参加を得て、平成7年度は本センター水谷寛明（主査・現佐久島小学校）、松田訓（調査研究員）、加藤博紀（調査研究員）が担当し、伊藤羊子（発掘調査補助員）がこれを補佐した。また、大府市歴史民俗資料館の古田功治（主事）が研修として参加した。
平成8年度発掘調査は、本センター坂倉澄夫（主査・現高浜中学校）、藤井孝之（調査研究員）、中野良法（調査研究員）が担当し、富田智恵（発掘調査補助員）がこれを補佐した。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局、名古屋市教育委員会、大府市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本編の編集は松田訓が担当し、執筆分担は第IV章を分析依頼したパレオ・ラボ株式会社が、第V章第1節第4項を奥村勝信が担当し、それ以外を松田が担当した。
7. 遺物整理作業については松田訓が担当し、次の方々の参加を得た。
奥村勝信、渡辺泰子、河合明美（調査研究補助員）、柳木えみ子、中西和子、加藤豊子、平野みどり、田中和子、野川佳江（整理補助員）
8. 本編に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠する。また、本編に示す海拔表記は、東京溝標準（T.P.）の数値である。
9. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
10. 調査記録は本センターにて保管する。
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
12. 本編の執筆にあたり橋崎彰一・藤澤良祐・中野晴久氏には、出土遺物の時期的解釈において多くの指導を得た。さらに本遺跡の調査・報告にあたって、つぎの諸氏、諸機関にご指導・ご助言をいただきいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）
赤羽一郎　伊藤　厚　伊藤正人　尾野義裕　蟹江吉弘　金子健一　城ヶ谷和広　立松　宏
山崎純男　余合昭彦
愛知県教育委員会　名古屋市教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査の概要

第1節	調査に至る経緯(松田)	1
第2節	調査の経過(松田)	1
第3節	遺跡の位置(松田)	2
第4節	歴史的環境(松田)	4

第Ⅱ章 遺構

第1節	基本層序(松田)	6
第2節	第Ⅰ次調査区の遺構(松田)	8
第3節	第Ⅱ次調査区の遺構(松田)	27

第Ⅲ章 遺物

第1節	器種分類(松田)	34
第2節	第Ⅰ次調査区の遺物(松田)	36
第3節	第Ⅱ次調査区の遺物(松田)	73

第Ⅳ章 自然科学的分析

窯跡焼土の熱残留磁化測定(パレオ・ラボ株式会社)(藤根)	82	
第1節	はじめに	82
第2節	考古地磁気年代推定の原理	82
第3節	試料採取と残留磁化測定および結果	83

第Ⅴ章 補論

第1節	出土遺物の観察・計測法(松田・奥村)	92
第2節	分類・計測の結果(松田)	97
第3節	遺構・遺物の特徴(松田)	106

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第49図 遺物実測図㉙	76
第2図 遺跡周辺地形図	3	第50図 遺物実測図㉚	77
第3図 遺跡周辺位置図	5	第51図 遺物実測図㉛	78
第4図 調査区基本層面観図	6	第52図 Shibuya(1980)による地磁気永年変化曲線	156
第5図 調査区Ⅰ北側断面図(東より)	7	第53図 SY01 無土(No. 04)の段階交流消磁測定結果	82
第6図 調査区遺構位置図(1/300)	9	第54図 SY02 無土(No. 07)の段階交流消磁測定結果	84
第7図 SY01 平・断・立面及び見通し図(1/40)	10	第55図 SY03 無土(No. 09)の段階交流消磁測定結果	84
第8図 SY02 平・側面図(1/40)	11	第56図 SY04 無土(No. 01)の段階交流消磁測定結果	85
第9図 SY02断面図・床面下施設平面図(1/40)	12	第57図 SY05 無土(No. 04)の段階交流消磁測定結果	85
第10図 SY03 平・側面図(1/40)	15	第58図 SY06 無土(No. 07)の段階交流消磁測定結果	86
第11図 SY03断面図(1/40)	16	第59図 SY07 無土(No. 07)の段階交流消磁測定結果	87
第12図 SY04断面図・床面下施設平面図(1/40)	16	第60図 燃焼土の地磁気測定結果と永年変化曲線	90
第13図 SY04 平・側面図(1/40)	18	第61図 構分計算による容量 1	95
第14図 SY05 平・側・断面図(1/40)	20	第62図 構分計算による容量 2	96
第15図 SY05 床面下施設上段・下段平面図(1/40)	21	第63図 遺構別器種組成図	98
第16図 灰原 A1・2層平面図(1/100)	23	第64図 出土器種組成図	99
第17図 東西ペルト断面図(北より・1/40)	24	第65図 器種別器形組成図	99
第18図 灰原 B1～6層平面図(1/40)	25	第66図 器種別見込み部調整内訳	101
第19図 灰原 B 层断面図	26	第67図 器種別付着痕内訳	101
第20図 第II次調査区平面図(1/300)	28	第68図 器種別底部調整内訳	102
第21図 SY06 平・断面図(1/40)	30	第69図 器種別焼成度組成図	102
第22図 SY07 断面図・床面下施設平面図(1/40)	32	第70図 出土地点別器種組成図	103
第23図 SY07 断面図(1/40)	33	第71図 梱の容量解式別組成図	104
第24図 器種分類図	35	第72図 梱の解式別容量分布	105
第25図 遺物実測図①	40	第73図 梱の容量別内訳	105
第26図 遺物実測図②	41	第74図 SY02～05 床面傾斜(1/40)	107
第27図 遺物実測図③	42	第75図 SY06・07 床面傾斜(1/40)	108
第28図 遺物実測図④	43		
第29図 遺物実測図⑤	44		
第30図 遺物実測図⑥	45		
第31図 遺物実測図⑦	46		
第32図 遺物実測図⑧	47		
第33図 遺物実測図⑨	48		
第34図 遺物実測図⑩	49		
第35図 遺物実測図⑪	50		
第36図 遺物実測図⑫	51		
第37図 遺物実測図⑬	52		
第38図 遺物実測図⑭	53		
第39図 遺物実測図⑮	54		
第40図 遺物実測図⑯	55		
第41図 遺物実測図⑰	56		
第42図 遺物実測図⑱	57		
第43図 遺物実測図⑲	58		
第44図 遺物実測図⑳	59		
第45図 遺物実測図㉑	60		
第46図 遺物実測図㉒	61		
第47図 遺物実測図㉓	74		
第48図 遺物実測図㉔	75		

表目次

第1表 調査工程	1
第2表 第I次調査区 遺物觀察表①	62
第3表 第I次調査区 遺物觀察表②	63
第4表 第I次調査区 遺物觀察表③	64
第5表 第I次調査区 遺物觀察表④	65
第6表 第I次調査区 遺物觀察表⑤	66
第7表 第I次調査区 遺物觀察表⑥	67
第8表 第I次調査区 遺物觀察表⑦	68
第9表 第I次調査区 遺物觀察表⑧	69
第10表 第I次調査区 遺物觀察表⑨	70
第11表 第I次調査区 遺物觀察表⑩	71
第12表 第I次調査区 遺物觀察表⑪	72
第13表 第II次調査区 遺物觀察表①	79
第14表 第II次調査区 遺物觀察表②	80
第15表 第II次調査区 遺物觀察表③	81
第16表 残留磁化測定(150 0e消磁)と統計計算結果	88
第17表 残留磁化測定(150 0e消磁)と統計計算結果	89
第18表 考古地磁気年代推定表	91
第19表 遺構別器形組成一覧表	100
第20表 器形別口縁形態組成表	100

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

NA 335号窯は、愛知県名古屋市緑区大高町高根山地内に所在する。この地は、愛知県遺跡分布図に記載された高根山古窯（遺跡番号 01-14132）の北西側に隣接しており、この地内に建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局によって、第2東海自動車道・伊勢湾岸道路の建設工事が行われることとなった。このため愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会では、道路建設工事に先立ち、この地の埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため試掘調査を行っており、複数の窯跡及び、山茶碗、小皿片などを確認した。これらの遺構、遺物検出地点は道路建設予定地内に入っており、事前に発掘調査が必要と判断された。この遺跡の名称は、試掘調査後、名古屋市遺跡分布図に記載されたものである。

側愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、建設省中部地方建設局、日本道路公団名古屋建設局から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、名古屋市教育委員会の協力のもと、平成7年8月から11月まで発掘調査（第1次・900m²）を実施した。さらにこの調査時に、調査区南西側の隣接地に窯跡が確認されたため、平成8年6月から8月にかけてこの部分の発掘調査（第II次・250m²）を実施した。

第2節 調査の経過

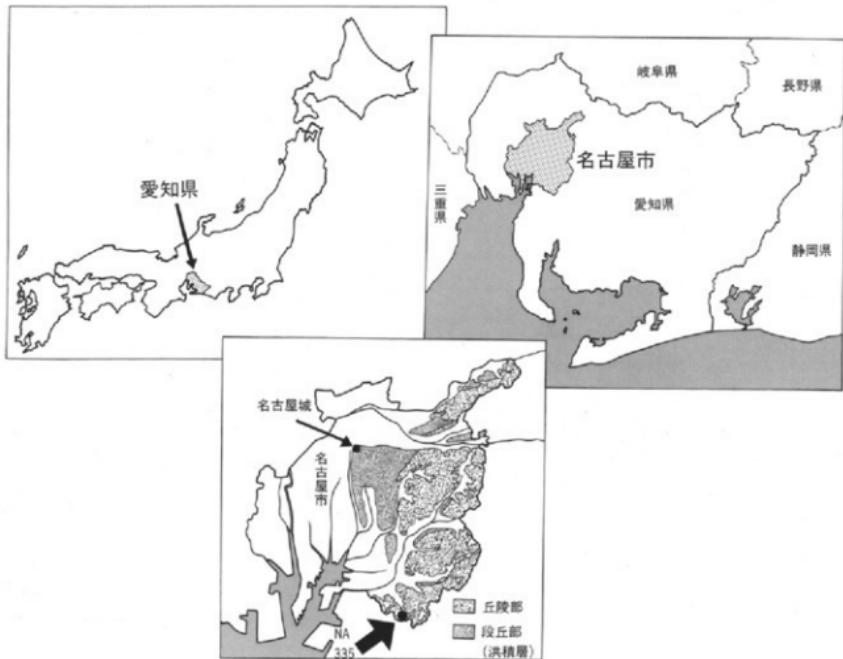
第I次調査区は、道路建設予定地内の丘陵北西向き斜面に一括して設定した。この調査区に平成7年7月から資材搬入を行い、表土剥ぎを実施し、発掘作業を開始したのは8月3日であった。調査地の旧態は林及び畠地であり、調査期間は3ヶ月強を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて11月10日に現地調査を終了した。第II次調査は、前年度に遺構の位置が確認されていたため、平成8年6月10日に資材搬入を行い、発掘作業を開始したのは6月12日であった。調査区の埋め戻し作業終了は、8月2日であった。

出土遺物の整理作業は、調査中及び調査終了後、洗浄・注記作業を現地事務所で行い、引き続き本センター三河事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

	H. 7 7	8	9	10	11	12	H. 8 1	2	3	4	5	6	7
第I次調査													
第II次調査												←	→

第1表 調査工程

第3節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。NA 335号窯の位置する名古屋市は、愛知県西部の伊勢湾岸最奥部に位置し、木曾三川（木曾・長良・揖斐）などによって形成された濃尾平野南端、名古屋台地、尾張丘陵などに市域を広げる、東海地方屈指の大都市である。

市域の中央部をめぐる低地は、繩文海進や河川による堆積物によって形成された沖積地である。市域の中央部は、この沖積地からは段丘状に高い面を形成しており、この名古屋台地のさらに東方に尾張丘陵が広がっている。

NA 335号窯はこの尾張丘陵南端、天白川と境川とに挟まれた丘陵上に立地しており、知多半島基部とも表現できる地で、名古屋市域では最南端にあたる。



第2回 遺跡周辺地形図(国土地理院 1/20万地勢図「名古屋」部分)

第4節 歴史的環境

NA 335号窯の位置する丘陵は、狭い谷が複雑に発達しており、変化に富んだ地形を形成している。こうした複雑な地形は、海に近いことも含めて豊かな動植物の生態系を生み、古くから人々が生活を営む場として利用されてきた。たとえば台地先端部分や段丘面、さらに低地に沿った部分には、各時代の人々の生活の痕跡が今も多く残されている。こうした遺跡の中で、調査地の所在する名古屋市南部域の窯跡を中心として、その歴史的環境を概観してみたい。

遺跡から北東に約25kmの位置に、標高629mの猿投山がある。この山から南西側に広がる丘陵は、古代より焼き物生産を行うための窯が、その地形を利用して築かれてきた。この地は、古くは5世紀から14世紀に至るまで、わが国における当該期の一大窯業生産地として、煙を立ち昇らせ続けた。この丘陵上に分布する古窯は、その全域が猿投山西麓古窯跡群（以下猿投窯と記す）と呼ばれ、遺跡の位置する場所はそのうちで、鳴海（N）地区、有松（A）支群にあたり、本遺跡をNAと称するのもこの鳴海地区有松支群の頭文字に由来する。この猿投窯内にあるこのほかの地区としては、東山（H）、岩崎（I）、折戸（O）、黒笹（K）などがあり、支群としては、同じ鳴海地区内に鳴海支群（NN）が存在する。

本遺跡の属する鳴海地区の範囲は、かつて名古屋市教育委員会、愛知県教育委員会が行った分布調査などでは、大枠での捉え方に差はないものの、それぞれが細部においていくらか異なる見解を示しており、特に鳴海・有松支群の境界は、研究者間でも統一見解が得られてはいなかった。この問題に対して尾野善裕は、1994年に名古屋市教育委員会が発行した「NN 330号窯発掘調査報告書」の中で、鳴海地区の範囲及び、この中の鳴海・有松支群の境界について再検討を行い、遺跡名称についても整理している。尾野の提示では、東海市北辺の窯跡が新たに有松支群に組み込まれており、この扱いを慎重にすべき点が気になる。しかし、その点を除けば尾野案は、猿投窯鳴海地区について明解な理由とともに境界が示され、遺跡名称も現時点でもっともわかりやすく整理が成されている。以上の理由から、ここでは、地区・支群の設定、窯名の整理において尾野案に依拠することとした。

NA 335号窯は、鳴海地区有松支群の中では、分布の中心からやや南東側に位置する。有松支群は、かつて名古屋市教育委員会が1976年に窯名を整理した時点では、東海道本線の走る断層線以東とされており、この境界線における本遺跡は、有松支群外となる。愛知県教育委員会が1980年に行った分布調査報告では、有松支群の境界は明確に示されていない。こうしたそれぞれの扱いが、いくつかの混乱を招いているのである。

周辺の古窯に目を向けてみると、有松支群西端には、この支群中唯一確認されている須恵器生産のNA 11号窯があるが、実態が把握されておらず、これに继ぐものは10世紀代と思われる灰釉陶器のNA 203・204号窯が支群の北側で確認できる。しかし、この支群の中で圧倒的に多く分布するのは12世紀末～13世紀代の山茶碗窯で、本遺跡や、隣接して確認される窯、周辺丘陵の窯跡も含めて、ほとんどこの時期のものである。



●二須惠器・灰胎陶器窯

■=山茶碗窯

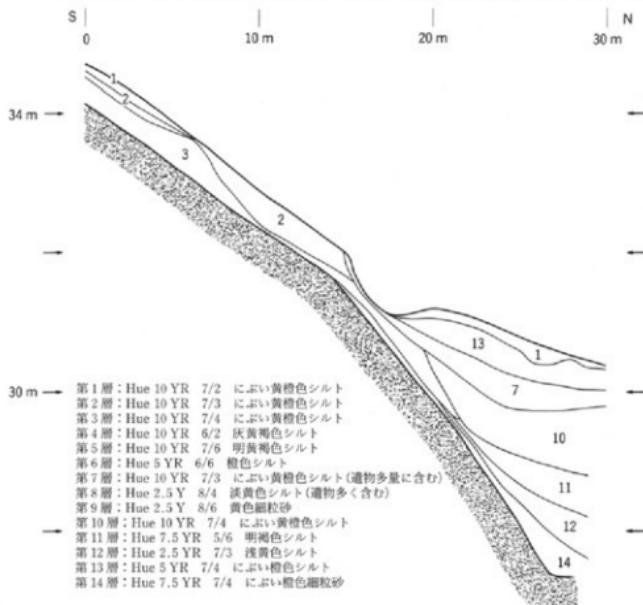
第3図 周辺遺跡位置図(国土地理院1/5万地形図「名古屋南部」部分)

第II章 遺構

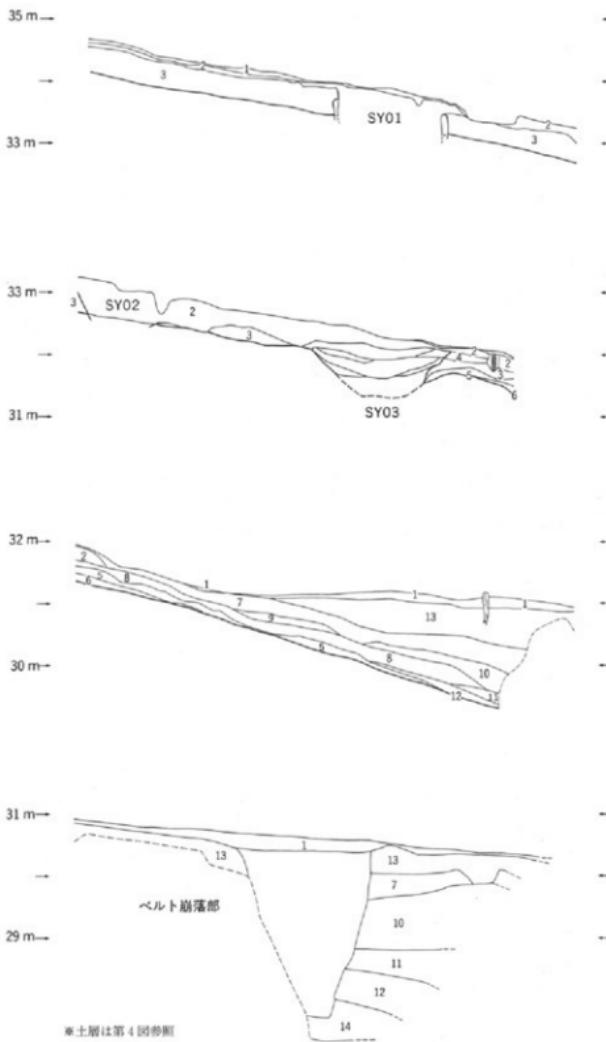
第1節 基本層序

NA 335号窯の所在する地点の基本層序を概観してみると、第4図のような状況が確認できる。まず表土層として、10~20 cmの厚さでにぶい黄褐色シルトが堆積し、調査区上位面ではこの表土の下部堆積層も、地山に至るまで同様の土層が続く。SY01~03は、この表土直下で窓壁が確認できる。調査区下位面に至ると、上位面では表土から地山までの平均が約50 cmであったのに対し、厚いところで約3 mの堆積が認められる。このうち、いわゆる「灰層」は上下2層認められ、地山までの堆積が厚くなり始める地点に始まり、上層は調査区外までのびるが、下層は地山の傾斜が急になり始める位置で、その範囲を留める。

傾斜地に位置する調査区内の標高は、最高位点で35.08 m、最低位点で27.38 mを地山面で測る。地形としては南側に最高位点があり、北側に最低位点がある北向きの斜面で、調査区(I)の中央擾乱部分には、南東から北西に向けて下る尾根筋が存在したようである。



第4図 調査区基本層序概念図



第5図 調査区(I)南北ベルト土層断面図(東より)

第2節 第Ⅰ次調査区の遺構

第1項 概 要

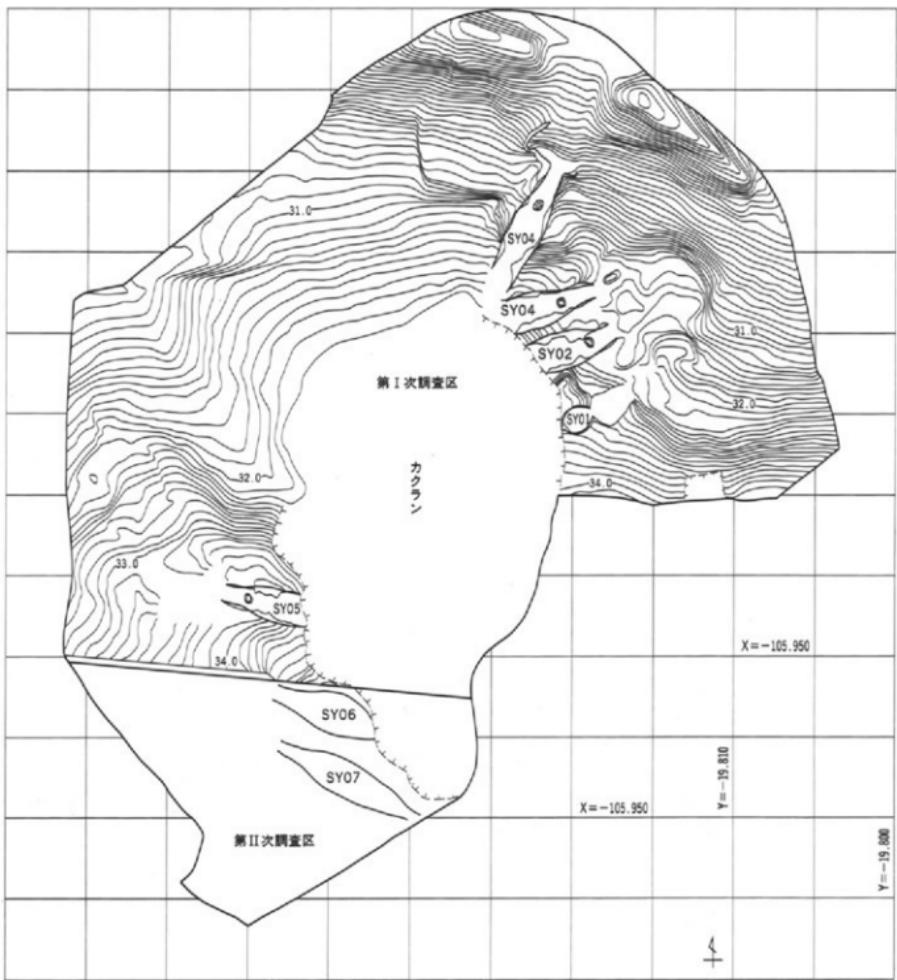
平成7年度に行った第Ⅰ次調査で検出された遺構は、窯体5基と、これらに伴う灰層である。調査対象となった区域では、中央の擾乱部分をはさんで北東向きに下る斜面と、北西向きに下る斜面が存在したが、このうち北東向き斜面で4基、北西向き斜面で1基の窯体を検出した。これらの窯体の存在は、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会による試掘調査の時点では、北東向き斜面地点にてSY03、04の一部にあたる窯壁が確認されたのみであった。しかし、実際に調査に入り表土を除去してみると、北東向き斜面では既知の窯体の上位からさらに2基、北西向き斜面では3基の窯体が確認できた。この北西向き斜面で確認された3基のうち、上位2基は調査対象区域外であったため、この年度の調査ではその所在確認のみに留めた。この年度で未調査であった部分は、次年度に第Ⅱ次として調査された。

第2項 SY01 窯体及び付帯構造

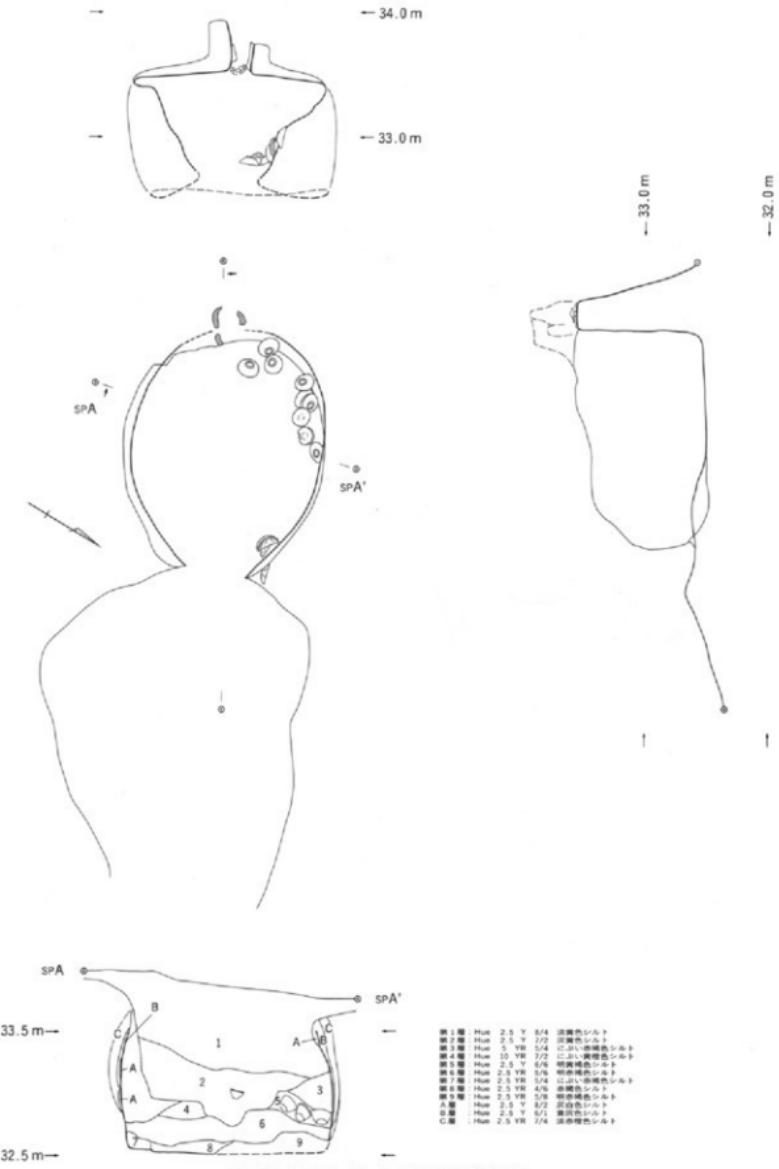
SY01は、北東向き斜面に存在する窯体4基中では最上部に位置する。平面形態は橢円形を呈し、床面は傾斜しないいわゆる「平窯」である。窯体は天井部の大部分を欠くが、煙道の一部と側壁は良好に遺存しており、焚口の前面には、斜面を掘り込んで平坦にした前庭部が設けられている。

窯体の規模は、長さ2.5m、幅1.94mを測り、断面形態においては、側壁はやや中太り気味ではあるがほぼ垂直に立ち上がる。焚口の幅は0.6mを測り、これに対する壁の中央最上部には、平面形態が橢円形の煙道が設けられている。この煙道は、長径0.32m、短径0.22m、残存高0.46mを測る。窯体の主軸は、S-58°Wを測る。窯体の床面はほとんど残っていないかったが、下部埋土には完形品及びそれに近い遺存度の碗が含まれており、これはいわゆる「山茶碗」で、形態的に鎌倉時代初期のものと思われる。したがって、SY01廃窯の時期もこの山茶碗の時期から極端に下らないものと思われる。窯壁の被熱部分は厚く、白色の硬化が顕著で、かなり高温度の焼成行為が行われたように思われ、焚口から窯壁にかけてはカーボン等の付着は観察できない。

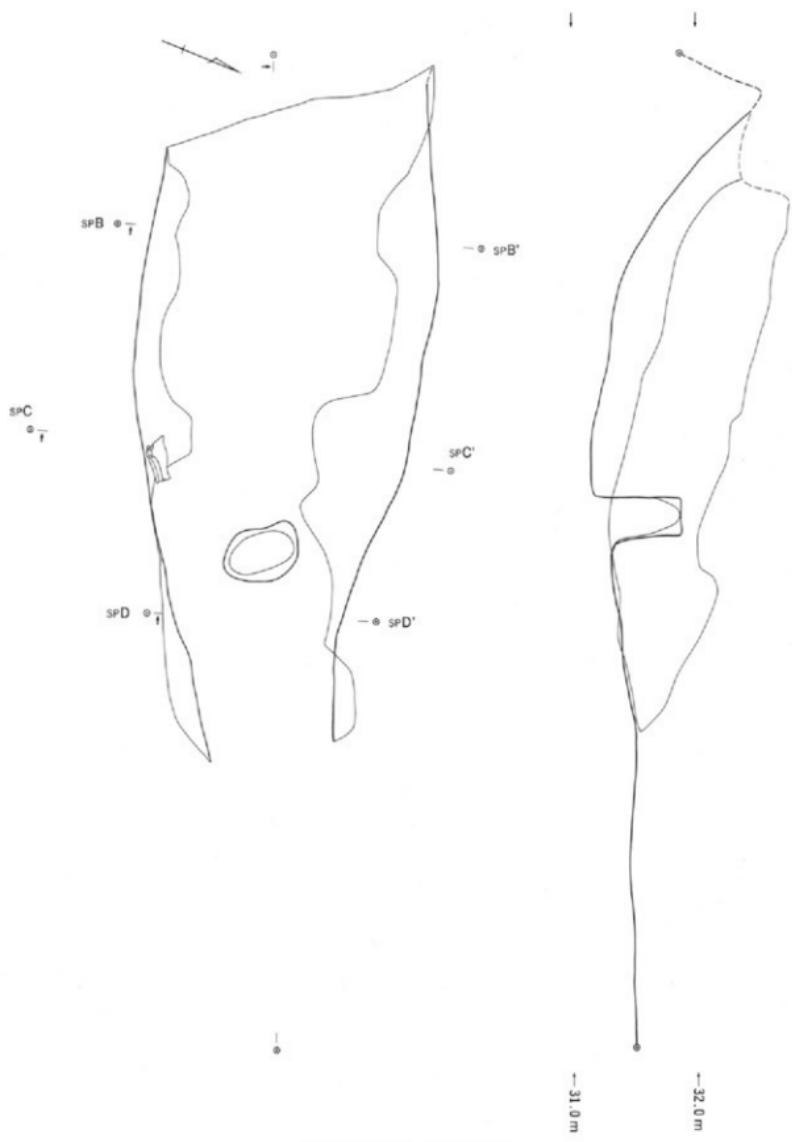
このSY01において焼成したであろう製品については、その特異な形態ながら決定的な判断材料が無く、いくつかの可能性を考えるに留まる。窯体の形態から推察すると、まず考えられるのは後世の炭焼き用窯である。しかし、窯体及びその周辺からは、不完全燃焼の工程を窺わせるカーボンの付着や散乱が見られない。窯壁の被熱部分は、極めて高温度で被熱したように観察できるが、ロストル式施設などの痕跡も見られず、窯の構造から考えても温度をかなり高めるには無理があるため、埋土に含まれる山茶碗などを焼いたとは



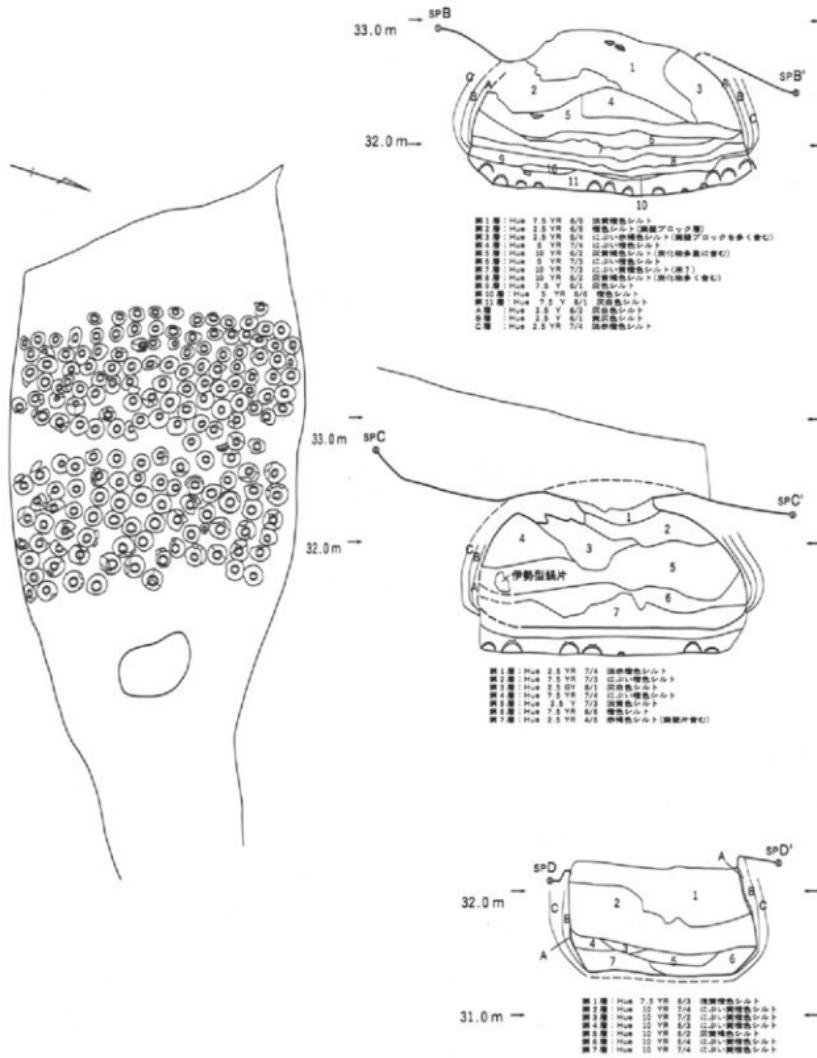
第6図 調査区邊境位置図(1/300)



第7図 SY01 平・断・立面及び見通し図(1/40)



第8図 SY02 平・側面図(1/40)



第9図 SY02 断面図・床面下施設平面図(1/40)

考えにくい。規模、形態や、時期的に近似する可能性がある類例を求める上とすれば、静岡県湖西市の湖西古窯群東笠子地区第38地点窯や、同県島田市旗指古窯跡群第4地点II地区第24号窯（いずれも静岡県教育委員会、1989、「静岡県の窯業遺跡」—静岡県文化財調査報告書第42集に所収）があげられる。どちらも焼成したであろう製品について言及するには至っていないが、こうした例の増加を待ち、判断材料としたい。

第3項 SY02 窯体及び付帯構造

SY02は、北東向き斜面に並ぶ4基の窯体の中では上位から2番目に位置し、このうち床面が傾斜する3基の窯の中では、最上位に位置する。主軸はS-67°-Wを測り、南方向に登る斜面に対して直登する方向に築かれておらず、傾斜角度調節のためか西側に振っている。焚口の前は、明確ではないが前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途中から先端方向は、後世の土取りによる擾乱によって欠損する。窯体の残存長は5.6mを測り、分焰柱を有する。焼成室半ばまでの床面下には、椀を伏せた状態で敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が設けられていた。

・燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、1.8mを測る。床面の幅は焚口で1.05mを測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では1.55mを測る。この床面は、分焰柱に向かって緩やかに下る。

・分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径0.42m、これと直交する径0.63m、残存高0.72mを測り、水平断面形態は不整橍円形を呈する。

・焼成室

残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって3.9mを測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅が広がる傾向があると思われる。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.95m、そこから1.9m進んだところで最大幅2.4mを測る。残存する焼成室での床面平均斜度は27°であるが、床面下施設の最先端付近より煙道方向に向かって残存する床面は、急激に傾斜がきつくなってしまっており、この部分のみでは46°を測る。天井部は崩落により欠損していたが、窯壁は良好な状態で残っていた。

・床面下施設

SY02の焼成室床面下には、椀を伏せて敷き詰められていた。こうした行為は、環投窯では鳴海地区に類例が多く見られ、「床面下施設」と呼ばれており、隣接する知多半島の同時期窯跡において、特に顕著である。これら床面下の施設は現在までに、大きく2種類に分けられることが確認されている。すなわち、焼成室一部に窯体縦と同様の面積を敷き詰めるものと、焼成室の一部に列状に椀を敷き、これに溝が伴うものである。SY02は、これらうち前者の、窯体幅全体に敷き詰めるタイプである。敷き詰められた範囲は、焚口

から分焰柱に向かって、柱の直後から窯体幅全体に長さ 2.3 m にわたる。この椀を敷き詰めるための掘り込みは、主軸に直交する断面図などから観察すると、窯壁及び地山の被熱部を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と椀を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。この施設に利用されていた椀は、歪んだもののや、複数の椀が融着したものが多く見られ、不良品と判断されたものが使用されたことが窺える。

・前庭部

焚口の正面から斜面を登る方向である左脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。平坦部の高さは、焚口の床面レベルより 0.15 m 高く、幅 4.0 m、奥行き 2.5 m を測り、焚口に向かって横長に広がる。

第 4 項 SY03 窯体及び付帯構造

SY03 は、北東向き斜面に並ぶ 4 基の窯体の中では上位から 3 番目に位置し、このうち床面が傾斜する 3 基の窯の中では、中央に位置する。主軸は S-73°-W を測り、SY02 とは主軸を合わせるように、南方向に登る斜面に対して直登する方向に築かれており、西側に振っている。SY02 と 03 は近接するが、それぞれの焚口中央部間は、2.8 m を測り、床面の最も接近する地点では、その間隔 0.5 m を測る。焚口の正面は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる擾乱によって欠損する。窯体の残存長は 6.5 m を測り、分焰柱を有する。窯壁は、SY02 など他の窯体と比べて、どの部分でも被熱の痕跡が弱く、実用化されていたとしてもわずかな使用で廃絶したものと思われる。

・燃焼室

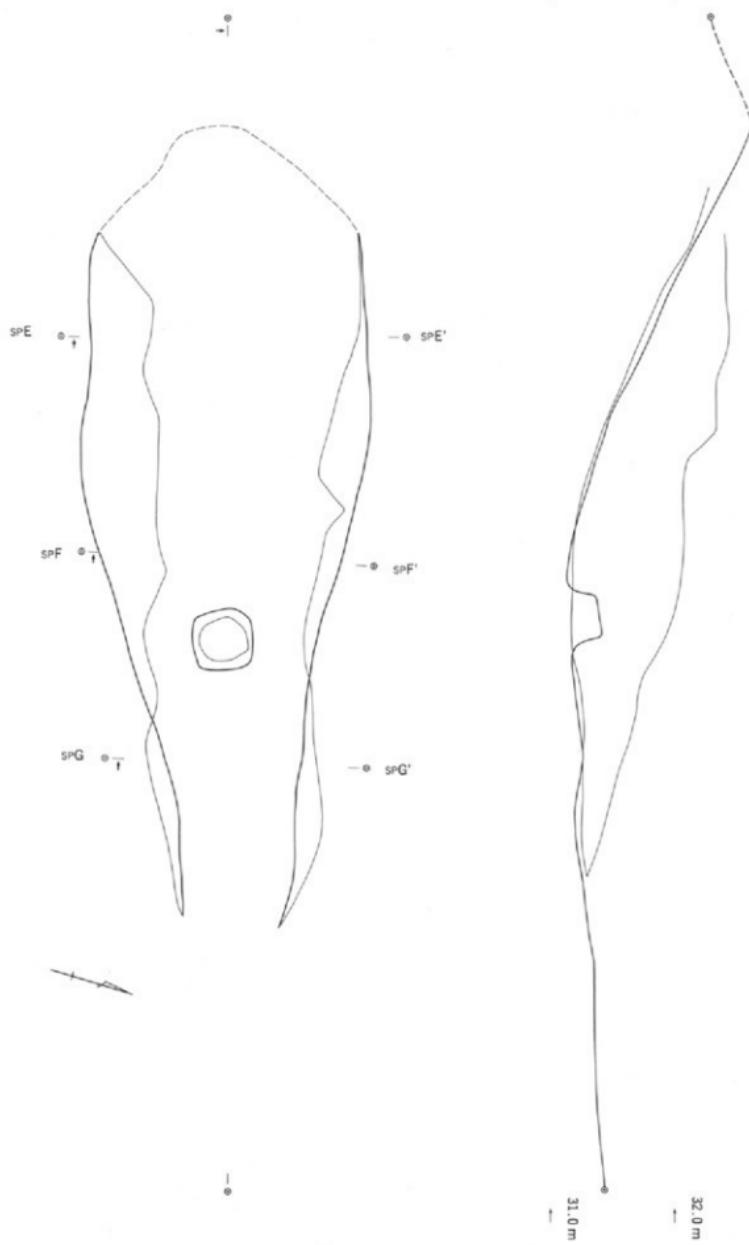
焚口から分焰柱中心部までの長さ、2.3 m を測る。床面の幅は焚口で 0.8 m を測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では 1.44 m を測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

・分焰柱

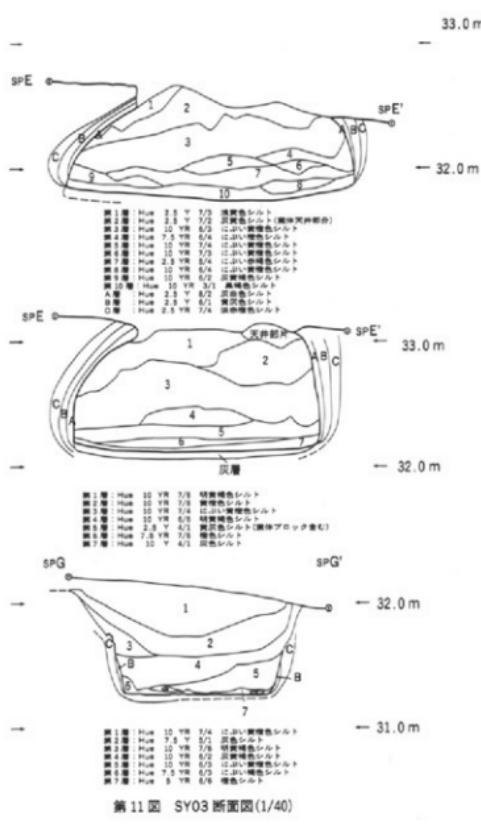
分焰柱基部は、主軸方向の径 0.5 m、これと直交する径 0.48 m、残存高 0.26 m を測り、水平断面形態は隅丸方形を呈する。完掘後の断ち割りでは、補修、補強などの痕跡は見られず、地山部分の掘り抜きが良好に残存していることが確認できた。

・焼成室

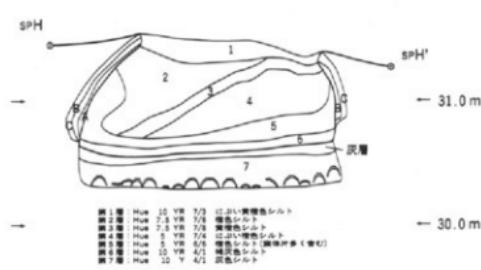
残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって 4.1 m を測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がしほられてゆくものと思われる。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で 1.7 m、さらにそこから 1.3 m 登ったところでは、最大幅 2.34 m を測る。残存する焼成室での床面平均斜度は、23° と SY02 よりも比較的緩やかで、残存床面内での急激な変化は認められないが、最大幅部分より先端方向は 27° とやや変化する。



第10図 SY03 平・側面図(1/40)



第11図 SY03断面図(1/40)



第 12 図 SY04 断面図・床面下施設平面図(1/40)

- ・前庭部

焚口の正面から斜面を登る方向である左脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅3.4m、奥行き3.0mを測り、焚口に向かってやや横長に広がる。

第5項 SY04 窯体及び付帯構造

SY04は、北東向き斜面に並ぶ4基の窯体の中では最下部に位置する。主軸については、同一斜面の床面が傾斜する3基の中では、SY02と03がほぼ方向を同じくして隣接しているのに対して、SY04はこれらの方から40°以上南側に振るS-27°-Wを測り、このラインは南方向に登る斜面に対して、ほぼ直登する方向である。このSY04と03は、欠損部を先端方向に向かって復元すると交錯するため、窯体の先端部分で切り合い関係にあるものと思われるが、この部分が攪乱によって削平されているため、遺構の検出状況からそれぞれの新旧関係は窺い得ない。焚口の前は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる攪乱によって欠損する。窯体の残存長は7.8mを測り、分焰柱を有する。焚口から分焰柱に向かって、柱の後側から焼成室半ば過ぎまでの床面下には、腕を伏せた状態で広範囲にわたって敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が設けられていた。

- ・燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、2.4mを測る。床面の幅は焚口で1.0mを測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では1.5mを測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

- ・分焰柱

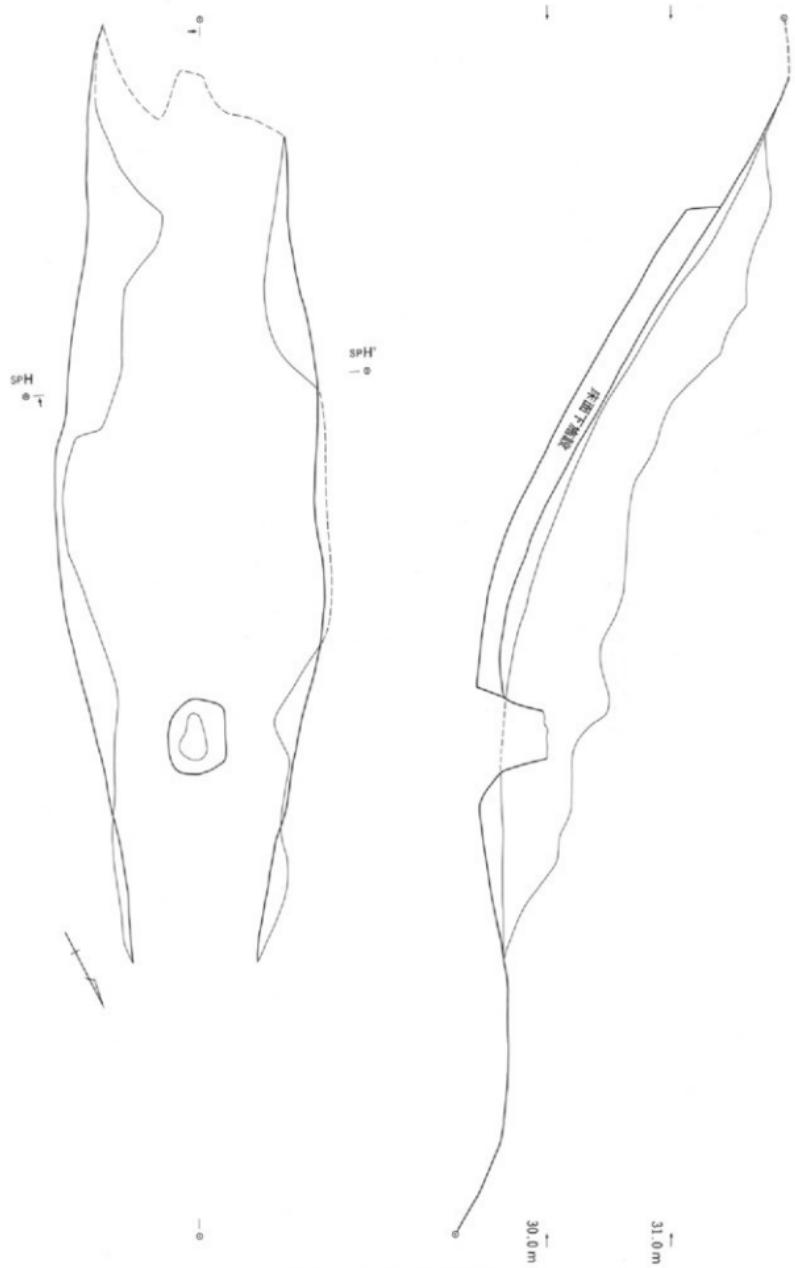
分焰柱基部は、主軸方向の径0.62m、これと直交する径0.47m、残存高0.57mを測り、水平断面形態は不整形形を呈する。

- ・焼成室

残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって5.34mを測る。床面の平面形態は、分焰柱から上に向かってわずかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がわずかにしまられてゆくものと思われ、SY02・03などと比較して広がりは緩やかである。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.78m、さらにそこから1.26m登ったところでは、最大幅2.2mを測る。残存する焼成室での床面平均斜度は、30°とSY02・03よりもややきつく、残存床面内での急激な変化は認められないが、最大幅部分より先端方向は34°とやや変化する。

- ・床面下施設

SY04の床面下施設は、SY02と同様に窯体幅全体に敷き詰めるタイプで、伴う溝なども見られない。敷き詰められた範囲は、焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から窯体幅全体に長さ4.0mにわたる。この腕を敷き詰めるための掘り込みは、これもSY02と同様に窯壁及び地山の被熱部を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度



第13図 SY04 平・側面図(1/40)

かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と榦を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。敷き詰められていた榦は、不良品と判断されたものが使用されたものと思われる。

・前庭部

焚口の正面には、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。規模は幅3.8m、奥行き1.1mを測り、焚口に向かって横長に広がる

第6項 SY05 窯体及び付帯構造

SY05は、SY01~04が並ぶ北東向き斜面から、擾乱部をはさんで約20m程南西方向に離れた、北西向き斜面に位置する。このSY05の位置には、平成8年度調査区が同一斜面で南接している。この斜面での検出窯体は、両調査区を合わせて合計3基で、この中ではSY05は最下部に位置する。この同一斜面3基の主軸は、ほぼ方向を同じくして隣接しており、SY05はS-76°-Eを測り、このラインは南東方向に登る斜面に対して、ほぼ直登する方向である。焚口の正面及び右側は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる擾乱によって欠損する。窯体の残存長は5.9mを測り、分焰柱を有する。SY05の特筆すべき点は、焚口から分焰柱に向かい、柱の後側から焼成室半ばまでの床面下に、榦を伏せた状態で敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が、上下に2段設けられていたことである。

・燃焼室

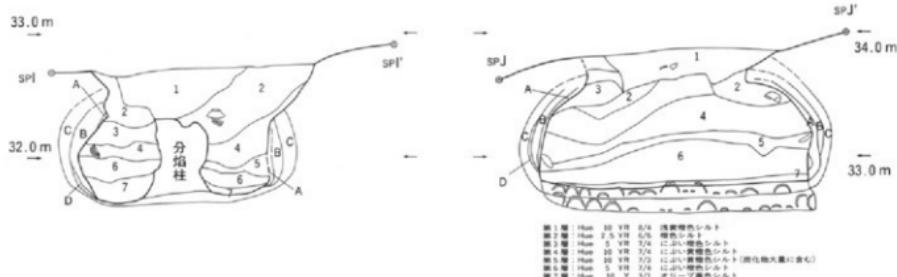
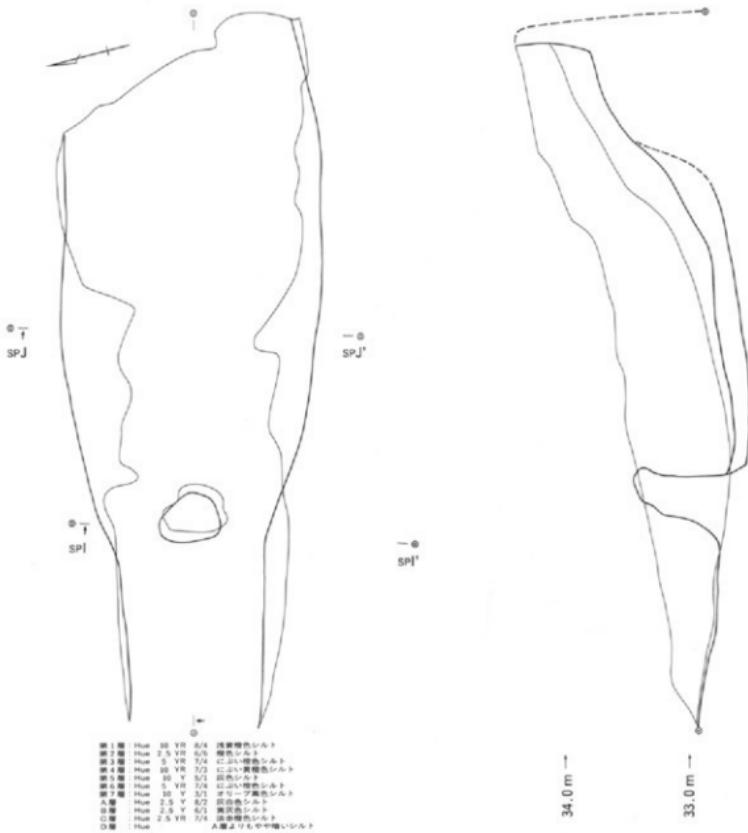
焚口から分焰柱中心部までの長さ、1.74mを測る。床面の幅は焚口で1.03mを測るが、この幅がそれほど広がらず、分焰柱前面では1.2mを測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点で、焚口から分焰柱に向かってやや下っている。

・分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径0.39m、これと直交する径0.5m、残存高0.93mを測り、水平断面形態は、主軸とは直交する方向に長径が求められる不整橢円形を呈する。この分焰柱は地山を掘り抜いて作られたものと思われるが、その周囲を砂礫混じりの粘質土で補強している。分焰孔の最大幅は、焚口から分焰柱に向かって左側では0.66m、右側では0.55mを測る。

・焼成室

残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって4.08mを測る。窯床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がしづられてゆくものと思われる。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.52m、さらにそこから1.7m登ったところでは、最大幅2.1mを測る。残存する焼成室での床面平均斜度は、21°とSY02~04よりも比較的緩やかだが、焼成室内の残存床面は角度が安定しておらず、最大幅部分より先端方向は21°~45°~32°~18°と変化する。



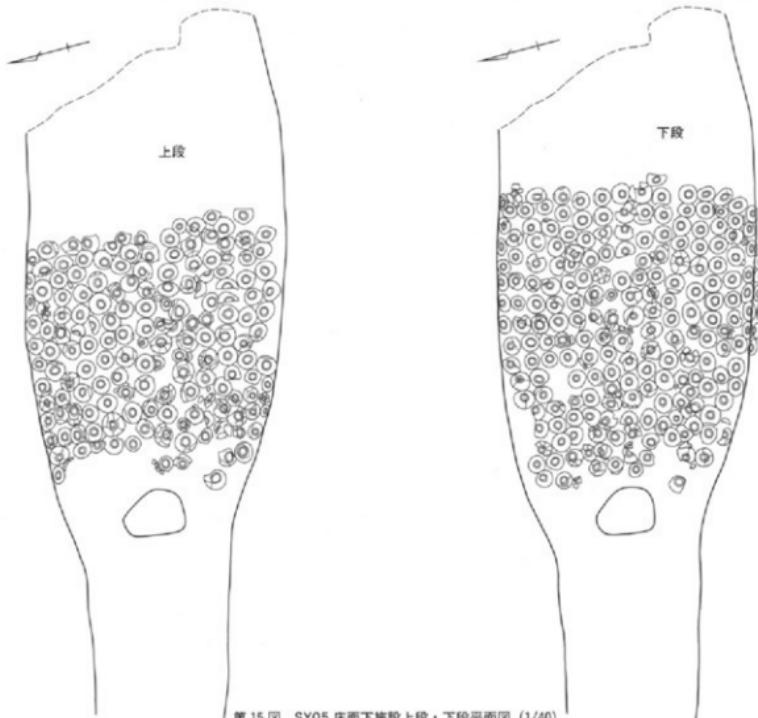
第14図 SY05 平・側・断面図(1/40)

・床面下施設

SY05の床面下施設は、SY02・04などと同様に窓体幅全体に敷き詰めるタイプであるが、これがほぼ同じ部分で上下に2段設けられていた。敷き詰められた範囲は、焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から窓体幅全体に上段で長さ2.2m、下段で長さ2.6mにわたる。この椀を敷き詰めるための掘り込みは、窓壁を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と椀を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。利用されていた椀は、SY02・04などのように重んだものや、複数の椀が融着したものが多く見られ、不良品と判断されたものが使用されたことが窺える。

・前庭部

焚口の正面から右脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅4.8m、奥行き2.2mを測り、焚口に向かってやや横長に広がるが、右脇部分はさらにこれと直交する方向に、幅1.5m、長さ2.0mの規模で鉤の手状に曲がってのびる。この曲がり角の部分からは遺物が集中して出土しており、仮置きや選別などの行為が窺える。



第15図 SY05 床面下施設上段・下段平面図 (1/40)

第7項 灰 原

平成7年度に調査した第I次調査区では、北東斜面に並ぶ4基の窓の下方に上下2層が重なる灰原が認められ、これとは別に北西斜面におけるSY05の焚口正面から右脇、さらにその下方にあたる位置に、合計6層に分けて検出できた灰原が認められた。この2ヶ所に分かれた位置の灰原を、それぞれ北東斜面側が灰原A、北西斜面側が灰原Bと区別し、各層には番号を付加した。

・灰原A

北東斜面の下部に大きく広がるものを灰原A1層、その下にこれよりも小規模に展開しているものを灰原A2層として検出した。

灰原A1層は、斜面上部に向かって「凹」字状に広がり、その規模は、等高線方向の最大幅15.5m、傾斜方向の最大長9.8m、最も厚い部分で0.45mを測る。この灰原A1層はSY03・04の位置では、地山を削って設けられた焚口から前庭部の埋土のさらに上部を覆つており、SY02の前庭部にわずかにかかっている。したがって、灰原A1層は、SY03・04が廃絶した後、SY02に伴って形成された可能性が考えられる。

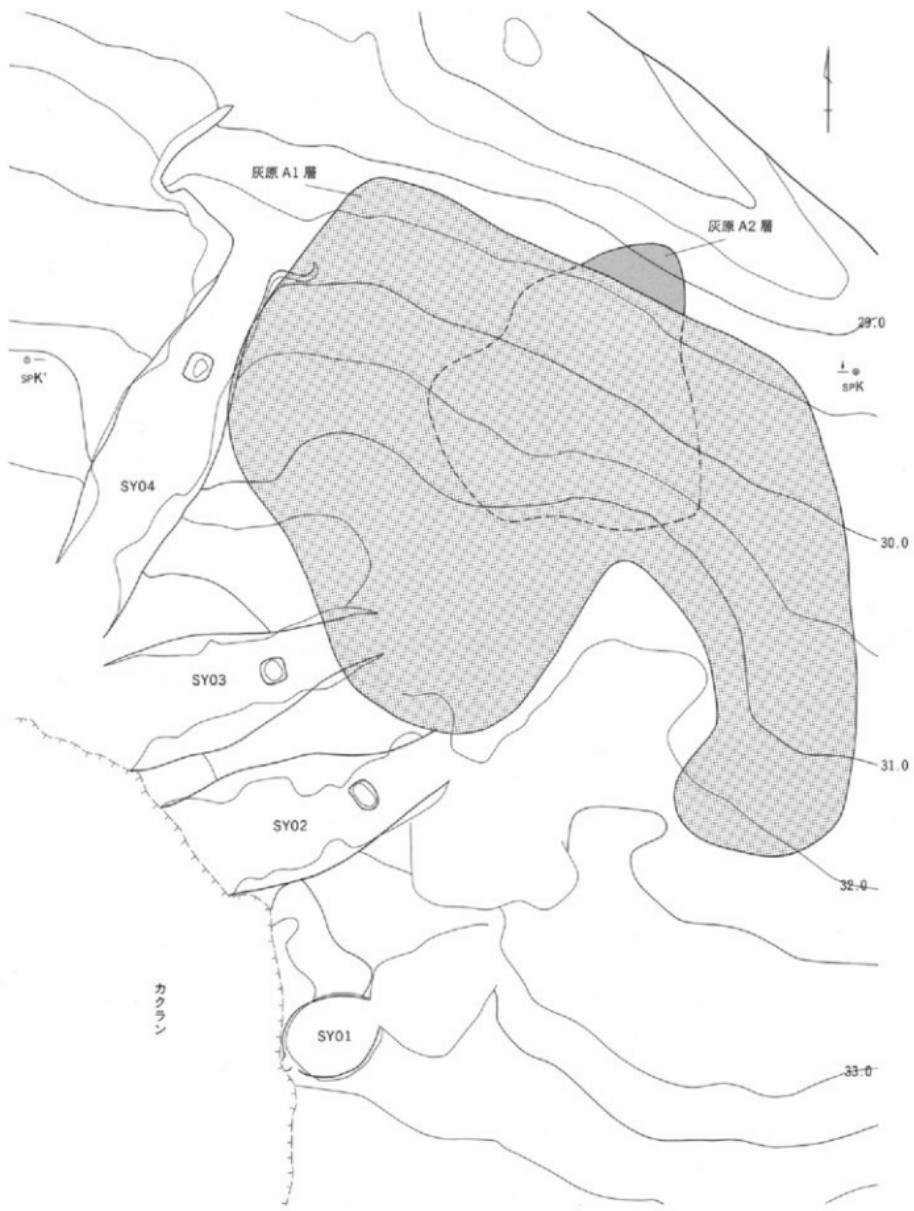
灰原A2層は、SY03の前庭部直下の斜面にA1層よりもかなり小規模に展開する。その規模は、等高線方向の最大幅5.5m、傾斜方向の最大長6.5m、最も厚い部分で0.32mを測る。この灰層は、SY03の直下に位置し、SY04の前庭部とはやや離れているため、SY03に伴って形成された可能性が考えられる。この灰原A2層の上部は、間層をはさんで灰原A1層がSY03ごと覆っているため、SY02と03の同時操業は不可能で、SY03と04は先端部分が切り合い関係にあるものと思われるため、これも同時操業は無理である。したがって、SY02～04の3基の窓は、斜面の下部に所在するSY04から、上部に向かってそれぞれ個別に築窓から廃窓を繰り返した可能性が考えられる。

・灰原B

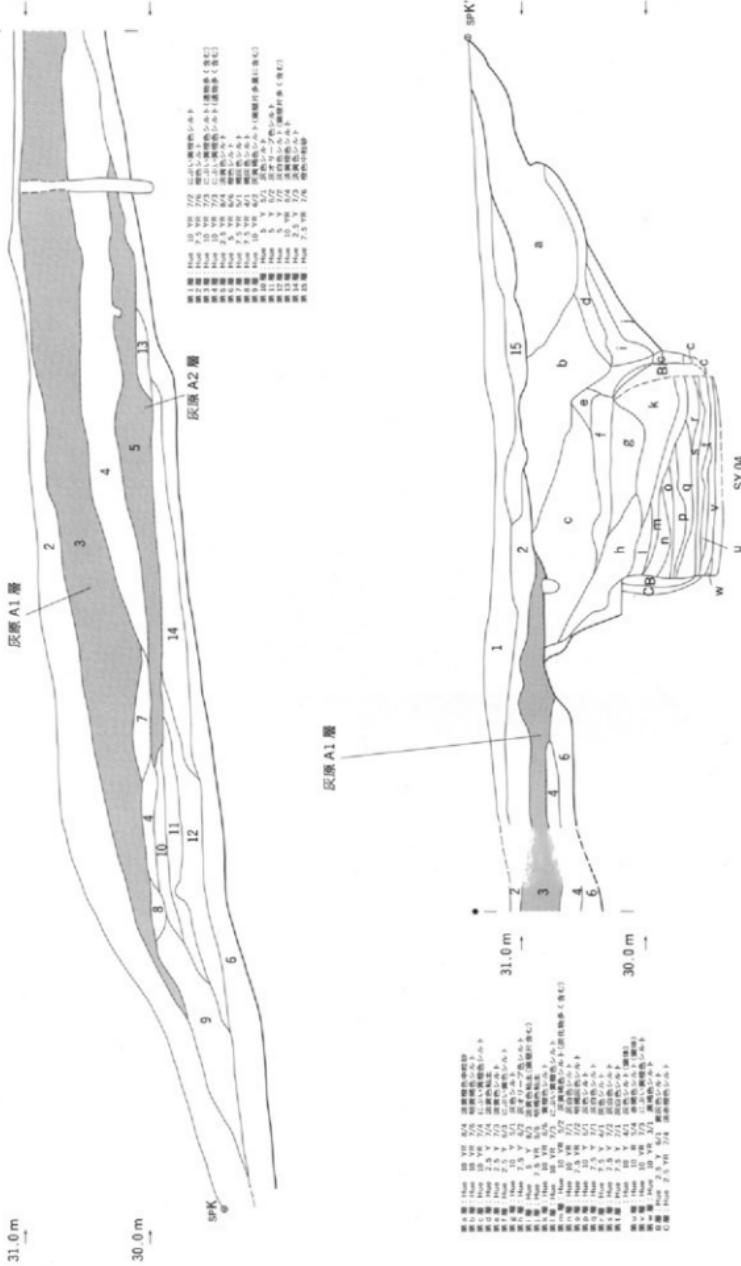
北西斜面において、SY05の前庭部と、その上下に広がる6層の灰層を、それぞれ灰原B1～6層として検出した。

灰原B1層は、第I次調査区の南端、SY05の前庭部より上部にわずかな範囲を検出できた。この層の下には、灰原B2層が広がる。その規模は、傾斜方向で検出した最大長が5.2m、最も厚い部分で0.1mを測る。第II次調査区側では検出されていないため、確認できた範囲以上には広がらず、小規模に灰原B2層の上部に重なるものと思われる。

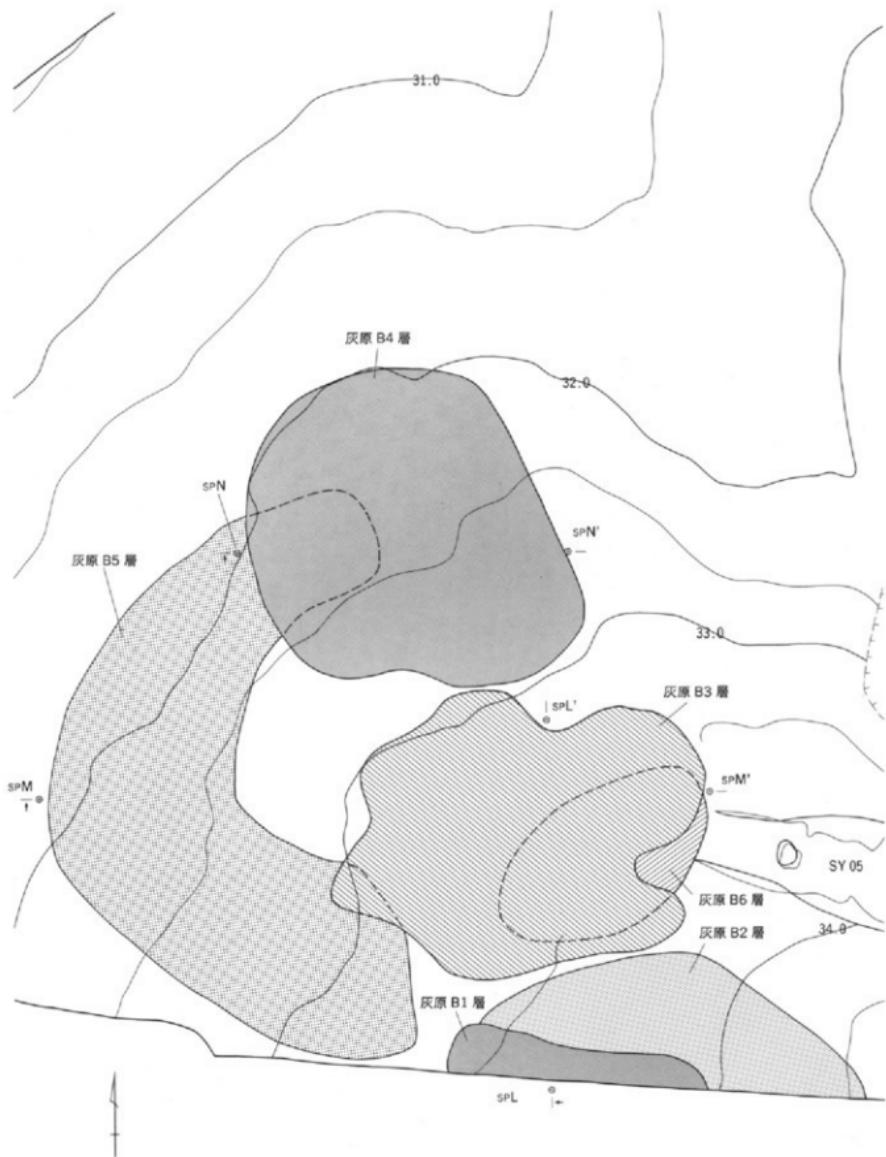
灰原B2層は、B1層と同様に第I次調査区の南端で、SY05の前庭部より斜面上部で検出された。この層の上には、灰原B1層が重なる。その規模は、傾斜方向で検出した最大長が7.9m、最も厚い部分で0.16mを測る。この層は、B1層と同様に第II次調査区側では検出されていないため、この調査区で確認できた範囲程度の規模で、灰原B1層の下部に展開するものと思われる。灰原B1・2層は、SY05の前庭部よりも斜面上部に位置する。そして、このさらに斜面上部には、第II次調査区のSY06前庭部が位置するため、灰原B1・



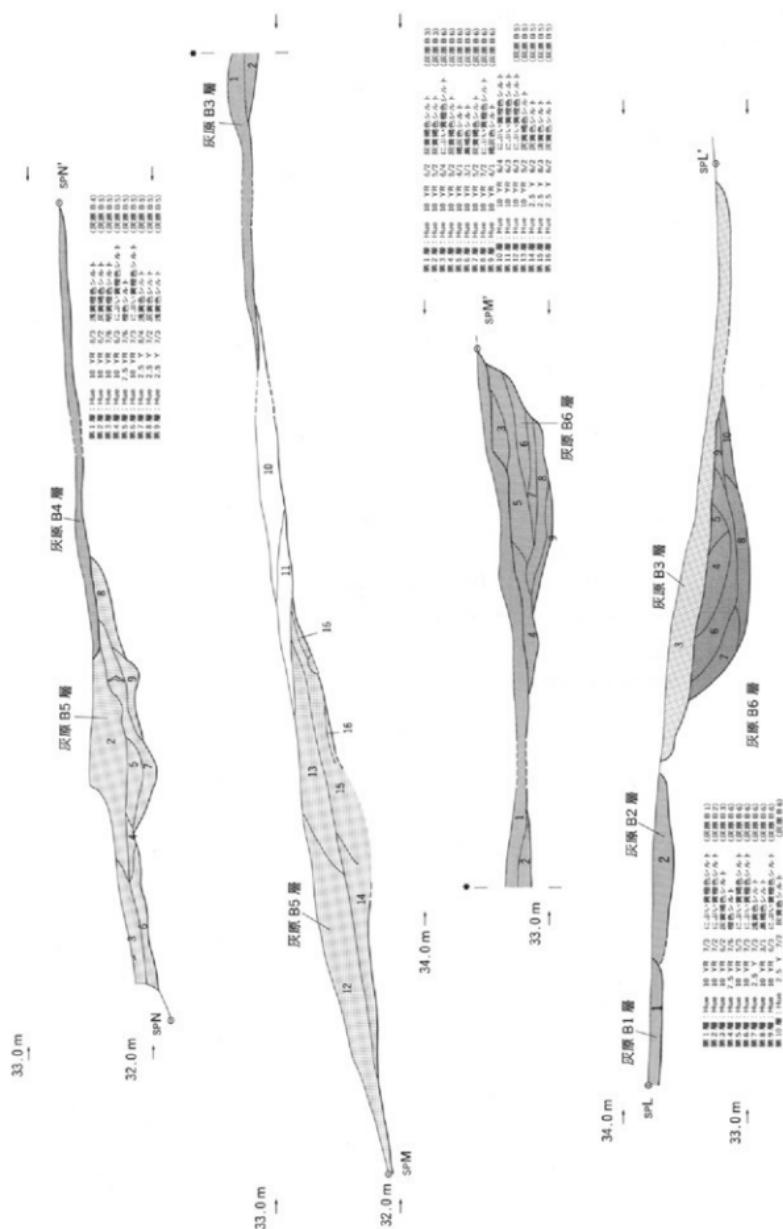
第 16 図 灰原 A1・2 層平面図(1/100)



第17図 東西ベルト断面図(北より・1/40)



第18図 灰原B1~6層平面図(1/40)



第19図 灰原B層断面図(1/40)

2層は、SY06に伴って形成された可能性が窺える。

灰原B3層は、SY05の前庭部を全体的に覆うように展開する。この層の下には灰原B5層がわずかな部分で重なり、灰原B6層の大部分が重なる。その規模は、等高線方向の最大幅7.8m、傾斜方向の最大長7.1m、最も厚い部分で0.22mを測る。この灰層は、SY05の前庭部及び、それに続く平坦面をほぼ全面に覆っており、灰原B5・6層をも覆っているため、SY05に伴って形成された灰層の中でも、終盤の灰層である可能性が考えられる。

灰原B4層は、SY05の前庭部から斜面を北東方向にやや下った位置に展開する。この層の下には灰原B5層が一部で重なり、灰原B3層の北端部分と近接する。その規模は、等高線方向の最大幅6.1m、傾斜方向の最大長7.4m、最も厚い部分で0.1mを測る。この北西向き斜面では、第I・II次調査区合わせて3基の窓体が検出されているが、このうちSY05は最も斜面下部に位置しており、これよりも下部に近接する窓体は見つかっていないため、灰原B4層は、SY05に伴って形成された可能性が考えられる。

灰原B5層は、SY05の前庭部から斜面を北東方向にやや下った位置に、この前庭部を弧を描いて囲むように展開する。この層の上には灰原B3・4層が一部で重なり、灰原B1・2層の西端部分と近接する。その規模は、等高線方向の最大幅9.6m、傾斜方向の最大長9.4m、最も厚い部分で0.44mを測る。このB5層は、距離的にはSY05の前庭部からやや離れるが、これを囲むような展開の状況などから、SY05に伴って形成された可能性が考えられる。

灰原B6層は、SY05の前庭部位置に小規模に展開する。この層は灰原B5層にほとんど部分が覆われており、灰原B2層の北端部分と近接する。その規模は、等高線方向の最大幅4.8m、傾斜方向の最大長2.8m、最も厚い部分で0.52mを測る。SY05の前庭部に展開していることから、この窓体に伴って形成されたものと思われる。

第3節 第II次調査区の遺構

第1項 概 要

平成8年度に行った第II次調査で検出された遺構は、窓体2基と、これらに伴うものと思われる灰層である。第I次調査区では、中央の擾乱部分をはさんで北東向きに下る斜面と、北西向きに下る斜面が存在したが、このうち北東向き斜面で4基、北西向き斜面で1基の窓体を検出した。これらの窓体の存在は、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会による試掘調査の時点では、北東向き斜面地点にてSY03、04の一部にあたる窓壁が確認されたのみであった。しかし、実際に調査に入り表土を除去してみると、北西向き斜面では3基の窓体が確認できた。この北西向き斜面で確認された3基のうち、上位2基は調査対象区域外であったため、この年度の調査ではその所在確認のみに留めた。この年度で未調査であった部分は、次年度に第II次として調査された。



第20図 第Ⅱ次調査区平面図(1/300)

第2項 SY06 窯体及び付帯構造

SY06は、北西向き斜面に並ぶ3基の窯体の中では中央に位置する。主軸については、同一斜面の3基はいずれも似通った方向であり、SY06はS-70°-Eを測り、このラインは南東方向に登る斜面に対して、ほぼ直登する方向である。焚口の前は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室中途から先端方向は、後世の土取りによる擾乱によって欠損する。窯体の残存長は6.6mを測り、分焰柱を有する。焚口から分焰柱に向かって、柱の後側から焼成室半ば過ぎまでの床面には、部分的に焼台が残っていた。

・燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、1.9mを測る。床面の幅は焚口で1.0mを測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では1.5mを測る。燃焼室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

・分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径0.36m、これと直交する径0.44mを測り、水平断面形態は不整形形を呈する。分焰孔は、焚口から分焰柱に向かって左側が幅0.52m、高さ0.63mを測り、右側が幅0.54m、高さ0.62mを測る。主軸と直交する断面を観察すると、地山を掘り抜いて作られた柱内部の被熱部が曲線的であるのに対し、柱の外郭線が直線的に立ち上がっているため、当初は左右分焰孔内側の断面形態が曲線的であったものを、直線的に補修したことが窺える。

・焼成室

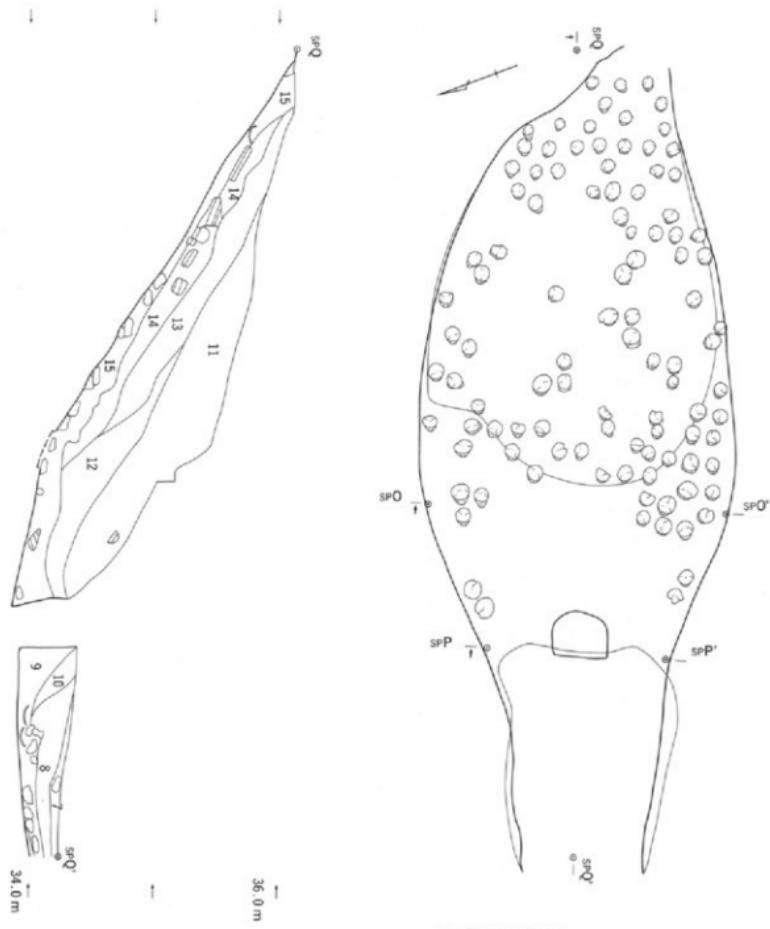
残存する焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって4.75mを測る。床面の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がったものがしばらく続いた後、再び幅がしばられてゆくものと思われ、第1次調査区のSY02・03などと同様の平面形態を呈するものと思われるが、SY02・03と比較して広がりはやや激しい。床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.76m、さらにそこから1.15m登ったところでは、最大幅2.52mを測る。残存する焼成室での床面平均傾度は27°で、残存床面内での急激な変化は認められないが、最大幅部分より先端方向は32°とやや変化する。

・前庭部及び灰層

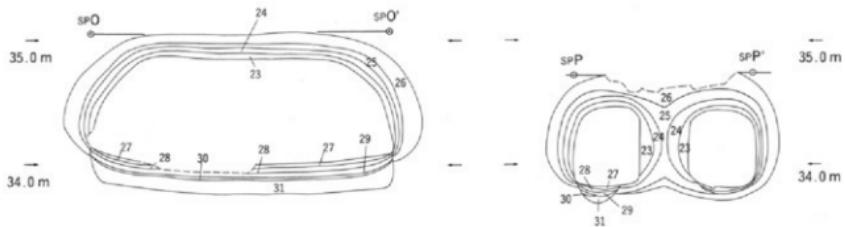
焚口の正面から左脇にかけては、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅1.8m、奥行き2.0mを測り、焚口に向かってやや縦長に狭く設けられている。灰層は、この前庭部から北西方向に小規模に展開する。その規模は、等高線方向の最大幅2.8m、傾斜方向の最大長1.5m、最も厚い部分で0.2mを測る。

第3項 SY07 窯体及び付帯構造

SY07は、北西向き斜面に並ぶ3基の窯体の中では最上部に位置する。窯体の主軸は、S-62°-Eを測り、このラインはSY05・06と同様に、南東方向に登る斜面に対してほぼ直登する方向である。北西向き斜面に並ぶ3基の窯体は、SY06と07は近接するが、第1次調査



* 土層は第 23 図参照



第 21 図 SY06 平・断面図(1/40)

区のSY05と中央に位置するSY06とはやや距離がある。焚口の前は、前庭部と思われる平坦部があり、焼成室の天井部一部と煙道部が欠損している以外は、遺存状態は良好であった。窓体の残存長は9.9mを測り、分焰柱を有するが、ダンパーは無かったものと思われる。焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から焼成室中途までの床面下には、椀を伏せた状態で敷き詰めた、いわゆる「床面下施設」が設けられていた。

- 燃焼室

焚口から分焰柱中心部までの長さ、2.5mを測る。床面の幅は焚口で1.1mを測るが、この幅が徐々に広がり、分焰柱前面では1.5mを測る。焼成室の床面はほぼ水平であるが、検出時点では、焚口から分焰柱に向かってわずかに下っている。

- 分焰柱

分焰柱基部は、主軸方向の径0.58m、これと直交する径0.42mを測り、水平断面形態は長方形を呈する。分焰孔は、焚口から分焰柱に向かって左側が幅0.58m、高さ0.76mを測り、右側が幅0.59m、高さ0.72mを測る。主軸と直交する断面を観察すると、SY06と同様に、地山を掘り抜いて作られた柱内部の被熱部が曲線的であるのに対し、柱の外郭線が直線的に立ち上がっているため、当初は左右分焰孔内側の断面形態が曲線的であったものを、直線的に補修したことが窺える。

- 燃焼室

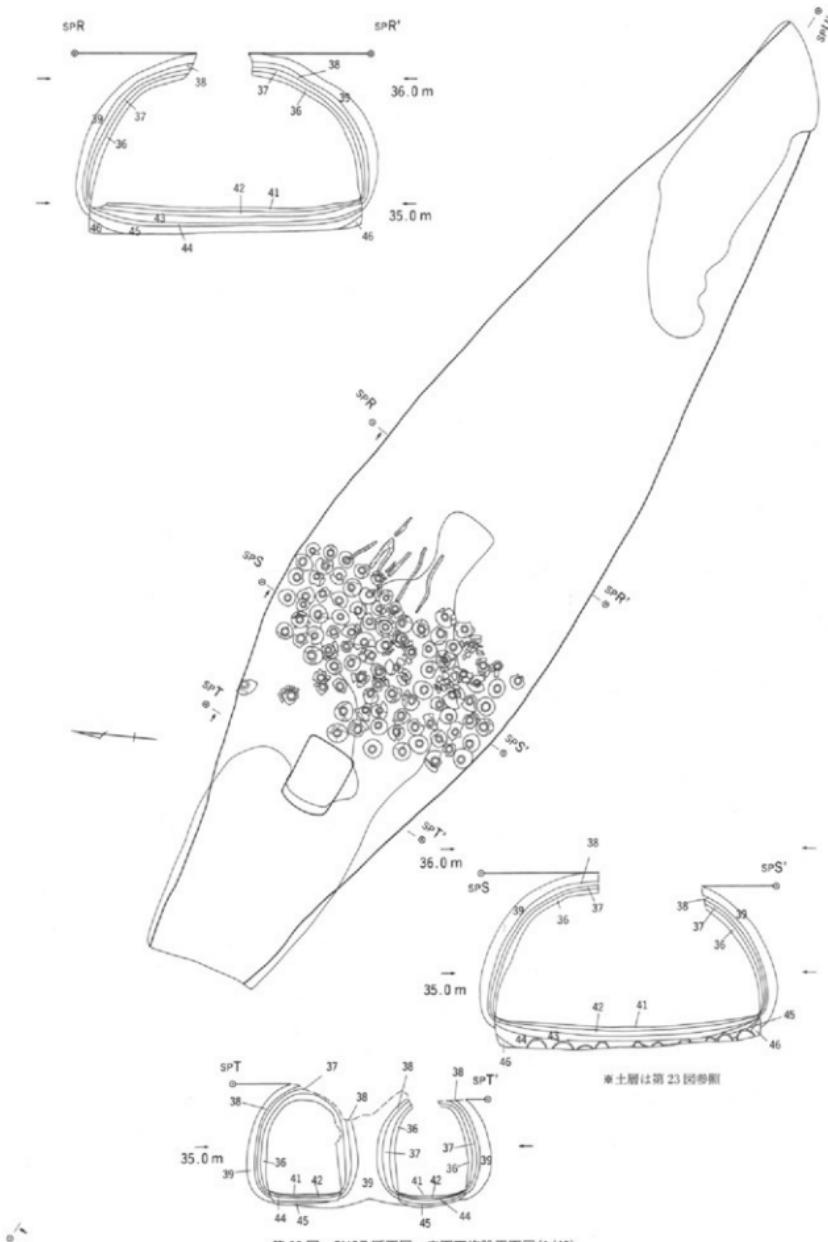
焼成室の長さは、分焰柱中心部から煙道方向に向かって6.88mを測る。窓床の平面形態は、分焰柱から上に向かって緩やかに広がる部分が短く続いた後、再び幅が緩やかに長くしばられてゆくものと思われ、第1次調査区のSY04・05などと同様の平面形態を呈するものと思われる。SY05と比較してしばられ方は、床面の幅は、分焰柱に最も近い部分で1.75m、さらにそこから1.76m登ったところでは、最大幅2.15mを測る。焼成室での床面平均斜度は21°で、SY04と比較すると緩やかで、床面内での急激な変化は認められず、比較的の安定している。

- 床面下施設

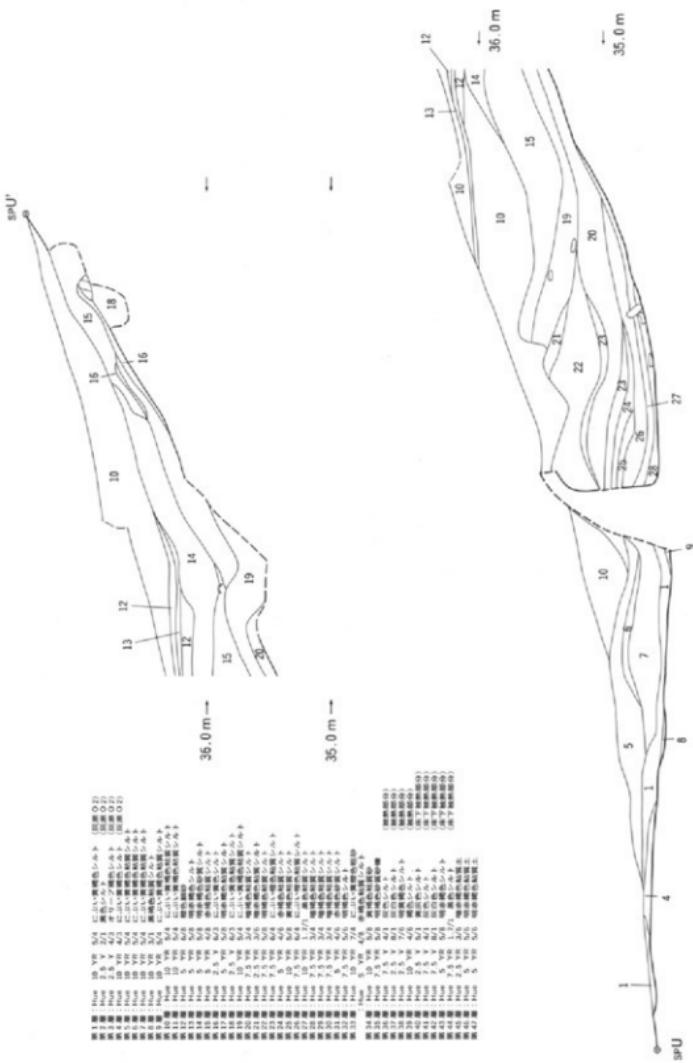
SY07の床面下施設は、第1次調査区で検出されたものと同様に窓体幅全体に敷き詰めるタイプで、伴う溝なども見られない。敷き詰められた範囲は他のものよりも狭く、焚口から分焰柱に向かって、柱の直後から窓床幅全体に長さ約1mにすぎない。この椀を敷き詰めるための掘り込みは、前年度調査のものと同様に窓壁及び地山の被熱部を断ち切っているため、これは築窯時に設けたものではなく、何度かの焼成行為の後に設けられたものと考えられる。床面と椀を敷いた層との間には、炭化物を多く含む層が確認できる。

- 前庭部及び灰層

焚口の正面には、地山を削り込んで設けたと思われる平坦部が見られる。幅2.9m、奥行き2.8mを測り、焚口に向かってやや横長に設けられている。灰層は、この前庭部とほぼ同じ範囲に小規模に展開する。その規模は、等高線方向の最大幅2.8m、傾斜方向における最大長1.7m、最も厚い部分で0.1mを測る。



第22図 SY07断面図・床面下施設平面図(1/40)



第23図 SY07 断面図(1/40)

第III章 遺物

第1節 器種分類

今回の調査で出土した遺物は、第Ⅰ・Ⅱ次調査区併せて、容量27リットルのコンテナで390箱である。器種の内訳は、製品としては伊勢型鍋2点を除くと椀及び皿に限られ、これに窯道具である焼台が加わる。これらはいわゆる「山茶碗・山皿」、または「行基焼き」と呼ばれたもので、主として中世に生産された無釉陶器である。

この出土遺物の個体識別については、椀、皿とともに底部を基準にした方法を用いた。すなわち、出土遺物の椀、皿の底部が1/2以上残存するものを1個体と数え、底部の遺存度が1/2以下のものについては、0個体と数えた。以下に記述する個体数は、すべてこの方法を用いた数値である。第Ⅰ・Ⅱ次調査区を合わせた総出土個体数は、11944点である。これらの器種別内訳は、椀=8182点、皿=3762点で、椀の全体に占める比率は69%である。なお、この個体識別に合わせて、各個体から観察できる複数の情報をデータ化したが、この結果については別章で述べる。

調査区周辺にみられる時期の近似する窯跡では、壺、瓶、鉢、瓦などの生産も確認されているが、今回の調査地点ではみられなかった。このNA335号窯出土遺物については、以下に分類を行い、これに基づいて次節で説明、検討を行う。

椀、皿とともに、主として体部の断面形態をもとに分類を行い(大分類1～)、これらをさらに口縁端部の断面形態によってそれぞれ分類(小分類A～)した。口縁端部の分類は、椀、皿とともに共通して同一基準を採用した。

・ 楓大分類

今回の調査地点において出土した楓は、胎土に肉眼観察における客観的な差が明確には認められず、全体的な特徴としては若干の砂粒や小礫を含み、泥質に近い。ここでは、楓の断面形態をもとに、3種類に大別した。

[楓1類]

体部から口縁部にかけての断面形態が、曲線的に立ち上がるもの

[楓2類]

体部から口縁部にかけての断面形態が、直線的に立ち上がるもの

[楓3類]

体部の断面形態は直線的であるが、口縁部付近では端反り風の丸みをもつもの

・皿大分類

皿の胎土については、椀同様の観察所見であった。ここでは主として断面形態の特徴から、4種類に大別した。

[皿1類]

体部の器壁に比べて底部の器壁が厚いもの

[皿2類]

体部・底部が、器壁の厚さに極端に差がないもの

[皿3類]

高台を有するもの

・共通小分類

[口縁A]

口縁端部が均等に丸みを帯びたもの

[口縁B]

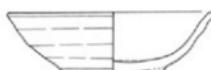
口縁端部が断面形態上角張り、端部内・外の曲点がそれぞれ直角なもの

[口縁C]

断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より大きく曲がるもの

[口縁D]

断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より緩く曲がるもの



椀1類



椀2類



椀3類



皿1類



皿2類



皿3類



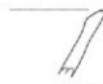
口縁A



口縁B



口縁C



口縁D

第24図 器種分類図

第2節 第I次調査区の遺物

第1項 概 要

第I次調査区で出土した遺物は、椀=7231点、皿=3546点、伊勢型鍋=2点である。この中で最も出土量の多かった窯体はSY04で、椀=668点、皿=90点を数える。反対に最も少なかったのはSY01で、椀=64点、皿=0点を数える。但し、最多のSY04の出土量は、SY05と比較して大きな差ではなく、SY02の出土量がこれらの約半数である。最少のSY01の出土量は、SY03の総出土点数と同じである。こうした各窯体における出土量の二極化は、床面下施設の有無に原因が求められよう。すなわちSY02・04・05の出土遺物量は、床面下施設に使用された椀の数量が多くを占めており、SY01・03では出土量にこうした数値が反映されていないため、二極化傾向を示す結果となったものである。第I次調査区で検出した窯体5基は、各遺構の遺存度を無視して、窯内の出土点数に限って比較してみると、極端な数量差が認められなかった。

第2項 SY01に関する遺物

SY01は、遺構の項でも記述したように、特異な形態でありながら決定的な判断材料が無く、どのような製品を目的に焼成行為を行ったのか判断し得なかった。しかし、窯体内からは、椀=64個体が出土しているため、これについて説明を行う。

SY01は、狭い床面積や特異な形態ながら、窯内の出土量としては他の窯体と大きな差はなく、しかも各出土椀の遺存度が良好で、細片の出土が少ないことが特徴であった。出土した器種は椀のみであったが、これらはすべて窯内で検出された。この椀64個体のうち、分類可能なものは57個体で、その内訳は、椀1類=36、2類=9、3類=12個体であった。遺物番号1~19は、SY01出土遺物である。1~9が椀1類、10~13が椀2類、14~19が椀3類である。口縁部には、極端な種の偏りはみられない。

第3項 SY02に関する遺物

SY02に関する出土遺物の内訳は、窯内から椀=82個体、皿=58個体、伊勢型鍋=1個体、床面下施設から椀=231個体、皿=3個体である。さらに、この窯体に伴うものと思われる灰原A1層からは、椀=2338個体、皿=1485個体、伊勢型鍋=1個体が出土している。

SY02は床面下施設をもつため、調査区内での各窯体で比較すると、出土個体数は多いグループに入る。特に、SY02に伴うものと思われる灰原A1層は、圧倒的な出土数量であり、この窯体が安定した生産活動を行っていたことを示唆している。

窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=66個体、皿=51個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=60、2類=3、3類=3個体、皿では1類=23、2類=

28 個体である。遺物番号 20~33・86~88 は、SY02 窓内出土遺物である。20~24 が椀 1 類、25 が椀 2 類、26・27 が椀 3 類で、28 が皿 1 類、29~33・87・88 が皿 2 類である。86 の伊勢型鍋は、焚口から分焰柱に向かって、焼成室に約 1 m 入った左壁側で出土している。球形の体部に外反する口縁部がつくもので、口縁端部は短く内側に折り返されて肥厚する。体部外面から口縁部内側までナデ調整が施され、体部内側はヘラケズリ調整が行われている。その形態的特徴などから、12 世紀後葉のものと思われる。

遺物番号 34~85 は、SY02 の床面下施設に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは椀 = 220 個体、皿 = 1 個体である。これらの器形別内訳は、椀では 1 類 = 185、2 類 = 11、3 類 = 24 個体、皿では 2 類 = 3 個体である。34~74・84 が椀 1 類、75~78 が椀 2 類、79~83 が椀 3 類で、84・85 が皿 2 類である。84 の椀と皿が融着したものでは、椀の外側に多量に自然釉がかかっており、融着の痕跡などから、3 本の積み上げられた皿の列上部に、椀を渡すようにかぶせて窯入れしたことが窺える。これは、小径の皿を積み重ねたときに、生じる安定の悪さを補うための行為かもしれない。

遺物番号 389~400・431~477 は、灰原 A 1 層出土遺物である。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは椀 = 1630 個体、皿 = 1078 個体である。これらの器形別内訳は、椀では 1 類 = 1104、2 類 = 356、3 類 = 170 個体、皿では 1 類 = 408、2 類 = 669、3 類 = 1 個体である。389~393・431・440~451・458~460・472~484 が椀 1 類で、414・415・432・437~439・452~455・473・474 が椀 2 類、416・417・433・434・456・457 が椀 3 類である。395~397・418~423・462~465・476 が皿 1 類で、398~400・424~430・435・436・466~468・477 が皿 2 類で、469・470 が皿 3 類である。これらの椀・皿の他に、伊勢型鍋が 1 点出土している。471 は伊勢型鍋の口縁部片で、頸部、外反部とともに短く、端部は短く内側に折り返されて肥厚する。こうした形態的特徴から、SY02 の焼成室内から出土したものと同様、12 世紀後葉のものと思われる。458~460 は、焼台が融着したものを図示した。461 の焼台には、上面平坦部内側に枠痕が認められる。

第 4 項 SY03 に関する遺物

SY03 出土遺物の内訳は、窓内から椀 = 51 個体、皿 = 13 個体である。さらに、この窓体に伴うものと思われる灰原 A 2 層からは、椀 = 382 個体、皿 = 147 個体が出土している。

SY03 は床面下施設をもたないため、調査区内での各窓体で比較すると、出土個体数はない。SY03 の窓壁は、調査区内で同時に検出された他の窓壁と比較して被熱が脆弱であった。この窓体に伴うものと思われる灰原 A 2 層は、圧倒的な出土数量の灰原 A 1 層と比較すると、椀と皿を合わせた総出土個体数において 7 分の 1 にも満たない。したがって、この窓体は、窓壁の被熱や灰原の出土量から考えると、生産活動という点で、SY02 よりかなり低かったことを示唆している。

窓内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀 = 38 個体、皿 = 13 個体である。これらの器形別内訳は、椀では 1 類 = 29、2 類 = 6、3 類 = 3 個体、皿では 1 類 = 11、2 類 =

2個体である。遺物番号89～100は、SY03窓内出土遺物である。89～91・98が椀1類、92・93が椀2類、94が椀3類で、95～97・100が皿1類、99が皿2類である。

第5項 SY04に関する遺物

SY04に関する出土遺物の内訳は、窓内から椀=92個体、皿=89個体、床面下施設から椀=576個体、皿=1個体である。

SY04は床面下施設をもつため、調査区内での各窓体で比較すると、出土個体数は多いグループに入る。また、この窓体の床面下施設は、焼成室内で分焔柱側からかなり広い面積で敷き詰められており、1窓体の床面下施設に使用された個体数では、第I・II次調査区併せた中でも最多であった。

窓内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=33個体、皿=72個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=28、2類=2、3類=3個体、皿では1類=18、2類=54個体である。遺物番号101～111・230～237は、SY04窓内出土遺物である。101・102の4個体中3個体・103～105・230が椀1類、106・107・231が椀3類で、108・232が皿1類、109～111・233～237が皿2類である。

遺物番号112～229は、SY04の床面下施設に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=502個体、皿=1個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=333、2類=118、3類=51個体、皿では2類=1個体である。112～183が椀1類、184～211が椀2類、212～223が椀3類である。

第6項 SY05に関する遺物

SY05に関する出土遺物の内訳は、窓内から椀=134個体、皿=15個体、床面下施設上段から椀=159個体、皿=5個体である。床面下施設下段から椀=245個体、皿=9個体である。さらに、前庭部からは椀=36個体、皿=101個体、この窓体に伴うものと思われる灰原B1～6層からは、各層合計で椀=586個体、皿=385個体が出土している。

SY05は床面下施設をもち、さらにこれが上下2段構造になっているため、調査区内での各窓体で比較すると、出土個体数は多いグループに入る。また、この窓体の床面下施設は、焼成室内で2面にわたって敷き詰められており、1窓体の床面下施設に使用された個体数では、第I・II次調査区併せた中でもSY04に次ぐものであった。

窓内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=101個体、皿=10個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=51、2類=37、3類=13個体、皿では1類=5、2類=4、3類=1個体である。遺物番号238～260は、SY05の窓内出土遺物である。242～248・256が椀1類、240・241・249～252・258～260が椀2類で、238・239・253が椀3類である。253・254が皿2類である。

遺物番号261～368は、SY05の床面下施設上下段に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=375個体、皿=11個体である。以下に器形別

内訳を、それぞれの段別に説明する。

床面下施設上段に使用されたものの器形別内訳は、椀では1類=115、2類=15、3類=15個体、皿では1類=2個体、2類=1個体である。261~292が椀1類、293・294が椀2類、295~302が椀3類で、303が皿1類、304・305が皿2類である。

床面下施設下段に使用されたものの器形別内訳は、椀では1類=164、2類=22、3類=44個体、皿では1類=3個体、2類=5個体である。306~350・367・368が椀1類で、351~355が椀2類、356~364が椀3類である。367の内1個体が皿1類、365・366・367の内1個体・368が皿2類である。367・368は、椀と皿が融着してしまったものを床面下施設に使用したもので、84と同様に椀の外側には自然釉が大量にかかっており、3本の積み重ねられた皿の列に、安定させるためか椀を渡すようにかぶせたことが観える。

遺物番号369~388は、SY05の前部で検出されたものである。このうち分類可能なものは椀=29個体、皿=66個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=22、2類=5、3類=2個体、皿では2類=66個体である。369~373・375が椀1類、374が椀2類、375~388が皿2類である。375・376は、84や367・368と同様に椀と皿が融着したもので、やはり3本の積み重ねられた皿の列に、安定させるためか、上から渡すようにかぶせられたものである。

遺物番号494~523は、SY05の生産活動に伴って形成されたと思われる、灰原B1~6層から検出されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは、椀=383個体、皿=309個体である。各層の重複関係は、B2層の上にB1層が展開し、B5層の上にはB3・B5層がそれぞれ別地点で重なり、B6層の上にはB3層が重なる。以下に器形別内訳を、それぞれの層別に説明する。

灰原B1層で検出されたものの器形別内訳は、椀1類=5、2類=2個体のみで、全形を知り得る資料が少ないため図示していない。

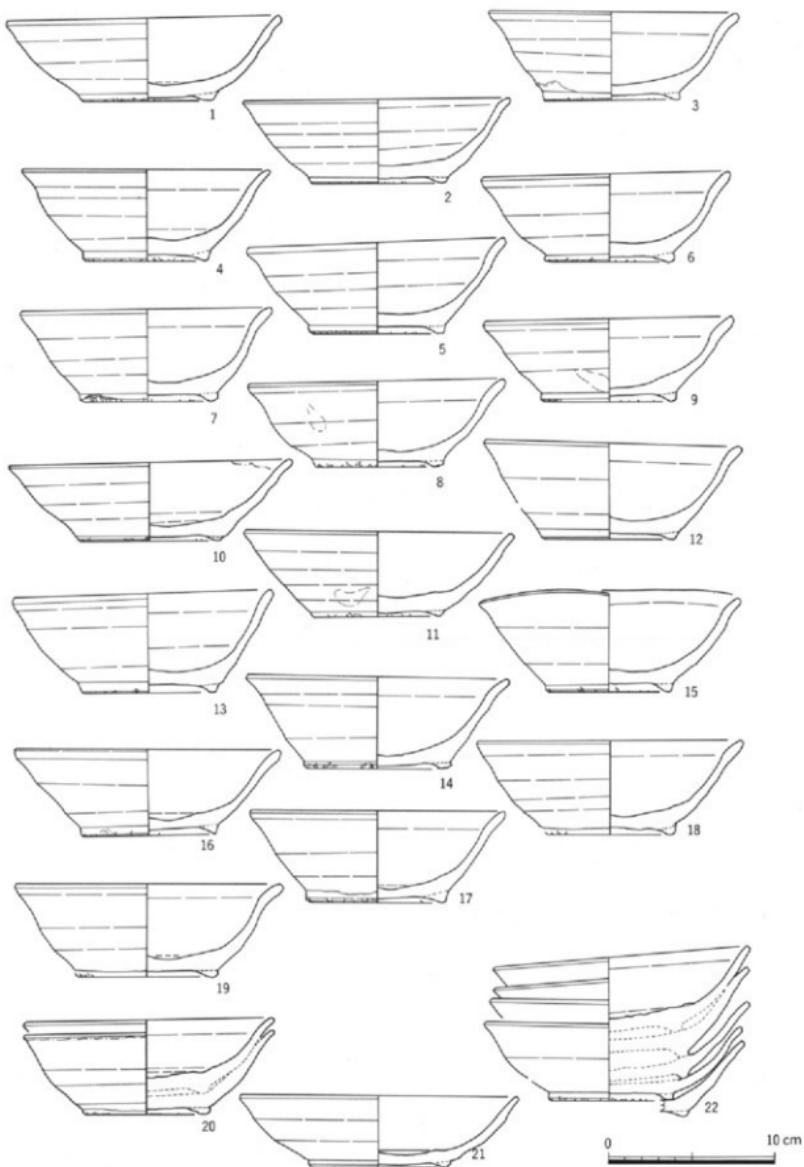
灰原B2層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=10、2類=5、3類=9個体、皿では1類=7個体、2類=9個体である。494が椀1類で、495が皿1類、496が皿2類である。

灰原B3層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=40、2類=62、3類=20個体、皿では1類=9、2類=76個体である。497が椀1類で、498~503が椀2類、504~506が皿2類である。507は、この層から出土した焼台で、上面平坦部内側には糊痕が認められる。

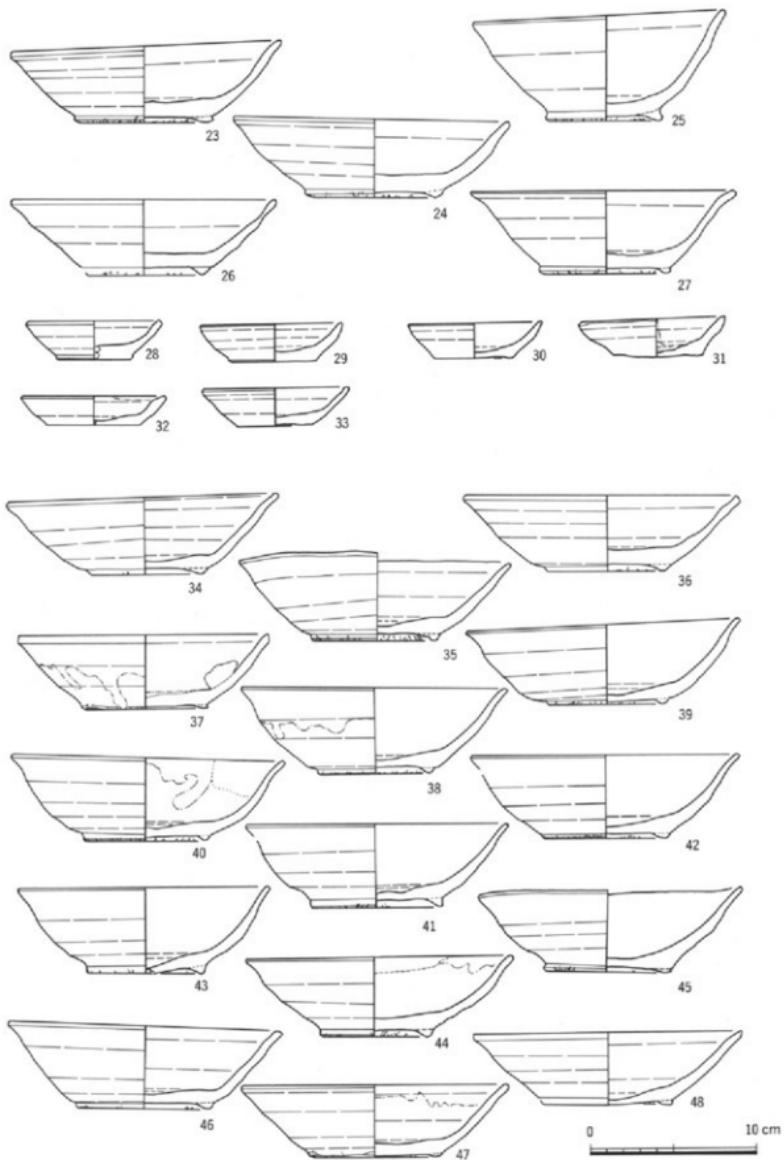
灰原B4層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=56、2類=11、3類=3個体、皿では1類=6、2類=18個体である。508が椀1類で、509が皿2類である。

灰原B5層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=87、2類=17、3類=30個体、皿では1類=47、2類=69、3類=1個体である。510~512が椀1類で、513・514が椀3類である。515・516が皿1類、517が皿2類である。

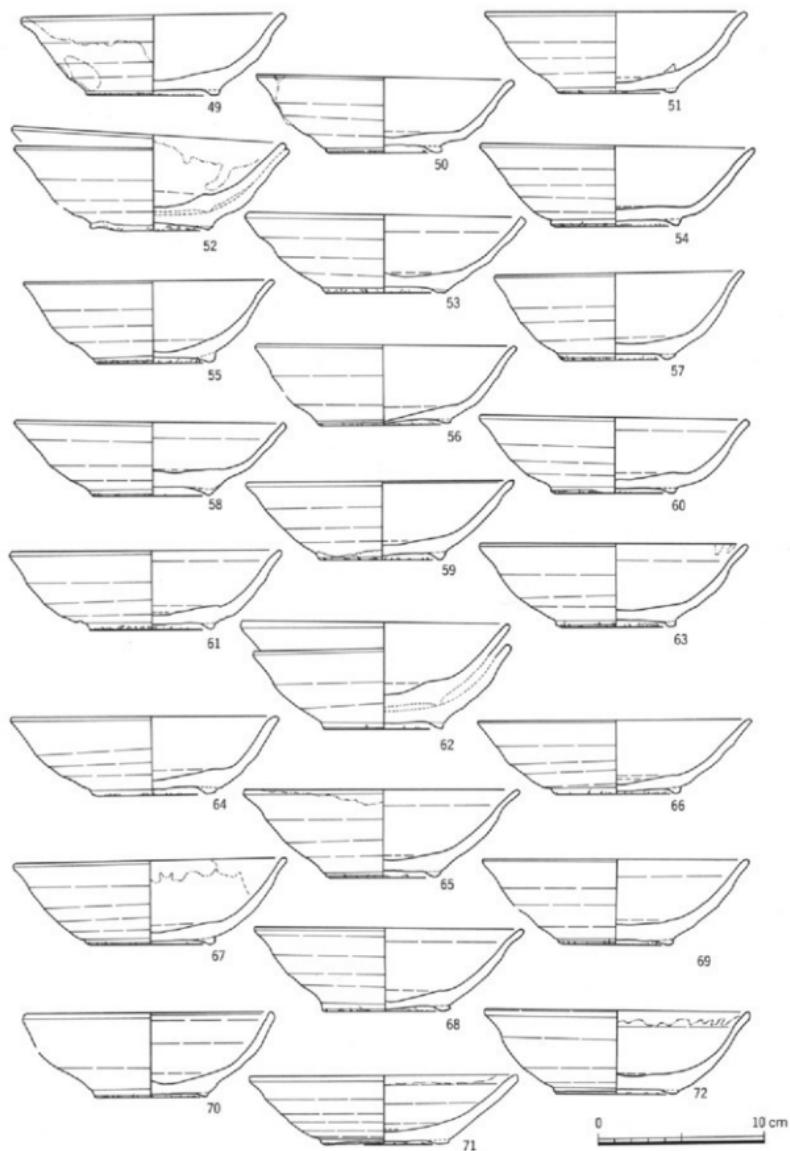
灰原B6層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=11、2類=6、3類=9個体、皿では2類=20個体である。518~520が椀1類で、521が椀3類である。522・523が皿2類である。



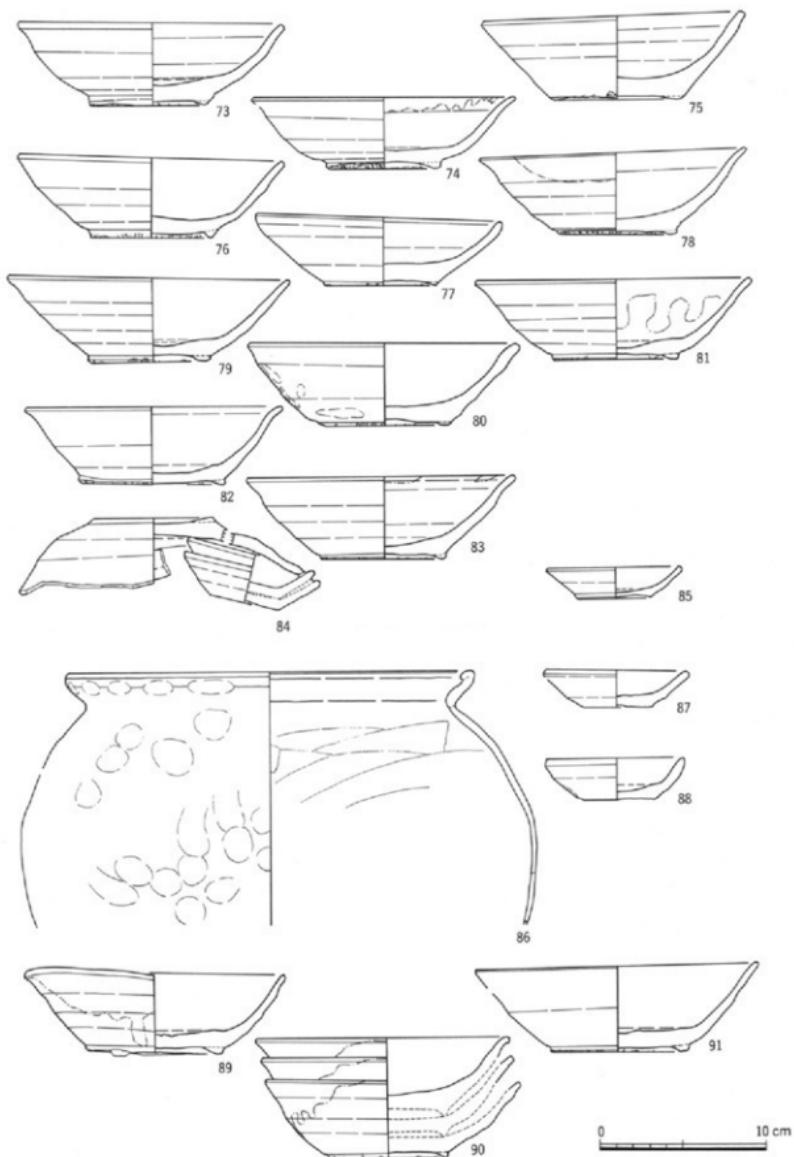
第25図 遺物実測図①



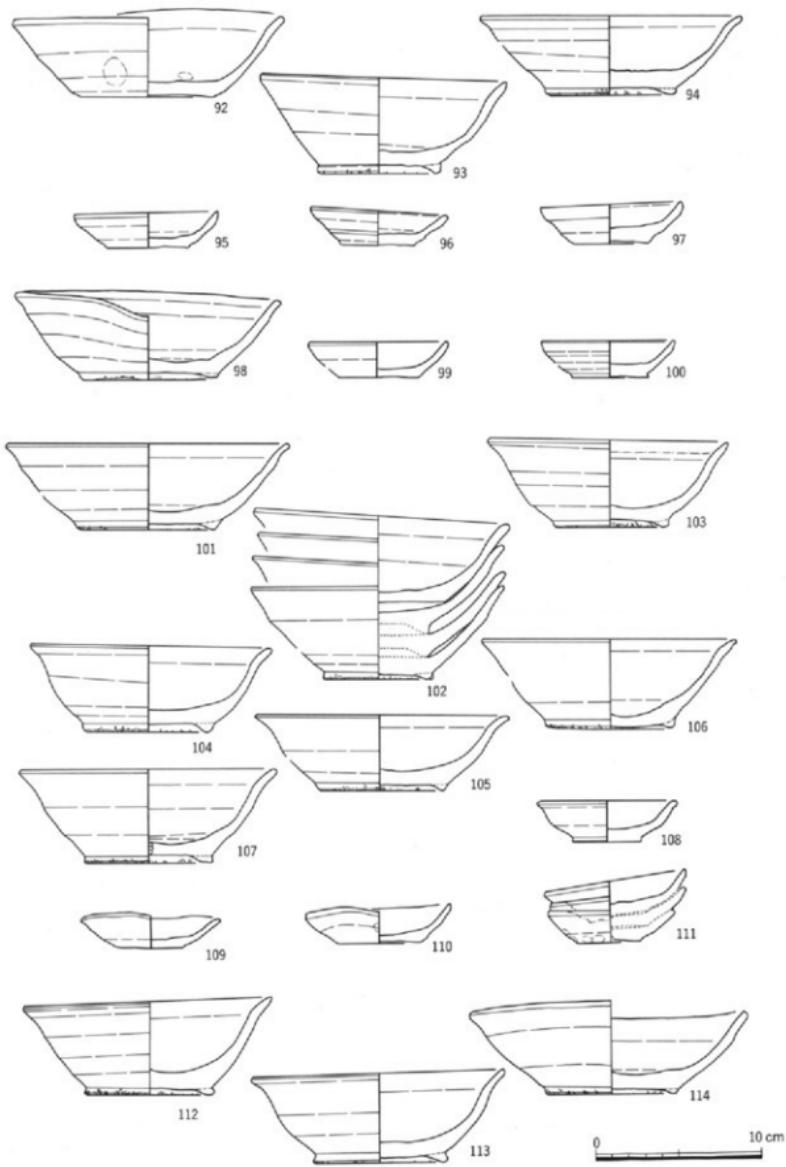
第26図 遺物実測図②



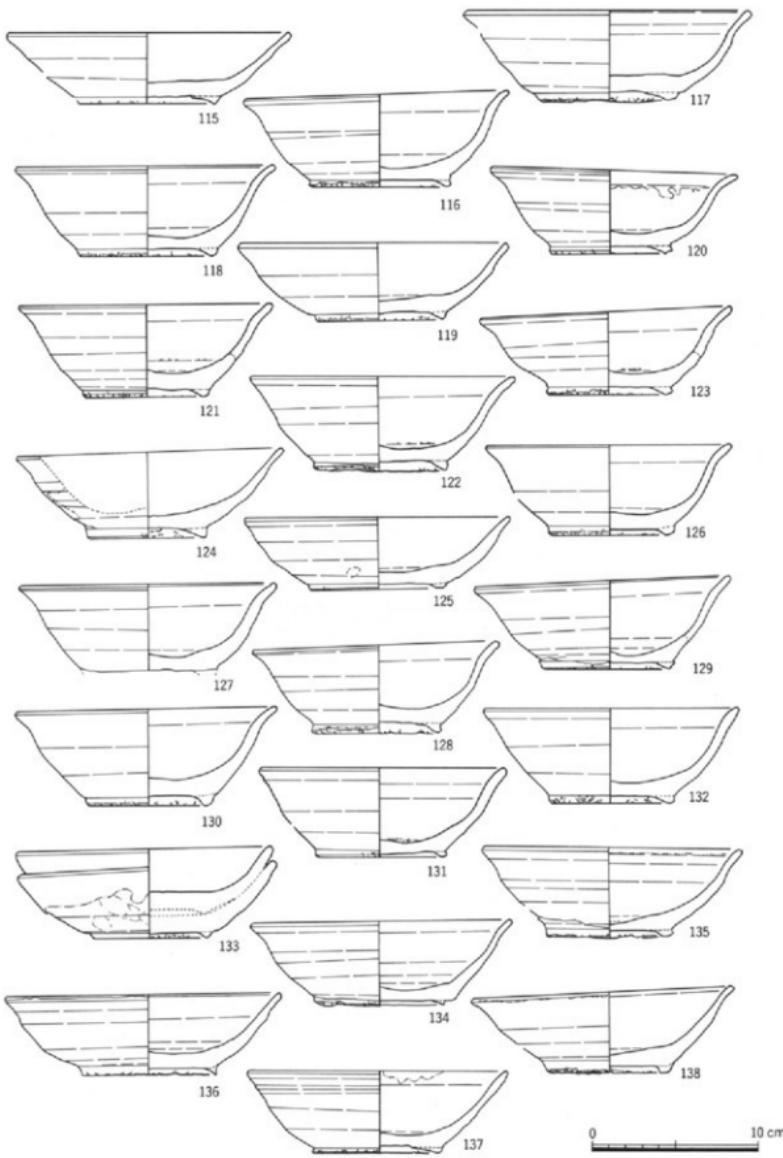
第 27 図 遺物実測図③



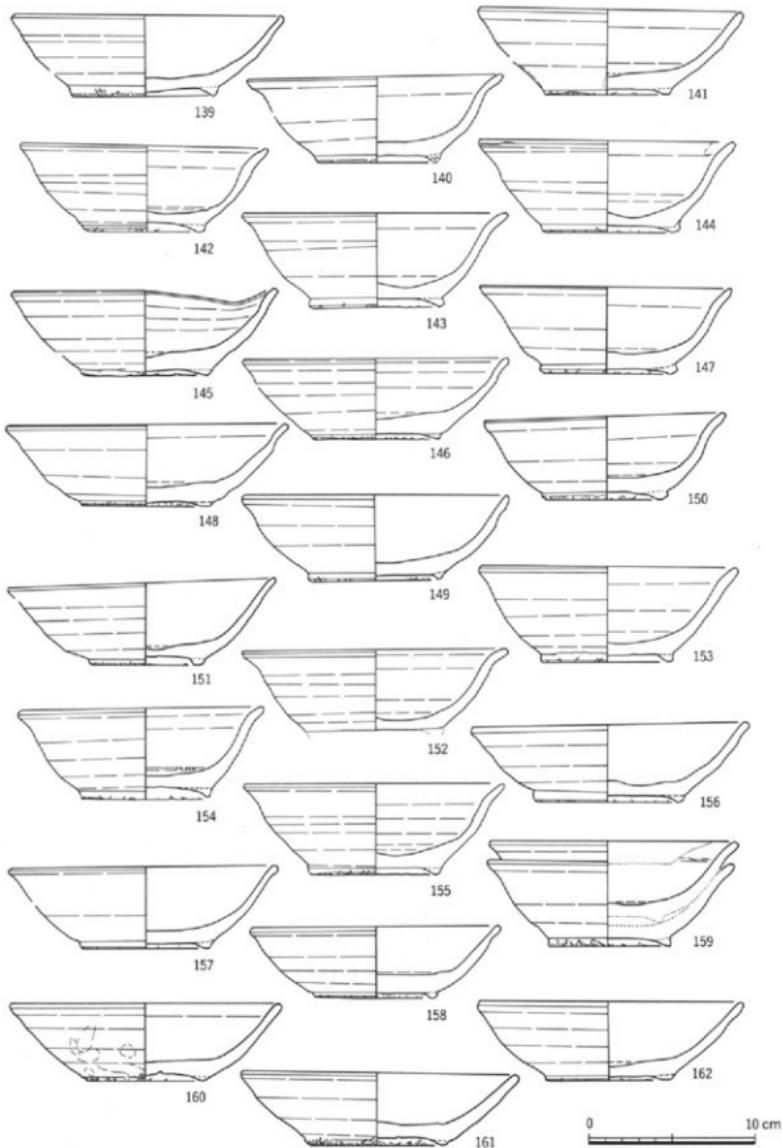
第28図 遺物実測図④



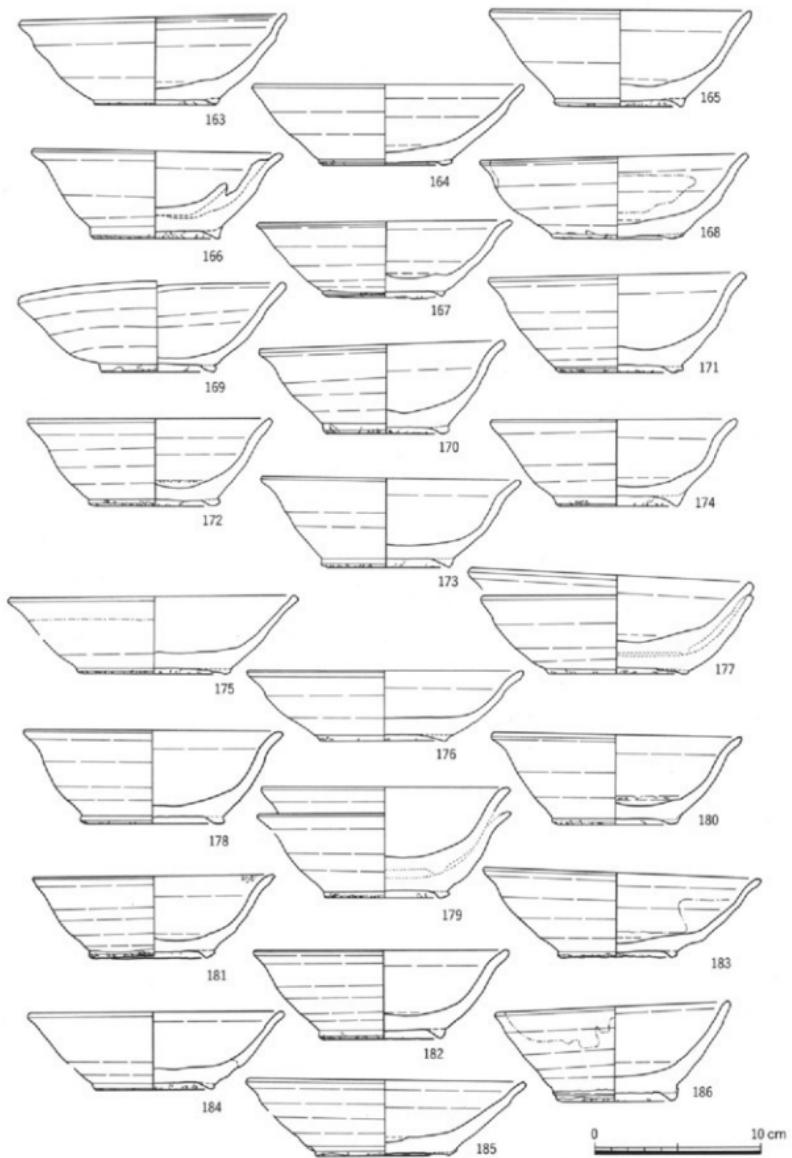
第29図 遺物実測図⑤



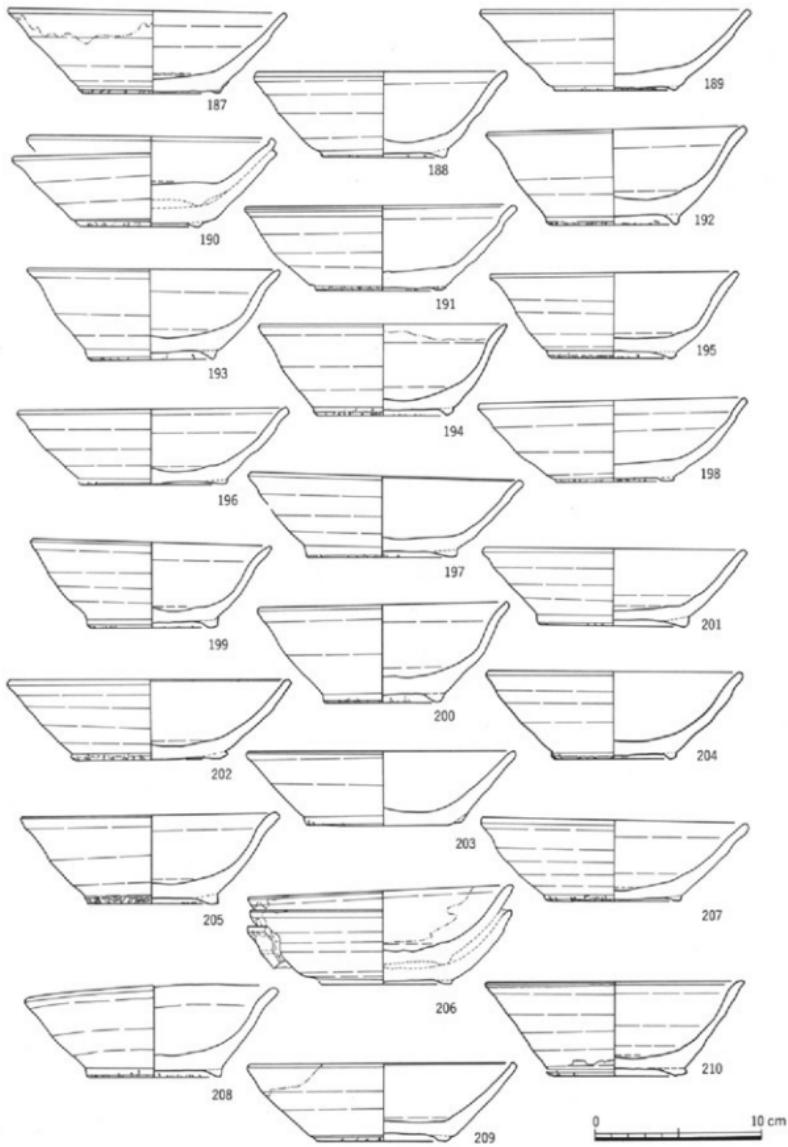
第30図 遺物実測図⑤



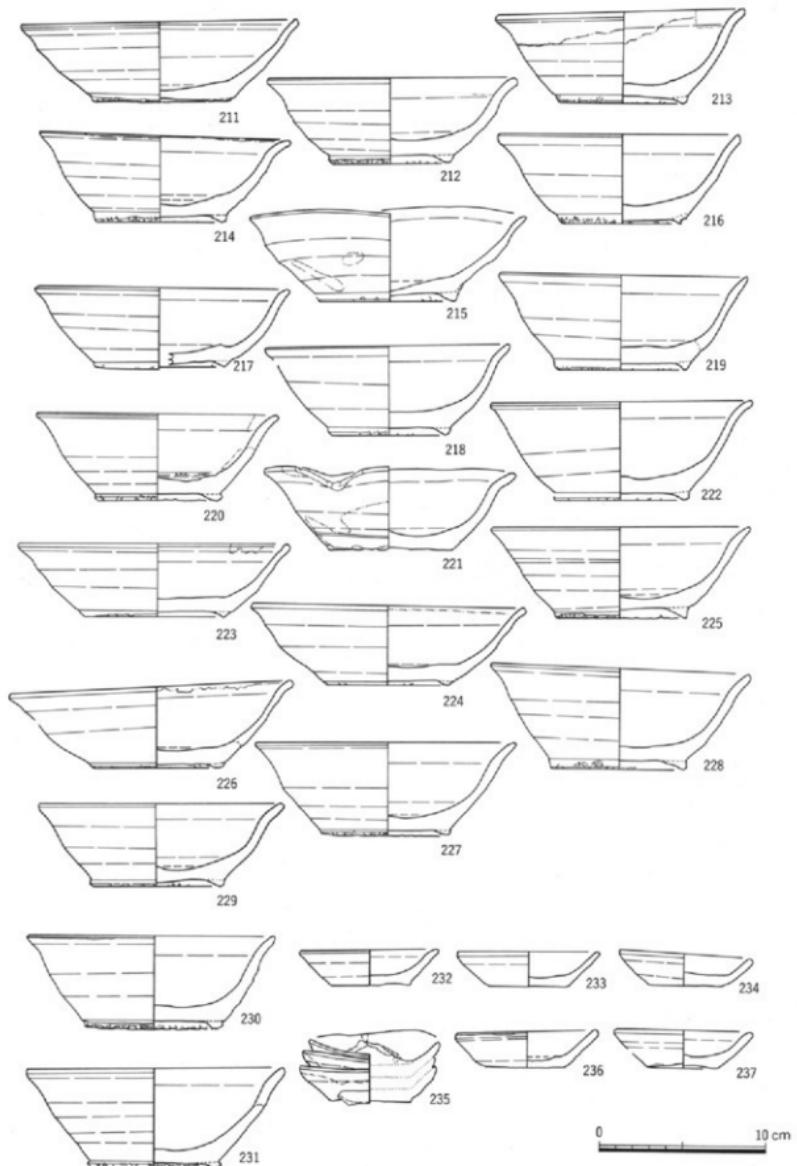
第31図 遺物実測図⑦



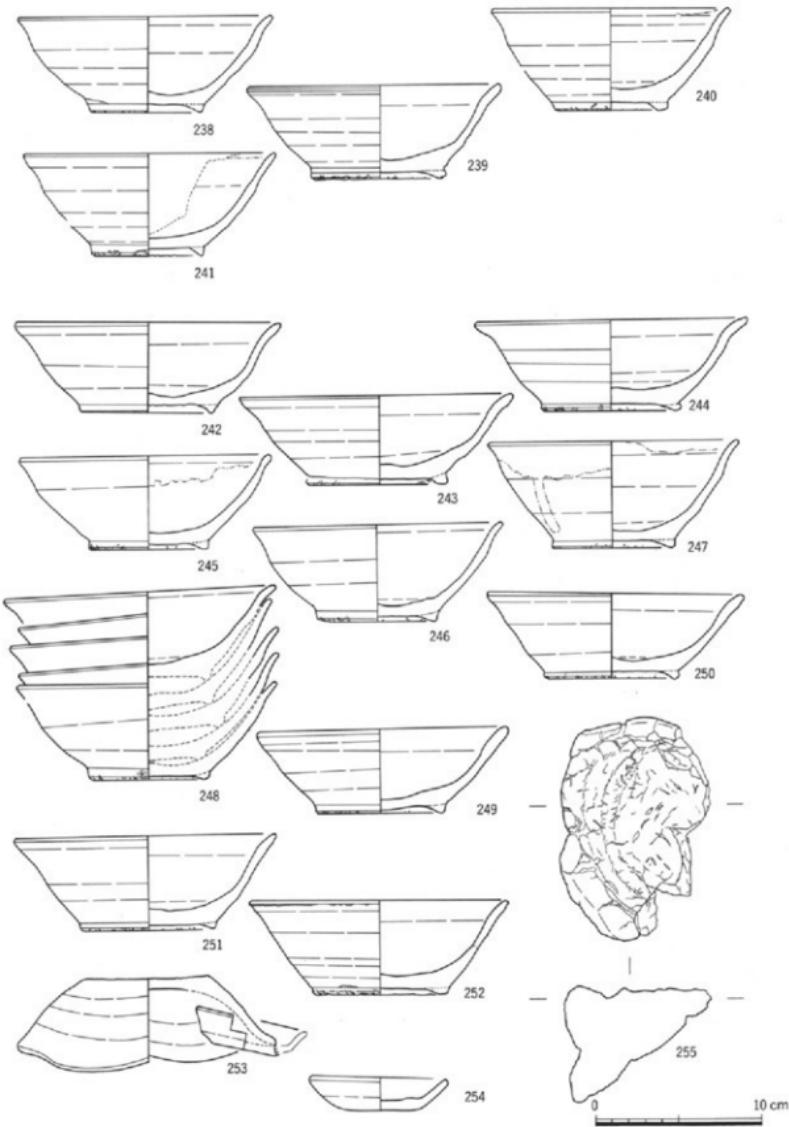
第32図 遺物実測図⑧



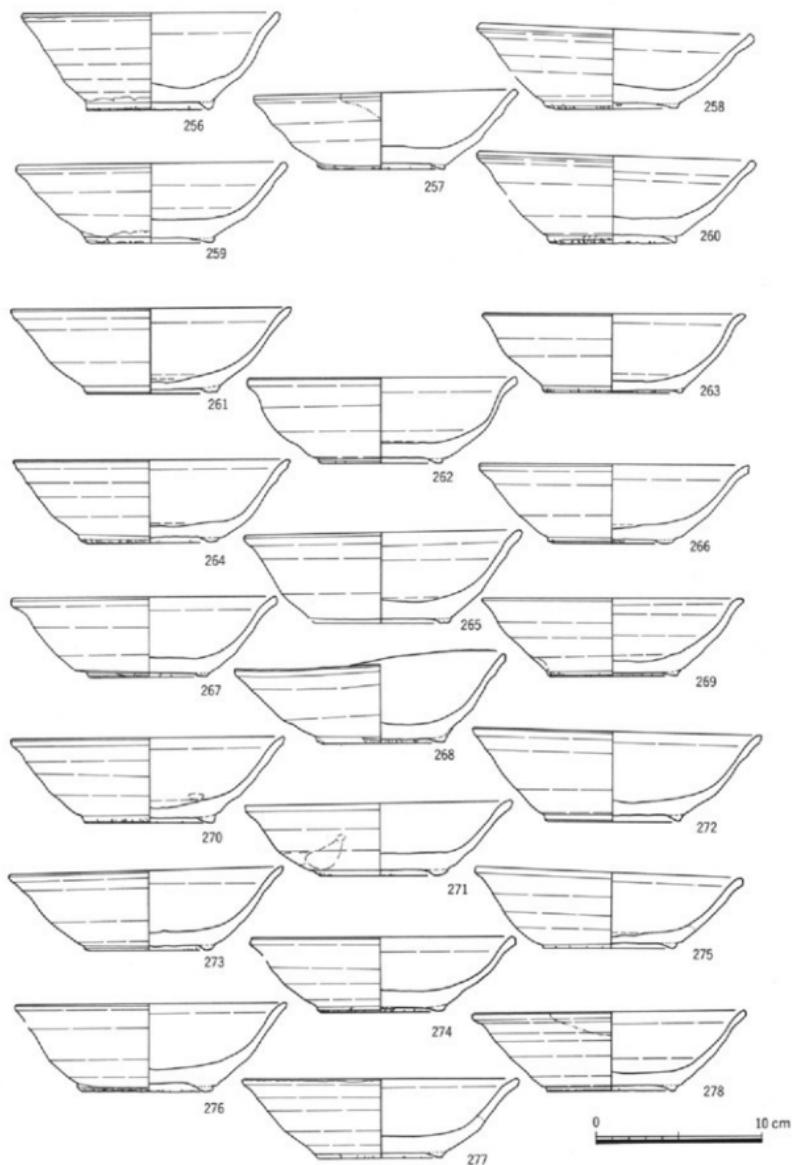
第33図 遺物実測図⑨



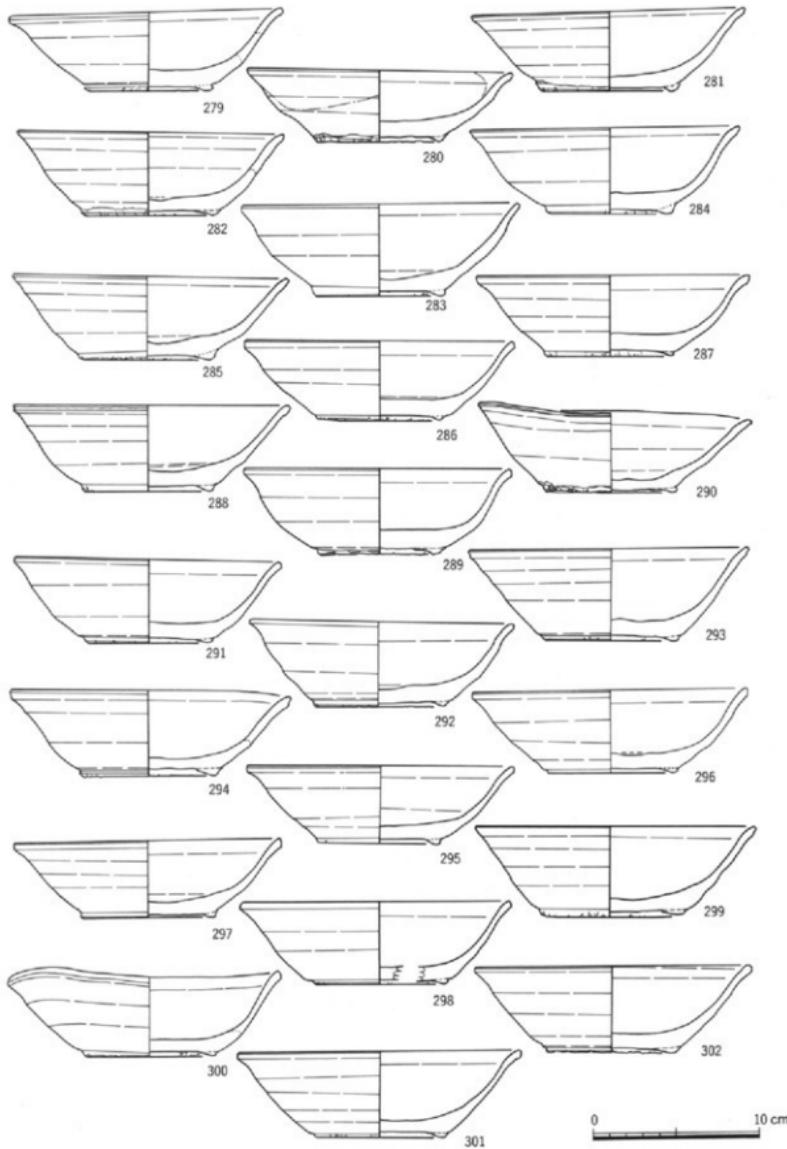
第34図 遺物実測図②



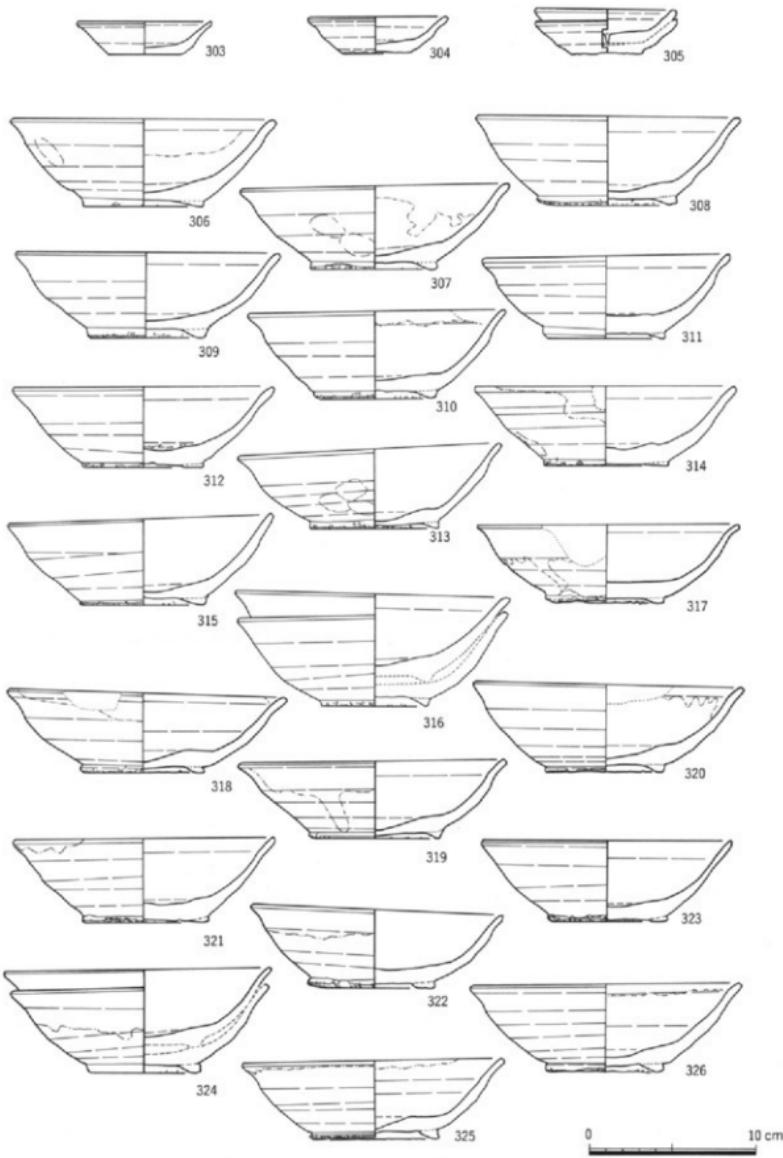
第35図 遺物実測図①



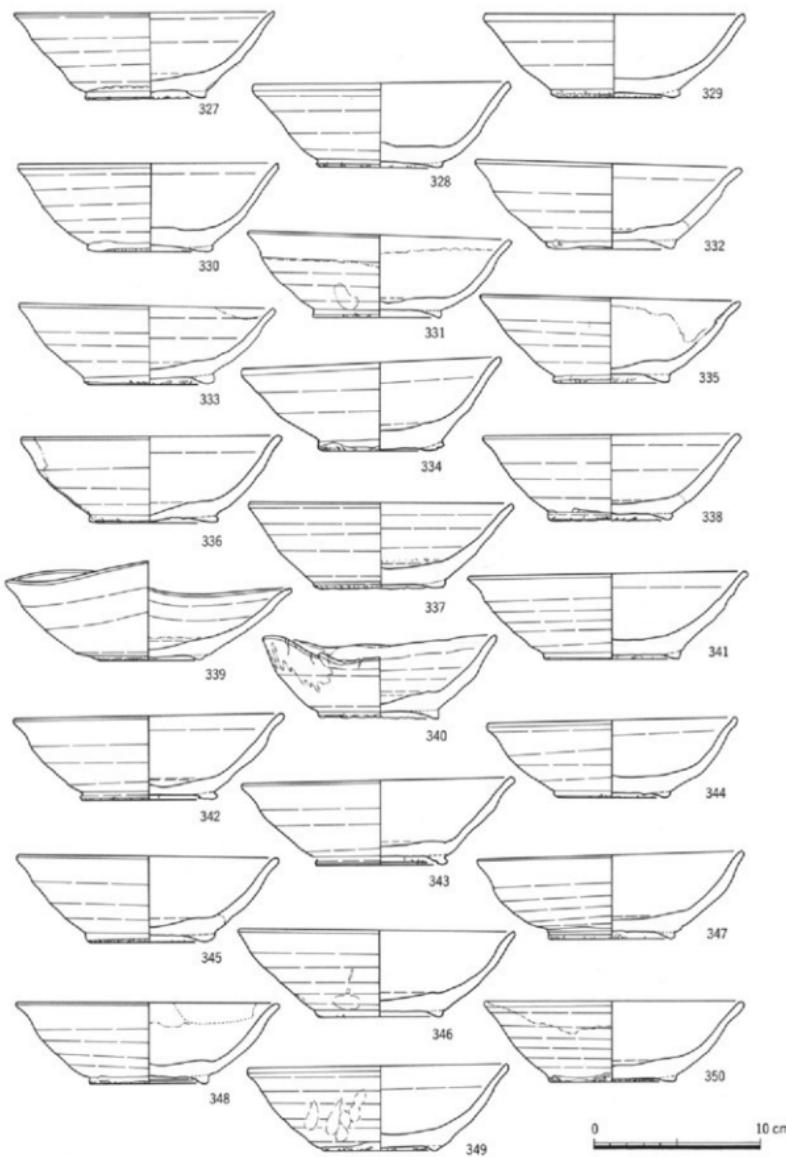
第36図 遺物実測図②



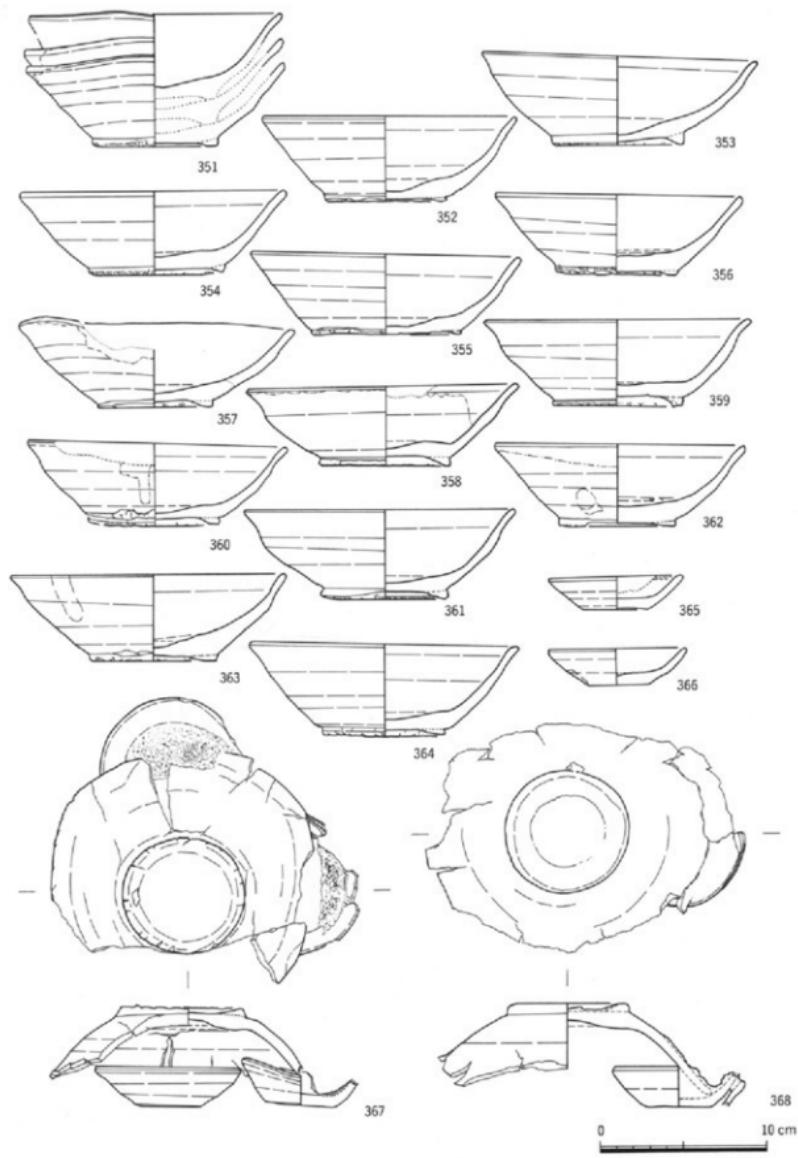
第37図 遺物実測図



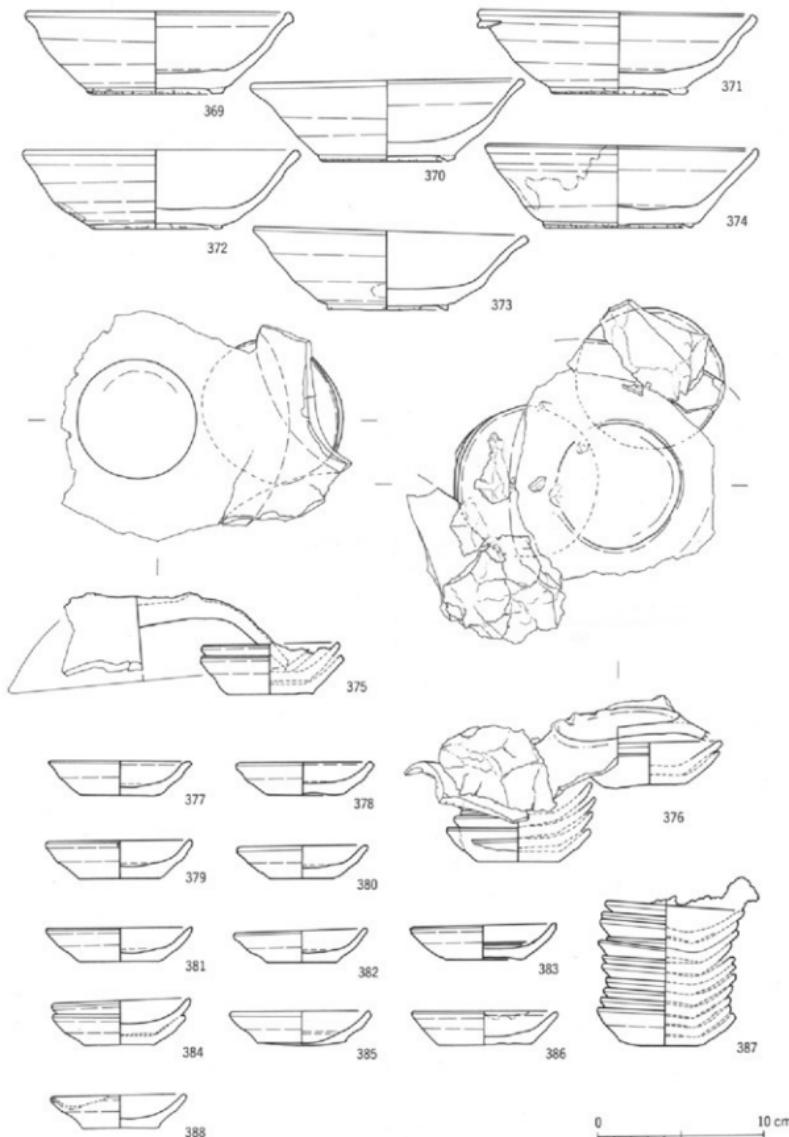
第38図 遺物実測図⑭



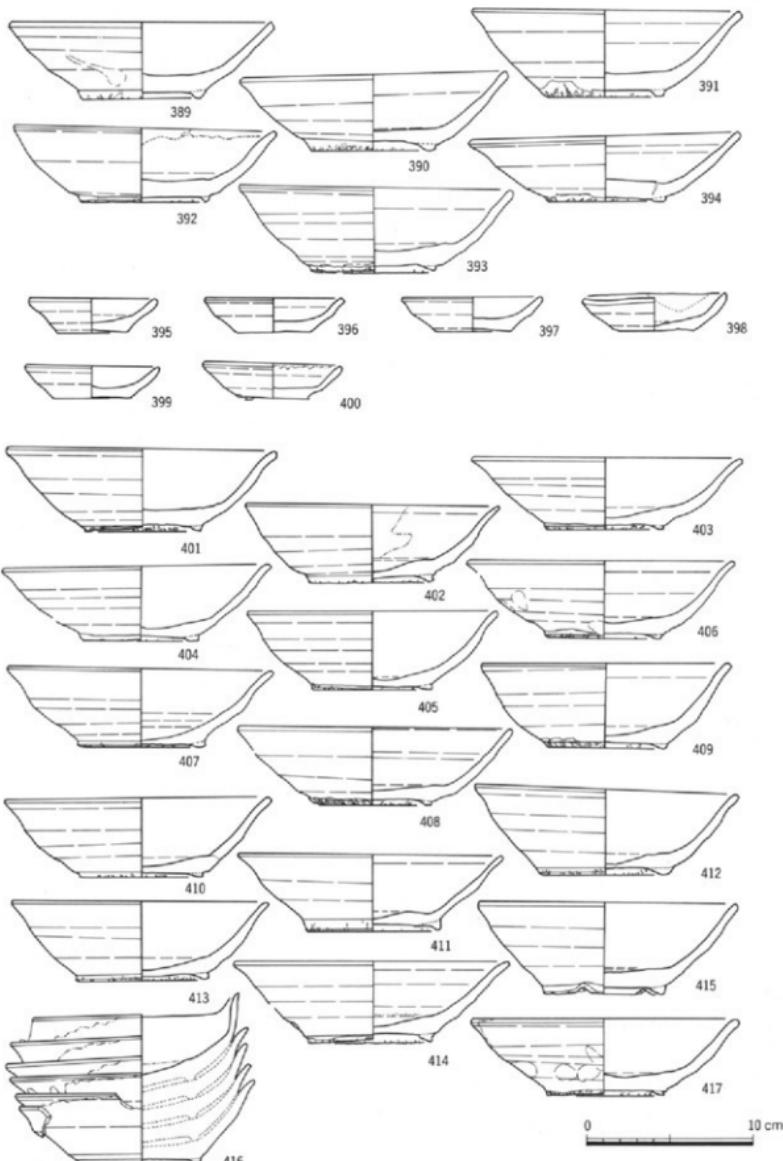
第39図 遺物実測図抄



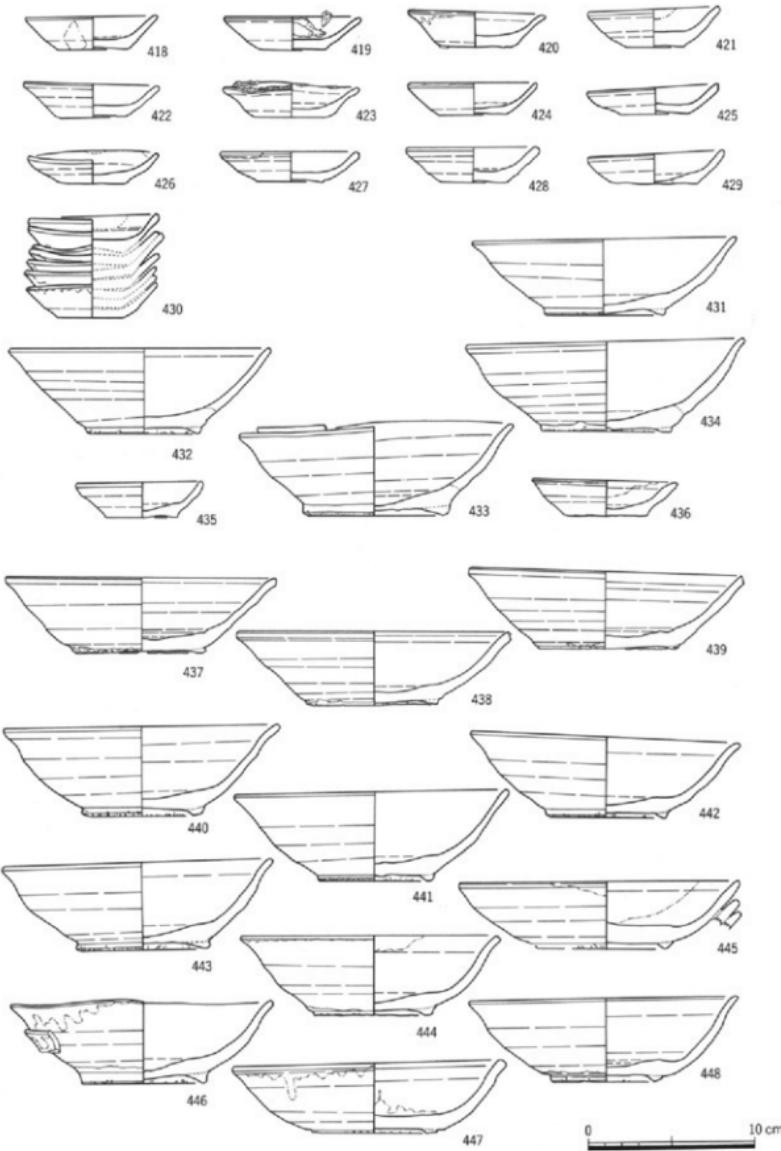
第40図 遺物実測図⑯



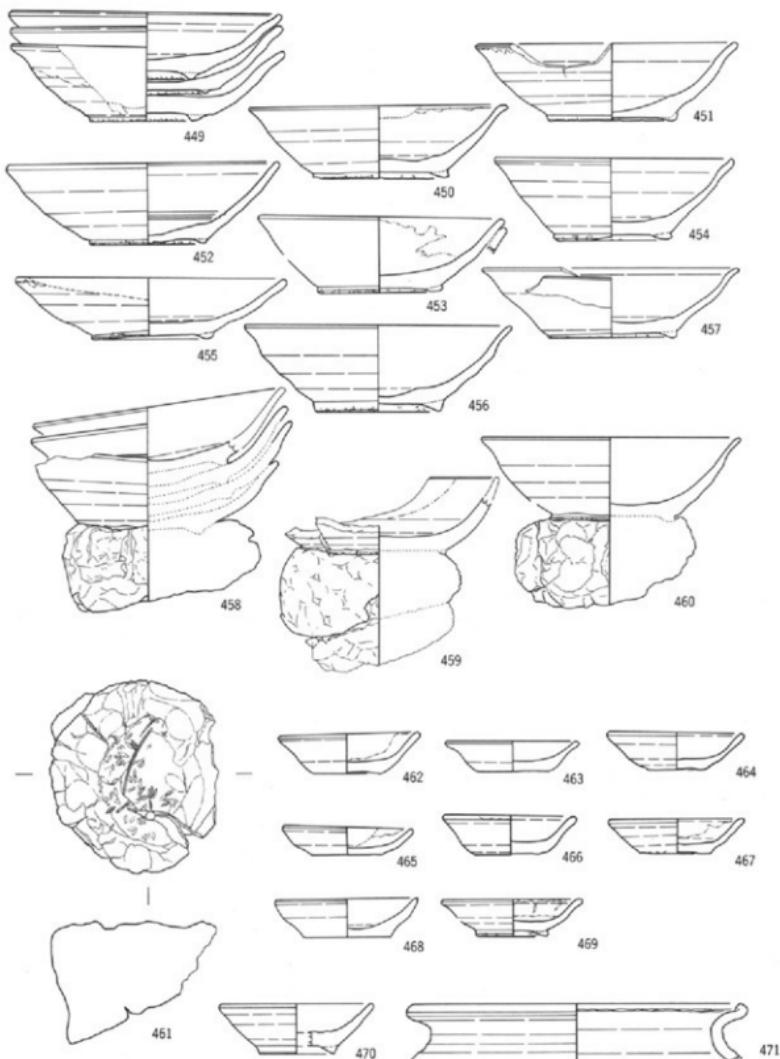
第41図 遺物実測図①



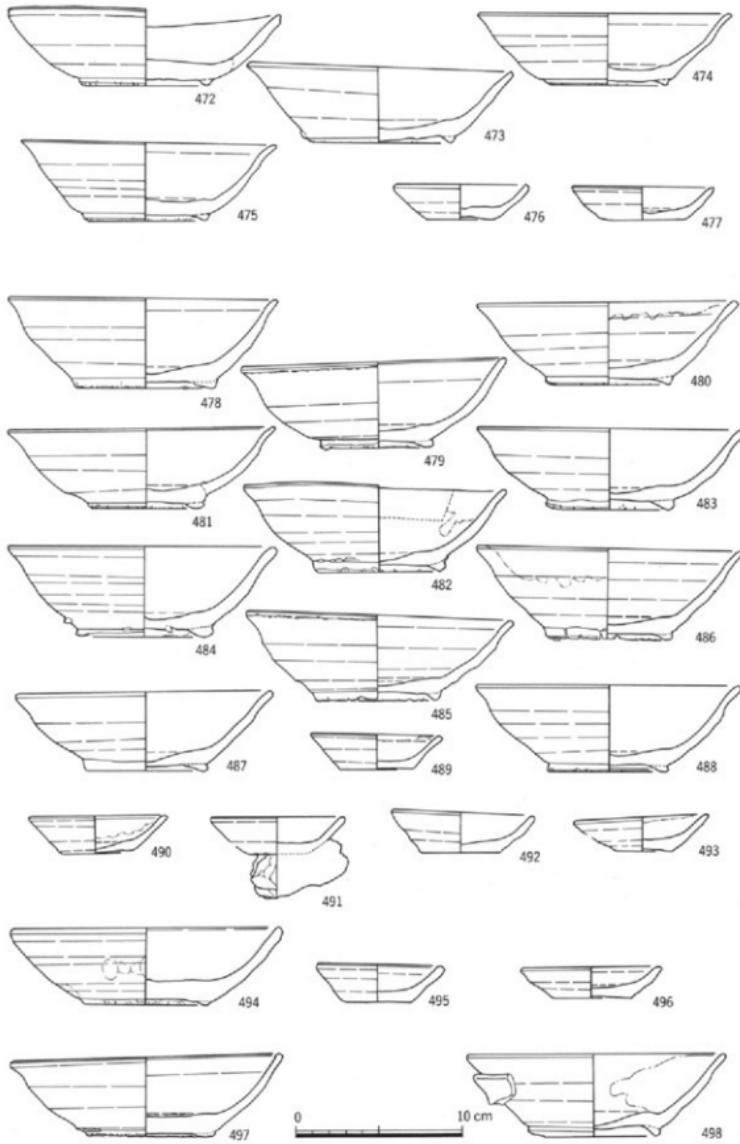
第42図 遺物実測図⑫



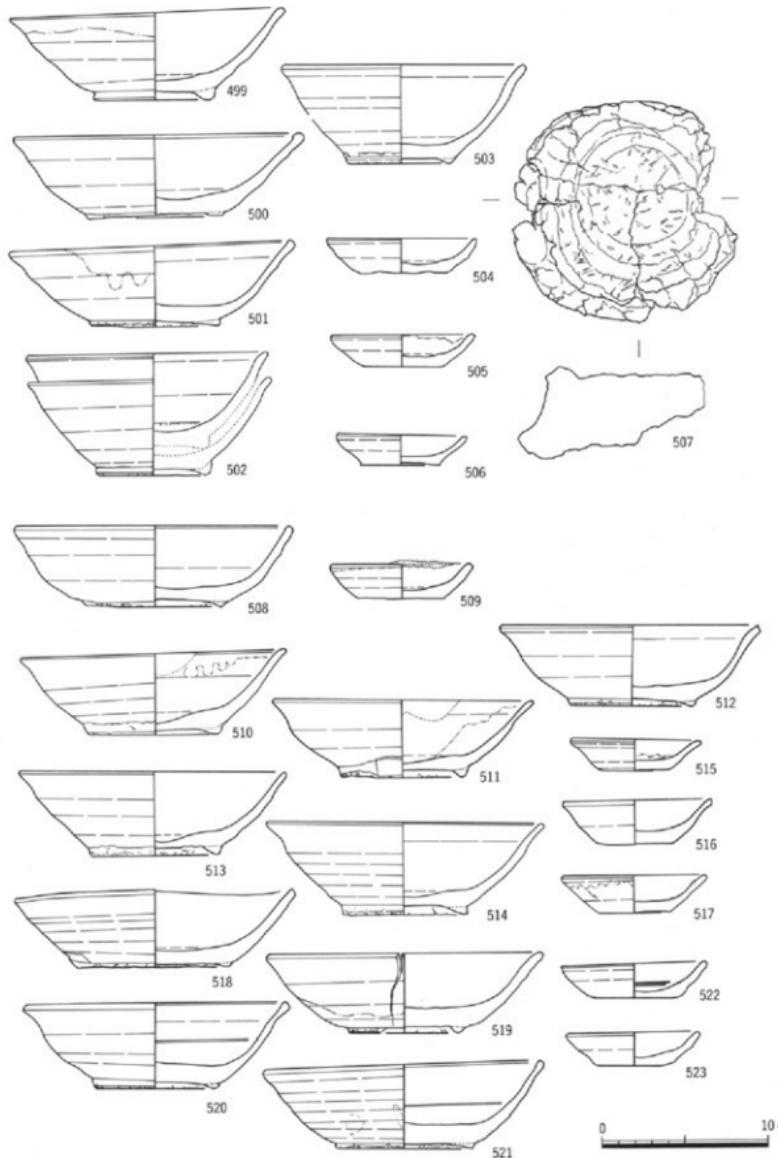
第43図 遺物実測図②



第44図 遺物実測図分



第45図 遺物実測図②



第46図 遺物実測図(2)

遺物 番号	遺標	焼成	新樹	器形	口縁	見込	釋 底	外底	器高 (cm)	底径 (cm)	口徑K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容 量 (cc)	備 考	登録番号
1 SY01		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.7	16.3	4.8	3.9	V7	488.8	E-1		
2 SY01		良好	陶	1 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.1	7.8	16.1	8.0	3.6	V3	441.5	E-2		
3 SY01		良好	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.3	8.1	14.8	7.0	4.3	V1	411.5	E-3		
4 SY01		良好	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.1	14.9	2.2	4.2	V6	421.9	E-4		
5 SY01		良好	陶	1 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.8	15.2	4.0	4.3	V7	479.6	E-5		
6 SY01		良好	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.3	7.0	14.7	4.0	4.1	V6	409.8	E-6		
7 SY01		良好	陶	1 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.6	15.0	9.0	3.5	V1	400.8	E-7		
8 SY01		平鏡	陶	1 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.3	15.3	2.4	4.2	V6	434.4	E-8		
9 SY01		良好	陶	1 C	橢ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.5	14.8	8.0	3.2	V3	346.6	E-9		
10 SY01		良好	陶	2 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.7	8.4	16.8	7.6	3.8	V3	486.3	E-10		
11 SY01		良好	陶	2 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.1	7.6	15.9	7.0	3.8	V5	464.7	E-11		
12 SY01		不良	陶	2 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.8	7.8	15.1	4.0	4.6	V6	491.7	E-12		
13 SY01		不良	陶	2 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.9	7.6	15.4	4.8	4.7	V6	534.6	E-13		
14 SY01		良好	陶	3 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.5	8.2	15.4	6.0	4.8	V1	448.3	E-14		
15 SY01		良好	陶	3 C	橢ナメ	有	直切後ナメ	(6.1)	7.3							E-15	
16 SY01		良好	陶	3 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.8	15.8	7.2	4.0	V3	454.2	E-16		
17 SY01		良好	陶	3 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.9	15.2	6.4	4.2	V4	448.6	E-17		
18 SY01		平鏡	陶	3 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.7	(7.4)	15.7	2.0	4.6	V6	503.5	E-18		
19 SY01		平鏡	陶	3 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.6	(8.0)	15.6	8.0	4.3	V1	454.9	E-19		
20 SY02		良好	陶	1 B	橢ナメ						14.7	6.8	3.1	V5	369.5	E-20	
21 SY02		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.9	7.5							E-20	
22 SY02		平鏡	陶	1 A	橢ナメ	有	直切後ナメ	4.4	7.9	16.5	7.8	3.3	V6	450.5	E-21		
22 SY02		良好	陶	1 B	橢ナメ											E-22	
22 SY02		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ									E-22	
22 SY02		良好	陶	B	圓ナメ											E-22	
22 SY02		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	(4.6)	7.0							E-22	
23 SY02		良好	陶	1 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.6	7.6	16.0	8.0	3.3	V5	424.1	E-23		
24 SY02		平鏡	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.7	7.3	16.5	2.2	3.3	V5	429.4	E-24		
25 SY02		良好	陶	2 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	6.4	6.6	15.1	5.2	5.2	V3	487.5	E-25		
26 SY02		良好	陶	3 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.6	6.7	15.6	8.0	3.2	V3	374.1	E-26		
27 SY02		良好	陶	3 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.2	15.8	6.6	3.9	V3	427.4	E-27		
28 SY02		良好	陶	1 B	圓ナメ	無	直切後ナメ	2.3	4.4	7.9	4.6	1.5	V2	47.1	E-28		
29 SY02		平鏡	陶	2 A	圓ナメ	無	直切後	2.3	5.2	8.3	1.2	1.7	V6	49.5	E-29		
30 SY02		良好	陶	2 C	圓ナメ	無	直切後	2.1	4.7	7.6	3.6	1.4	V6	40.3	E-30		
31 SY02		平鏡	陶	2 A	圓ナメ	無	直切後	2.3	5.4	8.6	4.8	1.3	V2	47.1	E-31		
32 SY02		良好	陶	D	圓ナメ	無	直切後ナメ	1.8	5.6	8.5	5.0	1.1	V2	40.2	E-32		
33 SY02		良好	陶	E	圓ナメ	無	直切後ナメ	2.3	4.5	8.5	5.6	1.3	V2	51.5	E-33		
34 SY02 JK?		不良	陶	1 E	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.6	6.7	16.1	8.2	3.4	V2	498.1	E-34		
35 SY02 JK?		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.7	16.1	8.0	3.3	V2	390.5	E-35		
36 SY02 JK?		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.5	7.1	16.2	7.6	3.2	V3	386.9	E-36		
37 SY02 JK?		良好	陶	1 C	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.4	7.5	14.9	8.0	3.4	V3	371.3	E-37		
38 SY02 JK?		良好	陶	1 A	圓ナメ	無	直切後ナメ	5.2	6.6	15.7	8.0	3.7	V4	451.1	E-38		
39 SY02 JK?		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後	4.8	6.8	16.2	8.4	3.4	V4	444.6	E-39		
40 SY02 JK?		良好	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.2	16.1	8.4	3.8	V3	506.5	E-40		
41 SY02 JK?		良好	陶	1 A	橢ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.7	15.5	7.6	3.7	V3	446.3	E-41		
42 SY02 JK?		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.3	15.8	6.6	3.7	V3	439.3	E-42		
43 SY02 JK?		良好	陶	2 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.2	6.9	14.8	6.8	4.0	V6	450.2	E-43		
44 SY02 JK?		良好	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.8	6.3	15.8	7.2	3.2	V5	387.4	E-44		
45 SY02 JK?		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.8	7.0	15.6	3.2	4.9	V6	431.9	E-45		
46 SY02 JK?		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	5.0	8.0	16.1	8.4	3.8	V2	462.6	E-46		
47 SY02 JK?		良好	陶	C	橢ナメ	有	直切後ナメ	4.4	8.0	15.8	8.0	3.6	V3	429.1	E-47		
48 SY02 JK?		良好	陶	1 C	橢ナメ	有	直切後ナメ	4.4	7.8	16.1	7.4	3.3	V3	390.5	E-48		
49 SY02 JK?		良好	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.8	7.7	15.6	9.4	3.0	V4	390.8	E-49		
50 SY02 JK?		良好	陶	1 A	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.4	6.5	15.3	9.0	3.3	V4	408.3	E-50		
51 SY02 JK?		良好	陶	1 B	圓ナメ	有	直切後ナメ	4.8	6.7	15.6	1.6	4.2	V6	444.4	E-51		
52 SY02 JK?		良好	陶	1 A	橢ナメ	有	直切後ナメ									E-52	

第2表 第1次調査区 遺物観察表①

遺物番号	遺構	組成	器種	器形	口縁	底足	幅	外高	裏高 (cm)	径深 (cm)	口徑× 底径 (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容積 (cc)	備考	登録番号	
52 SY02床下	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	(4.9)	7.0									E-52	
53 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.7	7.0	16.2	8.8	3.5	V4	467.1				E-53	
54 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後	4.8	7.2	16.4	9.4	3.6	V2	482.1				E-54	
55 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後	4.9	6.7	14.9	2.6	4.2	V6	416.1				E-55	
56 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後	4.8	7.6	15.5	8.8	3.7	V4	461.6				E-56	
57 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後	5.2	6.2	14.6	6.2	3.9	V7	431.9				E-57	
58 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.5	6.9	16.1	8.4	2.8	V7	379.8				E-58	
59 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.7	7.4	16.0	8.0	3.2	V3	388.7				E-59	
60 SY02床下	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後	4.6	7.5	15.9	8.8	3.3	V5	437.4				E-60	
61 SY02床下	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.7	7.3	16.1	8.4	3.4	V4	440.3				E-61	
62 SY02床下	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後			15.9	7.2	3.4	V4	406.8				E-62	
63 SY02床下	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.9	7.2									E-63	
64 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.0	6.7	15.9	8.0	3.6	V4	447.9				E-64	
65 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.7	6.6	15.9	8.8	3.2	V4	415.0				E-65	
66 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.3	6.4	16.3	8.0	3.6	V3	449.9				E-66	
67 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.4	7.3	16.2	7.2	3.3	V5	416.7				E-67	
68 SY02床下	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.2	16.0	8.0	3.7	V6	491.5				E-68	
69 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.2	15.9	6.8	3.9	V5	423.5				E-69	
70 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.1	6.4	15.7	2.0	3.9	V6	414.7				E-70	
71 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.1	6.6	14.7	2.0	4.2	V7	421.2				E-71	
72 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.3	7.7	15.9	8.0	3.3	V6	359.7				E-72	
73 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	無	素切後ナメ	5.0	7.3	15.8	2.0	3.9	V8	466.7	高台に移付管			E-73	
74 SY02床下	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.0	15.7	6.8	3.3	V7	407.6				E-74	
75 SY02床下	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.4	6.8	15.0	8.0	3.1	V3	359.0				E-75	
76 SY02床下	良好	陶	2 B	橢ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.7	15.2	5.2	3.8	V6	413.9				E-76	
77 SY02床下	良好	陶	2 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.3	7.7	15.9	8.0	3.3	V6	359.7				E-77	
78 SY02床下	良好	陶	2 A	橢ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.3	15.8	2.0	3.9	V8	466.7	高台に移付管			E-78	
79 SY02床下	良好	陶	2 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.0	15.7	6.8	3.3	V7	407.6				E-79	
80 SY02床下	良好	陶	2 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.4	16.0	4.0	3.8	V6	434.6				E-80	
81 SY02床下	良好	陶	3 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.8	7.3	16.4	8.0	3.6	V4	470.7				E-81	
82 SY02床下	良好	陶	3 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.7	8.8	15.2	8.0	3.4	V3	382.4				E-82	
83 SY02床下	良好	陶	2 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.0	7.6	15.9	6.6	3.7	V4	430.6				E-83	
84 SY02床下	良好	陶	1	圓ナメ					7.1								E-84	
85 SY02床下	良好	陶	C							7.8	3.4	1.7	V2	44.0				E-85
86 SY02	良好	陶	C													室内灰層	E-86	
87 SY02	良好	陶	2 B	圓ナメ	無	素切後ナメ	2.3	3.8	8.3	4.4	1.6	V2	52.3	室内灰層			E-87	
88 SY02	良好	陶	2 C	圓ナメ	無	素切後	2.5	4.6	8.3	0.0	2.0	V6	58.3	室内灰層			E-88	
89 SY03	良好	陶	1 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.9	7.5	15.4	7.6	3.4	V4	393.6				E-89	
90 SY03	良好	陶	1 C	圓ナメ			(4.3)		15.1	1.0	3.4	V6	325.3				E-90	
91 SY03	良好	陶	1 C				(4.3)										E-91	
92 SY03	良好	陶	1 A	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.2	7.6	16.8	8.4	3.7	V4	512.6				E-92	
93 SY03	良好	陶	2 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	4.8	7.9	16.0	8.0	3.8	V3	461.6				E-93	
94 SY03	良好	陶	2 C	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.8	6.9	14.5	5.0	4.4	V6	451.1				E-94	
95 SY03	良好	陶	3 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	(4.8)	7.2	15.6	8.0	3.3	V4	388.3				E-95	
96 SY03	良好	陶	1 C	橢ナメ	無	素切後	2.1	4.9	8.5	5.6	1.2	V2	47.5				E-96	
97 SY03	良好	陶	1 A	橢ナメ	無	素切後ナメ	2.0	4.4	8.1	4.6	1.4	V2	45.5				E-97	
98 SY03	良好	陶	1 C	橢ナメ	無	素切後ナメ	2.3	4.4	8.4	5.2	1.4	V2	51.8				E-98	
99 SY03	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	(5.0)	8.2							室内灰層	E-99		
100 SY03	良好	陶	1 C	圓ナメ	無	素切後	2.2	4.9	8.2	5.2	1.6	V2	57.4	室内灰層			E-100	
101 SY04	良好	陶	1 B	圓ナメ	有	素切後ナメ	5.2	8.0	16.7	8.0	3.7	V4	498.2				E-101	
102 SY04	良好	陶	1 C														E-102	

第3表 第1次調査区 遺物観察表②

遺物番号	遺物名	形状	器種	器形	口部	見込	外底	器高(cm)	底径(cm)	口徑(cm)	T(cm)	F(cm)	式の種類	容量(cc)	備考	登録番号
102 SY04	良好 梗	1	A													E-102
102 SY04	良好 梗	1	A													E-102
102 SY04	良好 梗	2	B	有	直切後ナメ	(5.6)	6.1									E-102
103 SY04	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.2	6.5	14.2	3.4	4.1	V7	397.4			E-103
104 SY04	良好 梗	1	A	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.1	14.3	8.0	3.8	V1	377.0			E-104
105 SY04	良好 梗	1	A	楕ナメ	有	直切後ナメ	(4.6)	7.2	15.0	7.6	3.4	V1	348.3			E-105
106 SY04	良好 梗	3	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.5	15.1	4.4	4.6	V4	446.9			E-106
107 SY04	良好 梗	3	C	楕ナメ	有	直切後ナメ	(5.6)	7.5	15.2	6.8	4.5	V1	440.1			E-107
108 SY04	良好 瓜	1	D	回ナメ	無	直切前	2.5	4.0	8.1	4.0	1.5	V4	48.1			E-108
109 SY04	良好 瓜	2	D	回ナメ	無	直切前	2.0	3.9	8.2	4.8	1.1	V2	37.3			E-109
110 SY04	良好 瓜	2	C	楕ナメ	無	直切前	2.1	4.9	8.6	5.6	1.1	V2	44.2			E-110
111 SY04	良好 瓜	3	C	回ナメ												E-111
111 SY04	良好 瓜	3	C	楕ナメ												E-111
111 SY04	良好 瓜	3	C	楕ナメ	無	直切前	1.9	3.4								E-111
112 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.6	7.4	14.6	7.1	4.5	V1	436.8			E-112
113 SY04 BK	良好 梗	1	A	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.7	15.0	8.4	4.2	V1	456.7			E-113
114 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.6								E-114
115 SY04 BK	良好 梗	1	B	回ナメ	有	直切後ナメ	4.3	8.1	16.7	9.8	2.8	V3	403.5			E-115
116 SY04 BK	良好 梗	1	C	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.5	(8.5)	15.6	8.0	4.4	V1	491.2			E-116
117 SY04 BK	良好 梗	2	B	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.5	8.2	16.7	8.6	3.9	V5	555.9			E-117
118 SY04 BK	良好 梗	2	C	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.8	15.3	8.0	4.3	V1	467.4			E-118
119 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	有	直切後ナメ	4.7	7.4	15.9	8.4	3.2	V7	432.1			E-119
120 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.3	14.5	8.0	3.6	V1	363.8			E-120
121 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.6	7.5	15.0	5.2	4.1	V6	441.9			E-121
122 SY04 BK	半楕	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.8	8.0	15.6	8.2	4.1	V1	464.8			E-122
123 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.6	14.8	8.0	3.5	V1	363.6			E-123
124 SY04 BK	良好 梗	1	B		有	直切後ナメ	5.1	6.9	15.9	2.4	3.8	V6	414.6			E-124
125 SY04 BK	良好 梗	1	A	楕ナメ	有	直切後ナメ	4.3	7.9	15.6	6.0	3.0	V2	376.9			E-125
125 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	6.8	14.5	7.2	4.0	V1	378.2			E-126
127 SY04 BK	半楕	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	6.2	15.2	7.6	3.9	V1	406.9			E-127	
128 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.3	7.8	14.5	8.2	3.8	V1	390.4			E-128
129 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.3	7.7	15.2	6.2	4.0	V4	423.3			E-129
130 SY04 BK	良好 梗	1	C	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.8	7.0	15.4	7.6	4.3	V1	456.9			E-130
131 SY04 BK	良好 梗	1	B	回ナメ	有	直切後ナメ	(5.4)	7.4	14.5	2.8	4.5	V6	433.1			E-131
132 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.7	7.0	15.2	3.2	4.5	V6	474.1			E-132
133 SY04 BK	良好 梗	1	A													E-133
133 SY04 BK	良好 梗	1	B		有	直切後ナメ	4.3	6.8								E-133
134 SY04 BK	良好 梗	1	B	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.8	15.3	7.2	4.1	V2	425.2			E-134
135 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.6	15.2	9.0	4.6	V6	468.3			E-135
136 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	有	直切後ナメ	4.8	8.1	16.4	6.4	3.4	V6	434.4			E-136
137 SY04 BK	良好 梗	1	A	楕ナメ	有	直切後ナメ	4.9	7.8	15.3	6.3	3.9	V4	419.3			E-137
138 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.4	15.6	8.0	3.2	V3	374.1			E-138
139 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	有	直切後ナメ	(4.9)	8.5	15.9	7.6	3.6	V4	439.1			E-139
140 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	(5.2)	(6.9)	15.0	8.0	3.9	V1	412.6			E-140
141 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	(5.1)	7.4	15.7	2.6	3.6	V4	430.1			E-141
142 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.3	14.6	7.0	4.1	V1	384.9			E-142
143 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.6	9.1	15.7	6.8	4.4	V1	451.1			E-143
144 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.5	8.2	15.2	6.8	4.6	V1	449.9			E-144
145 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.6	15.7	8.4	3.8	V3	459.9			E-145
146 SY04 BK	良好 梗	1	B	回ナメ	有	直切後ナメ	4.8	7.7	15.7	8.2	3.2	V4	394.2			E-146
147 SY04 BK	良好 梗	1	C	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.6	15.0	3.6	4.0	V7	424.1			E-147
148 SY04 BK	良好 梗	1	A	楕ナメ	有	直切後ナメ	4.9	7.6	16.6	8.0	3.4	V4	453.4			E-148
149 SY04 BK	良好 梗	1	C	楕ナメ	有	直切後ナメ	5.1	7.6	15.8	8.6	3.5	V6	467.2			E-149
150 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	6.9	14.3	7.6	3.7	V1	355.0			E-150
151 SY04 BK	良好 梗	1	A	回ナメ	有	直切後ナメ	(4.9)	6.4	16.0	9.4	3.3	V3	436.9			E-151
152 SY04 BK	良好 梗	1	C	回ナメ	無	直切後ナメ			15.7	7.2	4.3	V1	455.0	高台倒壊		E-152

第4表 第1次調査区 遺物観察表③

遺物 番号	通標	種類	形態	口絞	見込	胸張	外瓶	器高 (cm)	底径 (cm)	口徑 K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備考	登録番号
153	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.8	7.9	15.2	2.0	4.6	V6	475.5	E-153
154	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.5	7.7	14.5	2.2	4.6	V1	328.2	E-154
155	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.5	7.7	15.4	2.8	3.4	V1	396.8	E-155
156	SY04床下?	良好	瓶	I	B	横ナメ	有	赤切後ナメ	4.6	8.5	16.5	8.0	3.4	V4	449.0	E-156
157	SY04床下?	良好	瓶	I	B	横ナメ	有	赤切後ナメ	4.9	7.5	15.8	3.2	3.9	V7	444.6	E-157
158	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.3	7.0	14.7	2.8	2.9	V2	321.1	E-158
159	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ			14.8	2.8	3.8	V6	367.5	E-159
160	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.1	7.1						織着
161	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.7	6.9	16.0	8.0	3.4	V3	413.0	E-160
162	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.4	8.0	16.3	7.4	3.1	V3	374.0	E-161
163	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	7.1	15.6	7.0	3.6	V4	413.3	E-162
164	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.3	7.3	15.8	7.2	3.7	V4	438.6	E-163
165	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	7.2	16.1	7.0	3.6	V4	435.7	E-164
166	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.8	7.5	15.5	2.6	4.6	V6	508.4	E-165
167	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.2	7.3						織着
168	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ								織着
169	SY04床下?	良好	瓶	I	D	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.6	7.2	14.9	7.2	3.3	V3	342.1	E-167
170	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.4	7.0	14.6	2.4	4.1	V6	388.6	E-170
171	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.8	6.7	15.2	3.2	4.4	V6	461.5	E-171
172	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.2	7.0	14.5	6.9	4.1	V4	396.5	E-172
173	SY04床下?	良好	瓶	I	A	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.3	7.3	15.4	7.6	3.9	V1	414.4	E-173
174	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.2	7.1	14.6	9.9	2.9	V1	344.3	E-174
175	SY04床下?	良好	瓶	I	B	圓ナメ	有	赤切後ナメ	(4.6)	8.6	17.0	9.6	3.3	V2	470.3	E-175
176	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.2	7.5	16.3	9.4	2.8	V3	380.6	E-176
177	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	(4.2)							織着
178	SY04床下?	良好	瓶	I	B	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.7	8.2						織着
179	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.6	7.8	15.4	9.2	3.6	V1	433.2	E-178
180	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.2	7.1	14.6	9.9	2.9	V1	344.3	E-179
181	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.4	6.8	14.7	7.6	3.9	V3	406.5	E-180
182	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.0	7.6	14.3	2.8	3.9	V2	371.8	E-181
183	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.3	7.5	15.0	2.8	4.0	V1	272.2	E-182
184	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.1	7.1	16.4	8.4	3.6	V3	464.9	E-183
185	SY04床下?	良好	瓶	I	B	横ナメ	有	赤切後ナメ	4.7	7.0	15.1	7.0	3.4	V4	381.6	E-184
186	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	8.5	16.5	7.6	3.2	V3	398.1	E-185
187	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.7	7.3	13.9	2.0	4.2	V6	364.1	E-186
188	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.0	8.4	16.4	7.6	3.7	V2	437.2	E-187
189	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.1	7.2	14.8	6.4	4.2	V4	428.8	E-188
190	SY04床下?	良好	瓶	I	B	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.9	7.1	16.0	7.2	3.4	V3	421.3	E-189
191	SY04床下?	良好	瓶	I	B	圓ナメ	有	赤切後ナメ			14.5	8.6	2.7	V3	295.2	E-190
192	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	4.4	(7.2)						織着
193	SY04床下?	良好	瓶	I	B	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.7	7.3	13.9	2.0	4.2	V6	464.3	E-191
194	SY04床下?	良好	瓶	I	B	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.0	8.4	16.4	7.6	3.7	V2	451.3	E-192
195	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.9	7.3	15.0	3.2	4.1	V6	414.8	E-193
196	SY04床下?	良好	瓶	I	A	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.5	7.7	14.7	9.4	3.4	V1	391.5	E-194
197	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.1	7.2	14.7	7.8	3.9	V1	395.0	E-195
198	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	無	赤切後ナメ	4.6	(8.6)	16.1	7.0	3.7	V3	427.8	高台に砂付替
199	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.1	7.4	16.1	9.0	3.4	V2	431.8	E-196
200	SY04床下?	良好	瓶	I	C	横ナメ	有	赤切後ナメ	4.9	8.8	16.0	3.6	4.2	V6	451.3	E-197
201	SY04床下?	良好	瓶	I	B	圓ナメ	有	赤切後ナメ	5.1	7.3	14.3	3.2	4.2	V6	393.0	E-198
202	SY04床下?	良好	瓶	I	E	横ナメ	有	赤切後ナメ	5.9	6.9	14.9	7.2	4.4	V3	456.1	E-199
203	SY04床下?	良好	瓶	I	B	横ナメ	有	赤切後ナメ	4.6	8.6	15.6	7.6	3.4	V4	402.0	E-200
204	SY04床下?	良好	瓶	I	A	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	8.6	16.8	6.8	3.7	V3	490.5	E-201
205	SY04床下?	良好	瓶	I	C	圓ナメ	有	赤切後ナメ	4.5	9.3	15.9	7.2	3.7	V2	406.0	E-202

第5表 第1次調査区 遺物観察表④

遺物 番号	遺構	焼成	器形	口縁	見込	腹深	外底	底高 (cm)	底径 (cm)	口径 (cm)	T (cm)	F (cm)	式の種類	容量 (cc)	備考	登録号
204 SY04 BK下	良好	陶	2 C	縦ナメ	有	直切後ナメ	5.3	6.8	15.1	4.0	4.1	V6	429.9	E-294		
205 SY04 BK下	良好	陶	2 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.3	7.5	15.2	3.0	4.1	V6	422.6	E-205		
206 SY04 BK下	良好	陶	A	回ナメ					15.4	3.6	3.6	V7	390.2	織着	E-206	
206 SY04 BK下	良好	陶	2 A	無	有	直切後ナメ		(7.9)						織着	E-296	
207 SY04 BK下	良好	陶	2 C	回ナメ	有	直切後ナメ	4.9	8.3	15.8	6.8	3.7	V3	419.3	E-207		
208 SY04 BK下	良好	陶	2 B	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.8							E-208	
209 SY04 BK下	良好	陶	2 C	回ナメ	有	直切後ナメ	4.7	7.6	15.8	7.4	3.5	V2	386.1	E-209		
210 SY04 BK下	平底	陶	2 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.7	8.4	15.3	3.0	4.6	V6	481.1	E-210		
211 SY04 BK下	良好	陶	2 C	横ナメ	有	直切後ナメ	4.8	8.2	16.4	7.6	3.6	V3	443.6	E-211		
212 SY04 BK下	良好	陶	3 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.6	14.7	8.4	3.8	V1	404.1	E-212		
213 SY04 BK下	良好	陶	3 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.3	14.8	7.2	4.3	V1	418.4	E-213		
214 SY04 BK下	良好	陶	3 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.9	14.8	8.0	3.6	V1	374.0	E-214		
215 SY04 BK下	良好	陶	3 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.1	(8.1)							E-215	
216 SY04 BK下	良好	陶	3 C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.6	14.2	2.0	4.3	V6	388.9	E-216		
217 SY04 BK下	良好	陶	3 D	回ナメ	有	直切後ナメ	4.9	7.8	15.0	8.4	3.6	V4	417.8	E-217		
218 SY04 BK下	良好	陶	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	6.8	14.4	9.0	3.2	V1	347.7	E-218		
219 SY04 BK下	良好	陶	3 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.7	7.5	14.7	5.2	4.3	V5	431.4	E-219		
220 SY04 BK下	良好	陶	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.6	14.3	4.8	4.0	V4	357.4	E-220		
221 SY04 BK下	良好	陶	3 C	回ナメ	無	直切後			7.5						E-221	
222 SY04 BK下	良好	陶	3 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.9	(7.7)	15.5	7.6	4.6	V1	493.2	E-222		
223 SY04 BK下	良好	陶	3 B	横ナメ	有	直切後ナメ	4.4	8.4	16.1	7.8	3.3	V5	424.2	E-223		
224 SY04 BK下	良好	陶	3 B	回ナメ	有	直切後ナメ	4.8	7.3	16.2	8.4	3.4	V4	444.6	E-224		
225 SY04 BK下	良好	陶	3 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.9	15.4	7.2	4.2	V1	432.3	E-225		
226 SY04 BK下	良好	陶	3 C	回ナメ	有	直切後ナメ	(4.9)	7.5	16.8	8.6	3.6	V3	487.7	E-226		
227 SY04 BK下	良好	陶	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.6	7.9	15.5	8.4	3.8	V1	433.7	E-227		
228 SY04 BK下	良好	陶	3 A	回ナメ	無	直切後	6.0	7.9	15.4	1.8	4.6	V7	510.7	E-228		
229 SY04 BK下	良好	陶	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.3	14.5	8.4	3.1	V1	323.7	E-229		
230 SY04	良好	陶	1 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.6	8.3	14.6	3.2	4.2	V7	426.7	織内灰層	E-230	
231 SY04	良好	陶	3 C	横ナメ	有	直切後ナメ	6.0	7.2	15.3	6.0	5.0	V3	502.0	織内灰層	E-231	
232 SY04	良好	陶	1 B	回ナメ	無	直切後	2.1	4.6	8.4	4.6	1.5	V2	51.2	E-232		
233 SY04	良好	陶	2 D	無	直切後	2.1	4.7	8.2	3.4	1.5	V3	44.2	織内灰層	E-233		
234 SY04	良好	陶	2 C	回ナメ	無	直切後	1.9	4.0	7.9	5.4	1.2	V2	42.2	E-234		
235 SY04	良好	陶	2 C	無	直切後									織着	E-235	
235 SY04	良好	陶	2 C	無	直切後ナメ	1.9	4.8							織着	E-235	
236 SY04	良好	陶	2 A	無	直切後ナメ	2.2	4.7	8.2	4.4	1.5	V2	48.2	織内灰層	E-236		
237 SY04	良好	陶	2 A	回ナメ	無	直切後	2.3	4.3	8.0	1.6	1.4	V6	38.9	織内灰層	E-237	
238 SY05	良好	陶	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.7	6.6	14.9	6.0	4.6	V4	466.1	E-238		
239 SY05	良好	陶	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.5	8.1	14.8	9.0	3.1	V2	385.6	E-239		
240 SY05	良好	陶	2 A	回ナメ	有	直切後ナメ	6.1	6.7	14.9	5.2	4.8	V4	429.4	E-240		
241 SY05	良好	陶	2 A	回ナメ	有	直切後ナメ	6.1	6.7	14.7	7.6	4.4	V3	458.7	E-241		
242 SY05	良好	陶	1 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.8	15.7	2.6	4.4	V6	482.2	E-242		
243 SY05	平底	陶	1 C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.3	(8.1)	15.7	3.6	4.2	V6	466.7	E-243		
244 SY05	良好	陶	1 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.8	16.1	7.4	4.2	V1	467.9	E-244		
245 SY05	良好	陶	1 A	横ナメ	無	直切後	5.5	6.8	14.9	2.0	4.5	V6	447.1	E-245		
246 SY05	良好	陶	1 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.8	6.9	14.8	5.8	4.7	V4	466.4	E-246		
247 SY05	良好	陶	1 A	回ナメ	有	直切後ナメ	6.4	6.9	14.9	6.0	5.3	V3	504.0	E-247		
248 SY05	良好	陶	1 C	横ナメ										織着	E-248	
248 SY05	良好	陶	1 A	無										織着	E-248	
248 SY05	良好	陶	1 A	無										織着	E-248	
248 SY05	良好	陶	1 A	無										織着	E-248	
249 SY05	良好	陶	1 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.8	6.6							E-249	
250 SY05	良好	陶	2 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.5	14.8	0.0	4.2	V6	400.1	E-250		
250 SY05	良好	陶	3 C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.1	7.4	15.2	8.4	3.8	V2	427.1	E-250		
251 SY05	平底	陶	2 A	無	直切後ナメ	5.6	7.7	15.4	5.6	4.5	V4	474.5	E-251			
252 SY05	平底	陶	2 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.7	8.0	15.3	2.0	4.5	V6	468.5	E-252		

第6表 第1次調査区 遺物観察表⑤

遺物番号	清溝	機械	面種	圓形	口縫	込込	幅員	外周	巻高 (cm)	巻径 (cm)	口径× T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備考	登録番号
253 SY05	良好	輪	3 B	回ナダ	無	未切後ナダ	4.1	7.6							織着	E-253
253 SY05	良好	輪	2 A	回ナダ	無	未切痕			3.8						織着	E-253
254 SY05	良好	輪	3 C	横ナダ	無	未切後ナダ	2.0	4.6	8.0	4.6	1.4	V2	44.7		E-254	
255 SY05															輪形角38°	E-255
256 SY05	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.8	7.6	15.3	7.0	4.8	V1	481.7		E-256	
257 SY05	良好	輪	1 C	横ナダ	有	未切後ナダ	4.6	7.7	15.6	7.5	3.3	V6	499.0		E-257	
258 SY05	良好	輪	2 C	横ナダ	有	未切後ナダ	4.8	8.0	16.1	7.2	3.7	V4	452.0		E-258	
259 SY05	良好	輪	2 B	横ナダ	有	未切後ナダ	4.7	7.7	15.9	7.8	3.4	V6	439.4		E-259	
260 SY05	半輪	輪	2 B	横ナダ	有	未切後ナダ	5.2	7.6	16.4	7.4	3.7	V4	479.4		E-260	
261 SY05床下1	良好	輪	1 A	回ナダ	無	未切後ナダ	5.1	7.8	16.4	1.6	4.4	V6	513.6	高台に砂付番	E-261	
262 SY05床下1	良好	輪	1 C	横ナダ	有	未切後ナダ	5.2	7.0	16.0	9.0	3.9	V1	486.1		E-262	
263 SY05床下1	良好	輪	1 D	回ナダ	有	未切後ナダ	4.7	8.2	15.9	7.6	4.0	V4	444.2		E-263	
264 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.0	7.4	15.9	9.6	3.8	V2	495.0		E-264	
265 SY05床下1	良好	輪	1 A	回ナダ	有	未切後ナダ	5.4	9.0	16.4	4.0	4.0	V2	497.9		E-265	
266 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	4.7	6.8	16.1	6.0	3.6	V4	417.3		E-266	
267 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	4.7	6.9	15.7	7.6	3.6	V3	414.7		E-267	
268 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.0	7.3							E-268	
269 SY05床下1	良好	輪	1 D	回ナダ	有	未切後ナダ	4.7	7.5	15.4	6.8	3.7	V4	411.8		E-269	
270 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.1	7.6	16.3	2.4	4.1	V6	473.1		E-270	
271 SY05床下1	良好	輪	1 C	横ナダ	有	未切後ナダ	4.3	7.1	15.9	9.6	3.6	V2	399.8		E-271	
272 SY05床下1	良好	輪	1 A	回ナダ	無	未切後ナダ	5.4	7.9	17.2	4.0	4.1	V7	556.2	高台に砂付番	E-272	
273 SY05床下1	良好	輪	1 A	回ナダ	無	未切後ナダ	4.8	7.0	16.4	7.0	3.7	V4	462.0	高台に砂付番	E-273	
274 SY05床下1	良好	輪	1 B	回ナダ	有	未切後ナダ	4.5	7.1	15.5	8.4	3.2	V4	399.6		E-274	
275 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	4.6	7.7	15.9	6.4	3.6	V4	415.3		E-275	
276 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.3	8.1	16.1	7.6	3.8	V4	473.0		E-276	
277 SY05床下1	良好	輪	1 C	横ナダ	有	未切後ナダ	4.8	7.5	16.3	6.2	3.4	V5	416.4		E-277	
278 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	4.8	7.2	16.1	8.4	3.7	V3	461.8		E-278	
279 SY05床下1	良好	輪	1 C	横ナダ	有	未切後ナダ	4.7	7.7	14.9	8.2	3.4	V1	399.6		E-279	
280 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	4.3	7.6	15.7	5.2	3.1	V7	356.4		E-280	
281 SY05床下1	良好	輪	1 A	回ナダ	有	未切後ナダ	4.8	8.3	16.2	0.0	3.9	V7	448.5		E-281	
282 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.0	9.2	15.8	7.6	3.9	V3	453.6		E-282	
283 SY05床下1	良好	輪	1 B	横ナダ	有	未切後ナダ	5.5	7.6	16.4	1.2	4.5	V6	325.5		E-283	
284 SY05床下1	良好	輪	1 C	横ナダ	有	未切後ナダ	5.2	7.0	16.1	8.4	3.8	V3	477.4		E-284	
285 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	無	未切後ナダ	5.0	7.6	16.4	2.6	4.0	V6	466.6	高台に砂付番	E-285	
286 SY05床下1	良好	輪	1 C	横ナダ	有	未切後ナダ	4.8	7.2	15.9	7.6	3.3	V4	426.9		E-286	
287 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	4.8	7.4	16.3	7.6	3.5	V4	444.6		E-287	
288 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.2	7.6	16.4	10.6	2.9	V2	421.5		E-288	
289 SY05床下1	良好	輪	1 C	無	未切後ナダ	5.2	7.2	15.8	8.0	3.7	V5	469.0	高台に砂付番	E-289		
290 SY05床下1	良好	輪	1 A	回ナダ	有	未切後ナダ	4.9	7.9	16.1	5.0	4.1	V4	457.6		E-290	
291 SY05床下1	良好	輪	1 B	回ナダ	有	未切後ナダ	5.0	7.6	15.8	8.0	3.5	V3	464.8		E-291	
292 SY05床下1	良好	輪	1 B	回ナダ	有	未切後ナダ	5.1	7.9	15.6	5.6	3.8	V7	453.0		E-292	
293 SY05床下1	良好	輪	2 A	横ナダ	有	未切後ナダ	5.5	7.6	16.7	6.6	4.3	V4	544.5		E-293	
294 SY05床下1	良好	輪	2 C	横ナダ	有	未切後ナダ	5.2	8.0	16.5	4.8	4.0	V6	497.4		E-294	
295 SY05床下1	良好	輪	3 C	回ナダ	無	未切後ナダ	4.7	7.0	16.0	3.6	3.6	V7	416.9		E-295	
296 SY05床下1	不良	輪	3 C	回ナダ	無	未切後ナダ	4.9	7.5	16.5	6.6	3.7	V7	489.1		E-296	
297 SY05床下1	良好	輪	3 C	回ナダ	有	未切後ナダ	4.6	7.8	15.9	6.6	3.7	V4	430.6		E-297	
298 SY05床下1	良好	輪	3 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.0	7.6	15.9	7.0	4.0	V5	490.8		E-298	
299 SY05床下1	良好	輪	3 A	回ナダ	有	未切後ナダ	5.5	8.0	16.6	2.6	4.3	V6	518.4		E-299	
300 SY05床下1	良好	輪	3 C	横ナダ	有	未切後ナダ	4.9	7.4	16.1	7.8	3.9	V4	490.2		E-300	
301 SY05床下1	良好	輪	3 C	回ナダ	有	未切後ナダ	5.2	7.8	16.9	4.6	4.1	V5	512.0		E-301	
302 SY05床下1	良好	輪	3 C	横ナダ	有	未切後ナダ	5.2	7.8	16.3	4.0	4.0	V7	492.7		E-302	
303 SY05床下1	良好	輪	1 C	回ナダ	無	未切痕	2.0	4.6	7.9	3.8	1.5	V2	42.0		E-303	
304 SY05床下1	良好	輪	2 C	回ナダ	無	未切後ナダ	2.2	4.2	8.1	4.8	1.2	V2	40.1		E-304	
305 SY05床下1	良好	輪	C				(2.4)			8.2	5.0	1.2	V2	41.9	織着	E-305
306 SY05床下1	良好	輪	1 A	回ナダ	有	未切後ナダ	5.2	7.1	15.6	1.0	4.4	V5	444.5		E-306	

第7表 第I次調査区 遺物觀察表⑥

遺物番号	遺構	焼成	器形	器種	口縁	見込	腹幅	外机	器高(cm)	底径(cm)	口径(cm)	T(cm)	F(cm)	式の種類	容量(cc)	備考	登錄番号			
307 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.0	7.2	15.8	8.6	3.2	V4	394.1	E-307						
308 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.3	7.7	15.6	7.0	3.9	V6	428.8	E-308						
309 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	5.1	6.7	15.6	7.0	3.6	V4	413.3	E-309						
310 SY05床下2	良好	灰	1 B	回ナド	有	素切後ナド	5.2	6.7	15.2	8.8	3.5	V2	405.2	E-310						
311 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	4.9	6.8	14.7	6.0	3.6	V4	356.4	E-311						
312 SY05床下2	良好	灰	1 A	楕ナド	有	素切後ナド	4.8	7.0	15.5	2.4	2.8	V6	395.8	E-312						
313 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.7	7.5	15.5	7.8	3.6	V3	411.7	E-313						
314 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.8	7.5	15.5	2.4	3.7	V7	397.2	E-314						
315 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.1	7.2	15.7	1.6	4.4	V5	452.6	E-315						
316 SY05床下2	良好	灰	1 D	楕ナド					16.1	0.0	4.2	V4	427.5	繪眉	E-316					
317 SY05床下2	良好	灰	1 A		有	素切後ナド	5.4	6.5						繪眉	E-317					
318 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	無	素切後ナド	4.7	7.0	15.6	8.4	3.5	V3	419.6	高白に砂付眉	E-318					
319 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.8	7.4	15.5	8.0	3.4	V3	432.9	E-319						
320 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.7	7.8	15.7	8.6	3.4	V2	388.2	E-320						
321 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.3	7.1	15.8	8.0	3.7	V4	453.7	E-321						
322 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.0	7.0	15.5	1.8	4.0	V6	416.0	E-322						
323 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.7	6.3	15.6	2.8	3.6	V7	365.8	E-323						
324 SY05床下2	良好	灰	2 A		有	素切後ナド	4.9	6.4	14.9	0.8	4.0	V6	383.2	E-324						
325 SY05床下2	良好	灰	1 A		有	素切後ナド	5.1	6.5					16.0	0.0	4.0	V7	452.4	繪眉	E-325	
326 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.7	7.8	15.4	8.2	3.4	V2	383.4	繪眉	E-326					
327 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.3	7.1	15.9	8.0	3.5	V2	406.8	E-327						
328 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.2	7.3	15.2	7.6	3.6	V3	399.6	E-328						
329 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	5.1	7.0	15.3	8.8	3.8	V2	443.9	E-329						
330 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	5.0	6.8	15.5	4.0	3.8	V7	425.5	E-330						
331 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	5.2	6.9	15.5	7.2	3.8	V5	456.2	E-331						
332 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.9	7.6	15.5	7.6	3.7	V5	446.3	E-332						
333 SY05床下2	良好	灰	1 D	回ナド	有	素切後ナド	5.1	7.0	15.8	8.0	3.6	V2	414.7	E-333						
334 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.7	7.0	15.2	0.0	3.8	V7	387.9	E-334						
335 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	5.3	6.5	15.4	6.4	3.5	V5	393.5	E-335						
336 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.1	6.2	15.5	7.6	3.7	V2	402.8	E-336						
337 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.1	7.3	14.8	7.0	3.9	V6	441.6	E-337						
338 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	5.2	7.9	15.6	6.8	3.9	V3	423.8	E-338						
339 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.1	7.4	15.1	6.4	4.1	V3	412.7	E-339						
340 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド			6.5							E-340				
341 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.1	8.0	16.6	3.2	3.8	V7	469.6	E-341						
342 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.0	7.9	16.0	2.8	3.7	V3	444.1	E-342						
343 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.1	7.6	16.0	8.8	3.6	V2	447.0	E-343						
344 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	4.7	6.6	14.9	4.0	3.4	V6	373.9	E-344						
345 SY05床下2	良好	灰	1 A	楕ナド	有	素切後ナド	5.2	6.6	15.5	7.6	3.7	V3	417.9	E-345						
346 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	5.2	7.2	16.5	7.6	3.8	V7	535.6	E-346						
347 SY05床下2	良好	灰	1 A	楕ナド	有	素切後ナド	5.1	7.3	16.0	9.2	3.3	V4	441.4	E-347						
348 SY05床下2	良好	灰	1 A	回ナド	有	素切後ナド	4.9	6.8	15.6	8.0	3.6	V3	420.9	E-348						
349 SY05床下2	良好	灰	1 C	回ナド	有	素切後ナド	5.1	6.6	15.4	2.2	4.1	V7	432.5	E-349						
350 SY05床下2	良好	灰	1 C		有	素切後ナド	4.8	7.3	15.5	8.0	3.4	V4	406.2	E-350						
351 SY05床下2	良好	灰	2 C	回ナド												E-351				
354 SY05床下2	良好	灰	2 C		有	素切後ナド	5.0	6.3								E-351				
355 SY05床下2	良好	灰	2 C		有	素切後ナド	5.0	6.3								E-351				
352 SY05床下2	良好	灰	2 B	回ナド	有	素切後ナド	5.1	7.3	15.0	6.0	3.8	V5	403.8	E-352						
353 SY05床下2	良好	灰	2 D	回ナド	有	素切後ナド	5.4	7.4	16.3	6.4	3.8	V6	486.3	E-353						
354 SY05床下2	良好	灰	2 C	回ナド	有	素切後ナド	5.0	7.4	15.7	7.2	3.6	V4	421.8	E-354						
355 SY05床下2	良好	灰	2 A	楕ナド	有	素切後ナド	4.9	6.7	16.0	7.8	3.8	V5	487.2	E-355						
356 SY05床下2	良好	灰	3 A	回ナド	有	素切後ナド	4.8	6.6	14.7	7.2	3.5	V4	347.2	E-356						
357 SY05床下2	良好	灰	3 A	回ナド	有	素切後ナド	4.8	6.4	15.8	8.0	4.0	V6	420.6	E-357						
358 SY05床下2	良好	灰	3 A	回ナド	有	素切後ナド	4.8	7.9	16.0	8.4	3.4	V2	410.3	E-358						

第8表 第1次調査区 遺物観察表⑦

第9表 第1次調査区 遺物観察表⑧

遺物番号	遺傳	施成	器種	目種	見込	板鏡	外洗	器高(cm)	径(cm)	口徑(cm)	T(cm)	F(cm)	式の種類	容積(cc)	備考	登録番号
392	灰原 A1 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.5	7.7	15.4	8.0	3.0	V4	354.8	E-392	
393	灰原 A1 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	5.1	7.5	16.1	9.2	3.4	V3	448.5	E-393	
394	灰原 A1 ベルト	良好	楕	3 B	楕ナメ	有	無切抜ナメ	4.0	6.9	16.1	7.0	2.8	V4	338.9	E-394	
395	灰原 A1 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	無	無切抜	2.1	4.1	7.5	5.0	1.0	V2	31.1	E-395	
396	灰原 A1 ベルト	良好	楕	1 C	楕ナメ	無	無切抜	2.1	4.3	8.1	4.9	1.4	V4	44.9	E-396	
397	灰原 A1 ベルト	良好	楕	1 C	回ナメ	無	無切抜ナメ	2.1	4.3	8.3	3.8	1.3	V4	42.5	E-397	
398	灰原 A1 ベルト	良好	楕	2 C	回ナメ	無	無切抜ナメ	2.1	4.5	8.5	9.0	1.7	V7	52.1	E-398	
399	灰原 A1 ベルト	良好	楕	2 C	回ナメ	無	無切抜	2.0	4.4	7.9	5.9	1.2	V2	39.9	E-399	
400	灰原 A1 ベルト	良好	楕	2 A	楕ナメ	無	無切抜ナメ	2.2	4.4	8.0	5.2	1.4	V2	48.6	E-400	
401	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 C	楕ナメ	有	無切抜ナメ	4.9	7.6	16.0	7.2	3.6	V4	435.2	E-401	
402	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.7	7.4	15.1	7.6	3.3	V3	356.2	E-402	
403	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.3	6.8	16.0	6.2	3.0	V3	353.9	E-403	
404	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.5	6.7	15.3	8.6	3.1	V6	390.6	E-404	
405	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	(4.7)	(6.9)	14.9	1.6	4.1	V6	397.7	E-405	
406	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.7	6.7	15.8	6.6	3.4	V5	401.8	E-406	
407	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.7	7.0	15.8	0.0	4.3	V4	421.5	E-407	
408	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.7	6.8	16.2	8.4	3.4	V2	417.5	E-408	
409	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	5.1	7.0	14.8	8.8	3.3	V2	368.7	E-409	
410	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.7	7.3	15.8	8.0	3.5	V2	403.2	E-410	
411	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 B	楕ナメ	有	無切抜ナメ	4.6	7.8	15.8	7.6	3.4	V2	380.5	E-411	
412	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 B	回ナメ	有	無切抜ナメ	5.2	7.4	15.5	6.8	3.9	V5	454.3	E-412	
413	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	5.8	7.5	14.8	0.0	4.1	V6	388.6	E-413	
414	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 B	楕ナメ	有	無切抜ナメ	4.9	7.4	16.3	7.2	3.3	V2	373.7	E-414	
415	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	5.5	7.1	15.4	7.2	4.0	V4	454.0	E-415	
416	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 A	回ナメ										織筋	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 A	回ナメ										織筋	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 A	回ナメ										織筋	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 A	回ナメ										織筋	E-416
416	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 C	楕ナメ	有	無切抜ナメ	4.4	7.2						織筋	E-416
417	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 C	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.6	7.0	15.9	7.8	3.2	V3	380.4	E-417	
418	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 C	回ナメ	無	無切抜	2.0	4.3	7.8	3.0	1.4	V4	38.4	E-418	
419	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 C	楕	無	無切抜ナメ	2.0	3.7	8.1	4.0	1.3	V2	28.8	E-419	
420	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	無	無切抜ナメ	2.1	4.3	8.0	4.0	1.4	V3	42.5	E-420	
421	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 C	楕ナメ	無	無切抜ナメ	2.3	3.6	7.8	4.4	1.3	V2	39.0	E-421	
422	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 C	回ナメ	無	無切抜	2.0	3.9	8.0	4.4	1.3	V2	40.4	E-422	
423	灰原 A2 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	無	無切抜ナメ	1.8	4.3	8.0	4.6	0.9	V2	28.7	E-423	
424	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 C	楕ナメ	無	無切抜	2.9	4.1	7.6	4.6	1.3	V2	28.8	E-424	
425	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 A	楕ナメ	無	無切抜	1.6	4.0	7.8	3.6	1.1	V4	31.9	E-425	
426	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 A	回ナメ	無	無切抜ナメ	1.7	4.3	7.7	1.3	1.2	V6	29.6	E-426	
427	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 A	回ナメ	無	無切抜	1.8	4.1	8.1	4.0	1.2	V4	38.5	E-427	
428	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 A	回ナメ	無	無切抜	2.1	4.9	7.7	3.6	1.2	V3	32.7	E-428	
429	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 C	楕ナメ	無	無切抜ナメ	1.8	5.0	8.1	3.8	1.3	V4	40.9	E-429	
430	灰原 A2 ベルト	良好	楕	B	楕										織筋	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	楕	C											織筋	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	楕	C											織筋	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	楕	C											織筋	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	楕	C											織筋	E-430
430	灰原 A2 ベルト	良好	楕	B	楕	無	無切抜ナメ	2.0	4.2						織筋	E-430
431	灰原 A1 ベルト	良好	楕	1 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.6	7.0	15.8	7.0	3.3	V6	405.8	E-431	
432	灰原 A1 ベルト	半焼	楕	2 B	楕ナメ	有	無切抜ナメ	5.1	6.5	15.6	2.4	4.1	V6	437.2	E-432	
433	灰原 A1 ベルト	良好	楕	3 A	回ナメ	無	無切抜ナメ	5.2	8.1	16.3	7.4	3.8	V4	478.2	高台に砂付筋 E-433	
434	灰原 A1 ベルト	半焼	楕	3 A	回ナメ	有	無切抜ナメ	5.4	7.6	16.5	0.0	4.7	V6	506.8	E-434	
435	灰原 A2 ベルト	良好	楕	2 C	楕ナメ	無	無切抜	7.1	4.3	7.4	5.2	1.2	V4	38.5	E-435	
436	灰原 A2 ベルト	良好	楕	3 D	回ナメ	無	無切抜	2.2	5.0	8.5	2.2	1.7	V6	54.0	E-436	
437	灰原 A1 ベルト	良好	楕	2 C	回ナメ	有	無切抜ナメ	4.5	8.0	16.1	8.0	3.3	V3	404.7	E-437	

第10表 第1次調査区 遺物観察表⑨

器物 番号	遺構	造成	形様	口縁	見込	粗 細	外底	審査 (cm)	底径 (cm)	口径 (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容 量 (cc)	備 考	登録番号
438	灰窯 A1 ベルト	良好	陶	2 C	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.5	7.9	16.1	7.2	3.2	V4	390.9		E-438
439	灰窯 A1 ベルト	良好	陶	2 C	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.7	8.4	16.2	7.2	3.5	V4	432.0		E-439
440	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.3	6.7	16.3	8.2	3.6	V3	480.5		E-440
441	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.3	6.4	16.2	7.8	3.8	V6	511.1		E-441
442	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.8	6.8	15.9	6.4	3.6	V5	427.5		E-442
443	灰窯 A1	良好	陶	1 B	楕ナデ	有	未切後ナデ	5.2	7.3	15.8	8.4	3.8	V3	464.2		E-443
444	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.8	7.1	15.3	8.4	3.5	V2	384.5		E-444
445	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.0	7.7	16.4	8.4	2.6	V8	385.9		E-445
446	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.9	7.7	15.4	6.0	3.3	V6	372.8		E-446
447	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.2	7.5	16.0	7.6	3.2	V7	420.0		E-447
448	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.0	6.1	15.8	8.4	3.7	V3	452.0		E-448
449	灰窯 A1	良好	陶	1 B	楕ナデ	有	未切後ナデ	4.0	5.7	15.8	8.0	2.5	V3	298.0	縦着	E-449
450	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.0	7.0	15.9	8.2	2.7	V4	339.3	縦着	E-450
451	灰窯 A1	良好	陶	1 C	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.3	6.5	15.8	8.4	2.8	V3	342.0	縦着	E-451
452	灰窯 A1	良好	陶	2 B	楕ナデ	有	未切後ナデ	4.8	6.8	16.1	6.8	3.6	V5	444.0		E-452
453	灰窯 A1	良好	陶	2 B	楕ナデ	有	未切後ナデ	4.5	6.8	14.3	6.0	3.5	V6	303.5		E-453
454	灰窯 A1	良好	陶	2 C	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.9	6.4	14.2	6.2	3.8	V3	342.3		E-454
455	灰窯 A1	良好	陶	2 B	圓ナデ	有	未切後ナデ	3.7	6.9	16.1	7.8	2.7	V2	315.0		E-455
456	灰窯 A1	良好	陶	3 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.2	7.3	15.8	8.0	4.2	V6	450.5		E-456
457	灰窯 A1	良好	陶	3 B	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.2	7.4	15.3	7.0	3.2	V3	341.3		E-457
458	灰窯 A1	良好	陶	A	圓ナデ										縦着	E-458
459	灰窯 A1	良好	陶	A	圓ナデ										縦着	E-459
460	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ										縦斜角14°	E-458
461	灰窯 A1	良好	陶	1 B	圓ナデ	有		4.6	8.3						縦斜角15°	E-459
462	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	無	未切後	2.4	4.1	8.3	5.4	1.3	V2	48.6		E-460
463	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	無	未切後	1.9	4.5	7.8	2.8	1.2	V4	32.4		E-463
464	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	無	未切後	2.3	3.5	7.9	3.6	1.6	V4	47.4		E-464
465	灰窯 A1	良好	陶	1 A	圓ナデ	無	未切後	1.7	4.1	7.6	3.2	1.2	V4	32.6		E-465
466	灰窯 A1	良好	陶	2 A	圓ナデ	無	未切後	2.3	4.3	7.7	4.4	1.6	V2	47.1		E-466
467	灰窯 A1	良好	陶	2 A	圓ナデ	無	未切後	2.1	4.3	7.8	4.6	1.4	V2	43.2		E-467
468	灰窯 A1	良好	陶	2 D	圓ナデ	無	未切後ナデ	2.3	5.7	8.5	2.0	1.8	V6	57.6		E-468
469	灰窯 A1	良好	陶	2 A	楕ナデ	有	未切後ナデ	2.2	4.3	8.2	4.2	1.3	V4	43.3	高台付	E-469
470	灰窯 A1	良好	陶	2 D	圓ナデ	無	未切後ナデ	(3.0)	(4.0)	9.0	5.0	1.6	V2	63.3	高台付	E-470
471	灰窯 A1	良好	陶	A	圓ナデ										伊勢型壺	E-471
472	灰窯 A1	良好	陶	1 C	楕ナデ	有	未切後ナデ	4.6	7.4						傾斜角28°	E-472
473	灰窯 A1	良好	陶	2 C	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.6	8.4	15.7	8.8	3.2	V2	387.1		E-473
474	灰窯 A1	良好	陶	2 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.3	7.0	15.0	5.2	3.4	V6	357.1		E-474
475	灰窯 A1	良好	陶	2 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.7	7.0	15.1	7.6	3.5	V3	379.9		E-475
476	灰窯 A1	良好	陶	3 B	圓ナデ	無	未切後	2.1	4.0	7.8	4.2	1.4	V4	43.1		E-476
477	灰窯 A1	良好	陶	2 D	圓ナデ	無	未切後	2.0	5.1	8.3	4.6	1.3	V3	44.8		E-477
478	灰窯 A2	良好	陶	1 B	楕ナデ	有	未切後ナデ	5.4	8.5	15.9	8.0	3.8	V3	457.2		E-478
479	灰窯 A2	良好	陶	1 B	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.2	6.9	15.6	6.8	3.8	V6	460.9		E-479
480	灰窯 A2	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.9	6.9	15.3	8.0	3.7	V2	497.3		E-480
481	灰窯 A2	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.8	6.2	15.8	6.8	3.4	V7	425.9		E-481
482	灰窯 A2	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.0	7.3	15.5	7.2	3.7	V3	497.2		E-482
483	灰窯 A2	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	4.8	6.9	15.8	8.0	3.4	V3	495.2		E-483
484	灰窯 A2	良好	陶	1 A	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.3	7.5	15.8	7.5	3.8	V3	442.0		E-484
485	灰窯 A2	良好	陶	1 B	圓ナデ	有	未切後ナデ	5.2	7.4	15.6	7.6	3.8	V3	433.4		E-485

第11表 第1次調査区 遺物観察表⑩

遺物 番号	遺物 名	組成 部	形態	目 標	見込	現 状	外観	頭高 (cm)	眞得 (cm)	口徑長 (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備考	登録番号	
486	灰原 A2	良好	楕	2	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.5	7.6	15.5	7.6	4.0	V3	451.8	E-486	
487	灰原 A2	良好	楕	3	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.7	7.2	15.1	8.0	3.3	V2	356.6	E-487	
488	灰原 A2	良好	楕	3	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.2	6.9	15.7	7.6	3.7	V3	426.2	E-488	
489	灰原 A2	良好	楕	1	C	回ナメ	無	赤切底	2.1	4.4	7.5	3.8	1.6	V2	41.5	E-489	
490	灰原 A2	良好	楕	1	C	楕ナメ	無	赤切後ナメ	2.2	4.1	8.0	3.2	1.6	V4	46.6	E-490	
491	灰原 A2	良好	楕	1	C	楕ナメ			2.2	3.5	7.9	4.4	1.6	V2	48.8	E-491	
492	灰原 A2	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切底	2.4	4.9	8.3	4.4	1.6	V6	57.6	E-492	
493	灰原 A2	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切底	(2.0)	3.2	7.9	2.8	1.3	V4	35.9	E-493	
494	灰原 B2	良好	楕	1	C	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.6	7.3	16.0	8.6	3.1	V4	401.7	E-494	
495	灰原 B2	良好	楕	1	C	回ナメ	無	赤切底	2.3	3.8	7.4	2.4	1.6	V4	38.0	E-495	
496	灰原 B2	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切底	1.9	4.8	8.3	3.8	1.0	V4	32.7	E-496	
497	灰原 B3	良好	楕	1	B	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	7.6	15.9	8.4	3.3	V6	437.9	E-497	
498	灰原 B3	良好	楕	2	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.0	7.3	15.3	8.0	3.6	V2	396.3	E-498	
499	灰原 B3	良好	楕	2	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.3	6.6	16.2	6.8	3.7	V6	475.0	E-499	
500	灰原 B3	良好	楕	2	E	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.9	7.9	16.6	9.4	3.3	V6	490.4	E-500	
501	灰原 B3	良好	楕	2	E	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	7.4	16.5	7.2	3.6	V7	494.8	E-501	
502	灰原 B3	良好	楕	2	A	回ナメ			14.3	6.0	4.7	V4	443.9	融器	E-502		
503	灰原 B3	良好	楕	2	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.7	6.9						融器	E-503
504	灰原 B3	良好	楕	2	A	楕ナメ	有	赤切後ナメ	6.0	6.3	14.2	6.4	4.8	V4	437.3	E-504	
505	灰原 B3	良好	楕	3	A	回ナメ	無	赤切底	2.1	5.5	8.8	4.6	1.3	V5	50.9	E-505	
506	灰原 B3	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切底	1.9	4.8	8.4	4.4	1.2	V4	42.4	E-506	
507	灰原 B3	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切後ナメ	1.8	4.8	7.6	3.2	1.3	V4	34.7	E-507	
508	灰原 B4	良好	楕	1	E	楕ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	8.1	16.0	8.4	3.6	V8	317.6	E-508	
509	灰原 B4	良好	楕	2	C	回ナメ	無	赤切底	2.1	5.1	8.3	6.0	0.9	V2	36.4	E-509	
510	灰原 B5	良好	楕	1	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.9	8.0	15.7	8.8	3.1	V2	375.0	E-510	
511	灰原 B5	良好	楕	1	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.7	7.2	15.4	6.8	3.4	V4	378.4	E-511	
512	灰原 B5	良好	楕	1	C	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.8	7.4	15.4	9.2	3.4	V1	409.1	E-512	
513	灰原 B5	良好	楕	3	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.0	7.4	15.9	7.2	3.5	V6	441.2	E-513	
514	灰原 B5	良好	楕	3	A	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.6	7.5	16.4	7.6	4.1	V4	526.0	E-514	
515	灰原 B5	良好	楕	1	A	回ナメ	無	赤切後ナメ	2.9	3.9	7.5	4.6	1.0	V2	29.3	E-515	
516	灰原 B5	良好	楕	1	C	楕ナメ	有	赤切底	2.6	4.3	8.8	4.4	1.6	V3	58.8	E-516	
517	灰原 B5	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切底	2.3	4.2	8.4	3.2	1.6	V4	50.8	E-517	
518	灰原 B6	良好	楕	1	C	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.4	9.0	16.6	7.6	3.4	V4	445.9	E-518	
519	灰原 B6	良好	楕	1	C	回ナメ	有	赤切後ナメ	4.9	6.6	16.3	6.8	3.2	V5	400.6	E-519	
520	灰原 B6	良好	楕	1	B	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.1	7.0	15.6	8.4	3.8	V3	455.6	E-520	
521	灰原 B6	良好	楕	3	B	回ナメ	有	赤切後ナメ	5.0	8.0	16.5	8.0	3.6	V7	312.9	E-521	
522	灰原 B6	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切底	2.1	5.5	8.5	2.0	1.6	V6	50.1	E-522	
523	灰原 B6	良好	楕	2	A	回ナメ	無	赤切後ナメ	2.0	4.7	7.8	4.6	1.0	V2	30.9	E-523	

第12表 第1次調査区 遺物観察表④

第3節 第II次調査区の遺物

第1項 概 要

第II次調査区で出土した遺物は、椀=523点、皿=142点である。この中で出土量を比較してみると、SY06は、椀=81点、皿=33点を数え、SY07は、椀=145点、皿=21点を数える。この両窯体では、SY07は床面下施設を有し、SY06には床面下施設が施されておらず、こうした点が出土量の差として数値に反映している。但し、SY07の床面下施設は、第I次調査区で検出された各窯体の床面下施設よりも、施されている面積がかなり小規模である。

第2項 SY06に関する遺物

SY06に関する出土遺物の内訳は、椀=81個体、皿=33個体である。この窯体に伴うものと思われる灰原01層からは、椀=204個体、皿=65個体が出土している。SY06は床面下施設をもたず、第I次調査区内の各窯体と比較すると、出土個体数は少ないグループに入る。但し、窯内からの出土量として各窯体と比較すると、ほぼ同量である。

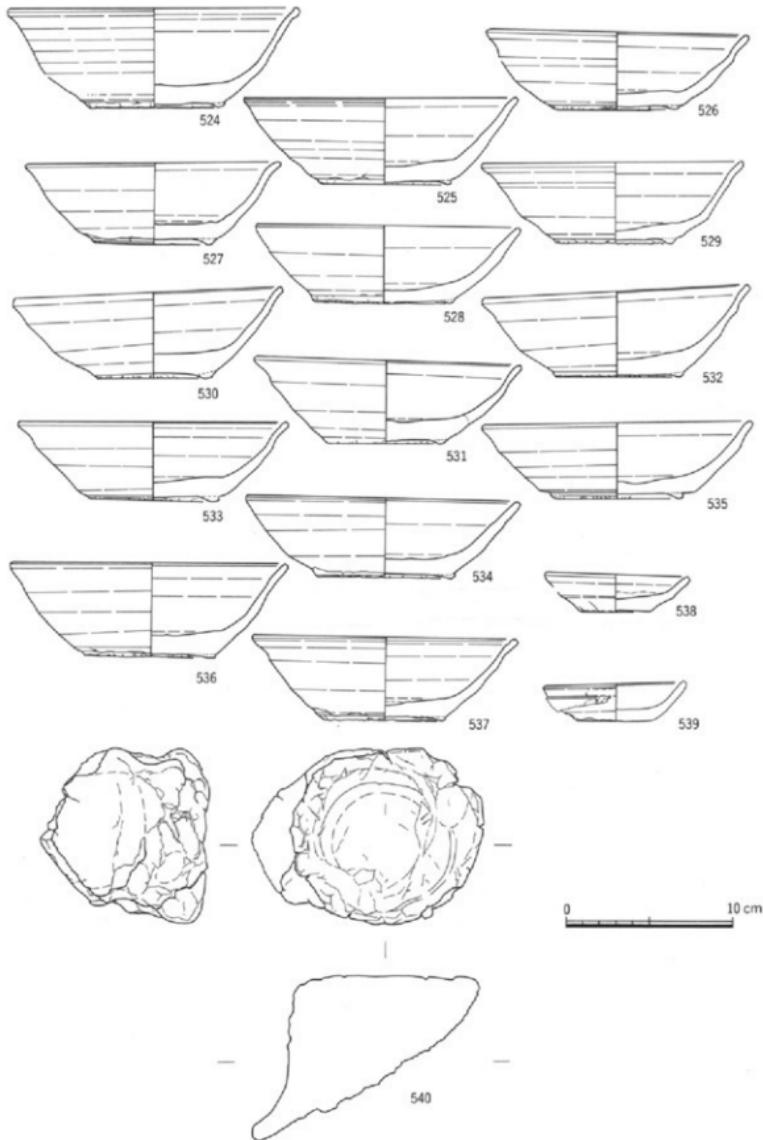
窯内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=72個体、皿=28個体である。これららの器形別内訳は、椀では1類=37、2類=13、3類=22個体、皿では1類=13、2類=15個体である。遺物番号524~563は、SY06の窯内出土遺物である。このうちで、524~540が焼成室出土遺物、541~563が燃焼室出土遺物である。524~534・541~544が椀1類、535・536・545・546・548が椀2類、537・547・549~551が椀3類である。538・539・552・553が皿1類、554~563が皿2類である。

遺物番号613~629は、SY06の生産活動に伴って形成されたと思われる、灰原01層から検出されたものである。ここで検出された遺物のうち、分類可能なものは、椀=154個体、皿=47個体である。灰原01層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=72、2類=32、3類=50個体、皿では1類=30、2類=17個体である。613~618が椀1類で、619が椀2類、620~622が椀3類である。623~626が皿1類、627~629が皿2類である。

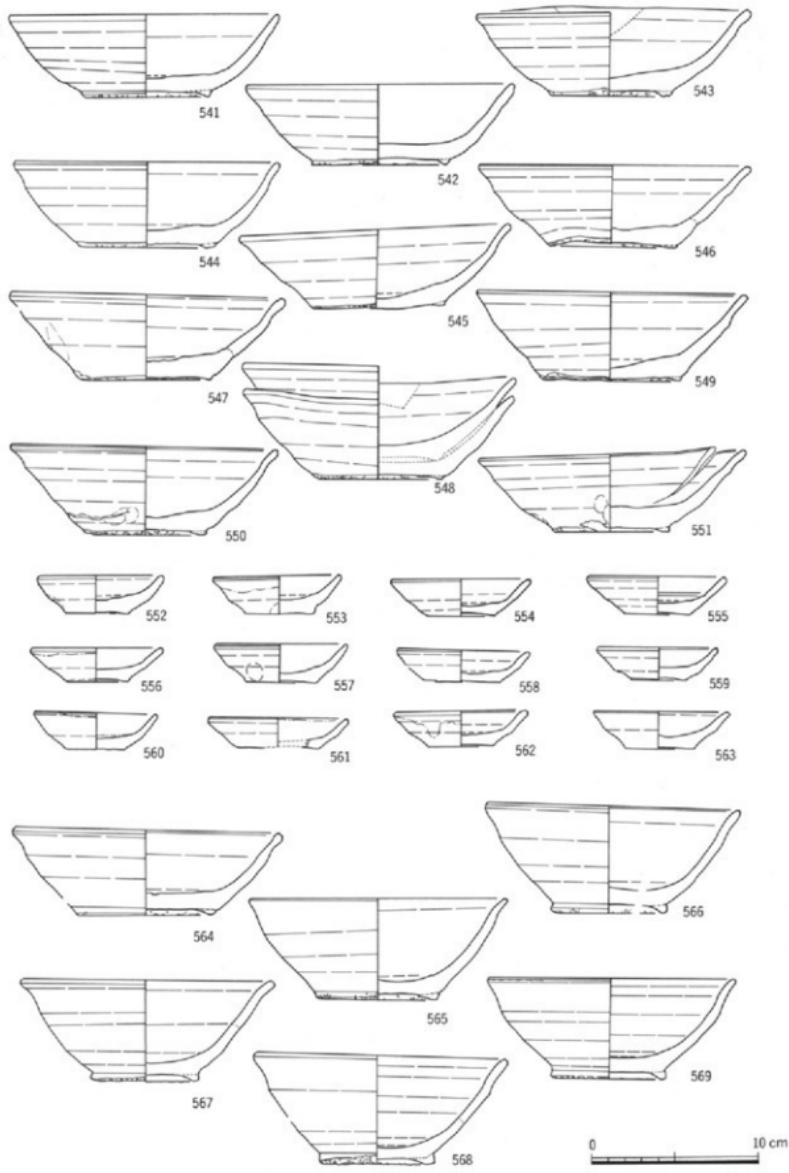
第3項 SY07に関する遺物

SY07に関する出土遺物の内訳は、窯内から椀=46個体、皿=21個体、床面下施設から椀=99個体である。この窯体に伴うものと思われる灰原02層からは、椀=9個体、皿=3個体が出土している。

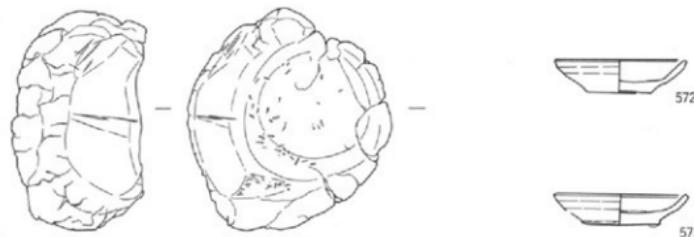
SY07は床面下施設を有し、窯体の遺存度もI・II次調査区を通じて最も良好であるが、調査区内での各窯体で比較すると、出土個体数は少ないグループに入る。また、この窯体の床面下施設は、焼成室内で小さい面積で設けられており、1窯体の床面下施設に使用さ



第47図 遺物実測図②

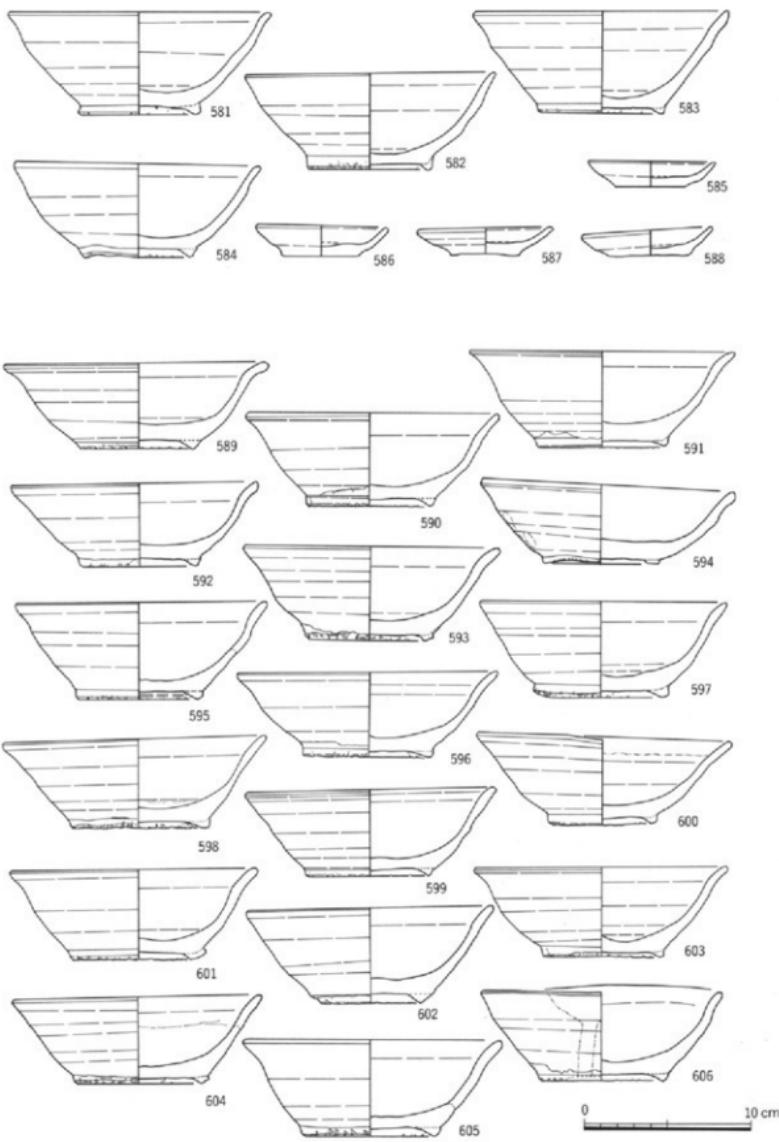


第48図 遺物実測図②

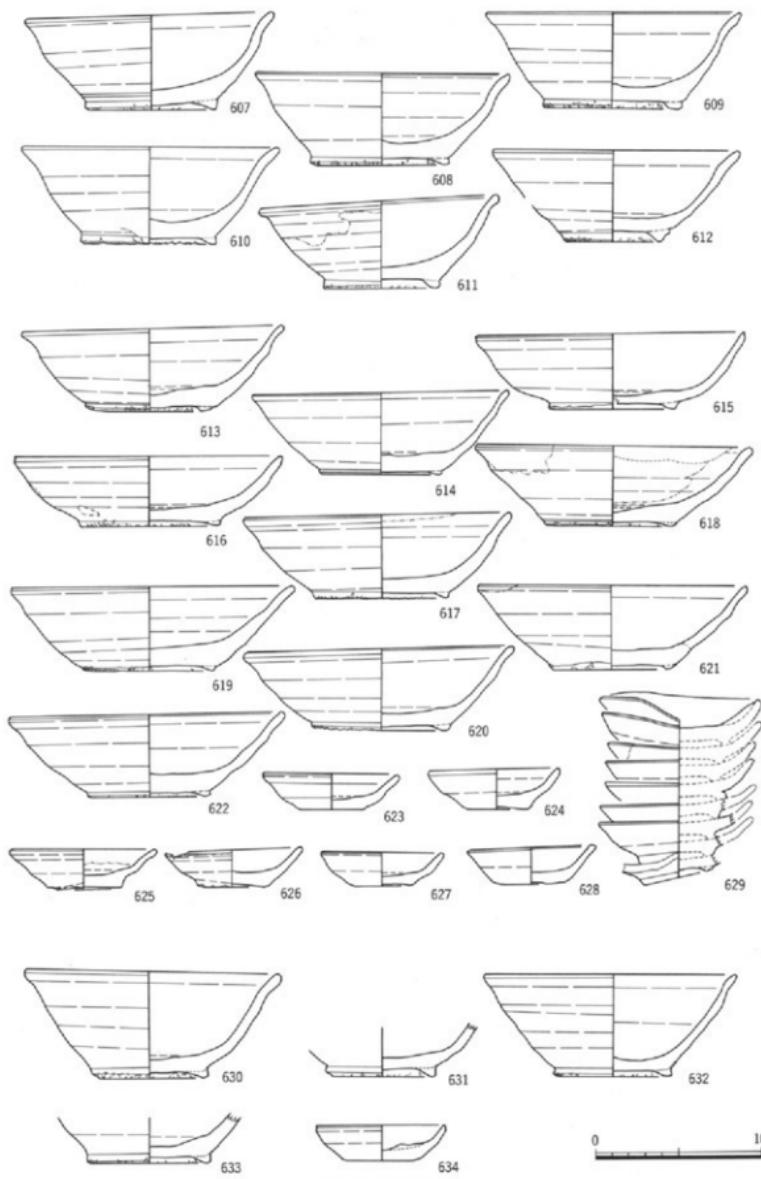


0 10 cm

第49図 遺物実測図谷



第50図 遺物実測図②



第51図 遺物実測図

れた個体数では、第Ⅰ・Ⅱ次調査区併せた中でも最少であった。

窓内から検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=31個体、皿=21個体である。これらの器形別内訳は、椀では1類=5、2類=23、3類=3個体、皿では1類=10、2類=11個体である。遺物番号564~588は、SY07窓内出土遺物である。このうちで、564~577が焼成室出土遺物、578~588が燃焼室出土遺物である。564~569・578~584が椀2類で、572~574・585~587が皿1類、575~577・588が皿2類である。570・571は焼台で、上面平坦部内側には粗痕が認められる。

遺物番号589~612は、SY07の床面下施設に使用されたものである。ここから検出された遺物のうち、分類可能なものは椀=96個体である。これらの器形別内訳は、椀1類=34、2類=24、3類=38個体である。589~596が椀1類、597~600・611・612が椀2類、601~610が椀3類である。

遺物番号630~634は、SY07の生産活動に伴って形成されたと思われる、灰原02層から検出されたものである。ここで検出された遺物のうち、分類可能なものは、椀=4個体、皿=3個体である。灰原02層で検出されたものの器形別内訳は、椀では1類=2、3類=2個体、皿では1類=2、2類=1個体である。631が椀1類で、630~632が椀3類である。632が皿2類である。

遺物番号	道構	焼成	器種	器形	口縁	見足	標識	外底	高さ (cm)	底径 (cm)	口徑K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備考	登録番号
524 SY06	不良	椀	1	C	有	無切後ナメ			6.0	8.0						焼成室	E-324
525 SY06	良好	椀	1	A	回ナメ	有	無切後ナメ	5.1	8.0	16.1	8.4	3.6	V2	438.3	焼成室	E-325	
526 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	4.7	7.5	15.2	8.0	2.6	V3	404.9	燃焼室床上	E-326	
527 SY06	良好	椀	1	A	回ナメ	有	無切後ナメ	4.9	7.2	14.9	7.4	3.6	V3	376.0	燃焼室床上	E-327	
528 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	4.7	8.5	15.7	6.8	3.5	V4	402.3	燃焼室床上	E-328	
529 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	4.9	7.1	15.5	9.8	3.2	V2	409.6	焼成室	E-329	
530 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	5.2	6.3	16.0	9.0	3.6	V2	451.3	燃焼室床上	E-330	
531 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	5.0	6.9	15.9	7.6	3.4	V5	435.6	燃焼室床上	E-331	
532 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	5.2	7.4	13.8	8.0	3.6	V6	467.8	燃焼室床上	E-332	
533 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	4.8	7.4	15.9	7.8	3.3	V4	406.5	燃焼室床上	E-333	
534 SY06	良好	椀	1	A	横ナメ	有	無切後ナメ	4.8	8.3	16.2	8.4	3.6	V2	442.1	燃焼室床上	E-334	
535 SY06	良好	椀	2	C	回ナメ	有	無切後ナメ	4.6	7.4	15.9	6.4	3.3	V7	409.9	燃焼室床上	E-335	
536 SY06	良好	椀	2	C	回ナメ	有	無切後ナメ	5.6	7.8	16.4	8.6	4.0	V3	329.0	分室付脇床直	E-336	
537 SY06	良好	椀	3	B	回ナメ	有	無切後ナメ	5.1	7.3	15.4	8.0	3.7	V3	424.3	焼成室	E-337	
538 SY06	良好	皿	1	C	横ナメ	無	無切直	2.3	4.3	8.4	6.2	1.0	V2	42.2	分室付脇床直	E-338	
539 SY06	良好	皿	1	A	横ナメ	無	無切後ナメ	2.3	4.6	8.3	3.4	1.6	V4	59.5	分室付脇	E-339	
541 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	4.9	7.4	16.1	7.6	3.6	V6	472.5	燃焼室床上	E-541	
540 SY06		焼台														焼成室・焼成F	E-546
542 SY06	良好	椀	1	C	回ナメ	有	無切後ナメ	4.8	8.0	15.9	7.2	3.6	V6	455.1	燃焼室床上	E-542	
543 SY06	良好	椀	1	C	回ナメ	有	無切後ナメ	5.0	6.8	16.2	8.8	3.1	V3	402.6	燃焼室	E-543	
544 SY06	良好	椀	1	C	横ナメ	有	無切後ナメ	(5.1)	17.0	15.8	7.4	3.8	V6	483.0	燃焼室	E-544	
545 SY06	良好	椀	2	C	回ナメ	有	無切後ナメ	4.7	7.9	16.1	8.0	3.2	V4	406.2	燃焼室	E-545	
546 SY06	良好	椀	2	C	回ナメ	有	無切後ナメ	4.9	7.4	16.1	7.6	3.6	V3	431.1	燃焼室	E-546	
547 SY06	良好	椀	3	A	回ナメ	有	無切後ナメ	(5.0)	7.8	16.2	8.4	3.4	V3	431.1	燃焼室床上	E-547	
548 SY06	良好	椀	2	C	横ナメ										燃焼室	E-548	
549 SY06	良好	椀	2	C	横ナメ	有	無切後ナメ	5.2	7.1						燃焼室	E-549	
550 SY06	良好	椀	3	A	横ナメ	有	無切後ナメ	5.3	8.2	15.6	8.0	3.6	V2	407.3	燃焼室床上	E-550	
550 SY06	良好	椀	3	C	横ナメ	有	無切後ナメ	5.3	6.6	15.8	7.2	3.7	V4	436.0	燃焼室	E-550	

第13表 第II次調査区 遺物観察表①

遺物 番号	遺構	組成	組種	形態	口 縦	見込	粗 度	外派	断面 (cm)	高さ (cm)	口径 (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備考	登錄号	
551 SY96	良好	楕	3	C	回ナゲ	有	直切後ナゲ	4.6	6.8	15.9	8.9	3.2	V2	372.9	燃焼室	E-551		
552 SY96	良好	正	1	A	楕ナゲ	無	直切底	2.1	3.7	7.5	3.2	1.1	V6	29.4	燃焼室床上	E-552		
553 SY96	良好	正	1	B	回ナゲ	無	直切後ナゲ	2.3	3.9	7.5	1.6	1.4	V4	33.8	燃焼室底	E-553		
554 SY96	良好	正	2	B	回ナゲ	無	直切底	2.2	4.6	8.2	3.8	1.4	V4	44.9	燃焼室床上	E-554		
555 SY96	良好	正	2	B	楕ナゲ	無	直切底	2.3	3.8	8.2	5.4	1.1	V2	49.5	燃焼室床上	E-555		
556 SY96	良好	正	2	C	楕ナゲ	無	直切底	2.1	3.6	7.7	4.4	1.0	V2	29.5	燃焼室	E-556		
557 SY96	良好	正	2	C	楕ナゲ	無	直切底	2.3	4.1	7.8	0.4	1.8	V6	46.2	燃焼室	E-557		
558 SY96	良好	正	2	C	回ナゲ	無	直切底	1.9	4.5	7.8	5.2	1.1	V2	37.0	燃焼室	E-558		
559 SY96	良好	正	2	B	楕ナゲ	無	直切後ナゲ	2.0	3.3	7.1	2.9	1.2	V6	28.4	燃焼室	E-559		
560 SY96	良好	正	2	B	回ナゲ	無	直切底	2.2	3.5	7.2	4.4	1.4	V2	37.7	燃焼室	E-560		
561 SY96	良好	正	2	C	楕ナゲ	無	直切後ナゲ	1.9	4.7	8.2	5.2	1.2	V2	43.0	燃焼室	E-561		
562 SY96	良好	正	2	C	楕ナゲ	無	直切底	2.1	3.8	7.8	4.8	1.1	V2	34.9	燃焼室	E-562		
563 SY96	良好	正	2	A	楕ナゲ	無	直切底	2.2	4.1	7.9	5.2	0.9	V2	30.8	燃焼室	E-563		
564 SY97	良好	楕	2	B	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.1	8.9	15.8	8.0	3.6	V4	443.4	燃焼室	E-564		
565 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.1	6.8	15.1	5.4	3.0	V4	505.0	燃焼室底	E-565		
566 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.4	6.3	15.0	6.4	3.0	V3	498.0	燃焼室	E-566		
567 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.1	6.5	14.9	5.6	5.0	V3	464.0	分煙社蔵	E-567		
568 SY97	良好	楕	2	C	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.6	6.9	14.8	5.4	3.5	V1	536.1	分煙社蔵	E-568		
569 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.1	6.9	14.6	2.0	4.7	V6	455.2	燃焼室底	E-569		
570 SY97	無														無	角33°	E-570	
571 SY97																無	角30°	E-571
572 SY97	良好	正	1	A	回ナゲ	無	直切底	2.0	4.9	7.8	5.0	1.1	V2	34.3	燃焼室底	E-572		
573 SY97	良好	正	1	D	楕ナゲ	無	直切後ナゲ	1.9	4.7	7.8	3.6	1.1	V5	33.2	分煙社蔵底	E-573		
574 SY97	良好	正	1	B	回ナゲ	無	直切底	1.9	4.4	8.1	4.8	1.2	V2	46.1	燃焼室	E-574		
575 SY97	良好	正	2	A	回ナゲ	無	直切底	1.9	3.9	7.8	4.8	1.1	V2	34.9	燃焼室床上	E-575		
576 SY97	良好	正	2	A	回ナゲ	無	直切後ナゲ	1.7	4.3	7.7	3.8	1.0	V1	29.0	分煙社蔵底	E-576		
577 SY97	良好	正	2	A	回ナゲ	無	直切底	1.7	4.5	8.6	1.4	1.1	V6	28.2	分煙社蔵底	E-577		
578 SY97	良好	正	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.4	6.9	14.3	5.6	5.2	V3	466.4	燃焼室底	E-578		
579 SY97	良好	正	2	A	楕ナゲ	有	直切後ナゲ	6.3	6.6	15.3	6.0	5.1	V3	512.1	燃焼室底	E-579		
580 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.5	6.0	14.8	5.6	5.1	V4	561.5	燃焼室底	E-580		
581 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.1	6.9	15.5	2.8	4.8	V6	525.5	燃焼室底	E-581		
582 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.8	7.1	14.3	2.0	4.8	V6	450.9	燃焼室底	E-582		
583 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	6.1	7.3	15.0	5.6	5.2	V3	493.4	燃焼室底	E-583		
584 SY97	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.6	6.3	14.8	4.6	4.4	V6	419.8	燃焼室	E-584		
585 SY97	良好	正	1	A	楕ナゲ	無	直切底	1.5	4.1	7.4	4.0	0.9	V4	25.0	燃焼室	E-585		
586 SY97	良好	正	1	A	楕ナゲ	無	直切底	1.5	4.7	7.6	5.2	1.1	V2	34.2	燃焼室	E-586		
587 SY97	良好	正	1	A	回ナゲ	無	直切底	1.6	4.2	7.9	5.0	0.8	V2	26.6	燃焼室底	E-587		
588 SY97	良好	正	2	A	回ナゲ	無	直切底	1.5	4.8	7.7	3.6	0.8	V4	22.7	燃焼室	E-588		
589 SY97 K.T.	良好	楕	1	A	楕ナゲ	有	直切後ナゲ	5.2	6.9	15.5	7.8	3.6	V1	392.1		E-589		
590 SY97 K.T.	良好	楕	1	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.6	7.6	14.8	6.4	4.4	V4	449.2		E-590		
591 SY97 K.T.	良好	楕	1	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.8	7.8	15.7	7.0	4.4	V1	489.1		E-591		
592 SY97 K.T.	良好	楕	1	C	楕ナゲ	有	直切後ナゲ	4.9	6.9	14.8	4.4	3.7	V7	386.2		E-592		
593 SY97 K.T.	良好	楕	1	C	楕ナゲ	有	直切後ナゲ	5.6	6.9	15.1	6.4	4.4	V1	412.4		E-593		
594 SY97 K.T.	良好	楕	1	C	回ナゲ	有	直切後ナゲ	4.7	6.8	15.1	7.2	3.3	V1	362.7		E-594		
595 SY97 K.T.	良好	楕	1	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.8	7.1	14.8	5.8	4.6	V4	456.4		E-595		
596 SY97 K.T.	良好	楕	1	C	楕ナゲ	有	直切後ナゲ	5.1	7.8	15.4	2.0	3.9	V7	415.9		E-596		
597 SY97 K.T.	良好	楕	2	A	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.8	7.2	14.6	8.6	4.0	V1	428.4		E-597		
598 SY97 K.T.	良好	楕	2	C	回ナゲ	有	直切後ナゲ	5.4	8.3	15.6	3.6	4.2	V7	480.9		E-598		

第14表 第II次調査区 遺物観察表②

遺物 番号	遺構	形状	断面	器形	口径 (cm)	足込 (cm)	外底 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	口径K (cm)	T (cm)	F (cm)	式の 種類	容量 (cc)	備 考	登録番号	
599	SY07 床下	良好	腕	2 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.5	14.7	6.4	4.1	V4	413.9	E-599		
600	SY07 床下	良好	腕	2 B	回ナメ	有	直切後ナメ	5.3	6.5	15.1	6.2	3.8	V3	377.9	E-600		
601	SY07 床下	良好	腕	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.9	14.6	6.8	4.2	V1	387.7	E-601		
602	SY07 床下	良好	腕	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.7	6.1	14.5	6.0	4.2	V4	406.1	E-602		
603	SY07 床下	良好	腕	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.4	7.4	15.0	6.0	4.5	V3	437.4	E-603		
604	SY07 床下	良好	腕	2 C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.2	7.5	14.8	2.8	4.2	V6	413.6	E-604		
605	SY07 床下	良好	腕	3 C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.8	7.7	14.8	6.8	4.6	V3	459.9	E-605		
606	SY07 床下	良好	腕	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.3	7.3	14.2	2.2	4.2	V6	379.3	E-606		
607	SY07 床下	良好	腕	2 A	横ナメ	有	直切後ナメ	5.6	7.5	14.7	0.9	4.5	V6	429.6	E-607		
608	SY07 床下	良好	腕	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.5	7.6	15.1	2.2	4.1	V7	429.6	E-608		
609	SY07 床下	良好	腕	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.8	8.0	15.1	6.6	4.4	V4	469.2	E-609		
610	SY07 床下	良好	腕	2 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.8	8.2	15.2	6.8	4.5	V1	444.3	E-610		
611	SY07 床下	良好	腕	2 C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.2	6.7	14.1	0.9	4.0	V7	362.6	E-611		
612	SY07 床下	良好	腕	2 A	回ナメ	有	直切後ナメ	5.5	5.5	14.6	6.0	4.1	V4	401.2	E-612		
613	灰原01	良好	腕	1 B	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	6.7	15.4	7.6	3.4	V4	293.8	E-613		
614	灰原01	良好	腕	1 A	回ナメ	有	直切後ナメ	4.9	7.0	15.3	8.0	3.8	V2	418.3	E-614		
615	灰原01	良好	腕	1 C	回ナメ	有	直切後ナメ	4.5	7.2	16.0	7.4	3.4	V8	479.0	E-615		
616	灰原01	良好	腕	1 A	回ナメ	有	直切後ナメ	4.2	8.2	16.0	7.4	2.9	V7	373.1	E-616		
617	灰原01	良好	腕	1 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.9	15.8	8.4	3.4	V3	415.3	E-617		
618	灰原01	良好	腕	1 A	横ナメ	有	直切後ナメ	4.8	7.8	16.5	8.0	3.3	V3	429.1	E-618		
619	灰原01	良好	腕	2 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.0	7.9	16.7	8.4	3.2	V2	410.3	E-619		
620	灰原01	良好	腕	3 C	回ナメ	有	直切後ナメ	4.9	7.8	16.0	7.2	3.4	V5	421.3	E-620		
621	灰原01	良好	腕	3 C	横ナメ	有	直切後ナメ	5.0	6.9	16.0	8.0	3.8	V2	445.7	E-621		
622	灰原01	良好	腕	3 C	回ナメ	有	直切後ナメ	5.0	6.8	16.4	7.6	3.6	V3	443.6	E-622		
623	灰原01	良好	皿	1 A	横ナメ	無	直切版	2.2	3.8	8.0	3.0	1.4	V5	49.9	E-623		
624	灰原01	良好	皿	1 A	回ナメ	無	直切版	1.9	3.8	7.7	5.4	1.1	V2	37.4	E-624		
625	灰原01	良好	皿	1 B	回ナメ	無	直切版	2.4	4.5	8.5	4.2	1.2	V3	40.9	E-625		
626	灰原01	良好	皿	1 C	回ナメ	無	直切版	2.2	4.2	8.1	3.8	1.2	V6	38.6	E-626		
627	灰原01	良好	皿	2 C	横ナメ	無	直切版	2.0	3.7	7.1	4.6	1.1	V2	30.0	E-627		
628	灰原01	良好	皿	2 E	無	直切後ナメ	2.2	4.2	7.4	4.4	1.2	V2	33.5	E-628			
629	灰原01	良好	皿	A										68.8	高台付皿	E-629	
629	灰原01	良好	皿	A												高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿	A												高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿	A												高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿	A												高台付皿	E-629
629	灰原01	良好	皿	C												高台付皿	E-629
630	灰原01	良好	皿	2 A	横ナメ	有	直切後ナメ	6.4	6.3	15.1	7.2	4.6	V1	460.4	E-630		
631	灰原02	良好	腕	1	横ナメ	有	直切後ナメ										E-631
632	灰原02	良好	腕	3 A	回ナメ	有	直切後ナメ	6.1	6.5	14.9	6.4	5.1	V3	502.6	E-632		
633	灰原02	良好	腕	1	回ナメ	有	直切後ナメ										E-633
634	灰原02	良好	皿	2 C	無	直切版	2.1	4.2	7.6	5.0	1.1	V6	36.4		E-634		

第15表 第II次調査区 遺物観察表③

第IV章 自然科学的分析 —窯跡焼土の熱残留磁化測定—

パレオ・ラボ株式会社 (藤根 久)

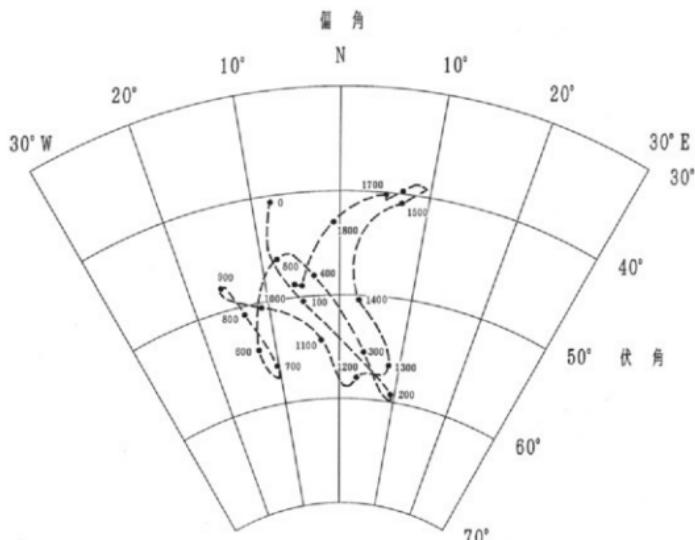
第1節 はじめに

NA 335 号窯は、名古屋市緑区大高町地内に位置する。遺跡からは、12世紀末～13世紀初頭と推定される窯跡 7 基が検出されている。

ここでは、これら窯跡 7 基の焼土の熱残留磁化を測定し、当時の磁化方向からその焼成年代を推定する。

第2節 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度(全磁力)によって表される。方向は、真北からの角度である偏角(Declination)と水平面からの角度である伏角(Inclination)によって表す。磁気コンパスが北として示す方向(磁



第 52 図 Shibuya(1980)による地磁気永年変化曲線

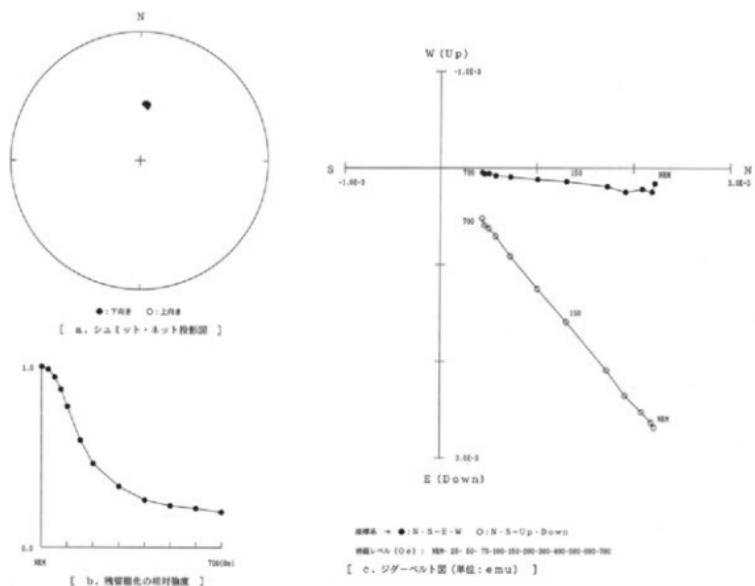
北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在の遺跡付近の偏角は約6.81°、伏角は約48.23°、全磁力（水平分力）は約30935.9(nT)である（理科年表、1993；いすれも1990年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁石になれる鉱物）はこの磁場を取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年間については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化の測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡、1977、Shibuya、1980；図1）。また、湖や浅海における堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている（Hyodoほか、1993）。

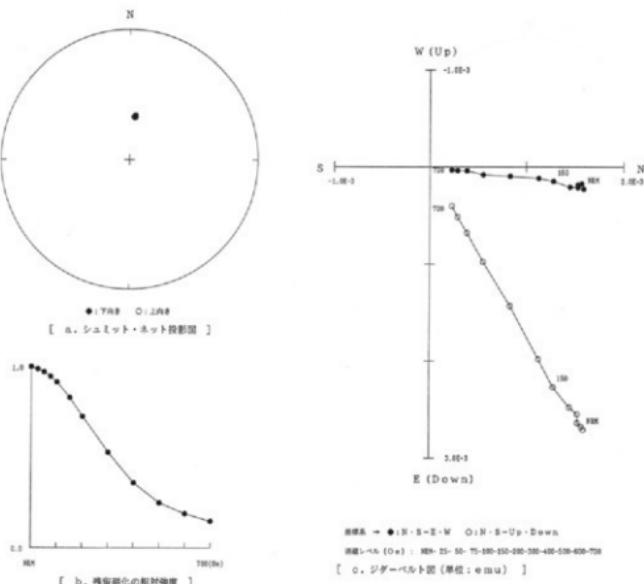
年代のよく分かっている遺跡の焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土の残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較すると、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯焼土についても、遺物とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、C¹⁴年代測定法などの他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定されるが、いすれを採用するかは、土器等による推定年代が参考となる。

第3節 試料採取と残留磁化測定および結果

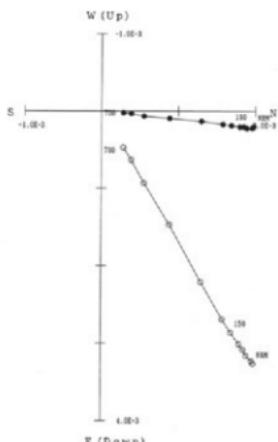
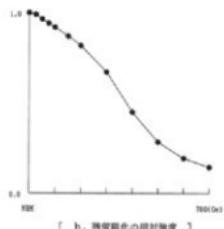
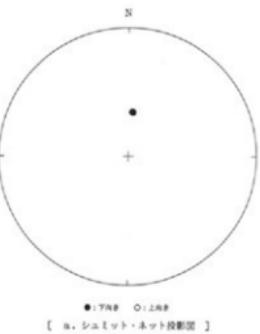
考古地磁気による年代推定は、a) 測定用試料の採取および整形、b) 残留磁化測定および統計計算を行い、c) 地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成時の年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認・検討するために、段階交流消磁も行った。



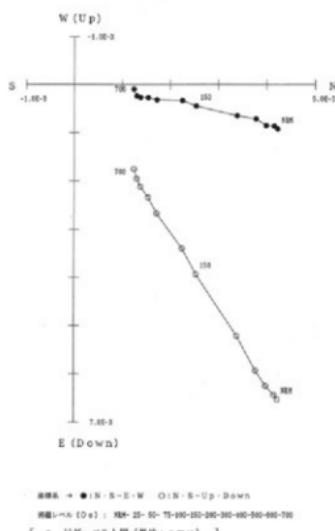
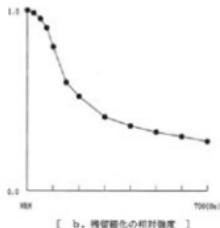
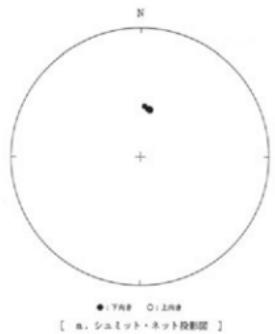
第53図 SY01 焼土(No. 04)の段階交流消磁測定結果



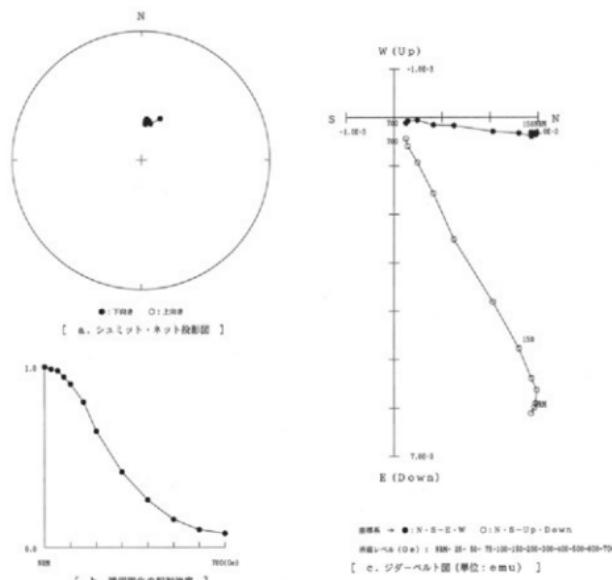
第54図 SY02 焼土(No. 07)の段階交流消磁測定結果



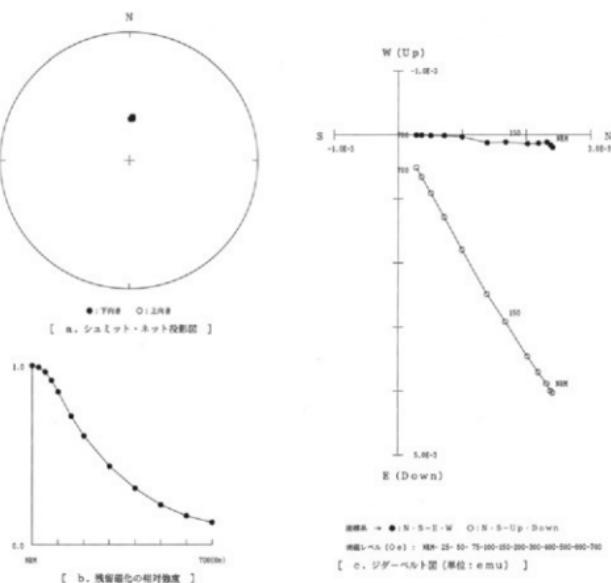
第 55 図 SY03 烧土 (No. 09) の段階交流消磁測定結果



第 56 図 SY04 烧土 (No. 01) の段階交流消磁測定結果



第57図 SY05 烧土(No. 04)の段階交流消磁測定結果



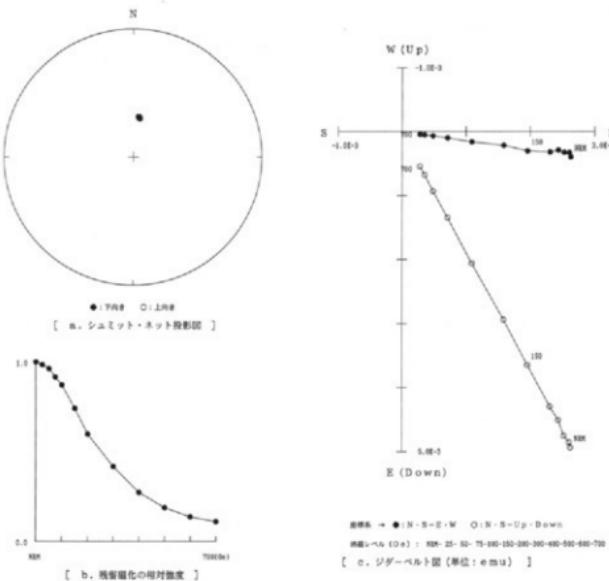
第58図 SY06 烧土(No. 07)の段階交流消磁測定結果

a. 測定用試料の採取および整形

熱残留磁化測定を行った試料は、窯跡 7 基 (SY01~07) の床面焼土である。試料は、焼土面において、①一辺数 cm の立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや堅め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺 5 cm の正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起した後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺 3.5 cm・厚さ 2.5 cm の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、SY01 が 10 個（1 個破損）、SY02 が 10 個（1 個破損）、SY03 が 11 個（1 個破損）、SY04 が 13 個、SY05 が 9 個（3 個破損）、SY06 が 14 個、SY07 が 10 個（2 個破損）である。

b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算

試料の熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計 (SMM-85: 淳夏原技研製)



第 59 図 SY07 焼土 (No. 07) の段階交流消磁測定結果

(補正前)						
道 構	試料番号	偏角 (°)	伏角 (°)	強度 (x10E-3)	備 考	統計処理項目
SY01 (150 Oe 消磁後)	01	116.2	48.0	0.351		試料数 (n)
	02	59.0	48.3	0.853		10
	03	39.2	65.0	2.200		平均偏角, Dm (°)
	04	6.0	50.2	3.280	段階交流消磁	10.15
	05				破損	平均伏角, Im (°)
	06	-49.1	29.1	1.960		60.82
	07	-32.7	40.3	1.800		誤差角(δD) (°)
	08	-4.2	57.6	2.830		40.26
	09	35.6	71.4	1.930		誤差角(δI) (°)
	10	34.3	51.5	2.250		19.63
	11	-15.5	47.6	1.130		信頼度係数 (k)
	12					7.01
	13					平均磁化強度 (x10E-3 emu)
	14					1.86
SY02 (150 Oe 消磁後)	01	5.3	60.6	2.880		試料数 (n)
	02	7.0	58.6	2.100		10
	03	8.6	60.5	2.290		平均偏角, Dm (°)
	04	7.1	59.4	1.760		7.29
	05	8.1	60.7	2.090		平均伏角, Im (°)
	06	5.9	61.1	2.250		59.95
	07	6.6	60.3	2.610	段階交流消磁	誤差角(δD) (°)
	08	7.1	58.4	1.410		1.66
	09	9.9	61.7	1.650		誤差角(δI) (°)
	10				破損	0.83
	11	7.4	58.1	1.600		信頼度係数 (k)
	12					3367.42
	13					平均磁化強度 (x10E-3 emu)
	14					2.06
SY03 (150 Oe 消磁後)	01	7.2	59.4	3.840		試料数 (n)
	02	4.8	59.6	2.680		11
	03	5.8	59.1	1.650		平均偏角, Dm (°)
	04	7.7	60.9	0.398		6.73
	05	6.6	60.8	2.400		平均伏角, Im (°)
	06				破損	60.09
	07	7.2	61.1	1.370		誤差角(δD) (°)
	08	6.8	61.0	3.870		1.56
	09	6.4	59.2	3.320	段階交流消磁	誤差角(δI) (°)
	10	3.7	58.6	2.990		0.78
	11	6.4	59.9	2.240		信頼度係数 (k)
	12	11.8	61.2	0.640		3437.64
	13					平均磁化強度 (x10E-3 emu)
	14					2.31
SY04 (150 Oe 消磁後)	01	12.3	56.5	7.840	段階交流消磁	試料数 (n)
	02	26.6	56.4	4.620	計算から除外	10
	03	5.6	60.0	2.720		平均偏角, Dm (°)
	04	11.8	60.0	12.700		9.65
	05	8.8	56.3	7.910		平均伏角, Im (°)
	06	1.1	49.2	5.360		57.28
	07	12.9	60.5	4.980		誤差角(δD) (°)
	08	2.3	34.9	22.300	計算から除外	5.7
	09	11.8	59.4	5.690		誤差角(δI) (°)
	10	18.8	50.3	6.410		3.08
	11	2.2	59.6	13.700		信頼度係数 (k)
	12	11.2	59.8	6.800		246.93
	13	15.8	41.7	1.390	計算から除外	平均磁化強度 (x10E-3 emu)
	14					7.41

第15表 残留磁化測定(150 Oe 消磁)と統計計算結果

を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料(SY01 No. 04, SY02 No. 07, SY03 No. 09, SY04 No. 01, SY05 No. 04, SY06 No. 07, SY07 No. 07)について交流消磁装置(DEM-8601:㈱夏原技研製)を用いて段階的に消磁し、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した(図2～8)。その結果、磁化強度は10-3emu前後と強く、磁化保持力は150 Oe(エルステッド)においてNRM(自然残留磁化)のSY01 No. 04が約59%、SY02 No. 07が約87%、SY03 No. 07が約82%、SY04 No. 01が約60%、SY05 No. 04が約79%、SY06 No. 07が約72%、SY07 No. 07が約74%を示し、SY01はやや低いものの、いずれの窯も保持力が高

(補正前)							
道 構	試料番号	偏角 (°E)	伏角 (°)	強度 (x10E-3)	備 考	統計処理項目	統計値
SY05 (150 Oe 消磁後)	01				破損	試料数 (n)	
	02	-24.3	21.8	3,510	計算から除外		6
	03	3.1	59.8	7,470		平均偏角, Dm (°E)	
	04	7.2	61.2	5,450	段階交流消磁		2.57
	05	0.5	57.8	6,320		平均伏角, Im (°)	
	06	-4.1	58.7	15,000			60.13
	07				破損	誤差角(δD) (°)	
	08	15.1	58.6	17,400	計算から除外		4.28
	09	-19.5	54.5	2,980	計算から除外	誤差角(δI) (°)	
	10	4.9	62.0	4,070			2.13
	11				破損	信頼度係数 (k)	
	12	4.6	61.0	6,220			992.08
	13					平均磁化強度 (x10E-3 emu)	7.42
	14						
SY06 (150 Oe 消磁後)	01	7.3	55.9	4,960		試料数 (n)	
	02	5.0	61.1	3,990			14
	03	1.8	61.3	3,340		平均偏角, Dm (°E)	
	04	3.0	56.2	5,210			3.74
	05	2.8	60.0	4,820		平均伏角, Im (°)	
	06	3.6	60.3	5,250			59.87
	07	3.9	60.0	3,370	段階交流消磁	誤差角(δD) (°)	
	08	3.6	60.3	4,350			1.87
	09	0.3	60.2	2,790	誤差角(δI) (°)		
	10	3.6	61.2	3,740			0.94
	11	5.4	60.3	2,670		信頼度係数 (k)	
	12	4.8	61.0	2,650			1804.41
	13	5.0	59.8	3,870		平均磁化強度 (x10E-3 emu)	
	14	1.8	60.4	5,590			4.04
SY07 (150 Oe 消磁後)	01	11.3	59.7	6,310		試料数 (n)	
	02				破損		10
	03	6.3	61.5	6,520		平均偏角, Dm (°E)	
	04	16.9	61.1	4,670			10.13
	05	13.6	57.5	4,550		平均伏角, Im (°)	
	06				破損		60.61
	07	8.9	61.5	4,150	段階交流消磁	誤差角(δD) (°)	
	08	7.5	59.8	3,020			2.71
	09	10.2	61.9	1,870	誤差角(δI) (°)		
	10	6.7	62.0	2,790			1.33
	11	8.4	58.9	4,170		信頼度係数 (k)	
	12	11.2	61.8	3,910			1327.44
	13					平均磁化強度 (x10E-3 emu)	
	14						4.2

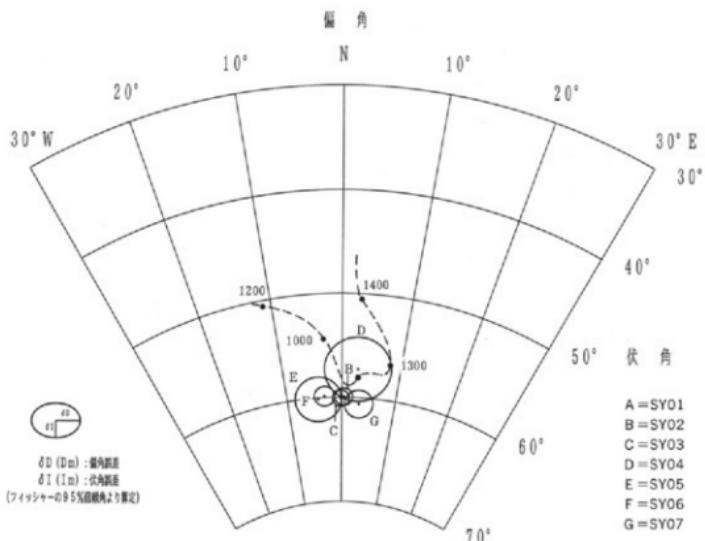
第17表 残留磁化測定(150 Oe 消磁)と統計計算結果

いことが理解される(b、残留磁化の相対強度)。また、磁化方向も、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録している(c、ジダーベルト図)。

以上のことから、150 Oeで消磁した際の残留磁化方向は、当時の地磁気の方向としても問題ない。これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、150 Oeで消磁した後に残留磁化を測定し、各試料の磁化方向とした。

こうした複数試料の測定から得た偏角(Di)、伏角(II)を用いて、Fisher(1953)の統計法により平均値(Dm、Im)を求めた(表1および表2、ただし、試料のうち大きく外れる試料は計算から除外した)。計算した結果は、SY01以外はいずれも誤差が小さく、信頼度係数(k)はSY02が3367.42、SY03が3437.64、SY04が246.93、SY05が992.08、SY06が1804.41、SY07が1327.44と高い数値を示している。なお、SY01は、10個の磁化方向がいずれも異なった方向を示しており、また赤化部分がブロック状であることから、当時の焼土ではなく、側壁部分が落下したものと考えられる。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した6.81°Wを使用した。その結果は、Shibuya(1980)による地磁気変化曲線とともにプロットした(図9)。図中測定点に示した梢円は、フッシャー(1953)の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。



第60図 焼土の地磁気測定結果と水年変化曲線(Shibuya, 1980の一部)

c. 窯跡の焼成年代

図9には、Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線の一部とともに各窯跡の磁化方向を示した。これによると、各窯跡の磁化方向は、地磁気永年変化曲線の1,100~1,300年に近い位置にある。磁化方向の中心を最も近い曲線上に移動し、その年代を推定すると、SY02が $1,180 \pm 15$ 年、SY03が $1,175 \pm 15$ 年、SY04が $1,200 + 100 - 70$ 年(他に $280 + 45 - 60$ 年、 165 ± 25 年)、SY05が $1,170 + 50 - 30$ 年、SY06が $1,170 \pm 15$ 年、SY07が $1,185 \pm 25$ 年と推定される。なお、SY01は、前述したように、磁化方向がいずれも異なり側壁の焼土が崩落したものと考えられる。

遺構	出土遺物による年代	考古地磁気推定年代(A. D.)
SY01	12世紀後葉~13世紀前葉	不能
SY02	12世紀後葉~13世紀前葉	$1,180 \pm 15$
SY03	12世紀後葉~13世紀前葉	$1,175 \pm 15$
SY04	12世紀後葉~13世紀前葉	$1,200^{+100}_{-70} (280^{+45}_{-60}, 165 \pm 25)$
SY05	12世紀後葉~13世紀前葉	$1,170^{+50}_{-30}$
SY06	12世紀後葉~13世紀前葉	$1,170 \pm 15$
SY07	12世紀後葉~13世紀前葉	$1,185 \pm 25$

第18表 考古地磁気年代推定表

引用文献

- Fisher, R. A. (1953) Disparison on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, p. 296-305.
- 広岡公夫(1977)考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、200-203
- Hyodo, M., C. Itota and K. Yaskawa (1993) Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan. J. Geomag. Geoelectr., 45, 669-696.
- 理科年表(1993) 国立天文台編、丸善、p. 952.
- Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文、54 p

第V章 補論

第1節 出土遺物の観察・計測法

第1項 概要

第I・II次調査区から出土した遺物は、時期的なばらつきは認められず、その形態的特徴などを今までの研究成果に照合すると、概ね12世紀後葉～13世紀前葉のものと判断できる。出土遺物の器種は、いわゆる「山茶碗・山皿」がほとんどであり、その他では、わずかに伊勢型鍋、焼台が出土しただけであった。したがって、膨大な量にのぼる同時期、同器種の遺物を整理することが、本遺跡の報告書作成作業となった。こうした場合多く行われてきたのは、出土遺物の内容が単純であるがゆえに、代表的なもののみわずかな点数を選択し、「以下同様に～」と、まとめて扱って報告を終了してしまう方法である。しかし、こうした時期・器種にばらつきのない膨大な出土遺物に対しては、個々のもたらすミクロ的な情報を、マクロ的な情報としてまとめることが必要と判断した。このため出土遺物に分類・観察・計測基準を設定し、統計処理を行って、識別できる個体すべてに目を向けることにした。以下にその方法を説明する。

第2項 基準設定

個々の遺物がもたらす情報は、視点によってさまざまであるが、その中で各情報をどのように取捨選択するかが問題となる。換言すれば、何を目的に分類するかあらかじめテーマ設定し、それに応じた基準を設定するが必要が生じる。なぜならば、基準の設定に関しては、思いつくままの目的をすべて盛り込むことは不可能で、全体の作業量の中で、現実的に実行可能なものにする必要があるからである。

今回の調査で出土した遺物は、時期的に大きな幅を持たず、ほぼ同時期といつても良い一群であった。したがって、出土遺物の分類にあたっては、第III章で行ったように器形を基準にし、これがより単純に階層化できるよう努めた。さらに、遺物観察基準の設定にあたっては、これらの限られた時期に製作された遺物は、この期間の中で製作技法に一定の傾向が認められるのか、一つの技法の中にもさまざまな種類が認められるのかを判断することを目的とした。そして、観察の対象は、識別できたすべての個体とし、これに対して項目別に記録し、統計処理を行うことにした。しかし、調査報告書を作成する作業は、分類・計測作業のみを行えばよいわけではない。したがって、作業の進行方法は、調査報告書作成期間の中で、分類・計測作業に費やす期間、消化可能な処理量をあらかじめ算定し、分類方法の選択まで含んで予定を組まなければならなかった。

分類・計測の作業は、「山茶碗・皿」を底部計測によって個体識別したため、この方法で識別できた個体を対象とした。この個体識別は第III章でも述べたように、第I・II次調査区から出土した遺物の内で、底部が1/2以上残存するものを1個体とし、1/2以下のものは0個体とする方法で、したがって底部1/2以上残存のものについて、記録を取った。

情報の収集は、各遺構ごとに接合作業を行った後に、底部1/2以上残存のものを選び出し、設定した項目別にその破片についての情報を記録した。この各記録対象遺物の情報は、パーソナル・コンピューターで表計算ソフトを用いて入力し、これを集計した。

各破片の記録用紙は、まず記録用紙ごとに調査区・グリッド・遺構名・コンテナ番号を枠外に記入し、情報項目としては①計測番号(コンテナ別)、②器種、③器形、④口縁端部形態、⑤見込み部の調整、⑥底部付着痕、⑦底部調整、⑧焼成、⑨備考を設定した。各項目への記入にあたっては、⑨備考を除いたその他すべての欄に、あらかじめ番号・記号別で内容を設定しておき、その番号・記号のみを記入することにした。各項目の内容は以下の通りである。なお、器種、器形などについては、第III章で説明を行ったため図示しないが、記録の手順をわかりやすく示すために、項目とその特徴について、重複することになるが記述する。

第3項　項目内容

①計測番号

観察・計測作業にあたっては、分類・計測後に対象遺物と情報が照合できるように、各計測破片に色付きシールを貼り、コンテナごとに1から順にシール内へ記入した。本項目の番号は、このシール内に記入した数字にある。

②器種

1 = 梶 … 当調査地点では、この項目はすべて「山茶碗」である。

2 = 皿 … 当調査地点では、この項目はすべて「山皿」である。

③器形

〔梶〕

1 = 体部から口縁部にかけての断面形態が、曲線的に立ち上がるるもの

2 = 体部から口縁部にかけての断面形態が、直線的に立ち上がるるもの

3 = 体部の断面形態は直線的であるが、口縁部付近では端反り風の丸みをもつもの

〔皿〕

1 = 体部の器壁に比べて底部の器壁が厚いもの

2 = 体部・底部が、器壁の厚さに極端に差がないもの

3 = 高台を有するもの

④口縁端部形態

- A = 口縁端部が均等に丸みを帯びたもの
- B = 口縁端部が断面形態上角張り、端部内・外の曲点がそれぞれほぼ直角なもの
- C = 断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より大きく曲がるもの
- D = 断面形態上、口縁端部内側の曲点が、外側の曲点より緩く曲がるもの

⑤見込み部の調整

- 1 = 指で円状にナデ調整されているもの
- 2 = 指で横方向にナデ調整されているもの

⑥底部付着痕

- 1 = 粋の付着痕を有するもの
- 2 = 粋の付着痕が認められないもの
- 3 = 粋の付着痕は認められないが、砂粒の付着または、付着痕を有するもの

⑦底部調整

- 1 = 回転糸切り痕（調整なし）
- 2 = 指ナデ整形しているもの

⑧焼成

- 1 = 良好
- 2 = やや不良
- 3 = 不良

⑨備考

分類・計測項目に該当しない特記事項を記入した。

さらに容量の計測方法に関しては、一般に行われている水や粟粒を用いる方法ではなくすでに実験的に行われていた積分計算による方法を採用した。この計算の基準設定に関しては、従来の基準を設定した担当者がこの基準をさらに発展させているので、新設定の基準及び方法を本節の第4項において掲載し、これを採用した。従来の方法の場合、完形品またはそれに近いものでないと容量の計測ができなかったが、積分による計算の場合、断面形態がすべて測図できるものであれば容量の算出が可能なことが、この方法を採用した理由である。

第4項 容量の計測法

—奥村勝信—

(1) 水による計測

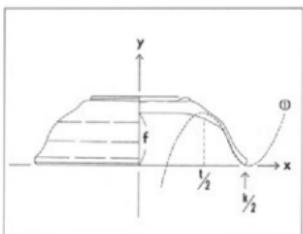
この方法は、土師質の器の場合、計測前に水に良く浸して、これ以上水を吸わない状態にしなければならない。また山茶碗類は、口縁が変形して高低に差があるものが多いので、口縁を水平になるよう調整しながら、その内の低い部分の表面張力が破れる寸前まで水を注意深く注げば、多少の高低の差は相殺され、他のサンプルとの比較になる。

(2) 粟粒・細砂による計測

楕円の物を量るには非常に不向きな方法で、これは粒と粒の隙間の絶対量が、楕と形の違うメスシリンダーなどとでは、大きく異なることから起る。また粒を入れる勢いの強弱や振動を与えたとしてもその値が変化する。この誤差は、形が皿に近づくほど大きく、反対に天目形の楕などは小さい。つまり形が円筒状に近づくほど信頼性の高い数値が得られる。(但しその場合も、撒くように粒を入れ、メスシリンダーに移す際もゆっくりと、なるだけ振動させないという条件の時のみ)

(3) 積分計算による計測

この方法は、内部の微妙な器面の変化を読み取れないという欠点があるが、それもいくつかの式を設定することで、その誤差を小さく抑えることはできる。今回の容量値は、その誤差を見るために水を入れて量った21点を含め、全て計算により出した近似値である。かつて『黒窯G2号古窯跡』⁽¹⁾で使用した式は二つで十分であった(他に本地楕を計算した式が一つ)が、このNA335号窯の場合は、形態にあまりにもヴァラエティがあり、また容量自体も大きいことから、誤差を5%に抑えるために、かつての3式に修正・加筆して10の式を用意した。以下それらの式について敷衍してみたい。



第61図 積分計算による容量 1

外反の著しい端反りの楕については、3次関数

① $y = a(x+b)(x^2+cx+d)$ の $t/2 \sim k/2$ までを y 軸を中心回転させた時の体積をその近似値とした。

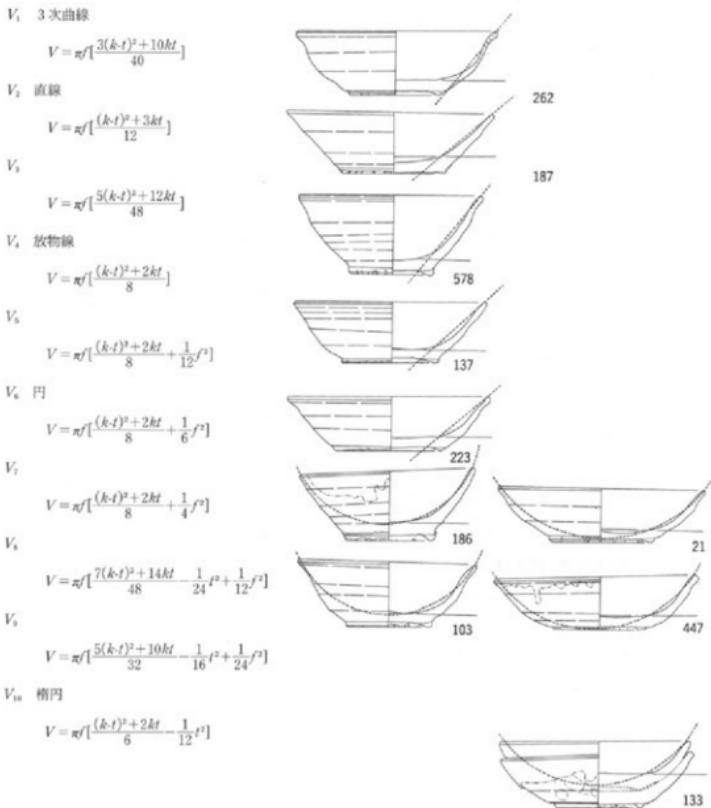
$$\textcircled{2} \quad v = 2\pi \int_{t/2}^{k/2} xz(x+b)(x^2+cx+d) dx + \frac{f^2}{4} \pi f^2$$

②の不明な数値 a, b, c, d をあたえられた k

$$\textcircled{3} \quad v = 2x \int_{t/2}^{k/2} x \frac{16f}{(k-t)^3} \left(x + \frac{k-3t}{4} \right) \left(x^2 - kx + \frac{k^2}{4} \right) dx + \frac{f^2}{4} \pi f^2 \quad \text{これを解いて}$$

$$\textcircled{4} \quad v = f\pi \left(\frac{3k^2 + 3t^2 + 4kt}{40} \right) = \pi f \left(\frac{3(k-t)^2 + 10kt}{40} \right)$$

以下同様に残りの9式は次頁に解式だけ記す。



第 62 図 積分計算による容量 2

上図のうち左列の楕に対して、右列は比較的浅い楕と言える。文献にてむりやりその名称を探すとしたら、「浅鉢（さはち）」や木本地楕で言うところの「平皿」があてられるかもしれない。また V_8 や V_7 の式は、もともと木本地楕を量るために用意した式で、これらの式で表される楕が、思いの外あったこともこの古窯の一つの特徴として挙げられる。

注

*上記の楕の計算値、水による測定値は、遺物観察表参照

(1) 奥村勝信（分担）1994 「黒雀 40・89 号古窯跡 黒雀 G 2 号古窯跡 立楠古窯跡」
●愛知県埋蔵文化財センター

第2節 分類・計測の結果

第1項 概 要

今回分類・計測したデータ数（底部破片数）の総計は、第I・II次調査区を合わせると、11442点にのぼった。分類・計測作業の後は、データの入力、入力内容の校正、データの統計処理の手順を踏んだ。基礎データの集計は、まず器種、器形ごとに組成を確認し、その後に各分類項目にしたがってそれぞれの組成を確認した。これらの計測した個体数を、遺構別に振り分けたグラフが第63図である。各遺構によって遺存度の違いがあるため出土量の単純比較はできないが、窯内から検出される遺物は少なく、床面下施設の有無やその内容に、出土量が大きく影響する傾向がみられる。また、各床面下施設においては融着・混入品などを除いて皿が使用されていないため、椀・皿の器種組成に極端な差がついた。次項では、統計処理によって明らかになった各項目別の組成について説明する。

第2項 全体組成

①出土器種組成

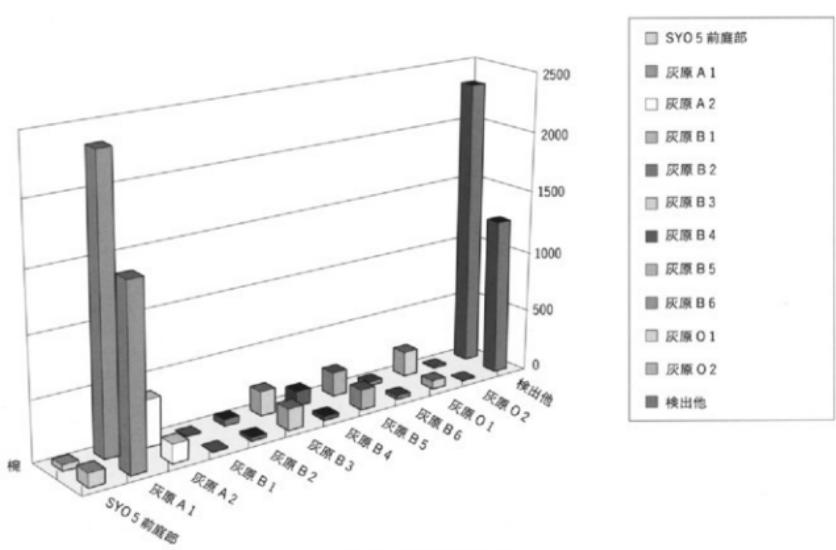
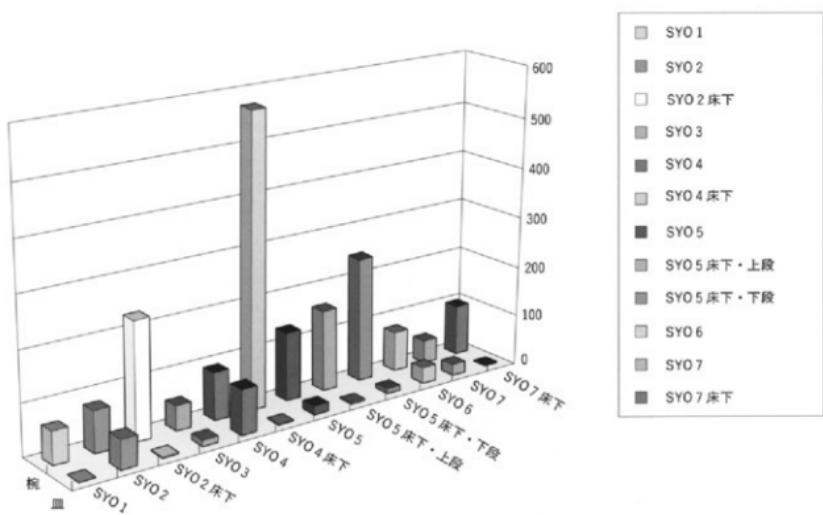
第64図は、第I・II次調査区で確認できた器種と、その個体数の比率である。鍋については、消費された遺物であって、本遺跡の窯で生産された製品ではないと思われる。したがって、本来であれば性格を異にする遺物として、分けて扱うべきであろう。しかし、この時期の窯跡の調査では、膨大な椀・皿とともに、わずかな伊勢型鍋が伴う類例も確認されるため、この意味が問われる機会を考え、あえて生産址の出土器種組成に組み入れた。全体の器種組成は、椀が約7割、皿が約3割で、これに2点(0.02%)の伊勢型鍋が加わる。

②器種別器形組成

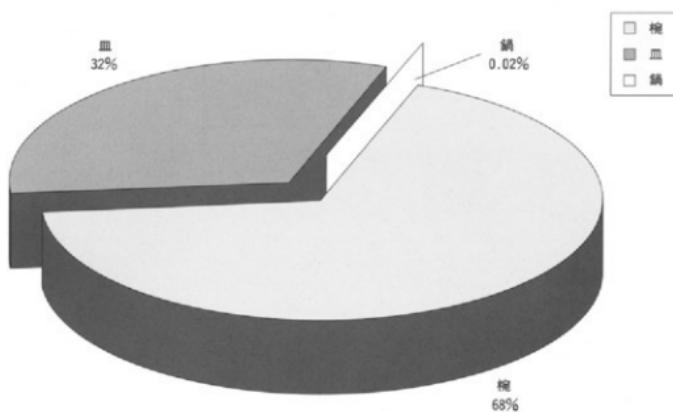
第65図は、第I・II次調査区で確認できた椀・皿別に、今回の調査で分類設定した器形組成を示したものである。

椀の器形組成では、曲線的に体部が立ち上がる1類が最も多く、66%を占める。直線的に体部が立ち上がる2・3類は、合わせても34%にとどまり、全体の傾向としては曲線的に立ち上がる椀が多く認められた。しかし、この1類の中には曲線的な体部をもちながら、器高が高い（深い）もの、低い（浅い）ものが混在しており、この細分まで行えなかった点が分類の精度を落とした。したがって、1類とカウントされたもの全てが、特定の時期に限定される形態的特徴を併せもつわけではない。

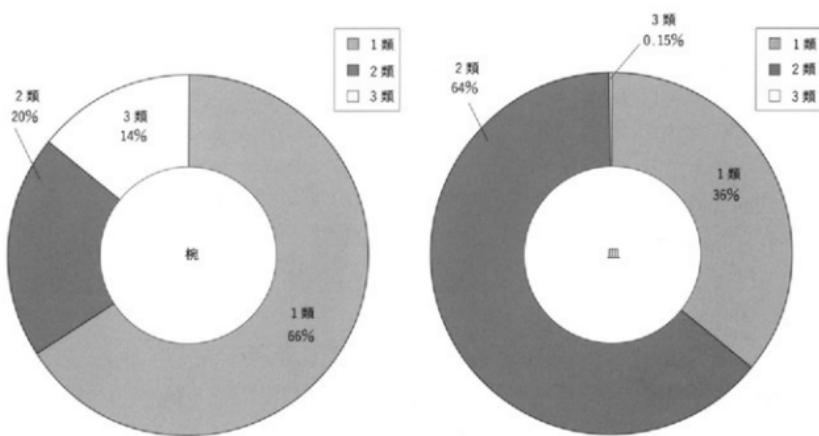
皿の器形組成では、器壁の厚さに特に差がない2類が最も多く64%を占め、底部の器壁が厚い1類は36%、高台を有する3類は、調査区全体で4個体のみ確認できた。



第 63 図 遺構別器種組成図



第 64 図 出土器種組成図



第 65 図 器種別器形組成図

遺構	器形	椀の器形				皿の器形				遺構別 統計
		1	2	3	合計	1	2	3	合計	
SY01		36	9	12	57	0	0	0	0	67
SY02		60	3	3	66	23	28	0	51	117
SY02床下		185	11	24	220	0	1	0	1	221
SY03		29	6	3	38	11	2	0	13	51
SY04		28	2	3	33	18	54	0	72	105
SY04床下		333	118	51	502	0	1	0	1	503
SY05		51	37	13	101	5	4	1	10	111
SY05床下1		115	15	15	145	2	1	0	3	148
SY05床下2		164	22	44	230	3	5	0	8	238
SY05前庭部		22	5	2	29	0	66	0	66	95
SY06		37	13	22	72	13	15	0	28	100
SY07		5	23	3	31	10	11	0	21	52
SY07床下		34	24	38	96	0	0	0	0	96
灰原A1		1104	356	170	1630	408	669	1	1078	2708
灰原A2		165	67	62	294	23	45	0	68	362
灰原B1		5	2	0	7	0	0	0	0	7
灰原B2		10	5	9	24	7	9	0	16	40
灰原B3		40	62	20	122	9	76	0	85	207
灰原B4		56	11	3	70	6	18	0	24	94
灰原B5		87	17	30	134	47	69	1	117	251
灰原B6		11	6	9	26	0	20	0	20	46
灰原01		72	32	50	154	30	17	0	47	201
灰原02		2	0	2	4	2	1	0	3	7
検出他		933	214	169	1316	347	583	1	931	2247
器形別総計		3584	1060	757	5401	964	1695	4	2663	8064

第 19 表 遺構別器形組成一覧表

第 19 表は、椀・皿別に器形が分類できた個体の内訳を、各遺構別で示したものである。したがって、底部の遺存度により個体は確認でき、総出土個体数には含まれるもの、器形が確認できる残存状態ではないものは、この中に含まれていない。

③器形別口縁形態組成

第 20 表は、椀、皿ごとに分類した各器形の中で、今回の調査で分類設定した口縁形態の

椀	1 類	2 類	3 類	統計
A	1538	440	414	2392
B	752	188	126	1066
C	636	234	153	1023
D	53	16	40	109
統計	2979	878	733	4590

皿	1 類	2 類	3 類	統計
A	472	980	3	1455
B	120	104	0	224
C	261	296	1	558
D	19	55	0	74
統計	872	1435	4	2312

第 20 表 器形別口縁形態組成表

組成を、数値表示したものである。椀、皿の各器形とともに、端部が均等に丸みを帯びた口縁Aが多く、端部内側の曲点より外側の曲点がきつく曲がる口縁Dが少ないことが、共通した特徴であった。

④見込み調整の組成

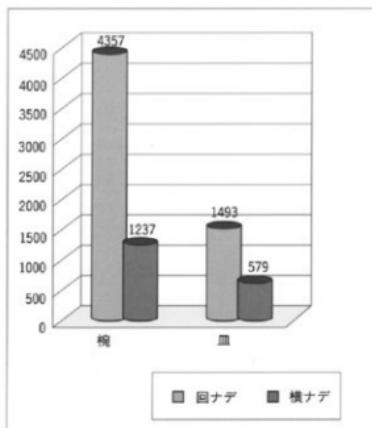
第66図は、椀、皿ごとに、それぞれにみられる見込み部の調整痕を統計処理し、その比率を図示したものである。椀、皿とともに、指で円状にナデ調整されたものが、横方向にナデ調整されたものを大きく上回っている。

⑤底部付着痕の組成

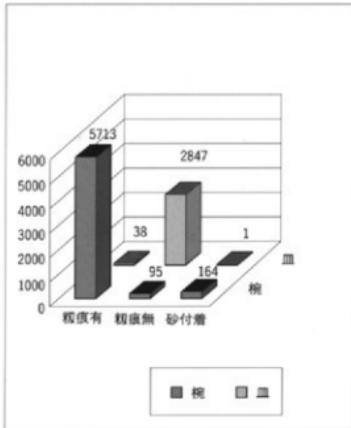
第67図は、椀、皿ごとに、底部または高台にみられる粉、砂などの付着痕を観察した結果を図示したものである。椀の底部では、粉痕が認められるものが大多数を占め、わずかに砂痕のみられないものや、砂の付着しているものがみられる。これとは対照的に、皿の底部では、粉痕が認められるものはほとんどみられない。

⑥底部調整の組成

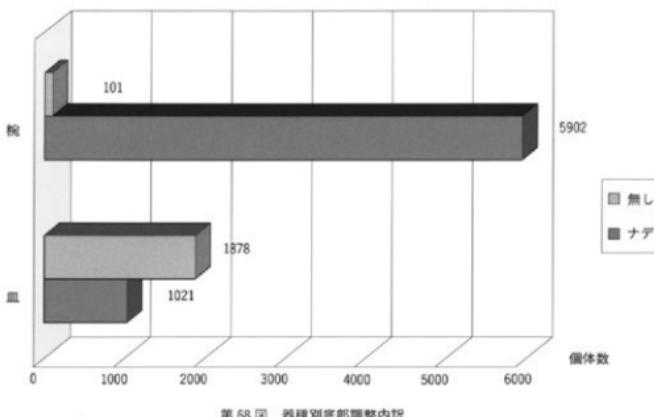
第68図は、椀、皿ごとに、底部調整の有無を観察した結果を図示したものである。椀では、回転糸切り痕のみで未調整のものはわずかで、高台内を回転糸切り痕が目立たない程度まで、指でナデ調整しているものが圧倒的に多くみられた。皿では逆に、わずかでもナデ調整が底部に施されているものの方が、少ない。



第66図 器種別見込み部調整内訳



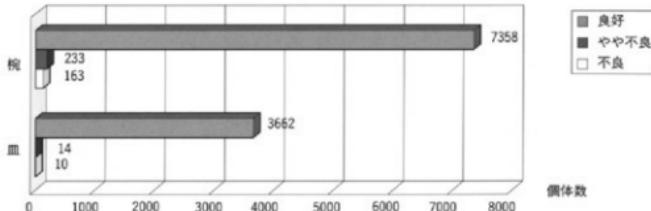
第67図 器種別付着痕内訳



第 58 図 器種別底部調整内訳

⑦焼成度の組成

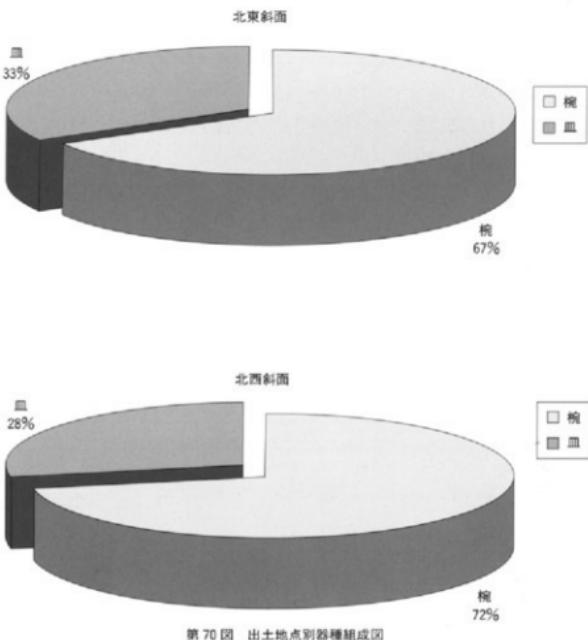
第 69 図は、楢、皿ごとにそれぞれの焼成度を観察し、その結果を表示したものである。楢では、焼成がやや不良なもの、不良なものを合わせると、全体の中で焼きがあまいものの比率は 5.1%である。皿における焼きがあまいものの占める割合は、楢に比してかなり少なく、0.65%である。



第 69 図 器種別焼成度組成図

⑧地点別組成

第Ⅰ・Ⅱ次調査区は、両調査区を合体した地の中央に位置する尾根で斜面の向く方向が分かれしており、北東向き斜面にSY01～04、北西向き斜面にSY05～07がならび、この下方にこれらに伴うものと思われる灰層などがみられた。この両調査区で出土した遺物を、調査区ごとに分けるのではなく、遺構と同様斜面ごとに捉え、それぞれの地点別に器種組成を図示したものが第70図である。各窯体ごとに器種の組成を観察すると比率にばらつきが出るもの、これらを斜面ごとにまとめてみると、それぞれの組成はほぼ近似値を示した。

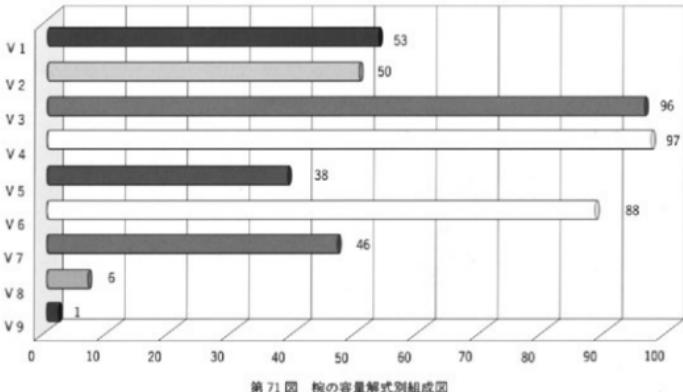


⑨椀の容量組成

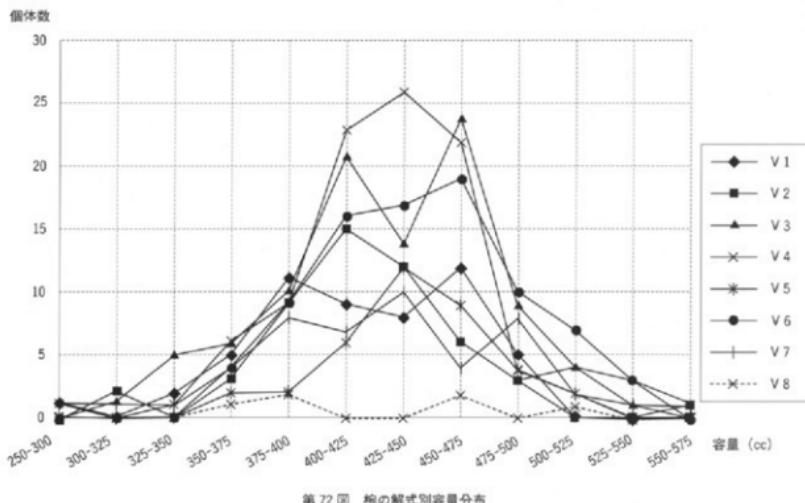
前節では、椀の容量解式を断面形態別に10種設定した。第71図は、この10種の解式のうちで、本地椀用のV10を除いたV1~9に当てはめた椀の個体数を、解式ごとに図示したものである。今回の調査で、容量を計算によって求めた総個体数は、解式の性格上、断面形態が底部から口縁部まで完全に図化できたものに限られるため、475点である。数値の上で極端に差がみられたのは、断面形態が浅い円状を呈するV8・V9にあたる椀が、他の解式に比べてかなり少なかったことである。逆に比較的多くみられたのは、やや浅い天目椀状を呈するV3、断面形態がやや深い放物線状を呈するV4、断面形態が深い円状を呈するV6であった。こうした傾向は、図化用に選んだ椀の中で、さらに遺存度の良好な、いわば限定されたものの中での傾向であり、出土物全体の傾向を表すものではない。

第72図は、各解式ごとの容量差を図示したものである。V9については328cc 1点のみであるため、これを除いた。各解式では、450cc前後に集中する傾向はあるものの、どの解式においても短い範囲に極端に集中するまでには至っていない。したがって、解式の差すなむち断面形態の差が、そのまま容量の差を表すような判断材料は、この解式別容量分布からはうかがえない。

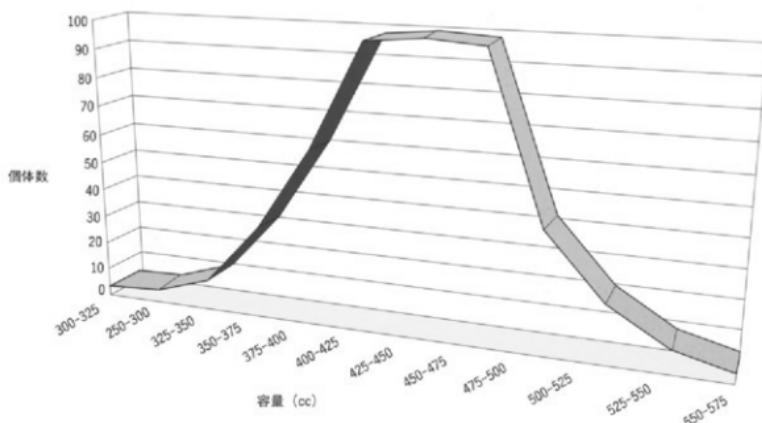
第73図は、計算によって割り出した椀全体の容量別内訳図である。この容量別内訳の中では、400~475ccのものが全体の60%を占める。したがって、つくり手の意識の中では、この程度の容量を仕上がり具合の目安として想定していたのかもしれない。



第71図 振の容量解式別組成図



第 72 図 桧の解式別容量分布



第 73 図 桧の容量別内訳

第3節 遺構・遺物の特徴

第1項 窯体構造の特質

今回の調査で検出できた窯体の特質は、床面下施設を有するものが半数以上（4基）を占めたことで、このうちの1基（SY05）はほぼ同じ面積、位置に上下2面検出されたことが注目される。床面下施設については、それがどのような目的を持って施されたものか諸説あり、完全には解明されていないのが現状である。発掘調査によって現在まで確認されている床面下施設は、面状に施されるもの、列状に施されるものなどに分類される。NA 335号窯における床面下施設は、こうした分類においてはいずれも面状に施されたものに属する。さらにこの施設には、溝を伴うものと、伴わないものとがみられるが、本窯で検出された床面下施設には、いずれにも溝は確認できなかった。この施設が施されている位置は、現在まで報告されている事例では焼成室下部が圧倒的に多い。NA 335号窯では、SY07の床面下施設は焼成室下部に位置するが、SY02・04・05においてはSY07に比べて設置面積が広く、焼成室下部～中央にかけて位置する。

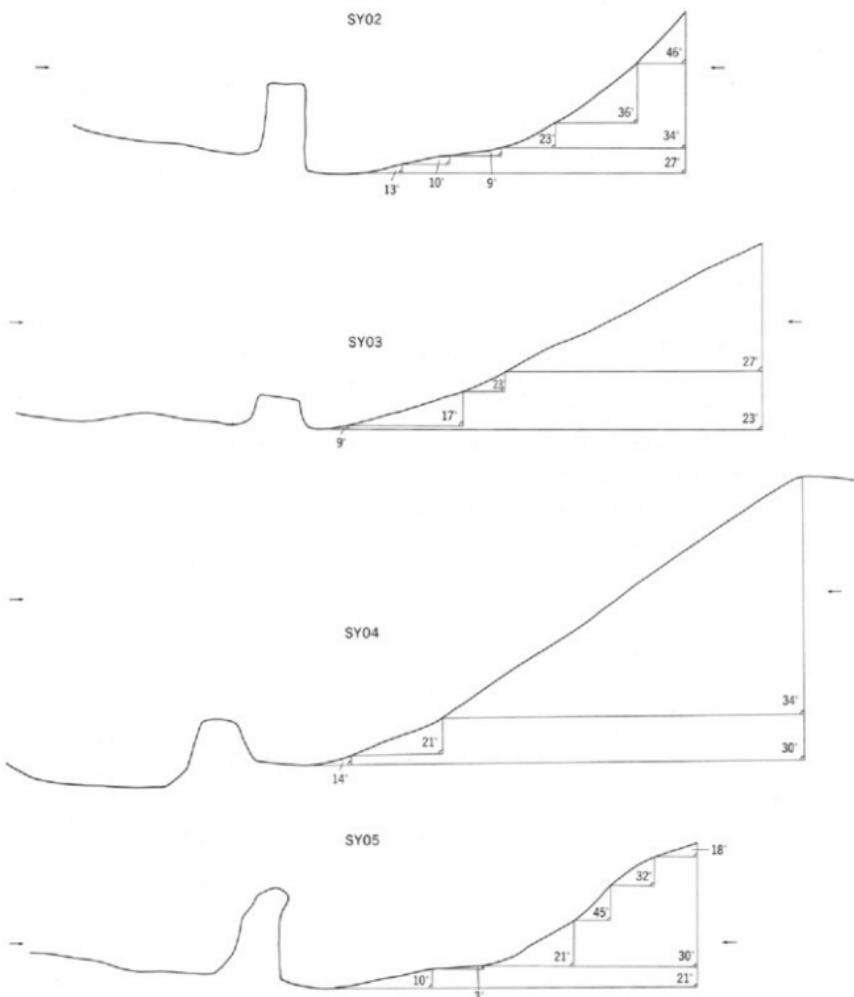
窯体の床面傾斜に関しては、第74・75図に示したように各窯体に若干の差違がみられ、大まかには2種類に分類できる。まず、SY02・05～07では、焼成室下部においては傾斜が比較的緩やかで、中央部から上部に向う最大幅付近で下部よりも明らかに傾斜がきつく変化し、断面形態がわずかに波状を呈しながら傾斜の角度が変化する。これに比べてSY03・04は、焼成室下部～上部に向かって傾斜角度が比較的安定したままのままである。

窯体の断面形態では、これも大まかには2種類に分類できる。すなわち、焼成室側の分焰柱基部床面が、燃焼室側の分焰柱基部床面に比べて若干低い、SY02・03・05・06と、若干高いSY04・07に分かれる。

第75図の（ ）内に示した角度は、焼成室床面に融着していた焼台において、器を乗せた面と床面に張り付けた面で生じた角度を、その断面図から計算式によって算出したものである。この算出した焼台の角度は、焼台の残っていた地点の床面傾斜角度と同じであれば、計算上はほぼ垂直に器を置いたことになろう。しかし、SY06・07で確認された大半の焼台の算出角度は、その地点での床面傾斜角度を上回っていた。したがって、SY06・07の最終窯焚きで焼台に設置された器は、床面の傾斜角度よりも煙道方向に向かって前傾させた角度で置かれたことが、計算上は推定できる。

第2項 出土遺物からみた時間的位置づけ

今回の調査で出土した遺物は、先述したようにいわゆる「山茶碗・山皿」、および「伊勢型鍋」である。このうち、伊勢型鍋については、第III章2-1においてその形態的特徴から、12世紀後葉のものと判断した。山茶碗・皿については、本章の前節などにおいて統計処理



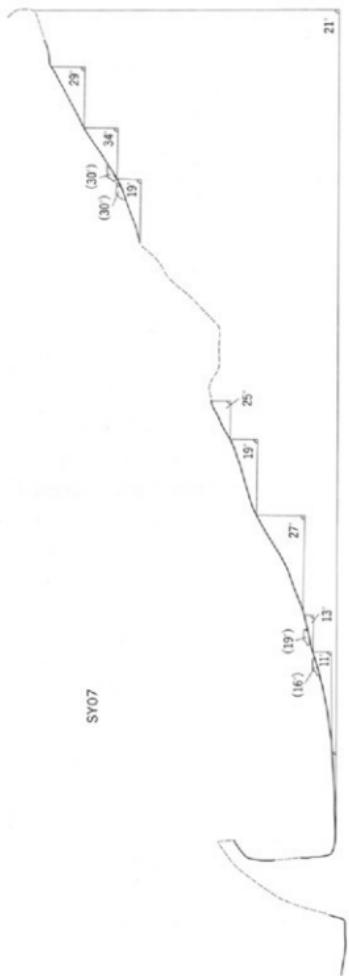
第74図 SY02~05 床面傾斜(1/40)

SY06



() 内の数値は傾斜角度

SY07



第75図 SY06・07床面傾斜(1/40)

を行い、その結果を図示した。山茶碗の編年に関しては、本窯の所在する猿投山西南麓古窯跡群では、藤澤良祐氏によるもの（藤澤 1982）が整えられている。さらに隣接する知多古窯址群では、中野晴久氏によってシンポジウムで「赤羽・中野編年」として発表され、さらにこの内容が活字化（永原 1995）されている。今回の調査区は、両古窯址群の境界にも近い。したがって、ここでは藤澤、中野両氏のいずれの編年区分も提示し、統計処理した結果観察できた各種組成をもとに、時間的位置づけを行う。

はじめに、第Ⅰ・Ⅱ次調査で出土した遺物の特徴を、観察できた組成を参考に順を追つて確認する。

全体の器種組成は、前節でも述べたように椀が約7割、皿が約3割である。この比率は、調査区内の異なった方向に傾斜する斜面別にみても、近似値を示した。

椀の器形は、体部が曲線的に立ち上がるものが最も多く(66%)、高台には大半のものに切痕が認められ(95%)、容量は400~475ccのものが多く(60%以上)認められた。

皿の器形は、体部、底部における器壁の厚さが極端に変わらないものが多く(64%)、高台を有するものの4点以外は無高台で(99.85%)、扁平化は認められない。

上記の特徴は、造構別に比較した場合、特に差違が認められることもなく、どの造構においてもある程度共通した結果であったため、造構による明確な時期差が、出土遺物から判断できる結果には至らなかった。したがって上記の特徴から導き出される時期は、藤澤案の5型式、中野案の第3及び第4型式にあたるものと考えられる。これらの編年区分の実年代は、現在までの調査成果から12世紀末~13世紀初頭と考えられている。この年代は、第IV章で示した熱残留磁化測定結果とも一致する。

第3項　まとめにかえて

名古屋市緑区大高町に所在するNA335号窯は、いわゆる「山茶碗・山皿」を焼成した窯業址で、第Ⅰ・Ⅱ次調査区合わせて7基の窯体が確認された。7基の窯体は、形態の特殊なSY01を除いて、椀・皿を生産したことは明白で、出土遺物の形態的特徴や、科学的分析結果が示すように、12世紀後葉~13世紀前葉に操業したものと思われる。

推察した実年代の時期は、平安時代が終わり、鎌倉時代が始まった時期である。この支配体制の変化は、窯業に携わった当時の人々に対し、直接的にも、間接的にも影響したことであろう。この地域の研究動向では、当該期と考えられる調査事例の増加と、それに対する分析により、鎌倉時代初期における窯業生産体制の変化が指摘されつつある。この窯業生産体制の変化は、国を支配する体制が変化したことにより、どの程度影響されての結果なのであろうか。窯業生産体制の変化を分析、研究することは、ほとんど未解明な当地における鎌倉時代初期の在地系領主、工人集団について、光をあてるにものつながる。調査する側では、単に事例を蓄積する行為に留まらず、この時代に窯業生産に関わった人々が、何を目的として、何の必要から窯業生産活動を行っていたのか、考えてゆく必要があるであろう。

参考文献

- 藤澤良祐 1983 「瀬戸古窯址群Ⅰ」「研究紀要Ⅰ」瀬戸市歴史民俗資料館
赤羽一郎 1984 「考古学ライブラリー23 常滑焼」ニュー・サイエンス社
中野晴久・坂野俊哉編 1985 「鎌場・御林古窯址群」常滑市教育委員会
内田智久 1986 「12世紀の幸田窯」『マージナル6』考古学談話会
礪部幸男・奥川弘成編 1987 「下別曾古窯址群」武豊町教育委員会
齊藤孝正 1988 「中世猿投窯の研究」『名古屋大学文学部研究論集C1史学34』
奥川弘成 1990 「中田池古窯が提起する問題」『研究紀要4』武豊町歴史民俗資料館
池本正明 1990 「猿投窯の「山茶碗」」『マージナル10』愛知考古学談話会
礪部幸男・奥川弘成編 1992 「中田池古窯址群その2」愛知県企業庁・武豊町教育委員会
野口泰子 1992 「NA 320号窯群調査報告書」名古屋市教育委員会
城ヶ谷和広 1992 「小田棗古窯跡群」愛知県埋蔵文化財センター
尾野善裕 1994 「NN 330号窯発掘調査報告書」名古屋市教育委員会
中野晴久 1994 「知多古窯址群の研究(2)」『知多古文化研究8』知多古文化研究会
余合昭彦 1995 「刀池古窯跡群」愛知県埋蔵文化財センター
永原慶二編 1995 「常滑焼と中世社会」小学校

図 版

平成 7 年度調査区(1)

■図版目次

平成7年度調査区(1)

図版1 ①調査前風景（西より）
②表土剥ぎ（東より）

図版2 ①灰原A検出状況（東より）
②灰原A検出状況（南より）
③灰原A検出状況（北西より）
④灰原A東西ベルト断面（北より）
⑤灰原A東西ベルト部分断面（北より）

図版3 ①灰原B検出状況（南西より）
②灰原B東西ベルト断面（南西より）
③灰原B遺物出土状況（南西より）
④SY01（北東より）
⑤SY01 埋土断面（北東より）
⑥SY01 煙道部（北東より）

図版4 ①SY02 埋土断面（東より）
②SY02 床面下施設検出状況（西より）
③SY02 床面下施設検出状況（東より）
④SY03（東より）
⑤SY03（西より）

図版5 ①SY04（北東より）
②SY04（南西より）
③SY04 埋土断面（北東より）
④SY04 床面下施設検出状況（南西より）
⑤SY04 床面下施設検出状況（北東より）

図版6 ①SY05（西より）
②SY05 上段床面下施設検出状況（東より）
③SY05 上段床面下施設検出状況（西より）
④SY05 下段床面下施設近影（西より）
⑤SY05 下段床面下施設検出状況（西より）

図版7 ①調査区全景（北西より）
②航空測量風景（西より）

図版8 遺物写真(1)

図版9 遺物写真(2)

図版10 遺物写真(3)

図版11 遺物写真(4)

図版12 遺物写真(5)

図版13 遺物写真(6)

図版14 遺物写真(7)



1



2

①調査前風景（西より） ②表土削ぎ（東より）



①



②



③



④



⑤

①灰原A検出状況（東より） ②灰原A検出状況（南より） ③灰原A検出状況（北西より）
④灰原A東西ベルト断面（北より） ⑤灰原A東西ベルト部分断面（北より）



①



②



④



③



⑤



⑥

①灰原B検出状況（南西より） ②灰原B東西ベルト断面（南西より） ③灰原B遺物出土状況（南西より）
④SY01（北東より） ⑤SY01埋土断面（北東より） ⑥SY01煙道部（北東より）



① SY02 墓土断面（東より） ② SY02 床面下施設検出状況（西より） ③ SY02 床面下施設検出状況（東より）
④ SY03（東より） ⑤ SY03（西より）



①



②



③



④



⑤

① SY04（北東より） ② SY04（南西より） ③ SY04 埋土断面（北東より）
④ SY04 床面下施設検出状況（南西より） ⑤ SY04 床面下施設検出状況（北東より）



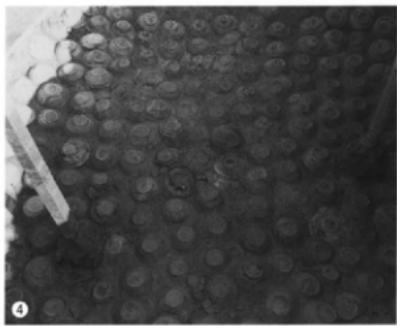
①



②



③



④



⑤

① SY05（西より） ② SY05 上段床面下施設検出状況（東より） ③ SY05 上段床面下施設検出状況（西より）

④ SY05 下段床面下施設近影（西より） ⑤ SY05 下段床面下施設検出状況（西より）

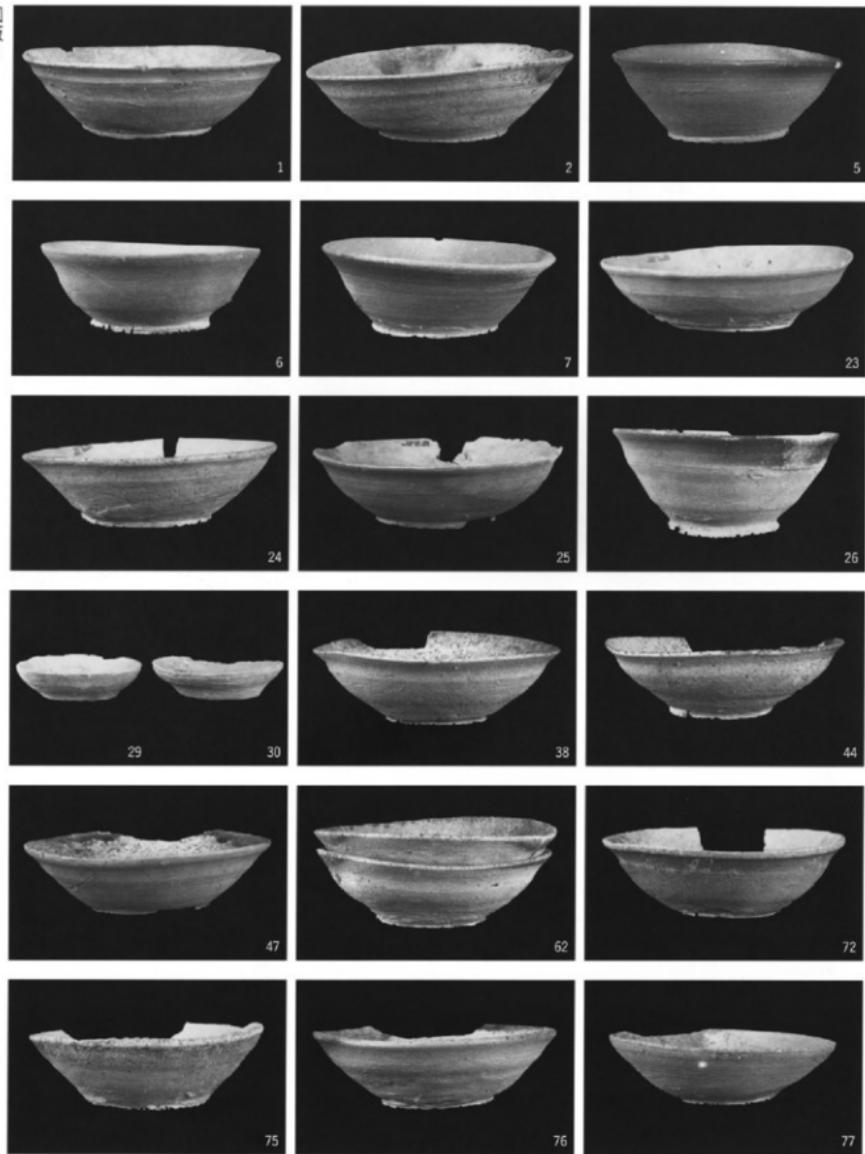


①

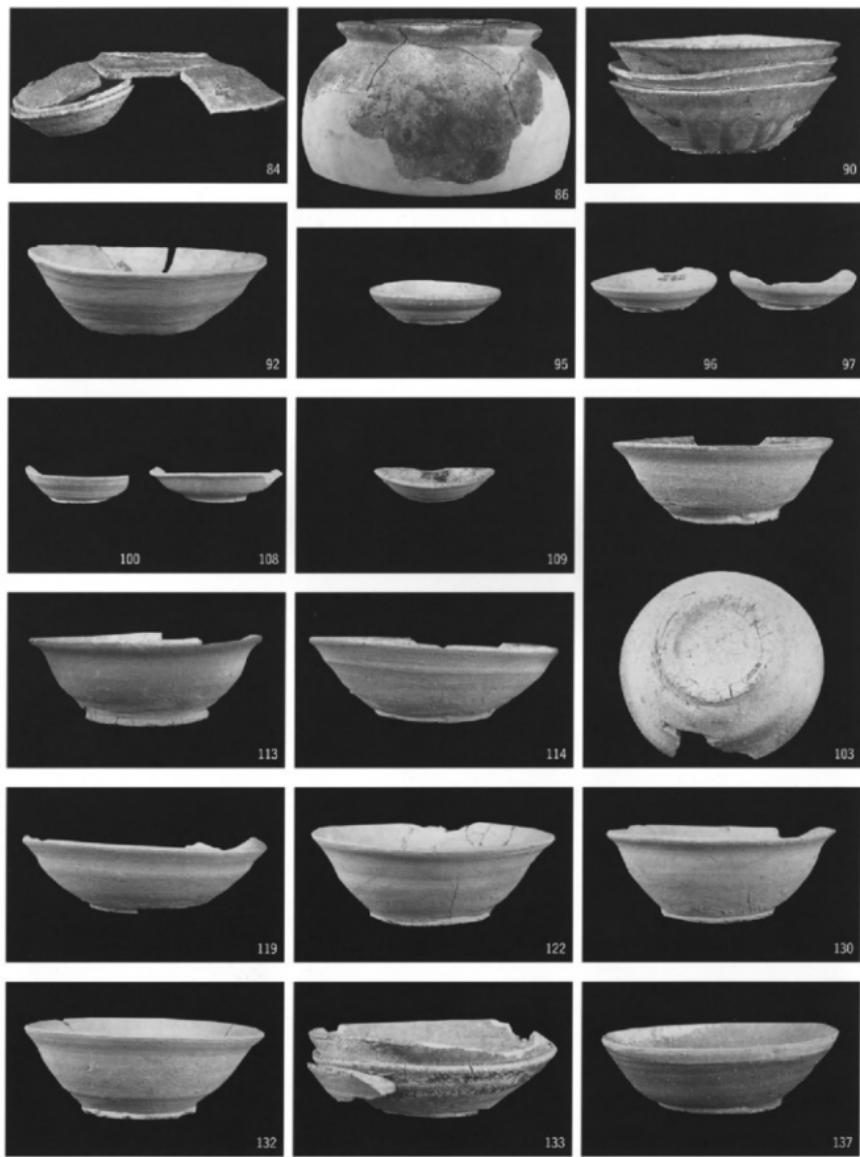


②

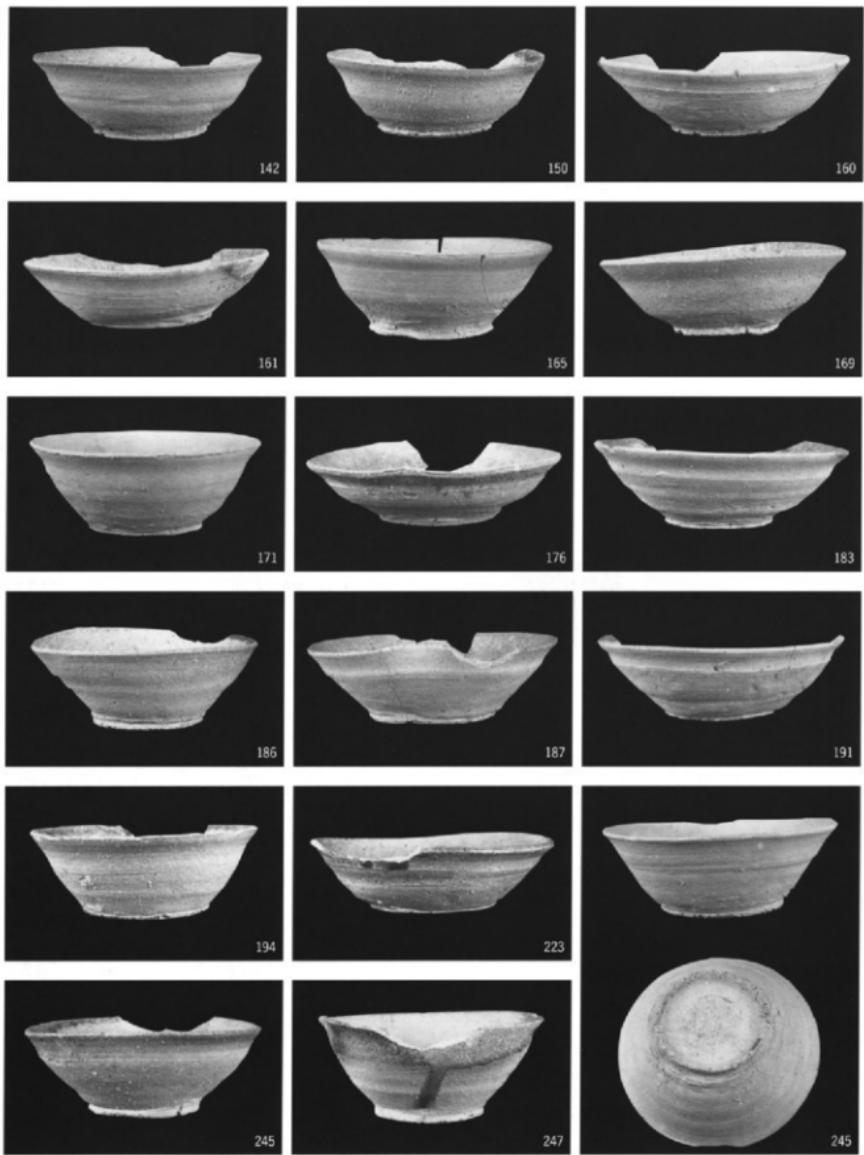
①調査区全景（北西より） ②航空測量風景（西より）



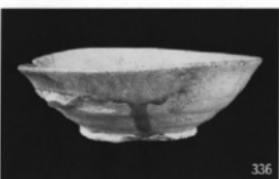
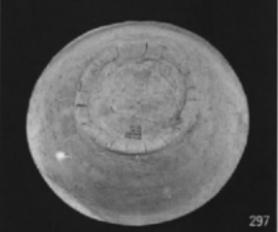
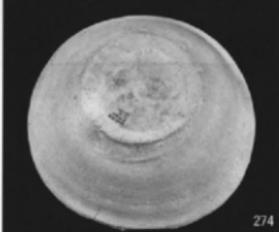
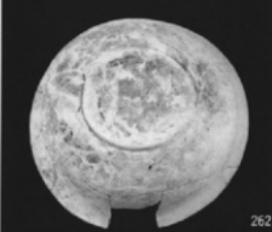
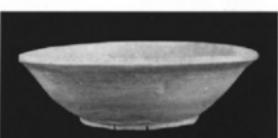
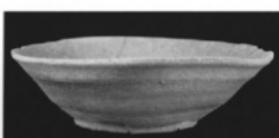
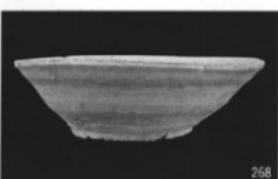
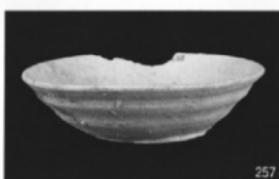
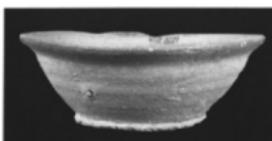
遺物写真(1)



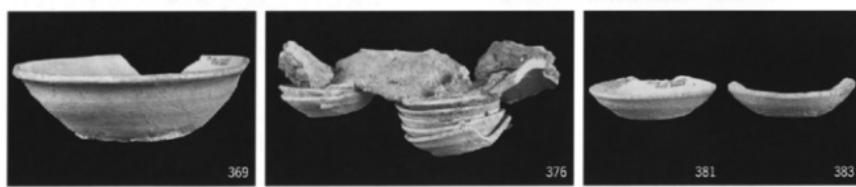
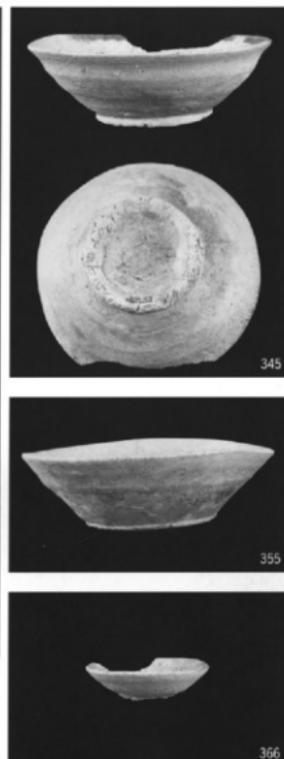
遺物写真(2)



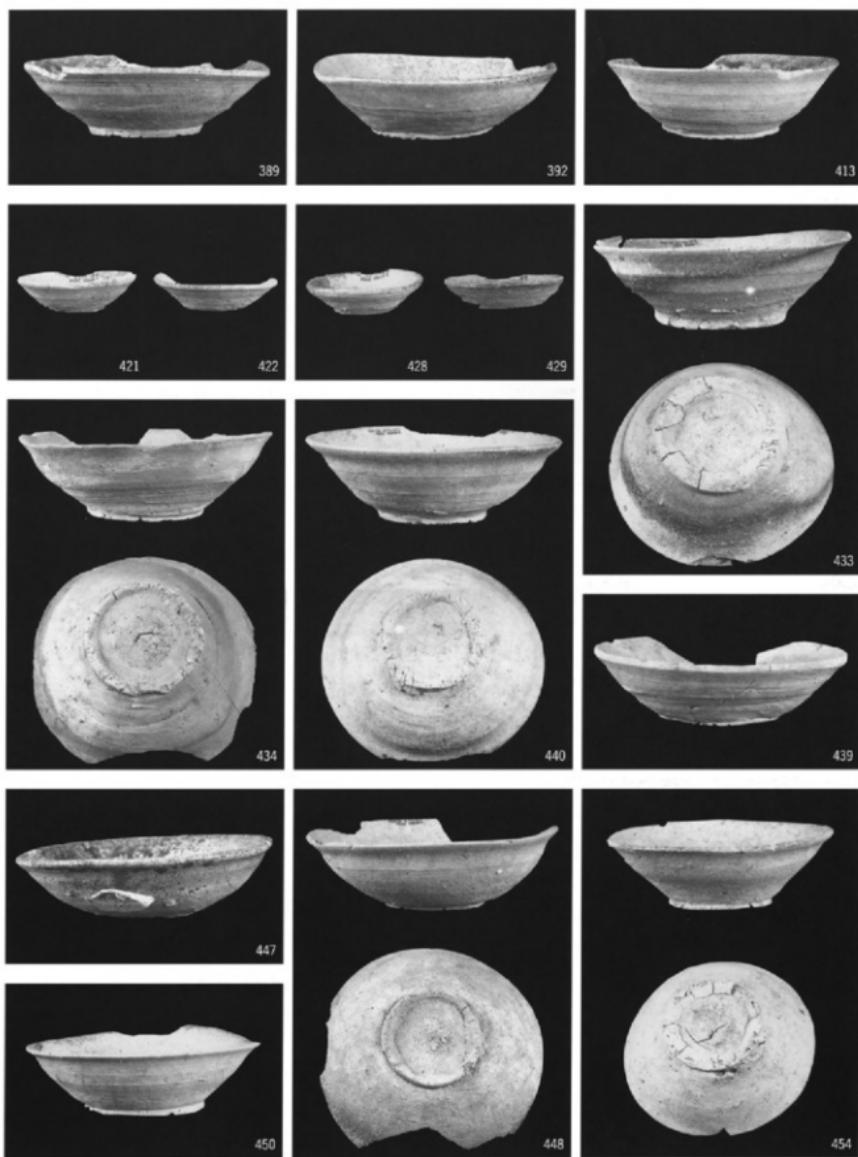
遺物写真(3)



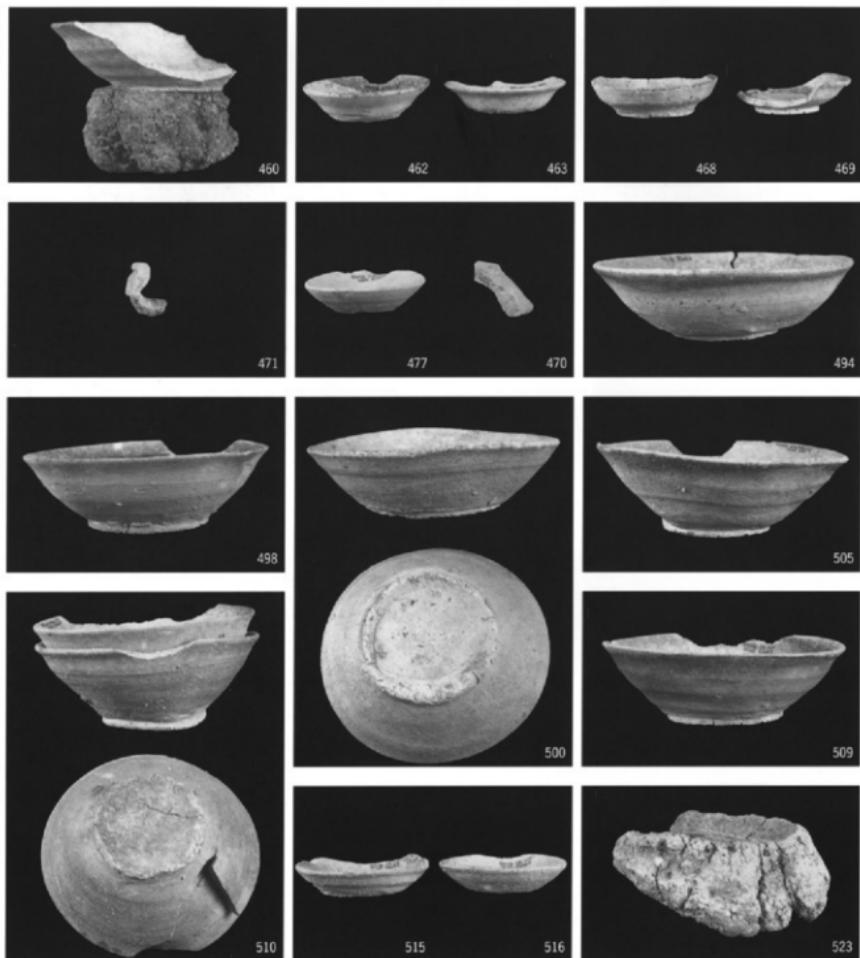
遺物写真(4)



遺物写真(5)



遺物写真(6)



遺物写真(7)

図版

平成 8 年度調査区(II)

■図版目次

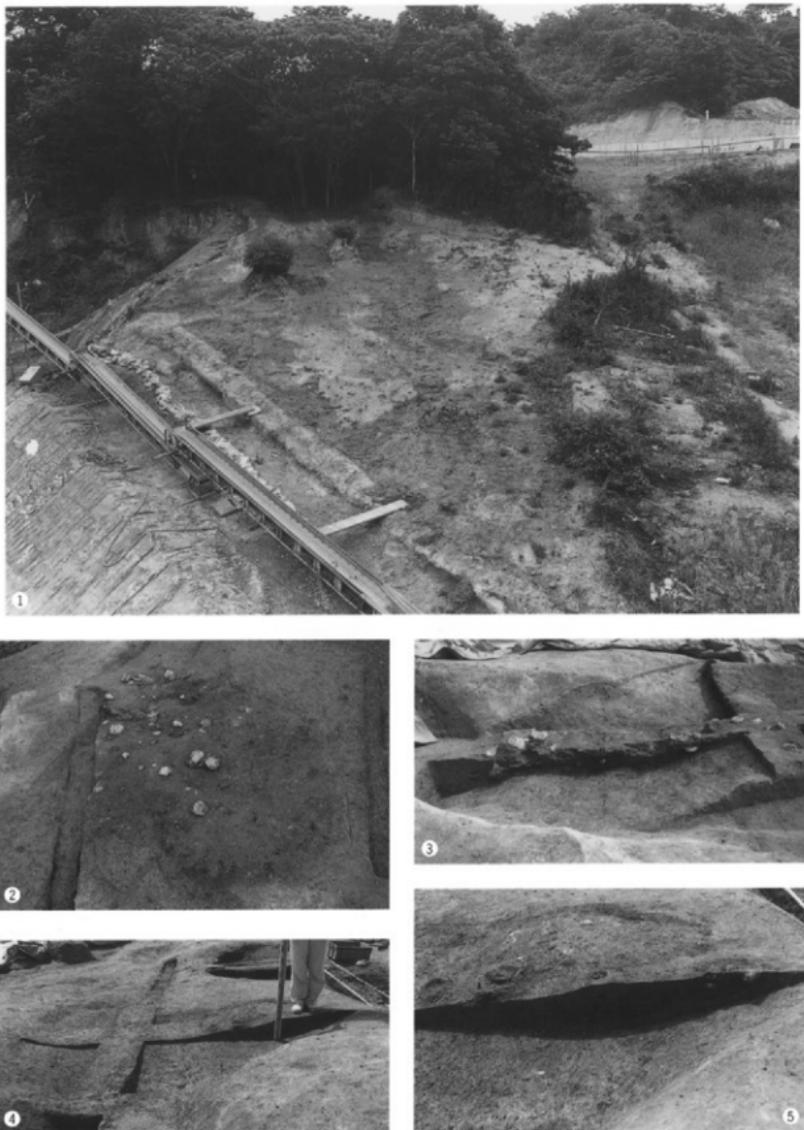
平成8年度調査区(II)

- 図版15 ①調査前風景（西より）
②灰原01検出状況（西より）
③灰原01断面（北より）
④灰原02断面（東より）
⑤灰原02断面（東より）

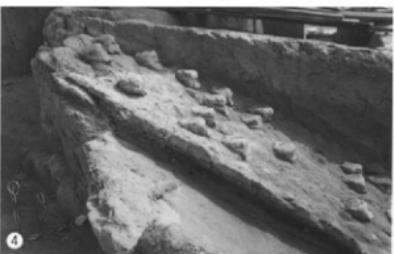
- 図版16 ①SY06_07（西より）
②SY06 分焰柱（西より）
③SY06（東より）
④SY06 燃成室床（北より）
⑤SY06 分焰柱断面（西より）
⑥SY06 分焰柱断面（南西より）
⑦SY06 分焰柱断面（東より）

- 図版17 ①SY07 分焰柱（東より）
②SY07 床面下施設（東より）
③SY07 窓壁（南より）
④SY07 分焰柱断面（東より）
⑤SY07 分焰柱断面（南東より）

- 図版18 遺物写真(8)



①調査前風景（西より） ②灰原01検出状況（西より） ③灰原01断面（北より）
④灰原02断面（東より） ⑤灰原02断面（東より）



7

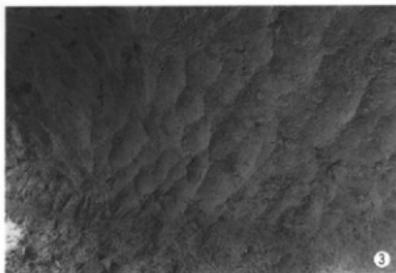
① SY06, 07 (西より) ② SY06 分焰柱 (西より) ③ SY06 (東より) ④ SY06 焼成窯床 (北より)
⑤ SY06 分焰柱断面 (西より) ⑥ SY06 分焰柱断面 (南西より) ⑦ SY06 分焰柱断面 (東より)



①



②



③

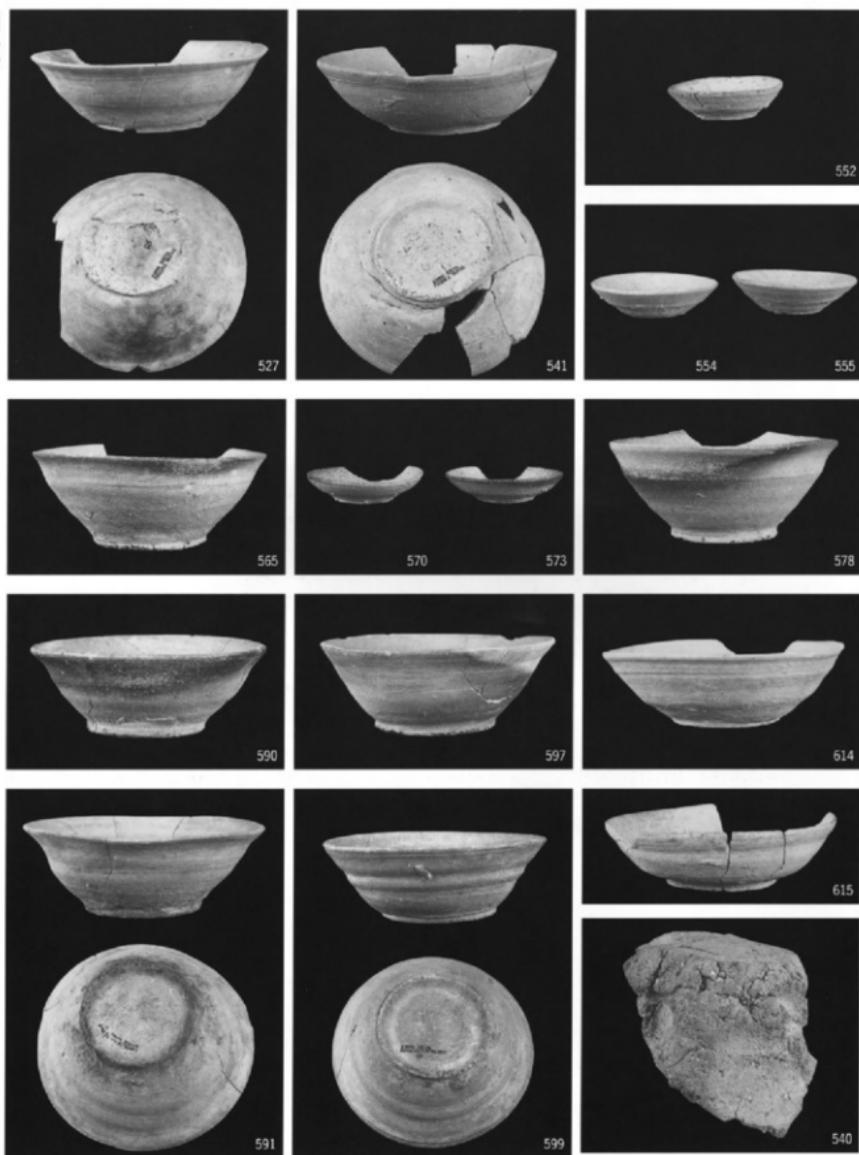


④



⑤

① SY07 分焰柱（東より） ② SY07 床面下施設（東より） ③ SY07 壁（南より）
④ SY07 分焰柱断面（東より） ⑤ SY07 分焰柱断面（南東より）



遺物写真(B)

報告書抄録

ふりがな	えんつうじこば・NA335ごうよう I・II
書名	円通寺古墓・NA335号窯 I・II
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第75集
編著者名	松田 誠・塙木真美子・奥村勝信・藤根 久
編集機関	財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年	西暦1998年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
円通寺古墓	大府市共和町	23223		35度 2分 36秒	136度 56分 15秒	95年度 19950418～ 19950801	1500m ²	道路建設
NA335号窯I	名古屋市緑区大高町	23114		35度 2分 41秒	136度 56分 57秒	95年度 19950710～ 19951110	900m ²	道路建設
NA335号窯II						96年度 19960610～ 19960802	250m ²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	主な遺物	特記事項
円通寺古墓	墓跡	江戸	土坑・墓廣 106 溝 3	陶磁器 金属製品	多量の人骨
NA335号窯 I・II	窯業址	平安～ 鎌倉	窯体 7	灰釉系陶器(山茶碗類)	窯体4基に床面下施設

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集

円通寺古墓

NA 335 号窯 I・II

1998 年 8 月 31 日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 ブクイックス